瑞浪市化石博物館研究報告

BULLETIN OF THE MIZUNAMI FOSSIL MUSEUM

No. 35

(Supplement)

瑞浪市化石博物館

Mizunami Fossil Museum

February, 2009

目　　次

はじめに …… 糸魚川淳二 …… i

博物館の現在

日本の自然史系博物館の現在（2008） …… 糸魚川淳二 …… 1

いかに生きるか－人文系博物館（2008） …… 里見親幸 …… 13

博物館と研究・収集

瑞浪市化石博物館と研究報告 …… 柄沢宏明・糸魚川淳二 …… 21

中津川市鉱物博物館と長島鉱物コレクション …… 荻野義雄 …… 25

博物館の展示を考える

包括的展示論 …… 糸魚川淳二 …… 37

博物館の展示技術（2008） …… 里見親幸 …… 53

博学連携

美濃加茂市民ミュージアムの博学連携活動－子どもの学びと地域博物館－

…… 可児光生 …… 63

エコミュージアム論

世界と日本のエコミュージアム（2008） …… 里見親幸 …… 73

自然史博物館から「えこ」ミュージアムへ …… 糸魚川淳二 …… 83

エピローグ

20 世紀の博物館学研究者からのメッセージ－その反省と期待－…… 倉田公裕 …… 93

はじめに

20 世紀から 21 世紀へ移り変る，その時代はまさに博物館にとって変動の時代であったが，その頃，1995 年から 2005 年にわたって，（株）丹青研究所では毎月 1 回のペースで顧問会が開かれていた．メンバーは新井重三，倉田公裕，佐々木朝登，糸魚川淳二，そして研究所の里見親幸であった．最初は博物館に関するさまざまの問題について意見を交換することが主であったが，ある時期からテーマを選び，それについて誰かが話題を提供し，それについて議論する形式となった．時には研究所内の公開講演会の形をとる事もあった．

記録したものだけでも 75 回を超す数となり，その中の一部は丹青研究所の出版物として出版されている．Museum 〜講演録・明日の博物館を考える〜（1996），Museum exhibition 〜講演録・博物館の展示を考える〜 (1997) であり，その他，研究所内の内部資料としてまとめられているものもある．

内容的には多岐にわたり，時には新説・過激な議論もあり，全体のレビュー・歴史的な回顧も含めて博物館についてのすべての分野にわたる話題が登場したといっても過言ではない．こうした議論をこのまま埋もれさすのは残念であり，何らかの形で残せないものかと考えた．

瑞浪市化石博物館は 1974 年に開館した，地方の地質・化石専門の単科の館である．開館以来研究報告を継続して出版し，2008 年で 34 号となっている．もちろんその内容は専門の分野に関わるものが多いが，博物館についての論述もある．この研究報告は執筆に関してオープンであるし，先述のメンバーの何人かはこの館の創設に関わっていたので，その意味でもこの研究報告に投稿することがひとつの選択であり，意義があると考えた．

幸い，館側の了解を頂き，特集として出版できることとなった．折角の機会であるので，瑞浪を含め，近隣の博物館の学芸員の方々にも参加して頂いて，博物館に関する主な分野を網羅した論文集とすることを試みた．内容的には会の話題と同様多岐にわたる．したがって，論文集としての統一に欠ける面もあるが，あえて調整する事はしなかった．

上梓に当たり，（株）丹青研究所，研究所顧問であったみなさん，執筆に参加された方々に感謝する．
博物館激動時代の，現在の日本において，この特集が何らかの形で役立つことを期待している．

2008 年 8 月

糸魚川 淳 二
（招聘　編集長）

瑞浪市化石博物館研究報告 no. 35 (supplement) (2009)， p. 1–12, 4 figs., 3 tables.
特集「博物館－現在と未来－」糸魚川淳二・柄沢宏明（編）
© 2009, Mizunami Fossil Museum

日本の自然史系博物館の現在（2008）

糸魚川　淳二

〒509-6251　瑞浪市日吉町 5125-4

Natural History Museums in Japan (2008)

Junji Itoigawa

5125-4　Hiyoshi-cho, Mizunami 509-6251, Japan

Abstract

The circumstances of natural history museums in Japan at present is analyzed on the basis of data which are mainly results of researches of the Japan Association of Museums and the Tansei Institute Co.

The results are as follows;

1) Museums in Japan are 4040 or 9000 (in wide sense) in number and natural history museums occupy 4.5% or about 7% (in wide sense) of them.

2) Users decrease a little compared with ones of the last five years.

3) A general trend of museums in Japan at present is low-spirited state because of decrease in administrative support of finance.

4) Museum activities are seemed to lay emphasis on education than on research.

5) Museums in Japan are asked to establish identity in changeable social conditions generally.

6) Natural history museums have an important role in various problems of environment and nature conservation.

In this century, museums have to notice their role and to start for stepping up of them in future.

Key words: museum, natural history museum, Japan, basic data, museum activity

はじめに

日本には現在，4000 を超す博物館があり（日博協，2008a），さらに広く捉えれば約 9000 館ともいわれている（丹青研究所による）．その中で，自然史系の博物館はその一部に自然史分野を含む総合博物館・郷土博物館，ビジターセンターなども含めて考えれば，大きな位置を占めているといえる．筆者はこれまでに自然史系博物館について，それぞれの時期における概要をまとめ，歴史・現状，問題点について解説した（糸魚川，1993; 1994; 1999）．

20 世紀末から 21 世紀はじめにかけて，日本のみならず世界の，社会的な変化は著しい．しかもその流れは激しく，急である．博物館の世界もその影響を受け，大きく変化している．こうした状況の中で，日本の自然史系博物館を中心に，以前の状況から現在までの変化，現状を分析し，これからの方向を模索して見たい．

なお，ここで扱う自然史系博物館には原則的に自然史博物館の他に，自然史分野を含む総合・郷土・大学の博物館，ビジターセンターが含まれる．自然博物館という場合には理工館，生物館園（動物園・植物園・水族館）も含む．しかし，基礎となるデータが多様なので，必ずしもそうでない場合がある．

本稿を草するに当たり，博物館についての情報の提供，議論をして頂いている倉田公裕氏，故新井重三氏，佐々木朝登氏，里見親幸所長初め（株）丹青研究所のみなさんに感謝する．

1．日本の博物館についてのデータ

1）博物館リスト

全博物館をリストアップしたものとして，日本博物館協会（編）（1978）：全国博物館総覧（上・下），丹青総合研究所（1986）：博物館・情報検索事典，全国科学博物館協議会（編）（1996）：全科協データブック，大堀哲（編・著）（1997）：日本博物館総覧などがあり，日本博物館協会（2007）：平成 19 年度会員名簿には会員館が掲載されている．

2）新設館状況

日本博物館協会の「博物館研究」には毎年前々年度の博物館館園数関連統計（3 月号），前年度新館紹介（4 月号），前年度博物館施設概要（5 月号）が掲載されている．丹青研究所の発行するミュージアム・データには毎年前々年の「開設博物館情報」，「リニューアル博物館情報」が掲載されている（最近，電子情報となっ

た).

3）博物館調査

日本博物館協会は2004年に文化庁委嘱の事業として，博物館のアンケート調査を行い，2005年に「博物館総合調査報告書」を発刊している.「博物館の現状と問題点，将来の課題」を把握するための調査としている.

丹青研究所は全国博物館アンケート調査を1987年以来行っていて，1992年，1995年，1999年，2002年と続けている.

4）自然史系博物館

各種の学会などのシンポジウム・学会誌の特集に自然史系博物館の状況が総合されている．日本古生物学会は「新しい自然史学と博物館」というシンポジウムを1991年6月，千葉県立中央博物館において開催し，その結果は「月刊地球13巻11号」に，同じタイトルで11の論文などからなる特集号として刊行されている．東京地学協会の発行する「地学雑誌」は107巻6号(1998)を特集号「自然史系博物館を考える」として，15の論文を掲載している．さらに，この中には資料として,「日本の自然史系博物館と関連施設」,「自然史系博物館のリンク集（小出良幸・宇津井　篤)」が含まれている.

自然史学会連合・日本学術会議50周年記念・合同シンポジウム「博物館の21世紀―ナチュラルヒストリーの未来―」が1999年10月に開催され，その要旨集が発行されている．また，日本学術会議は「学術の動向」第12巻・第2号（2007）に「博物館が危ない・美術館が危ない」を特集している．日本古生物学会は2007年2月に，徳島県立博物館で開催された第156回例会において「古生物学のアウトリーチ」というシンポジウムを開催し，その要旨を「化石」(同学会日本語機関誌）の第83号に特集している.

5) その他

各館の年報，各種出版物，ホームページなどはそれぞれの館についての情報を掲載している．ホームページをもつ館の割合は最近特に増大した.

この他,「博物館研究」(日本博物館協会),「博物館学会誌」「学会ニュース」(全日本博物館学会),「エコミュージアム研究」(日本エコミュージアム研究会),「ミュージアム・データ」(丹青研究所),「文環研レポート」(文化環境研究所),「Rex Journal」(展示文化研究所)，各大学の博物館学関連の紀要・ニュースなど，各県レベルの博物館協議会の報告・出版物，各県・地方の博物館案内（単行本など),分野別の協議会の出版物など,情報源は多い.

単行本として，　最近の関連するものをあげてみると,「新版博物館学講座　全15巻（1999～）(加藤有次他編，雄山閣）には，自然史博物館の各種特性•活動も記述されている.「自然史博物館」(千地，1998）は自然史博物館全般について記述し，解説しているし，布谷(2005)は「博物館の理念と運営」において，滋賀県立琵琶湖博物館を事例として，利用者の立場に立った博物館論を展開している.

2. 自然史系博物館の現在(2008)―基礎的データ―

日博協(2008a),丹青研(2007a)の新設館情報,アンケート調査(日博協，2005c;丹青研，1999・2000,2003a,b）に基づいて博物館，特に自然史博物館に関連しての，基礎的データをまとめてみる.

1）総館数・館種数・入館者数

日博協(2008a)によれば，2006年度の博物館の数と館種の割合は図1のようである．これを見ると，日本の博物館は半数近くを歴史博物館が占め，ついで美術館が多い．自然史博物館は4.5%

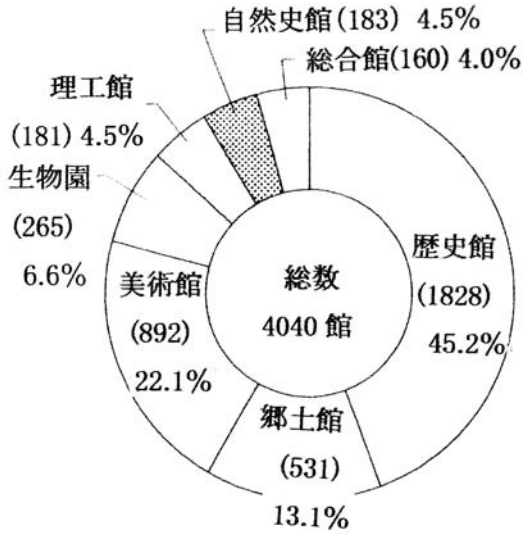


図1．博物館の数と館種の割合（日本博物館協会　2008aのデータによる).

Fig. 1. Number of museums and the rate by the kind of them in Japan.

で，他の自然系館（理工・生物館園）とあわせて約15%となる．総合館(4.0%)・郷土館(13.1%)の内，自然分野を含む館があるので，この数字は最小の値と思われるが，大きな数字ではなく，日本における自然に対する認識の低さを示すものであろうか．糸魚川(1999)においての同様の数字を見ると，自然史館の割合は4.6%でほとんど変っていない．歴史館・美術館は漸増している．自然系館はほぼ同じ，あるいは微減である．なお，前回では丹青研究所の資料も扱ったが,館種の区別において,継続追跡が出来なかっ

表1．最近5年間の館数と入館者数（日本博物館協会の資料による).

Table 1. Number of museums and of users of them in the last five years in Japan.

年度	2006	2005	2004	2003	2002
全体数	4040	3997	3965	3944	3930
自然史館数	183	184	181	182	185
同上　%	4.5	4.6	4.6	4.6	4.7
全体入館者数（千人）	148195	155163	145859	166088	153421
館数	2171	2279	2166	2506	2304
自然史館入館者数（千人）	7446	7442	7682	7409	7400
館数	81	93	92	109	94
同上　%	5	4.8	5.3	4.5	4.6
全体1館あたり人数	68261	68084	67340	66276	66589
自然史館1館あたり人数	91926	80022	83500	67972	78725

表 2．最近 5 年間の新設館状況（丹青研究所の資料による）．
Table 2. Number of newly established museums in the last five years in Japan.

年　度	2005	2004	2003	2002	2001
新設開館数	218 多様化	223 既存施設・複合施設	219 移転新設・複合 併設	247 移転・取り壊し新設	270
設立主体（増加）	市・区・個人	町村	法人	国・市・区・ 法人	町村・個人
館　　種	美 術	人文・理工・ 生物	人文系	自然史・エコ 関連	水　族
延　　床	平 均 値　＋ 中 央 値　－ 500 ㎡以下＋	2003 年の継続	平 均 値　－ 3000 ㎡以上　－	平均値　－ 3000 ㎡以下 86.7%	平均 2000 ㎡ 平 均 値　＋
総工事費	平 均 値　＋ 中 央 値　－ 5 億円以下 71%	平 均 値　＋ 中 央 値　－	平 均 値　－	平 均 値　－ 5 億円以下69.8%	平 均 値　＋
リニューアル館数	197	160	138	117	90
特　　徴	複数年で	愛知万博関連 市民参加 無料増	増加　体験型	ショップ・食堂 バリアフリー わかりやすさ	ショップ　充実

たので，今回は取り上げなかった．自然関連の施設（例えばビジターセンター）で展示をもつ館を含むので，これよりやや大きい，7％前後の数字が推定される．

最近の 5 年間 (2006 年度まで) の博物館数，自然史博物館数及びその％・入館者数，自然史博物館の入館者数及びその％は表 1 に示される（日博協，2004a, b, 2005a, b, 2006a, b, 2007a, b, 2008a, b より総合）．

表 1 から，日本における博物館数はわずかであるが増加の傾向をもつこと，自然史館数はほとんど変らず，全体に占める％もほとんど変らないこと，入館者数は全体において微減の傾向にあること，自然史館の場合は数，全体に対する％とも殆ど変らないことがわかる．

丹青研のアンケート調査による入館者数は次のとうりで，減少していることを示している．

1999 年調査（1330 館）平均 65949 人　3 万人以下が 62%
2002 年調査（1762 館）平均 51394 人　3 万人以下が 66.7%

2）新設館・リニューアルの傾向

丹青研究所の毎年の開設博物館・リニューアル博物館の情報がミュージアム・データに掲載されている（丹青研，2002，2003c，2005，2006a, b，2007a, b）．その結果を表 2 にまとめる．

この 5 年間の新開設館について．次のようにまとめられる．

(1) 数が減少している．
(2) 多くのことにおいて多様化している．館種・設立主体には変化があり，特別な傾向は見られない．
(3) 既存施設の活用，複合施設，移転施設，他の施設との併設などが増加している．
(4) 平均値の増加は大型館の設立により影響されており，中央値の減少は中・小館が増加し，規模が小さくなっていることの反映である．
(5) リニューアルの館が増加している．
(6) 2002 年に自然史館が増加しているが，環境・エコロジー・ネーチャーセンターなど，関連する分野での増加である．
(7) 2004 年に愛知万博関連の，市民参加型の館の増加が著しかった．

リニューアル開館については次のように整理される．

(1) 2000 年代で増加している．
(2) 体験型展示が 2003 年から増加している．
(3) 入館料無料の館が 2004 年から増加している．
(4) わかりやすい展示，バリアフリーの施設が 2002 年から増加している．
(5) ミュージアムショップは 2001 年より，食堂・喫茶は 2002 年から増加．
(6) 展示スペースは 2003 年から増えている．
(7) 複数年で施工する例がある．予算減が反映していると思われ

る．

新設およびリニューアルした，主な自然史系博物館は以下のとうりである．

年	新　設	リニューアル
2001	鹿児島大学総合学術博物館	虻田町立火山科学館
		東海大学自然史博物館
2002	ダイノソアファクトリー	三瓶自然館
	（現在は終了）	葛生町化石館
	大阪大学総合学術博物館	倉敷市立自然史博物館
	北九州いのちのたび博物館	（2002 ～ 2005）
2003	岩手大学ミュージアム本館	東大教養学部駒場博物館
		国立科学博物館（継続）
		福島県立博物館
		鳳来寺山自然科学博物館
2004	東京農大「食と農」の博物館	秋田県立博物館
		福地化石館
		豊橋市自然史博物館
		（2004, 2008）
		名古屋海洋博物館
		大阪大学総合学術博物館
2005	鳥取県立大山自然歴史館	夜久野町化石・郷土資料館
		鳥取県立博物館
2006 ～ 2008	沖縄県立博物館	石川県自然史資料館
		富山市科学博物館
		（前自然科学センター）
		福井市立自然史博物館

日本博物館協会のアンケート調査（2005c）は新設館について，以下のように結果をまとめている．

(1) 前の調査（1993 ～ 1997）と比べて，減少している（322 館→237 館；自然史館の割合（6.2%→ 4.2%）．
(2) 美術館，都道府県立が増え，市町村立は減少．
(3) 規模の大きい館が新設されている．職員数・支出額も増加．
(4) ネットワークが強まる．
(5) ボランテイアの受け入れが進んでいる．
(6) 入館者増が大きな問題．
(7) 評価システムが出来てきた．

3）職員数・学芸員数

・日博協（2005）

館長

全館（2030 館）　常勤 55.8%　非常勤 35.9%
自然史館（103 館）　48.5%　39.8%

職員

全館（1997 館）　常勤 13592 人　平均 6.8 人 / 館
学芸員　4591 人　平均 2.3 人 / 館
総合館（103 館）　平均 11.2 人 / 館　常勤 9 人 / 館
学芸員　4.17 人 / 館
自然史館（101 館）　平均 8.9 人 / 館　常勤 6.2 人 / 館
学芸員　2.65 人 / 館

・丹青研（1999・2000, 2003a, b）

	1999	2002
職員数（全体）（1328 館）	9.6 人 / 館	（1758 館）8.6 人 / 館
自然史	8.0 人 / 館	8.0 人 / 館
常勤職員数（全体）	6.1 人 / 館	5.4 人 / 館
自然史	5.1 人 / 館	4.7 人 / 館
学芸員（全体）	4.0 人 / 館	3.7 人 / 館
自然史	3.0 人 / 館	3.8 人 / 館

4）年間運営費

・日博協（2005c）

支出 / 年・館（1570 館）　平 均 118,536（千円）
3000 万円以下の館　47.3%
自然史館（76 館）　平 均 67,837（千円）
予算の増減（2030 館）　増 8.0%　減 48.9%
自然史館（103 館）　増 8.7%　減 42.7%

・丹青研（1999・2000, 2003a, b）

		1999	2002
年間運営費	（849 館）	3000 万円以下	61.9%	62.7%
			前回を下回る
自然史館		平 均	49,612（千円）	64,786（千円）

5）施設の規模

・日博協（2005c）

全体(敷地 1805 館,建物 1931 館）　総合館(敷地 95 館,建物 99 館）
自然史館（敷地 90 館，建物　96 館）

	敷地面積		建物面積（㎡）	
	中央値	平均値	中央値	平均値
全　体	4311	26880	1350	2907
総合館	6281	19493	2502	4168
自然史館	5869	47157	1467	3239

敷地は動植物園が大きく，自然史館がそれに次ぐ．建物では生物館園で大きく,理工館がそれに次ぐ．郷土館は両方とも小さい．

建物の利用割合

	展示	教育普及	収蔵保存	調査研究
全体（1859 館）（%）	67.4	9.9	18.0	4.7
総合（100 館）	61.8	9.4	22.3	6.5
自然史（94 館）	68.7	13.2	12.7	5.4

建物の建築年

～ 1945 年　8.6%, 1946 ～ 1974　18.2%　1975 ～　69.0%

・丹青研（2000, 2003）

	1999（1270 館）		2002（2179 館）	
延床面積	中央値	平均値	中央値	平均値
（㎡）	1050	2209	1041	2179
	（1371 館）	（1270 館）	（906 館）	（1952 館）

6）アンケート調査

日本博物館協会（2005c),丹青研究所（2000, 2003）のアンケート調査から関連あるアイテムを選んで記述する．

・日博協（2005c）

2004 年度に調査　回答率　全体　2030/3930 館 51.7%
総合館 103/152 館　67.8%　自然史館　103/185 館 55.7%

（1）全体のまとめ（典型的な姿）

a. 開館から 20 年，b. 敷地総面積：約 4300 ㎡，c. 建物面積：約 1350 ㎡，d. 常勤職員 3 人，e. 学芸員資格をもつ職員 1 人，f. 収

蔵資料　約 4000 点，g. 年間経費　約 3500 万円，　開館：300 日以上，　入館者数 5000 人未満

(2) 前回 (1997) の調査との比較

a. 新規開館の減少 , b. 館種構成の変化はほとんど無い，　c. 規模は少し大化，d. 職員数は減少，e. 非常勤職員が増加，f. 教育普及活動に重点，g. 展示活動は変化なし，h. 資料整理は電子メディア化，i. 連携協力は停滞，j. 広報はインターネット利用，k. 入館者に配慮した施設の整備進行，l. ボランテイア受入増加，m. 入館者はやや減，総合館と理工館で増加が目立ち，自然史館もやや増加傾向にある．

(3) 組織・運営

・公立館の設置者

		教育委員会	首長部局	その他
全体	（1489 館）	74.2 %	21.6	4.2
県立	（317）	52.7	43.2	4.1
市立	（662）	78.2	18.1	3.7
町村立	（510）	82.4	12.7	4.9
総合	（83）	86.7	12.0	4.2
自然史	（72）	62.5	30.6	6.9

都道府県立で教委以外の所管が増えている．分野別では生物館園に首長部局所管が多く，教委所管は郷土・総合・歴史館に多い．自然史・理工館は中間である．

・指定管理者制度の導入

2004 年の段階で，1489 館のうち，導入されているものは 2 %，導入決定が 9.4%, 検討中が 15.5%, 予定の無いもの 41.4% である．

・市町村合併

市町村合併のあった館園は 96 館（全体の 8.2%）で，それに伴う変化のあった館は約 20% であった．

(4) 入館者関連

入館者階層を見ると，壮年者・高齢者の割合が多い．1997 年の調査と比較して，高齢者の割合が増えている．自然史館で見ると，多いほうから壮年者層－家族づれ－小学生の順で，団体より個人が多い．観光を目的とした場合は生物館園に多い．

入館料は有料が全体（1435 館）で 70.7%, 総合館（103 館）で 65.0%, 自然史館 (103 館) で 73.8％である．入館料は全体－総合－自然史でそれぞれ，中央値が 300 円－ 300 円－ 400 円，平均値が 402 円－ 307 円－ 428 円である．割引は団体割引のほか, 幼児, 小・中学生，障害者，高齢者対象であり，県立館に多い．住民限定の場合もある．

開館時間の変更も季節・時期において行われており，自然史館では比率が高い．曜日による変更は生物館園で高く，自然史館も高い傾向にある．美術・総合などの金曜日，生物館・自然史などでは土・日が多い．いろいろな入館者増の取り組みが行われている．

(5) 資料

一般的に人文系資料が多い．自然系資料は総合，自然史，生物館園に多い．

総合館・郷土館は人文・自然両方の資料をもち，郷土館はミニ総合館的である．図書資料は総合・歴史・自然史館に多い．

資料購入費は無い（ 0 円）館が全体 (2030 館) では 52.6%，総合館で 35.9%, 自然史館で 53.4% ある．　収蔵スペースはいっぱい・オーバーが全体で 45.6%, 総合館で 67%，　自然史館で 33% である．

整理状況を見ると，ほとんどの資料が台帳に記載されている館が全体で 53.3%, 総合で 40.8%, 自然史で 27.2%, 電子メデイアによるデータ・ベース化はそれぞれ，35.5%, 51.5%, 34.0% である．研究紀要を出版している館は全体 22.1%，　総合 52.4%, 自然史 34.0% である．

(6) 防災

防火設備は 90% 前後，防犯設備は 50% 前後用意されている．免震ケースの採用は全体で 8.1%, 総合館で 12.6%, 自然史館で 5.8% である．

(7) 障害者対応

		エレベータ	車いす	展示パネル	字幕スーパー
全体	（2030 館）	37.3 %	66.7	7.1	6.4
総合館	（103 館）	62.1	85.4	12.6	11.8
自然史館	（103 館）	41.7	61.2	14.6	8.7

(8) 付帯施設

ミュージアムショップ　　全体：43.6%，総合館：43.7%, 自然史館：53.4%　直営が半分～ 2/3 である．

レストランなど　　全体 : 24.6%，総合館：25.2%, 自然史館：19.4%　総合館では 100% 近くが委託，その他では 2/3 が委託である．両者とも 50% ～ 90%＋が自由にアクセスできる．

・丹青研

	2000 年（1999 年調査）	2003 年（2002 年調査）
回答率全体	1432/4198 館　34.1%	1870/4490 館　41.6%
自然史	117 館（全体の 8.2%）	160 館（全体の 8.6%）
運営費のうち		
特別展費	640 館　500 万円未満	827 館　500 万円未満
（全体）	が 59.1%	が 59.4%
中央値（千円）	3,512	3,143
平均値（千円）	14,720	14,377
	両方の値とも前回を下回る	
（自然史）	10,126（千円）	13,869（千円）
資料費	546 館　500 万円未満	645 館　500 万円未満
（全体）	が 72.4%	が 76.3%
中央値（千円）	1,065	1,000
平均値（千円）	13,288	8,730
	両方の値とも前回を下回る	
（自然史）	4,795（千円）	11,245（千円）
（平均値）	金額としては増えている	
ミュージアムショップ　全体	49.7%	49.8%
自然史	47.7	42.5
	美術館，生物館園に多い	美術館・理工館が増加
レストラン•喫茶室　全体	23.4%	22.3
自然史	17.6	17.3
	同上	同上

その他

1999 年度調査

・平均観覧時間　（1216 館）　16 ～ 30 分が 1/2

・解説スタッフ　　いる　　80.8%　　子供対応　33.4%

障害者対応 29.6%　高齢者対応　36.6%

2002 年度調査

・無料化　　全体　61.6%　　自然史 58.3%

・外部委託が増加している（特に施設管理面）
・総合学習対応　　63.3%　授業協力・出前授業・パンフなど
・管理運営方式（1851 館）　　直営　75.3%　委託　24.4%

(9) 博物館の都道府県別館数

日博協（2008）のデータを整理して博物館の県別分布のベスト10 を選んだのが表 3 である．この表から次の点が指摘できる．

a. 博物館数は必ずしも人口と比例していない．
b. 人口比から見て博物館の多い県は人口 200 万人台の県である．
c. 自然史関連の館の，全体館数に対して比率の大きいのはいわゆる都市型の県でなく，自然に恵まれた地方の県である．
d. 人口比で自然史系の館の多い県は同時に博物館全体に対して自然史系の館の多い県である．
e. 博物館数・人口比で見た博物館数はいくつかの例外はあるが近畿以西で少ない．東高西低である．
f. ここにあげた項目全部をクリアした県は長野県•岐阜県である．長野県は多くの項目で上位を占め，人口比で全館数で 1 万人に 1 館，自然史系で 9 万人に 1 館の数は他と比較して抜群である．岐阜県の，それぞれ 1.4 万人及び 12.4 万人に 1 館も優れた数字である．
g. 北海道・富山県が 4 項目，岩手県が 3 項目，秋田県・高知県・愛媛県が 2 項目に該当し，表からわずかに外れるが島根県・沖縄県がこれに次ぐ．
h. 人口比で下位にランクされる館は全体では下位より大阪府，静岡県，埼玉県，神奈川県，千葉県，自然史系では福岡県，大阪府，静岡県，千葉県，佐賀県である．しかし，これらの県の多くには県立・市立の活動的な総合館，自然史館があり，その地域の中心館となっている．博物館活動が数だけの問題でないことを示している．

3．自然史系博物館の基本・活動などの状況（まとめ）

上で述べたデータをまとめて，自然史系の博物館の基本，活動などについてまとめる．

1）基本

•館種と館数　　全博物館 4040 館中，自然史博物館は 4.5%(183 館)，総合館は 4 %(160 館）であり，一方，約 9000 館，約 7.5% という数字も考えられる．時代的経過を見ると，全体ではやや増加している．自然史館はほとんど変らず，全体に対する割合もほとんど変らない．

・入館者数　全体ではやや減少している．自然史館では数・割合とも微増している．

•新設館　減少している．規模は縮小し，形態が多様化している．すなわち，既存施設の活用，複合館，併設館，施設の移転などがある．中・小の館が増加し，一般的に規模が小さくなる傾向が見られる．リニューアル開館が増えていて，バリアフリー化，わかりやすい展示，ショップやレストラン・喫茶が増加している．財政的な理由からか施工が複数年で行われる場合がある．

・職員数　常勤職員は全体で平均 6.8 人，学芸員 2.3 人，自然史館では 6.2 人，総合館で 9.0 人で，1997 年とくらべて減少している．逆に，非常勤職員が増加している．なお，学芸員の数は平均で自然史館で 2.65 人，総合館で 4.17 人である．

丹青研の 1999 年と 2002 年の調査を比較すると，常勤職員数は全体で 6.1 → 5.4 人 , 自然史館で 5.1 → 4.7 人, 学芸員は全体で 4.0 → 3.7 人，自然史館で 3.0 → 3.8 人で，自然史館の学芸員の他は減少している．

・資料　自然史資料は総合館，自然史館，生物館園に多い．資料購入費は減少し，資料の整理は十分には行われていない．

・建物　利用割合は展示が高く，全体　67.4%, 自然史館　68.7%,

表 3. 県別に見た博物館数（ベスト 10）（日本博物館協会 2008 のデータによる）.
Table 3. Number of museums by Prefecture in Japan.

博物館数	総合＋自然史館数	総＋自／博物館数%	人口(万人)／博物館数	人口(万人)／総合館＋自然史館数
1．東　京　264	1．北海道　44	1．高　知　17.1	1．長　野　1.0	1．長　野　9.1
2．北海道　262	2．長　野　24	2．北海道　16.8	2．島　根　1.1	2．岐　阜　12.4
3．長　野　220	3．東　京　19	3．沖　縄　16.3	3．山　梨　1.3	2．富　山　12.4
4．兵　庫　149	4．岐　阜　17	4．岩　手　13.1	4．岐　阜　1.4	4．岩　手　12.6
5．岐　阜　148	5．神奈川　15	5．鳥　取　12.0	4．富　山　1.4	5．北海道　12.8
6．神奈川　145	6．新　潟　12	6．岐　阜　11.5	4．福　井　1.4	6．石　川　13.0
7．新　潟　143	7．岩　手　11	7．愛　媛　11.4	7．秋　田　1.6	7．高　知　13.3
7．愛　知　143	7．埼　玉　11	8．富　山　11.0	7．山　形　1.6	8．岡　山　13.7
9．静　岡　109	7．兵　庫　11	9．長　野　10.9	9．新　潟　1.7	9．秋　田　16.5
10．千　葉　108	10．富　山　9	10．滋　賀　10.8	10．山　口　1.9	10．福　島　17.3
11．埼　玉　101	11．石　川　9	10．熊　本　10.8	11．岡　山　2.0	11．愛　媛　18.6
全国(参考)　4040	343	8.5	3.2	37.9

総合館　61.8% である．中央値が低く，中小館が多いことを示している．築 30 年以上の館が約 27% あり，老朽化が徐々に進んでいる．免震設備は十分ではない．障害者対策では車椅子の用意が多く，ついでエレベータの設備である．

・運営　外部委託が増加している．指定管理者制度の導入はそれほど進んでいない．無料化は約 60% で行われている．

・自然史博物館の多い都道府県は人口比で多いのが長野県，岐阜県，富山県，岩手県，北海道である．

・自然史館のうちに休館・統合・廃館などの館が生まれている．

・総合博物館は最近作られていない．

・大学博物館　　国立（独立行政法人立）大学の中で整備が行われた（～ 2002 年）．その他の大学でも整備が進んでいる．

・ビジターセンター　　エコブームが生まれ，自然に対する認識が向上し，ビジターセンター，ネイチヤーセンターが各地に生まれている．

2）活動

・調査研究より教育普及の面が重視されている．

・広報，資料整理を中心に情報化が進んでいる．

・入館者増加対策・わかりやすさを求める対策　解説スタッフ，音響解説の導入はその例である．

・ネットワーク　自然史館のネットワークが西日本でつくられ，全国的にも必要性が論議されている．

・ボランテイア　増加している．

・評価　一般的になり，各館で，各種のレベルで，各種の方法で行われるようになった．

3）その他

・ミュージアムショップ・レストラン・喫茶　増えている．委託などが多くなってきている．

4．自然史博物館の現在（2008）―いくつかのコメント

1）背景としてあるもの―社会と博物館

（1）社会の流れ

21 世紀に入って 8 年，世界情勢は混沌としている．経済的変動は各種の格差を生み，戦争はいまだ終焉せず，環境問題，資源・エネルギー問題，食料問題，飢餓問題，災害問題と果てるところがない．国家間の問題，人種・宗教の問題もますます複雑さを増し，各種の紛争が世界各地でいまだに発生している．経済（価値観の基礎がお金）が優先される社会はますますひずみをつくってゆくだろう．

日本ではどうだろうか．戦後 50 年を超え，私たちの暮らしは確かによくなった．巷に「もの」があふれ，豊かさに満ちている．世界の状況と比べれば，格差は少なく，全国民が中流意識をもっているとさえ言われる状況がある．しかし，行政改革は予定されたほどの効果を生まず，むしろひずみが目立っている．特に国・地方の財政危機は大きな問題で，これからの私たちの暮らしに大きな影響を与えると考えられる．環境・資源・食糧などの世界的な問題は日本においても大きな問題であり，むしろより強く影響が出てくると想定される．こうした問題のほかに高齢化・少子化が進み，物質的価値観があふれる社会は決して住みよい社会とはいえない．　ゆとりがあり，穏やかな社会の中でゆっくり暮らせる，「豊かな日本」というイメージはもはや遠いといえよう．相次ぐ各種の災害，事件はこういったひずみの別な側面を見せているとも考えられる．

（2）博物館の流れ

博物館は社会的な意味をもった機関であるから，当然，上に述べたような社会の流れから独立して存在することはありえない．最近の博物館の状況を見ると，まさに社会の反映と思われる事象がたくさんある．その第一は財政問題であろう．前章で見たごとく，日本の博物館ではすべての面において財政的危機の影響を受けている．新設館の減少，展示替えの延期（展示の老朽化），職員数の減少，運営費の減少などが著しく，さらには廃館，休館，統合縮小なども見られる．さらにこのことが他にも影響を及ぼしている．指定管理者制度の導入，運営の外部委託の増加などである．これに伴っての博物館の見直しも行われている．

一方，博物館の性格・ありかたについても，「開かれた博物館」の理念の下に，利用者対応のいろいろな改善が行われている．いわゆる博学連携，わかりやすい展示，　参加体験型の活動，ボランテイアの増加などがそれである．

確かにこの 10 年くらい，博物館は変ってきたといえそうである．変わらざるを得なかったともいえよう．一方，変っていない側面もある．本来の博物館の基本はしっかり守られなければならないが，いつまでも旧来のことにこだわっている場合でもない．いかに対応すべきか，模索しなければなるまい．

（3）博物館はなにのためにあるか

いまさらの感無きにしもあらずだが，一言で言えば博物館は社会の学校であり，「もの」を使って「こと」を語り，知り・理解し・考えてもらう　場である．そのために 3 つの基本，「資料」・「人」・「建物」があり，「収集保存」・「調査研究」・「展示」・「教育普及」の 4 つの活動を行う機関が博物館である．このほか，現在では「情報」に関すること，「社会活動」に関することも含まれると思われる．もう少しわかりやすく，具体的に言えば，a.「もの」を集めて調べ・保存する，b. わかりやすい展示と楽しい行事，c. 誰でも利用でき，d. 楽しく参加でき，e. 情報の受発信をする場といえようか．

学芸員は「人」の中心であり，能力，専門的知識，熱意，総合力などが求められる．さらに現在のように限られた人数である場合は専門から多少はなれても，関連する広い範囲をカバーすることも必要である．同時に，人を育てること－友の会の会員・ボランテイア・利用者などを対象とする－も重要である．その分野の底辺を広げ，共同研究者あるいはアシスタントをつくることになるからである．

「資料」は最近は少し意味が異なってきた．実物の入手に限りがあり，制約が多くなってきた現在，おのずと複製を利用することが生まれてきていて，しかも場合によってはコンピュータ技術の目覚しい発達によって実物と区別が出来ないほどのものが作られること，バーチャル表現が可能になったことがある．ある場合には本質的な「資料」として扱う必要があるかもしれない．しかし，「実物」はあくまで別物で，高い価値を持つことはもちろんである．「情報」は果てしない広がりをもつようになった．博物館の重要な機能として認めなければなるまい．

（4）博物館の多様性・多重性と両極性

博物館の対象とする自然・文化は多様性をもつ．空間的には地球あるいは世界規模のことから，広域・国のレベル，さらにはさ

まざまな地域・地方にまで多様な姿・形がある．これら多様なものは時間的経過の中で積層され，篩い分けられ，変化し，進化し，多様性が生まれる．多様性・多重性をもったものの中から，選ばれたものが博物館に保存され，研究される．その中のあるものは展示として一般利用者の目に触れ，また，普及・学習の材料として利用される．

ここにおける選択はアイテムによって異なるが，同時に選択する「人」によっても左右される．選択は公平・公正でなければならないが，同時にある種の個性（例えば学芸員・館長など，地域性など）による区別がなされる場合もある．博物館の歴史の中にそれを読み取ることが出来るが，このことによって館の個性が生まれてくる．しばしば，国によっての博物館の性格の違いが見られるが，それはこの選択によることがある．いずれにせよ，この選択は洗練することにつながるので，なされるべきである．

博物館にはいろいろなことに両極性が認められる．例えば，総合館にするか，単科の専門の館にするか，研究面を重視するか，教育普及面に重点を置くか，などである．その他，伝統的立場か革新的立場か，地域的か地球的か，建物型か野外型か，常設展型か企画展重視か，などである．さらに，未来へ向かって，変るか変らないか，そのための努力をするかしないか　などもあろう．

利用者の立場から見ても，見る側の年齢による違い・意識の違い，参加型重視か，面白さ・わかりやすさの程度，楽しさの度合いなどである．

両極のいずれにあるか，また，その要素の割合がどちらに属するか，どちらのウエイトが大きいかなど博物館の性格を規制することがある．このことは固定的でなく，動的に考えたほうがよい．

（5）博物館のバリアフリー

バリアフリーという言葉は最近よく聞くが，主に障害を解消するハードの面を言うことが多い．しかし，バリアフリーということはもっと広く捉えて，そのほかのことにも適用されると思われる．例えば，展示や学習活動の中身（ソフト）についても，レベルによる差を考慮した形があるだろうし，博物館活動に関して，正規のスタッフ以外にNGO・NPOやボランテイアの方たちが重要な位置を占める場合も生まれてきている．正式の職員による，組織としての確かさは必要であるが，一方においてゆとりのある姿勢，ときに枠にこだわらない仕組みや活動も現在ではあってもよいのではないだろうか．また，いろいろな面での“ゆるさ”はバリアフリーにつながると思われるが，逆にある“きつさ”が必要とされる場合もあろう．このことがバリアフリーに反対の立場でないことも明らかである．

（6）利用者の立場から

博物館を利用しようとする人は必ずしも多くない．年間の入館者数をみても，2171館で148,195,174人（2006年）であり，人口比にすると，国民一人が約1年に1.1回博物館へ行くことになり，多めに見積もっても1.5回がせいぜいであろう．この数字を大きいと見るか，小さいと見るかは判断の分かれるところであるが，博物館は一般の人にとって決してなじみ深いところではないのである．むしろ，時間的にも空間的にも非日常の世界である．

それでは人は博物館に何を求めるのであろうか．利用者は好みにしたがって，目新しさ（珍奇新古変）を求めて来館する．そして，そこで満足を得る場合もあるだろうし，つまらないと思うこともあるだろう．一過性でなく，リピーターとして再来館ということになれば，それは博物館に魅力があったということになる．

来館者増が今の博物館にとって，命題のひとつである．そのためのさまざまな対応がある．ハードとソフトの両面における展示のバリアフリー化（わかりやすい・見やすい展示），ハンズオンを加味した展示，体験型の面白い行事の企画などがあげられる．遊びの要素も時には必要であるし，映像と情報技術を取り入れることもある．一方，テーマパークについては，その技法を参考にすることはあっても基本的に違う施設であることを知っておく必要がある．その意味ではイージーに流れないこと，安易な迎合は避けねばならない．

2）自然史系博物館では

（1）自然史学と自然史系博物館

かって博物学と呼ばれた自然物に関する学問は今では自然史（誌）学と呼ばれる．糸魚川（1993; 1999）は自然史学について解説しているが，簡単に言えば「自然のありのままのすがたと生い立ちを総合的に研究する学問」である．歴史的な背景を重視すれば［史」を当てたほうがよいし，記述を主に考えれば「誌」のほうがよい．対象とするものは自然物（地球の構成物と生物）である．この自然物は多様性と普遍性をもち，加えて歴史性をもつ．その分布は空間（地球上の分布）と時間（地球史）の2つの軸の上で捉えられる．自然物は個々を対象としてもよいが，お互いに関連付けて総合的・包括的に扱うことが大切である．認識のレベルはいろいろで，階層性をもつ．

自然物を対象とし，自然史学を基盤において自然史系博物館が成立する．博物館という形の上でのあり方が多様であるので，「系」をつけて呼んでおく．自然史系博物館は次のように区分される．

自然史博物館	総合（自然物全般を対象とする） 単科（個別の自然物を対象とする）
自然史系博物館	総合博物館（人文・美術など他分野も含む大型館，県立などが多い） 郷土博物館（複数分野からなる，総合博物館ほど規模が大きくない．市町村立が多い）
ビジターセンター・ネイチャーセンターなど	自然公園などに併設される館
大学博物館	大学付置（多分野を含むことが多い）

自然史系博物館は大学•研究所と共に自然史研究の中心であり，同時に資料の保存，教育普及，情報の受発信の面で大きな役割を果たしている．

自然物のうちで，生きている動物・植物は動物園，植物園，水族館で扱われるが，最近では自然史系の博物館でも扱われるようになった．また，生物館園の中に，資料館として展示を行う場合もあり，厳密な区分はされなくなった．

自然現象や宇宙に関することは原則的に自然史系博物館では扱われなかったが，包括して含む場合もあり，理工館は理学のうちの物理学・化学（ときに数学），応用理学（工学・農学・医学など）を主な対象とするが，環境など多分野にわたるアイテムの場合は自然史分野のことも関連してくる．自然物は地球的なひろがりをもつと同時に地域的な存在である．したがって自然史学もそれに基づく自然史系博物館も地球性と地域性の両面をもつ．時間の軸で捉えた場合は過去－現在の軸のどこかに位置づけられ，この場

合は連続的であるといえる．どちらにしてもこの２つの軸を基軸として対象を扱う必要がある．

最近の環境問題などとの関連で考えると，「自然」を「人」と対置して扱わなければならないことが多い．人の行為は自然に大きな圧力を加えていて，現在の地球ではそのことを考慮しないでの自然の扱いは考えられない．自然史系博物館の基本的なテーマとして「人と自然」が大きくクローズアップされるのである．

（２）研究と教育普及のバランス

日博協のアンケート調査によれば，現在，多くの博物館では研究活動より教育普及活動に重点が置かれている．「開かれた博物館」としての姿勢は当然，多くの来館者を期待しているし，そのためには来館者へのサービスとしての各種の活動が必要となってくる．展示を含めて，普及教育（学習）はその中心に位置づけられる．多くの博物館では，学芸員が知恵をしぼり，ボランテイアの方がたの協力も得て多様な活動を展開している．自然史系の博物館では野外と室内とを結びつけた活動がやりやすいし，また成果を何らかの形で手元に残すことが出来るので有利である．総合学習が始められた時期にそれへの対応が多くの博物館で行われた．文部科学省の方針変更で，現在は多少事情が違うが，多くの事例が生まれた．例えば「博学連携」と呼ぶ活動はある館ではそれ以前から実施され，現在も続いている（本特集の「博学連携」を参照して欲しい）．博物館で「もの」を使っての授業，学校へ出向いての出前授業，いずれも学芸員が行う．新しい形の授業である．子供たちがどのように受け取ったかは別稿（可児，2009）に詳しい．少ない経験ではあるが，実見したところでは，それこそ非日常のこととして楽しく・面白く受け止められていると感じた．

博物館にとって，教育普及の側面は重要であるが，研究の側面も大切であることはいうまでもない．資料の収集・保管を第一として，それに続く調査研究は教育普及活動の基礎としてそれを支える重要な役割をもつ．ただ残念なことに，これらの活動は地味であり，効果がすぐ表われない．費用対効果が現われにくい，などにより疎外されることが多い．最近は目の前の・目立つことが重視される社会であるからなおさらである．

財政的な状況が悪い中で，研究活動はともすれば無視され・無用と扱われかねない．30年，50年後は言うに及ばず，近い将来においても研究活動は必ず効果を表す，博物館の大切な・基本的な活動であることを忘れてはならない．バランスよく２つの活動のできる博物館がこれからの理想的な博物館の形であろう．

（３）アイテムの多様化・枠の拡大

社会の流れに沿って，博物館で大綱化・弾力化が言われて久しい．実際にどのくらいの変化があったかはよく読み取れないが，その方向は間違いではない．ただ，具体的に，何を，どのように進めることが出来るかが問題である．

自然史系博物館で対象とするのは「自然」であり，さらに「自然」「人」のかかわりである．対象とする，「もの」・「こと」が多様になり，枠が拡がった．例えば，最近，世界的に大問題となっている環境問題は自然史分野と関わってアイテムの広がりを生み，扱う枠を拡大させ，環境に関するさまざまな展示施設を生んだ．自然保護の問題も含めて市民の関心は深まり，いわゆるエコブームを生んだ．NGOとして，積極的に運動に参加する人の数も増えてきた．

いわゆる人と自然のかかわりをテーマとしたときは単なる自然だけでなく，人間生活とかかわるさまざまなアイテムが対象になってくる．この視点に立てば複雑な現代は多くの材料を提供してくれる．身近な環境としての自然，地球規模の自然環境は当然としてテーマとなる．地域の環境を対象とすれば博物館は地域博物館の色彩が濃くなり，視点を広げれば地球規模の問題を扱うことなり，世界へ広がるネットワークを作ることが出来る．

さらにアイテムを拡げれば，健康・医療に関するすること，資源に関すること，災害に関すること，食糧問題などもテーマとなる．観光に関しても，自然についての興味が増大している昨今だから，十分アイテムになりうる．人々が単に興味の対象として自然を見るだけでなく，より本質を知る努力を始めれば，当然博物館の問題となってくる．

もう少し拡げて，自然博物館との関連を見れば，仕切りを取り外して，共通の問題として，自然と人のしていること・してきたこと・その結果が主題として浮かび上がってくる．拡大解釈となるかもしれないが，分野間の仕切りが外れて，より包括的な・総合的な博物館が生まれる可能性が見えてくる．

そして，あり方や存在の形としてみたとき，現在の商業施設に小売の個人商店，コンビニからスーパー，高級専門店，デパートまで多様な形があるように，博物館も分化した多様な姿があってもよいと思われる．

（４）情報化と国際化

現在の社会における情報機能の発展は自動車と並んで大きな革命的変化といえるだろう．博物館における情報化は博物館の本来の機能との関連で大きく発展した．その主たることは資料の整理と広報，そして展示における画像化などである．アンケート調査にも，最近の進歩・拡大の様子が現れている．いまや，多くの博物館がホームページをもち，いかにつくり・活用するかが問題とされ，アクセス数が活動のひとつの目安とさえなってきている．利用者側からすれば大変便利であり，また，博物館の姿勢を知るために役立つ．

資料の整理についても，革命的な変化が生まれたといえる．パソコンを利用してのデータベースの作成は普通のこととなりつつある．つくりやすさ・整理のしやすさ・利用のしやすさから考えて当然であろう．

情報機能の一般化は別の側面の活動を活性化した．日本は欧米と離れた位置にあり，近代化して外国と交流を始めてからまだ140年しかたっていない．しかも第２次世界戦争によって外国との交流は閉ざされた状況にあった．戦後の経済的発展によって，いまや世界的な大国といわれ，海外旅行も一般化している時代であるが，言語の問題もあって，国際化が進んでいるとはいえない状況がある．

ただ，現在はパソコンを利用しての通信が早く・安く・簡単に出来ることになり，言語のバリアの少ない若い人を中心に国際的な活動が盛んになってきている．それは多くの情報をもたらし，資料の貸し借り，共同調査・研究などにまで及んでいる．博物館の世界での人的交流も十分とはいえないが生まれてきており，外国の博物館でキュレーターとして活躍している人もあり，外国の博物館人の来訪・交流も増加している．博物館のルーツはヨーロッパにあり，アメリカではそれを継承して，新しい形が生まれている．いろいろな面で日本の博物館が参考とする点がある．日本の

博物館も高いレベルにあると思われるので，積極的な交流によってさらに新しい発展が望めるものと思われる．

（5）大学博物館とビジターセンター

この2つは自然史系博物館に含めて考えることが出来る．いずれも欧米で早くからつくられた博物館であるが，最近，日本でも増えてきた．前者は戦前から教育・研究のための資料館として，あるいは実験所・植物園などの付置としてあり，長い歴史を持っているが，本格的な大学博物館といえる館は東大総合資料館が初めてであろう．近年になって，文部科学省の方針に基づき，大きな総合大学のいくつかに博物館を付置する構想が生まれ，つくられた．東大総合資料館は東大総合博物館としてリメイクし，デジタルミュージアム構想も実現した．最終的に2001年の鹿児島大学総合学術博物館，2002年の大阪大学総合学術博物館で一応終結し，その他の大学には及ばなかった．これらの大学博物館は建物の再利用やや人員の流用によって実現したもので， 各大学の努力は大変なものであった，と聞いている．その他の大学にはこのプロジェクトは及ばなかったが，ある大学では自前の努力によって，ある場合には学内措置によって大学博物館を設立した場合もある．

欧米ではほとんどの大学が博物館を持ち，場合によっては複数の専門別の館をもっている．オクスフォード大学のアシュモレアン博物館（図2）は1683年に創立された世界最古の博物館であるが，現在でも活動を続けている．韓国は大学設立の必須条件に博物館があること，というのがあり，この点に関しては先進的である．

考えてみれば大学は研究と教育の2つの機能をもち，その点では博物館と共通する．ただ博物館は不特定の，多様なレベルの知識をもった人々をを対象としている点で異なる．大学に博物館があることは当然といってもよく，むしろ無いほうが不自然とさえいえるかもしれない．

図2．オクスフォード大学アシュモレアン博物館．
Fig. 2. Ashmolean museum of the Oxford University, Great Britain.

大学博物館では研究の成果の基礎となった資料を保存することが最初の活動としてある．ついで成果を学生に公開し，教育の一助とする役割を持つ．さらに一般化して市民に理解してもらうことが必要である．これは大学のＰＲとしても役立つ．各種の行事を計画して市民の参加を俟つのも大学と市民を結ぶ手段として有用であり，「開かれた大学」としてのイメージを生むであろう．

いずれにせよ，日本の大学博物館は博物館としてみたとき，まだ未成熟であるといえよう．数•質とも満足のゆくものではない．大学のなかでのステータスも十分に確立しているとは思えない．さらに，最近は変ってきてはいるが大学人は基本的に研究優先の気持ちを持ち，教育普及，特に博物館的な教育活動を苦手としている．時間をかけて,改めてゆくことが必要であろうと思われる．

最近，環境問題や自然保護に対する意識が高くなり，ビジターセンターやネイチャーセンターが各地に生まれている．ビジターセンターはもともとアメリカの国立公園などで生まれた機関であるが，いまや全世界的に，公園に限定されない．ネーチャーセンターも含めて広がりを見せている（図3）．基本的には，里山も含めて近くに体験できる自然環境があり，その場の案内・解説と管理を目的とするものである．そこには博物館的機能が含まれてくるが，一般的には限られた地域に限定されることが多い．

図3．キラウエア国立公園ビジターセンター（ハワイ島）．
Fig. 3. Visitor center of the Kilauea National Park, Hawaii, USA.

単なるビジターセンターであるだけでなく，機能的な拡がりが加わって，広い意味の博物館としての更なる発展を期待して，地域から一歩踏み出した広域的な視座に立った活動が望まれる．その活動は市民，特にボランテイアの人々の協力，地域の有識者，例えば大学その他の研究者との協働のもとに行われるとよい．また，教育普及の側面だけでなく，研究の側面，特に資料の収集・保存が行われ，地域の自然センターとしての役割を果たすことが必要である．具体的な例を別稿(糸魚川，2009)において述べる．

（6）ネットワーク

日本には数多くの博物館があるが，それぞれは別の機構の中に含まれていて，直接関係が無い．それぞれの行政組織の中で，博物館はどちらかといえば小さい・特殊な・孤立した・閉じられた世界である．専門性から行政内の他の部門との交流は少なく，一度博物館に属してしまえばそのまま定年までということも少なくない．これはこれでじっくりと・継続して仕事が出来るというよい面を持っているが，一方において停滞・閉鎖・慣れといった悪い面も出てくる．

こうした環境を変える一つの方法が共通する博物館同士のネットワークである．こちらの側面にこそ新しい展開がある．すでに

いくつかの事例がある．

日本地質学会の中には博物館の学芸員の部会があり，総会の折に会合をもっている．学術会議にも博物館の連帯をプロモートする動きがある．松下(2002)は地域博物館ネットワークを作る必要性をまとめている．特に市町村立博物館と県立博物館とのネットワークの確立を提唱している．

山西(2005)は「環瀬戸内地域（中国・四国地方）自然史系博物館ネットワーク推進協議会」について述べている．この地域の公立7館園が参加し，さらに9館園と2つの友の会，1団体が加わった，ネットワークがつくられ，各種の活動をしたという．そして，その意義についても，資源の共有による大きな事業が出来ること，互いの事業の進め方やノウハウを知る事ができること，学芸員の人的交流ができること，情報交換ができること，存在意義を社会に対して示すこと　を上げている．文部科学省の推進事業として始まったが，その後「西日本自然史系博物館ネットワーク」に引き継がれ，NPO法人にまで発展したという．

（7）博物館と博覧会

2005年の3月から9月へかけての185日間，愛知県の瀬戸市と長久手町を会場として開催された2005年日本国際博覧会（愛・地球博）は予定の約1.5倍の，2200万人を超す入場者があって，大成功であった．130を超す機関が出展し，多様な展示・イベントが繰り広げられた．主題は「自然の叡智」，サブテーマの一つに環境問題を取り上げたのは，時代の流れとはいえ，成功であった，といえよう．

この博覧会ははじめ瀬戸市の海上の森（図4）を主会場として計画された．ここは県有林を主とする地域であるが，里山としての性格を持ち，自然を楽しむ場として市民に広く利用されていた．そこで自然保護が問題となり，反対運動が始まり，愛知万博検討会議をはじめとして，多くの議論が行われ，会場の変更が行われ，開催されたのである．このことと関連して，環境についての意識が高まり，　この運動は結果として大成功であった．

博覧会と博物館はよく似た側面を持ち，博覧会から博物館が生まれた事実もあり（日本の博物館のルーツは博覧会である），しばしば混同されたりする．しかし，当然のことであるが基本的に違う．第一に博物館は恒久的な機関であり，はっきりした理念を持ち，基本的な要素を備えて確かな機能を果たす．これに対し，博覧会は一過性で，愛知万博の場合もそうであったが，その内容は多岐に渡り，テーマはあっても必ずしもそれに一致してなくて，いかに人を集めるかの視点に立った展示・イベントが多い．愛知万博の場合，極端な見方をすればテーマに沿った展示・イベントと，自国のＰＲを兼ねたバザールとに分かれた．前者は主に先進国の館であり，後者は主に開発途上国のそれであった．このように，博物館と博覧会は根本的な違いがある．

図4．海上の森．
Fig. 4. Kaisho-no-mori Forest.

また，相変わらずの珍らしい・稀な・新しい・古いなどの展示物が人目を引いた．シベリアの冷凍マンモスはその例で，連日長蛇の列ができ，その後，全国を巡回して人気を呼んだという．昔の見世物的なセンスは今でも残っていて，それを目玉にしたわけである．マンモスというなら，それのもつ意味を提示して，環境と結び付けて，単なる昔の，違う環境に生き，その後絶滅した珍しさだけでなく，その意味をもっと提示して欲しいものである．

しかし，プラスの面が無いわけではない．確かな主張をうまく，一般の観客（博物館の入館者と比べて遊び・楽しみに来ている人が多い）にわかってもらえるような展示をしている場合がある．また，物を買う・何かを見る・聞くの楽しみは誰にもあり，その点に関しては博物館は敵わない．博物館としては大いに学ぶべき点である．なるべく多くの入場者をとの努力も博覧会に認められる．ただそのために，なんでもありとすることは博物館には出来ないが．

愛知万博の場合の終了後の対応にはいくつかのプラス効果が認められる．環境評価（いわゆるアセスメント）がとにかく行われたこと，資材のリサイクルが行われたこと，　瀬戸愛知県館の建物が「あいち海上の森センター」としてよみがえり，ビジターセンターの役割をはたすことになったこと，長久手会場が再び青少年センターとしてスタートしたことなどである．環境に配慮した対応が行われたということであろう．

2010年に生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）が名古屋市で開催されることが決まった．直接的ではないが，　愛知万博の成功がこの会議の誘致に影響を与えているのは事実である．

こうした対応は決して悪いことではないが，自然史系博物館を造る運動が30年も前から続いているのに何の反応もなく，今になっての，形だけの自然保護や環境問題への対応ができるのか疑問を感じる．

今年スペインで，2010年に中国の上海で万博が開催される．愛知万博の場合，その前のハノーバー（ドイツ）の万博と比べたとき，明らかに姿勢の違いがあり，それもより現代にふさわしい形であったと思われる．それは時代の変化をしっかり捉えて対応したことであり，まさにテーマの「自然の叡智」　あるいは人間の叡智を示したものとして評価できる．

一般論であるが，２１世紀でもまだ万博か，という考えがある．確かに，情報システムが高度に発達し，グローバル化が進んだ現代にいまさら，の感もある．博覧会が博物館をつくる時代を過去のものとし，博物館が博覧会をつくる時代を考えることは出来ないかと思われる．

おわりに

糸魚川(1999)は「これからの自然史博物館」と題して，将来の博物館のあるべき姿をキーワード・キーセンテンスとして示している（198–209 p.）．また，これからの博物館の方向として10の項目をあげている（208–209 p.）．現在に置いて，これらを改訂する必要はなく，博物館については「包括的博物館」を目指すこと，自然史系博物館については「自然と人」を大テーマにとすることが大きな命題として挙げられる．これらをさらに具体化した「21世紀における博物館の将来像」は次の機会に改めて検討したい．

引用文献

千地万造(1998)，自然史博物館―人と自然の共生を目指して．253 p. 八坂書房.

糸魚川淳二（1993），日本の自然史博物館．228 p. 東大出版会.

糸魚川淳二（1994），自然史博物館の現在．豊橋市自然史博物館研究報告，4，29–41.

糸魚川淳二（1999），新しい自然史博物館．229 p. 東大出版会.

糸魚川淳二（2009），自然史博物館から「えこ」ミュージアムへ．瑞浪市化石博物館研究報告，35(Suppl.)，83–92.

糸魚川淳二・濱田隆士（編）(1991)，シンポジウム　新しい自然史学と博物館．月刊地球，**13**（11），687–738.

可児光生（2009），美濃加茂市民ミュージアムにおける博学連携活動．瑞浪市化石博物館研究報告，35(Suppl.), 63–72.

加藤有次・西源二郎・米田耕治・鷹野光行（編）(1999～)，新版博物館学講座，全15巻，雄山閣出版.

松下師一(2002)，地域博物館ネットワーク構築の必要性．徳島博物館研究会（編）地域に生きる博物館，3–27.

日本学術会議（2007），特集「博物館が危ない！美術館が危ない！」．学術の動向，**12**（2），7–55.

日本博物館協会（編）(1978)，全国博物館総覧（上・下）．666 p. ぎょうせい.

日本博物館協会(編)，(2004a)，平成14年度博物館園数．博物館研究，**39**（3），5–8.

日本博物館協会（編），(2004b)，平成14年度博物館入館者数．博物館研究，**39**（3），9–11.

日本博物館協会（編），(2005a)，平成15年度博物館園数．博物館研究，**40**（3），9–12.

日本博物館協会（編），(2005b)，平成15年度博物館入館者数．博物館研究，**40**（3），13–15.

日本博物館協会（編）(2005c)，博物館総合調査報告書，274 p. 日本博物館協会.

日本博物館協会（編）(2006a)，平成16年度博物館園数．博物館研究，**41**（3），5–8.

日本博物館協会（編）(2006b)，平成16年度博物館入館者数．博物館研究，**41**（3），9–11.

日本博物館協会（編）(2007a)，平成17年度博物館園数．博物館研究，**42**（3），5–8.

日本博物館協会(編)(2007b)，平成17年度博物館入館者数．博物館研究，**42**（3），9–11.

日本博物館協会（編）(2008a)，平成18年度博物館園数．博物館研究，**43**（3），7–10.

日本博物館協会(編)(2008b)，平成18年度博物館入館者数．博物館研究，**43**（3），11–13.

日本古生物学会（編）(2008)，特集　古生物学のアウトリーチ－博物館での取り組みを例にして－．化石，83，1–40.

布谷友夫（2005），博物館の理念と運営．234 p. 雄山閣.

大堀　哲（編）(1997)，日本博物館総覧．387 p. 東京堂出版.

自然史学会連合・日本学術会議（編）(1999)，「博物館の21世紀－ナチュラルヒストリーの未来－」．26 p. シンポジウム要旨集.

丹青総合研究所（編）(1986)，博物館・情報検索事典．544 p. 丹青社.

丹青研究所（編）(1999)，1999年度アンケート調査結果報告＜テーマ調査編＞．ミュージアム・データ，47，5–7.

丹青研究所（編）(2000)，1999年度アンケート調査結果報告＜概要調査編＞．ミュージアム・データ，48，1–7.

丹青研究所（編）(2002)，2001年度開設博物館情報／リニューアル博物館情報．ミュージアム・データ，58, 2–8.

丹青研究所（編）(2003a)，「2002年度全国博物館園アンケート調査」結果報告〔I〕．ミュージアム・データ，61，1–11.

丹青研究所（編）(2003b)，「2002年度全国博物館園アンケート調査」結果報告〔II〕．ミュージアム・データ，62，9–11.

丹青研究所（編）(2003c)，2002年度開設博物館情報／ニューアル博物館情報．ミュージアム・データ，63，2–9.

丹青研究所（編）(2003d)，〔2002年全国博物館アンケート調査〕結果報告〔III〕．ミュージアム・データ，63, 10–13.

丹青研究所（編）(2005)，2003年度開設博物館情報／リニューアル博物館情報．ミュージアム・データ，68, 2–10.

丹青研究所(編)(2006a)，2004年度開設博物館情報．ミュージアム・データ，70, 2–7.

丹青研究所（編）(2006b)，2004年度リニューアル博物館情報．ミュージアム・データ，70, 7–11.

丹青研究所(編)(2007a)，2005年度開設博物館情報．ミュージアム・データ，72, 2–6.

丹青研究所（編）(2007b)，2005年度リニューアル博物館情報．ミュージアム・データ，72, 7–13.

東京地学協会(編)(1998)，〔特集号　自然系博物館を考える〕．地学雑誌，**107**（6），781–911.

山西良平（2005），自然史博物館の課題と新展開．日博協（編）博物館総合調査報告書，209–214.

全国科学博物館協議会（編）(1996)，全科協データブック．406 p. 科学博物館後援会.

瑞浪市化石博物館研究報告 no. 35 (supplement) (2009)， p. 13–19, 6 figs.
特集「博物館－現在と未来－」糸魚川淳二・柄沢宏明（編）
© 2009, Mizunami Fossil Museum

いかに生きるか－人文系博物館（2008）

里見　親幸

（株）丹青研究所　〒110-0005　東京都台東区上野５－３－４植木ビル

How do live; Museum of Humanities Group

Chikayuki Satomi

Tansei Institute Co., Ltd., Ueki Bldg., 5–3–4 Ueno, Taito-ku Tokyo 110-0005，Japan

Abstract

This article explores the following cases of cultural museums in order to discuss how they can help people: “HYOGO PREFECTURAL MUSEUM OF HISTORY - a new history museum through its renewal whose concept is interaction”, “SHIMANE MUSEUM OF ANCIENT IZUMO - exhibits on themes rather than on comprehensive history”, “WAKASA MIKATA JOMON MUSEUM - reconsidering modern civilization through the Jomon culture”, “FUKUI PREFECTURAL MUSEUM OF CULTURAL HISTORY - a tour route in reverse chronological order and sensuous exhibits”, “IBUSUKI ARCHAEOLOGICAL MUSEUM - ideas for modern life”, “KITAKYUSHU LITERATURE MUSEUM - supporting the literature of personal histories”, “TOKYO NATIONAL MUSEUM - enriching services”, “HIGASHIOHMI NOTOGAWA CITY MUSEUM - working with local residents”, “KITANAGOYA CITY MUSEUM OF HISTORY AND FOLKLORE - cooperating with a welfare organization”, and “live museums - SANSHU ASUKE YASHIKI, TETSU NO REKISHI MURA, SUMIDAKU SMALL MUSEUMS”. People who have felt failures or have lost sight of purposes in their lives can learn many things in cultural museums from the lifestyles and various ideas of our ancestors. These museums should not just be where old objects are arranged but be where people can discover something and obtain energy to live tomorrow through devised exhibits and educational programs.

Key words: history museum, literature museum, archaeological museum, live museum, humanity museum

はじめに

わが国の博物館総数は，8150 館（2008 年 3 月末現在，丹青研究所調べ）である．

その中で人文系博物館の数は 4951 館（2008 年 3 月末現在）が数えられる．ここでいう人文系博物館（資料館）とは郷土館，歴史館，民俗館，考古館，文学館などを含んでいる．また，他分野との複合施設の場合は，人文系分野が占める割合が大きい施設を数えた．現在の博物館総数の中に占める割合は 60.7%で全体の 6 割となり，自然史系，理工系，美術系，総合博物館，飼育栽培系（動物園，水族館，植物園）の中で最も多い分野である．人文系博物館を設立年代別に見ると 1950 年以前が 208 館，60 年代が 280 館，70 年代 776 館，80 年代 1187 館，90 年代 1661 館である．2000 年代は 2005 年度開館分までの集計であるが 839 館となっている．90 年代までは年代を重ねる毎に増加の傾向にあったが，2000 年代に入って増加のピークが過ぎた感がする．

歴史系博物館は，各自治体の歴史編纂に伴い収集された歴史的資料の保存，活用のために設置されることが多く，他分野より早い時期に整備された．これからは数の多い人文系博物館を，どのようにして多くの人に活用してもらうか，ニーズの把握や質の向上が求められている．歴史博物館は人間がつくり残した「モノ」とそれにかかわる「情報」を蓄積し整理して示し，人生いかに生きるべきかを思索する博物館としてのプログラムや展示の充実を図るべきではないだろうか．いくつかの事例を挙げてこの問題を検討する．

1．事例

1）兵庫県立歴史博物館改装－交流をコンセプトにする新しい歴史博物館

姫路城に隣接する兵庫県立歴史博物館が 2007(平成 19)年 4 月，装いを新たにして開館した．多くの歴史博物館が採用している学校教科書的な通史の展開から地域の特色を前面に出したテーマ別展示に変え，子どもから年輩者，歴史のセミプロまで含めた幅広い人々の交流の場にする「交流博物館」をコンセプトにした歴史博物館である．

ここでは県民各層が「歴史」と交流できることをを目ざして，さまざまなアプローチを受け入れる機能が考えられた．１階は，エントランスロビーの床に巨大な衛星写真を敷きつめ自らの郷土を感じてもらい，そこを中心に歴史を身近かに感じる部屋にアプローチさせている．「みんなの家」では，新たな世代間交流をめざして播磨地方の民家をイメージした空間において，「もの」で

はなく「人」を主役に暮らしや遊びを体験しながら3世代間の交流が生まれる場を提供している．また，鎧と十二単を着て写真が撮れることで外国人の人気の場所にもなっている．「歴史工房」は展示とワークショップが一体化したもので，一歩踏み込んだ歴史を学ぶ展示室である．古文書の解読や館蔵の屏風絵の細部を観察して書かれてあるストーリーを読みとったり，研究者がどのような視点で資料を観察し研究テーマを設定するかなど，歴史の扉を一緒に開けて歴史ファンを育てようとする試みといえる．「ひょうごの歩み／ひょうごライブラリー」は，実物資料と6千冊の図書資料が同居する展示室になっていて，身近に実物を観察しながらじっくり図書を開いて内容を深めることができる（図1）．この展示室は兵庫の歴史の特徴を選び紹介するもので，順次変えていくコーナーである．2階には11万点にのぼる入江コレクション（児童文化資料）をもとにした「こどもはくぶつかん」を設置，遊園地をイメージした楽しい空間を演出している．また，「ひょうごの祭り」展示コーナーは，祭りの熱気の中に紛れ込んだような臨場感を映像や音響によって味わえる．「姫路城と城下町」は，間近に見える世界遺産の姫路城をさまざまな切り口から紹介している．国内の博物館は1980年代以降に多くが誕生したが，約20年を経た今日，社会の中で博物館が市民と共に育っていく時期にきているように思う．さまざまなニーズを持つ利用者各層にそれぞれ応える機能を用意することは難しいが，アクセスする入り口の相談機能を充実させ，個々人が大切に迎えられていると実感できるようにすることが重要であろう．アメリカでは「博物館はそれぞれの価値観にもとづく場」とすることで，多くのミュージアムファンを引きつけた．兵庫県立歴史博物館の試みが，利用者の生き方に影響を与え，かつ継続的に新たなソフトやプログラムを提供できるかが重要であろう．

図1．兵庫県立歴史博物館「ひょうごの歩み／ひょうごライブラリー」．

2）島根県立古代出雲歴史博物館－通史展示からテーマ型展示に

同じく通史に拘らず「テーマ型展示」を行っているのは，2007（平成19）年3月10日，出雲大社の東隣に開館した島根県立古代出雲歴史博物館である．出雲は古来より神話の国として知られてきた．1980年代中頃から21世紀にかけて古代遺跡から驚くような発見が相次ぎ，同館では特色ある古代文化を紹介し，日本とは何か，日本文化とは何かを問いかけていく展示コンセプトで構成されている．

図2．島根県立古代出雲歴史博物館　古代出雲大社復元模型．

運営は「指定管理者制度」を採用しているが，研究・展示企画を中心とした学芸業務は，県の直営部門としつつ，広報・誘客などの運営業務・施設の維持管理などは主に指定管理業務としている．また，普及交流事業などは役割分担するという「協働的指定管理制度」が採用され，「しまね方式」と称されるが，現状の中では望ましい姿ではなかろうか．

博物館の建設構想は，1984年に一つの遺跡から大量に発見された銅剣（358本）が発端である．島根県では「島根古代文化活用委員会」が1989年に設置され，建設計画がスタートしている．それ故，他県の歴史博物館は「通史」が中心であるが，「古代」にこだわっていることに特色がある．展示室は導入部の中央ロビーに4つの部屋が入り口を向けており「総合展示室」，古代の「テーマ別展示室」，「神話展示室」，「特別展示室」がある．

総合展示室は，原始から今日に至るまでの人々の生活と交流の姿を中心に概観するものであるが，四隅突出型墳丘墓，古代の玉作り，岩見銀山，たたら製鉄といった島根の文化を特色づける事象を重点展示している．

テーマ別展示は，「出雲大社と神々の国のまつり」「出雲風土記の世界」「青銅器と金色の大刀」について紹介している．2000年，出雲大社の境内から，直径3mの杉の巨木が3本一組の状態で発見された．文献などから東大寺の大仏殿を超える高さを誇ったといわれる十六丈（48m）の古代の本殿を支えていた巨大柱である「宇豆柱（うずはしら）」との見方が多い．展示室では5人の学者が考える古代出雲大社の復元模型（図2）とともに，コンピュータグラフックスによる解説で当時を推定する展示方法は観覧者にイマジネーションをかき立てる切り口を提示するものである．また，弥生時代の荒神谷遺跡の銅剣，加茂岩倉遺跡の銅鐸を床・壁面一杯に展示した空間は，他のメディアにはない博物館ならではの「もの」の持つインパクトを発揮して観覧者を感動させる．この館では古代の精神世界が生活の中に息づいている事象との繋がりを今も見ることができる．

3）三方町縄文博物館－縄文文化を通じて現代文明を見つめ直す

日本人は縄文人に自分たちのルーツを重ねて見ることが多いようで，各地に縄文ミュージアムが存在する．北は青森県の三内丸山遺跡に設置された「縄文時遊館」をはじめとし，南は鹿児島県の「上野原縄文の森展示館」など，縄文という名称をつけたミュージアムは18館（丹青研究所調べ）がある．

三方町縄文博物館（福井県三方町鳥浜）は，縄文文化を通じて現代文明を見つめ直そうと，「共生と循環」をテーマに2000（平成12）年4月に開館した施設である．三方五湖の一つである三方湖のほとりに建てられた博物館は楕円ドーム型で，表面は芝生を植えた厚さ30センチの土で覆われ，土偶のおなかに入っていくようなユニークな外観である．初代館長の哲学者で縄文文化を研究してきた梅原猛氏は「縄文人は豊かな自然と共生し，深い知恵を持っていた．人類の未来が危惧される今日，人類の還るべき文化が縄文にあるのではないか」と述べている．中心となる鳥浜貝塚は，三方湖沿いの低湿地に形成された集落遺跡で，5500年前という日本最古の丸木舟や弓などの木製品，漆塗りの櫛，編み物や縄など，本来ならば腐敗するはずの植物性の遺物が見つかり，「縄文のタイムカプセル」と呼ばれている．館内は高さ約10メートルの吹き抜け空間に縄文の森をイメージした巨大な柱が林立し，中央部分に町内から出土した根の広がり幅5メートル以上の杉の切り株が据えてある．展示室へ導く縄文プロムナードでは，石笛の「ヒュルヒュル」という音と，黒曜石を打つ「カーン」という澄んだ音が響き，突き当たりには赤い照明に照らされた土偶が縄文の世界への導入になっている．続く土器の展示では上下からのスポットライトに30以上の縄文土器が浮かび，コーナーに流れる土笛の音と相まって縄文人の芸術性・精神性を感じさせる演出が図られている．通路状の土器の展示を抜けると「ザザー」と波の寄せる音を聞きながら丸木舟の展示コーナーへ．ここでは縄文の丸木舟と並んで，現在も使われている世界各地の丸木舟も比較展示されてある．中央のガラス張りの床下には出土状況が再現され，発掘現場の状況を観察できる．縄文人から現代人が学ぶことは環境問題を含め多くのことがある．縄文時代の遺跡からは様々な生活道具が出土しているが，他の時代にはあっても縄文遺跡には見あたらないものがあるという．それは人と人が集団で殺しあうための道具がないことで，人々は平和を愛し自然を大切に暮らしていたことが想像されている．ここでは縄文人の文化，暮らし方から学ぶべき点が多いことを提示し，様々なメッセージを解明して多くの人々に伝え現在に活かすことをコンセプトにしている．

4）福井県立歴史博物館－時代を遡る順路と五感に訴える展示

福井県立歴史博物館は1984年に総合博物館として開館した施設であるが，勝山市に県立恐竜博物館が独立したことに伴い役割分担を見直し，2003（平成15）年3月県立歴史博物館としてリニューアルオープンした．館内は4つのゾーンに分かれ，「もの作り」をテーマにした歴史ゾーン，昭和30・40年代の昭和の暮らしをテーマにした「トピックゾーン」，資料の整理や修復作業を見学できる「オープン収蔵庫」，福井の歴史や文化財を音と映像で綴る「情報ライブラリー」がある．

歴史ゾーンにおける展示の動線は，現代から過去へ遡る流れで構成されている．最近の歴史離れの傾向の中で，いきなり太古の時代から入ると自分と関係のない世界へ足を踏み入れる捉え方をされがちなところから，現在からだんだん過去へ辿る方法を採用している．

展示は「もの」を中心とし，感性に訴え五感に感じる展示を目指して，図や写真，解説を極力少なくしてある．解説文章は必要な情報を4項目に箇条書きにして，最低限の概要が分かる解説になっており，全体として「もの」を見せる空間としてシンプルな構成を採用している．石像や土器，絵馬など残されている文化財が，かって人々が作り使っていた頃，どのような感じだったかを体感してもらうため，絵馬の展示では絵馬を新品に復元して灯明の揺らぎを再現した照明のもとで見せている．歴史資料として残った「もの」を作った人と使った人がどのような思いを抱いて作り使ったか，それぞれの生き様が感じられることに重きを置いた展示にしたいとしている．「トピックゾーン」の昭和の暮らしは，駄菓子屋，貸本屋，食堂が並ぶ「町の暮らし」や古い重厚な造りの「農家の暮らし」を再現（図3）．それぞれの展示は，季節ごとに中身や設えが替えられるようになっている．駄菓子屋には，正月のタコ，羽子板を売っているが，春から夏になると水中メガネと虫カゴを置き，季節毎の売り物に変え，背景のパネルは，冬景色と春の景色に変えることができる．福井の農家では，昭和40年過の，洋間と台所を改築を始めたそのころが再現されており，農家の応接間では，クリスマスの時は昭和40年代頃のクリスマスツリーを飾り，蛍の時期には虫カゴに蛍を入れて情緒を醸しているという．そして，屋根の上のカラスは柿の実をくわえ，玄関の上にはヤモリ，そして雀をねらう黒猫がいる．玄関先の番犬ジョンは，触ったり，玄関に入ると怒って吠える．そして，応接間に手を伸ばすと電話が鳴る仕掛けになっている．柿の実と紅葉した葉は脱着可能になっており，もうすぐ春の装いの展示替えがスタートする．電柱のところに転がっているジョンの糞も今のペットフードを食べたものではなく，昭和30年代の犬の糞にこだわりつくったそうだ．朝昼晩の演出，実際の風が吹く冬の木枯らし，秋の台風の演出など様々な工夫を凝らして，1回来ただけでは見つけることができない多くの隠れた仕掛けを用意して何回も訪れることで，今の生活の原風景を発見させようとしている．

図3．福井県立歴史博物館展示「トピックゾーン」．

5）指宿市考古博物館「時遊館ＣＯＣＣＯはしむれ」－現代生活に繋げる工夫

鹿児島県薩摩半島の南端に位置する指宿市に，考古博物館「時遊館ＣＯＣＣＯはしむれ」は，縄文土器と弥生土器の時代区分を初めて明らかにした国指定史跡「指宿橋牟礼川遺跡」に隣接した敷地に設置され，開聞岳噴火の火山灰で集落が埋もれるなど，イタリアのポンペイと同じような「火山災害遺跡」という特色があり，ＣＯＣＣＯはイタリア語の「秘蔵っ子」の意味で愛称として選ばれた名称である．

常設展示室は，「自然と隼人，いきづく文化」をテーマとして，指宿の自然を導入部に，旧石器時代，縄文時代，古墳時代，奈良・

図4．指宿市考古博物館「時遊館ＣＯＣＣＯはしむれ」
展示「ナベの移り変わり」.

平安時代の人々がいかに生きたかを展示している．第一展示室では，地質・火山・動植物を中心に紹介し，特に古代人と動物に光をあてている．また，２万４千年前の姶良カルデラ大噴火による南九州の成り立ち，平安時代の開聞岳噴火などをコンピュータグラフィックで再現しているのが見所である．第二展示室の「指宿文化のはじまり」では，楽しく，しかも興味深い展示手法が数多く採られ，親しみやすい構成になっている．旧石器時代の狩りの模型は，人間の視点だけでなく，シカの視点から人間がどのように映ったか，さらにその両者を見ている鳥の視点も用意されている．土器の展示では，「ナベの移り変わり」を螺旋状に縄文土器，弥生土器を並べ頂点に現代のセラミック鍋が置いてある（図４）．このセラミックは，科学の粋であるスペースシャトルに，摩擦熱からパイロットを守るためも使われており，まさに縄文土器の延長上にあって，現代と古代はひとつの技術で結ばれていることをディスプレイしている．また，縄文人と弥生人の代表がテーブルをはさみ，木の実や海の幸，赤米など，それぞれの時代のグルメを競いあうユニークなコーナーも用意されている.第三展示室は，橋牟礼川遺跡で発見された古墳時代の集落の一部を直径18メートル360度ドームの中に復元し，光と音の演出で古代の一日のようすを窺うことができる．第四展示室は，奈良・平安時代に南部九州に住んでいた「隼人」と呼ばれた人々に焦点をあてた展示を行い，中央の律令制度に伴う地方の状況を紹介している．展示室の最後の部分には，火山災害と人類に関する展示として西暦874年の開聞岳の噴火をモチーフに模型と映像で展示し，災害と人類の関係について考えさせる．当館のコンセプトは「生活の利便性だけが人間の生き方ではない．古代人が災害を乗り越え生き抜いてきた様々な暮らし方を知ることにより，生きるということはどう言うことかを古代人が教えてくれる．博物館はいかに生きるかを思索する施設である」と,初代館長の中村利廣氏は述べている．

６）北九州市立文学館－自分史文学の支援

北九州市は九州における交通の要衝であり，多くの近代工業がこの地に誕生し，人・もの・情報が交流するまちであった．文豪森鴎外は，軍医として明治32年から足かけ４年にわたり小倉で過ごし新しい文化の種を蒔いたといわれる．その後，林芙美子，火野葦平，松本清張ほか優れた文学者がこのまちから生まれている．一方，八幡製鉄所，門司鉄道管理局，新聞社などの職場で従業員の文芸活動が盛んになり多くの同人誌も発行された．

こうした土壌を背景に，文化の薫るまちづくりとして昭和63年に「北九州市ルネッサンス構想」が掲げられ，以来18年の歳月を経て待望の北九州市立文学館が文芸活動の場として2006（平成18）年11月１日に開館した．

今，全国の文学館は図書館内の文庫など付帯施設を含めると580館（全国文学館協議会）があるが，各地の文学館の展示は一度設置してしまうと更新できないものが多い．北九州市文学館は更新性のある常設展示を目指し,「文箱（ふばこ）」と名付けたパッケージ型の展示ケースが設けられ，これを展示替えして運用することで，数多くの文学者を紹介できる工夫がなされている．

これまでの文学館は故人の作家が対象だったが，現在の文芸活動の拠点施設としての機能を充実させている．文学に関連した多彩なイベントや，市民の文芸サークルへの支援，さらに，北九州市が毎年開催している「自分史文学賞」は，今年で１８回目で大賞には200万円の賞金と単行本として出版してくれる魅力に毎年約400編の応募があるという．人には様々なドラマがあり，人生を言葉や文字で紡いだものが自分史文学であるとして，北九州市立文学館では支援に力を入れている.自分の生きたあかしとして，いかに生きてきたかを表現する行為は，多くの人に共感や感動を生み勇気を与え，いかに生きるかを提示してくれるだろう．

７）東京国立博物館－サービスの充実

東京国立博物館（以下東博）は,1872（明治５）年に開館し，1889（明治22）年宮内省管轄になり，昭和22年（1947）旧文部省に再び移管された．そして2001（平成13）年，独立行政法人国立博物館として新たなスタートをした歴史を持ち，名実共に日本を代表する博物館である．現在，独立行政法人下において事業計画は文部科学省などに厳しく評価され，予算は減ることはあっても増える望みはないという現実の中でさまざまな試みが成果を生みだし，意識改革も大きく前進したと聞いている．

2004（平成16）年に本館（日本ギャラリー）の全面改装が行われた他，交流事業も活発になった．欧米では盛んに行われていた展示室を企業が借り，美術品を鑑賞しながらパーティ会場として利用できる仕組みも誕生した．本館地下のミュージアムショップも全面改装がなされて，親しみやすさの工夫と共に「床の間」を設置するなど,全体が日本らしさを前面に出した「和」のイメージで統一したショップが誕生している．

また，ミュージアムサービスにおいてショップと共に近年重視される味覚の満足についても充実してきた．法隆寺宝物館１階には「ホテルオークラガーデンテラス」と東洋館の隣に精養軒が運営する「ラコール」があり，食事だけの希望者も入り口で手続きをすれば入館できる仕組みになっている．この他，東洋館の外に「アジアンカフェ」をオープンさせたり，期間限定で野外にテントを張って「甘味処」をオープンしたりと新しい取り組みを積極的に行って以前の東博のイメージがガラリと変わってきた．

そして，ついに敷地内に映画館「一角座」をオープンさせた．これは期間限定ではあるが，独立行政法人になって，敷地やホールを自由に貸すことができるようになった背景の中で，未来館者に対して博物館を知って貰うきっかけをつくることにもなり，新しい文化・芸術性の高い作品を上映することで話題性も高くなることをねらうマーケティングの位置づけとしても評価できる．

2007（平成19）年には表慶館が「みどりのライオン」という教育普及スペースとして新たに生まれ変わった．10万平方メートルという広大な敷地を構える東博を楽しむための案内施設であり，正面入り口の高欄上に座る青銅鋳物でつくられた2頭のライオンから付けられた愛称である．

東京国立博物館と他の博物館との比較は無理な話ではあることは承知の上だが，利用者サイドに立った様々なサービスを小さくてもできることから見直し，理念を明確にして守るべき部分と自由度の両面を備えた仕組みをつくっている．そしてそれを常に見直していく日常的な営みがミュージアムファンを育て，今を生きる人々の糧として期待され，なくてはならない博物館として支援されることにつながっている．

8）東近江市能登川博物館－博物館機能を住民に開放

滋賀県にある東近江市能登川博物館は，小さな町の博物館であるがゆえに，多くの専門職員を配置することはできないことから，地域に住んでいる多くの知識や技術を持った人々に「地域学芸員」として参加を依頼し助けてもらう仕組みをつくった．専門的な知識を持った人々を従来のように講座・講演会への参加や単発の講師に迎えるだけではなく，博物館機能そのものを住民へ解放する仕組みを考え実行している．博物館機能を利用して，自分たち自身で収集，調査，研究して，その成果を展示し発表してもらっているのである．参加している地域学芸員の人たちもボランティアというサポーターとは違い，自らが博物館を利用して，楽しむことを主眼として，借り物ではない，自分たちが使い込んでいく博物館として共に成長し続ける博物館を目指している．

9）昭和文化がテーマの博物館

平成の時代も20年を過ぎ，今や昭和ははるか昔となってしまった．各地で昭和30年代の文化をテーマにした博物館が増えている．昭和30年代がなぜ多くの人々を引き付けるのか．そこには大きな暮らしの変化があつたからのようである．弥生時代から続いた直火での生活から電化による生活へと暮らしが変わり，現在の生活の基礎が出来た．いわば30年代は原風景として普遍的な懐かしさを感じるのかも知れない．

小学校3年の社会科に「むかしの道具しらべ」という学習項目があり，博物館におじいさんやおばあさんが使っていた頃の道具の見学に来る．一方，大人も懐かしさと思い出を求めて訪れる人が多い．博物館では，激しく移り変わる時代の名残を記録しようと，子どもの生活史に属する玩具類を収集したり，漫画週刊誌などの収集を行っている．愛知県の尾西市，師勝町，豊山町では，それぞれのミュージアムが合同テーマの企画展「私の時間小旅行」を1998年10月にそれぞれの町で同時開催した．このテーマのきっかけは各町の学芸員らが話し合い，各自が身近で懐かしさを覚える昭和，特に戦後から高度成長期にかけて生活を支えた民具や生活用具を中心にした企画展を行った．展示では，子どものおもちゃや菓子類，清涼飲料水，ランドセルなどを展示し，訪れた人に自分が体験した，記憶に残っているものを書き込むクイズ形式の参加展示も行われた．中にはまちづくりへ展開する例もある．山形県の高畠町では，町の中央通り商店街（52店）が懐かしい昭和30年代の雰囲気を楽しめる商店街づくりに取り組んでいる．歩道の両脇に並ぶ店舗の一角や空き倉庫を利用して，昭和時代の生活用品や映画のポスターなどを集めた14の「昭和ミニ資料館」を設けている．商店主15人が「館長会議」と称した会議を重ね，昭和の雰囲気を作りだした．高畠町は，昭和30年代には商店街の一角に高畠電鉄の駅があり，駅前は映画館や製糸工場でにぎわっていた．それを再現したいとの願いから昭和をテーマに選んだという．当時の映画ポスター，旧式のカメラやラジオ，懐かしい昔の新聞店舗に飾っていた看板などノスタルジーにこだわって集めている．

10）北名古屋市歴史民俗資料館－福祉分野との連携

高度に発達した文明社会は，様々なストレスや不安を生み出し，そのストレスや不安に対して，郷愁が極めて有効だと言われている．郷愁とは，意識するかどうかに関係なく，過去のことを懐かしむことで，懐かしむことにより，心が安らぎを覚え明日への活力がわいてくる．

愛知県・北名古屋市（旧師勝町を含む）の歴史民俗資料館（1990年開館）は，昭和の日常生活用具の収集・保存・展示が行われ，全国から多くの視察者を迎える注目される博物館である．当館では昔懐かしい道具を教材に体験を語り合う（回想する）ことが行われてきた．開設準備段階から関ってきた学芸員の市橋芳則氏は，楽しげに語り合う来館者に接し，調べていくうちに回想法という心理療法があることを知った．そして，企画展「ナツカシイってどんな気持ち」を開催し（1999年11月），初めて回想法と資料との関係を提起した．これを契機に北名古屋市では博物館と総合福祉センターが連携し展開する方向性を探り，縦割り行政の難しい壁を乗り越え「思い出ふれあい事業」として2002年度を初年度にスタートした．さらに，国の登録有形文化財「旧加藤家住宅」の敷地に「北名古屋市回想法センター」も開設され，福祉分野と博物館が手を結ぶ新しい事業が誕生した．

郷愁や懐かしむことは，年寄りの繰言とか懐古趣味といった否定的な意味が強かった．回想法が発展しているアメリカでさえ1950年代の頃は悪いことだと言われていたというが，現在，新しい力を引き出す方法として確立されている．北名古屋市では歴史民俗資料館を会場として，地域のお年寄りを対象とした回想スクールを開催した．その効果測定では，いきいきした表情になり，やる気や好奇心が出て物忘れが減少したなどの改善が見られ，回想法が大きな力になることが理解された．今後は介護予防事業として推進してゆき，現在，社会問題化している医療費負担へ方策の一つとして注目される．

博物館では貸し出し用の「回想キット」の教育プログラムソフトの開発が行われている．市橋さんは「さまざまな人々に対応する回想キットをつくるのは難しいが，良い形で提供できるようバリエーションや精度を高め提供したい」と語る．入館者減で悩む多くの博物館の中で年間4万人を超える観覧者を確保し，また，高齢者だけでなく小学生の参加も多く，「昔の暮らしを学ぶ」学習として，遠くは三重県からも訪れる人もあるという．

今日，博物館では観て，触って，試して考える参加体験の「ハンズ・オン展示」の様々な工夫が試みられており，その延長線上に回想法展示もあると思う．今までの子どもを主流にしたハンズ・オンが，高齢化社会の中で世代間交流や生涯学習の視点から博物館は「出会いの場」としてコミュニケーションが展開され，新しい創造が生まれることが期待される．日曜日には3世代で見学に来て博物館の展示室で会話が弾み，その会話を記録して観覧者の「記憶の収集」から解説文も作成するという．博物館の収蔵資料を活用し，福祉分野と連携する北名古屋市の事例は新しい博物館

のあり方として注目される試みである．是非，継続した研究が進み高齢化社会の中で直面する社会的課題へ歴史博物館の果たす役割として確立されることを望みたい．

11）生きた博物館－三州足助屋敷，鉄の歴史村，墨田区小さな博物館

（1）三州足助屋敷

愛知県足助町（現豊田市）は古くから，海から山への塩を運ぶ街道沿いに発展した町で，飯田街道の宿場町として栄えたところである．町並みの保存整備も積極的に行われ，この町並み保存活動をきっかけとして，足助の生活や産業の将来への関心が高まり，足助に昔から伝わる仕事や生活を保存する考えが生まれた．紙すき，木地ろくろ，炭焼き，竹細工など技術を職人が再現し伝える

図5．三州足助屋敷　竹細工の作業．

「生きた博物館」として1980年に「三州足助屋敷」として開館した（図5）．

構想が浮かび上がったのは1973（昭和48）年頃で，当時は郷土館や資料館の建設ブームであったが，既存の多くの資料館を研修や見学する中でケースに飾られた民具を見るにつけ，物は使われてこそ生きる，そして物を作る過程を知ることが大切であるという考えから足助屋敷の構想が生まれた．問題は人材であり，手仕事の職人たちは時代の変化の中で働く場を失い，ある者は工場で働き，あるいは高齢で引退してしまっていた．高齢者に呼びかけて，初めは渋っていたお年寄りも熱心な説得に動かされ集まってきた．ここでは単にボランティア活動として参加して貰うのではなく，収入を得られる仕事として位置づけた足助屋敷への参加は，お年寄りの自立を促し「真の老人福祉とは何か」についても考えさせる端緒ともなった．のちに生まれた「福祉センター百年草」は，お年寄りの自立と共に生きる方向を目指す活動の考え方として受け継がれている．現在は，第3セクターである（株）三州足助公社が足助屋敷，百年草，香嵐渓公園と駐車場を管理運営している．

（2）鉄の歴史村

島根県出雲地方は，古来より「たたら製鉄」が盛んに行われ，19世紀の後半，近代製鉄技術が西洋から輸入されるまで日本の和鉄生産地として栄えてきた．島根県の山深い吉田町には，国の重要民俗資料の指定を受けた「永代たたら・菅谷高殿」がある．吉田町では鉄を地域おこしの核に据え，1986（昭和61）年「鉄の歴史村」（図6）を宣言した．活動は「財団法人鉄の歴史村地域振興事業団」が担い地域の活性化に取り組んでいる．豊かな自然環境と貴重な製鉄遺産を保護し活用するために，鉄の歴史博物館，鉄の未来科学館，菅谷高殿遺跡と技術集団が住んだ菅谷たたら山内集落，オープンエアミュージアムなどが整備，設置され全体がミュージアムと位置づけられるのが「鉄の歴史村」である．

産業は文化という背景を持たないと世界に通じないという考えのもとにシンポジウム・フォーラムの文化事業を継続して実施し，国際的な学術交流など文化の集積を行ってきた．イギリスの産業革命時の製鉄遺跡をもとに展開するアイアンブリッジ・ゴージ・ミュージアム財団やドイツやノルウエーといった国々との交流を行い，ミュージアムを中心にした世界と対話できる地域づくりを行っている．

（3）墨田区小さな博物館

国技館のある町として知られる墨田区は，江戸時代からさまざまな地場産業の盛んな町であり，今でも昔気質の親方や職人さんが働いている．墨田区では産業活性化と伝統技術の伝承のために

図6．鉄の歴史村．

1985（昭和60）年から3M運動（ミュージアム運動，マイスター－技術者の育成と顕彰運動，マニファクチュアリングショップ－工房ショップ運動）が推進され，現在27館がある．小さな博物館が設置されている場所は工場内や民家，お店の一角である．例えば，「羽子板資料館」は明治以降の羽子板を全国から集め郷土羽子板など複製を含め約20点ほどが展示されている．ご主人はマイスターにも認定されオリジナルの羽子板を制作し，観覧に訪れる子ども達に昔から伝わる手仕事を通じてモノづくりの心を育てたいという．また，「小林人形資料館」は墨田区東部の荒川河畔に幕末から伝わる人形づくりの伝統を守り続けている老舗である．安政元年にできた墨田区最古の民家が仕事場で隣の建物が資料館になっている．昭和2年アメリカから贈られた「青い目の人形」やその答礼のために贈った「やまと人形（複製）」，特攻隊員が抱いて出撃していった「ほまれ人形」など珍しい人形と出会える．また，東京に3店しか残っていない足袋の製造販売店の一つである「喜久や足袋本舗」は，足袋に関する資料が少ない中で館長が長年かかって収集したものが展示されている他，大相撲の地域柄として店内には若・貴兄弟，曙をはじめ有名力士の足型がたくさんあり，珍しいものでは江戸時代の雷電為五郎の足型などもあって興味深い．近年，修学旅行での班別行動で訪れる生徒も多く，マイスターのご主人から受ける説明に熱心にメモをとる様子も見られるという．

歴史博物館は，「博物館行き」という言葉があるように過去に関わる世界のイメージが強く，一般には過去の資料を展示ケー

スに入れて珍しい資料を眺めるという自分とは隔絶された世界になってしまいがちである．三州足助屋敷，鉄の歴史村，墨田区小さな博物館などは，雇用を生みだし，豊かな創造能力を育てるビジネスの孵卵器としての機能をも併せ持つもので，今を生きている人々と歴史が繋がっていることを実感させる「生きた博物館」そのものである．

おわりに

今日，全国に多くの博物館が誕生し，数と整備状況の面では充実しているが，博物館が社会の中で，どのような役割を果たすべきか博物館の使命や目的が十分に議論されないまま今日まで至っており，博物館法改正の動きもあり改めて見直すべき時代になった．

誕生から20数年を経ている多くの成熟期にきている博物館は，活用次第では宝の山である．政治の指導者は今こそ博物館を文化戦略として位置づけることに覚醒してほしいと強く考える．英国では97年にブレア政権下においてさまざまな戦略が練られ「クール・ブリタニア（格好いい英国）」政策を積極的に展開した．その結果，美術，デザイン，音楽，映画，建築などの創造産業が育成され英国社会の活性化の源となっている．

博物館は逆風の今こそ，社会に見返りのない．あってもなくても良い施設であるとする厳しい一部の評価を跳ね返すほどの有用性をもっと主張して，博物館の存在意義そのものを積極的に働きかける必要がある．アメリカ博物館協会（ＡＡＭ）が発行している情報誌は，「ミュージアム物語プロジェクト」でミュージアムの意義をアピールしている．ミュージアム職員の体験談や，ミュージアムが利用者や地域に与えた影響など，各館にまつわる物語を募集し，それらをまとめ，同協会のホームページや定期刊行物などに掲載している．国会議員やメディアなどに対し，社会におけるミュージアムの価値を理解してもらうことをねらったものである．国内に置いても理解を得るために積極的なアピールも必要であると思う．また，日本国内だけでの動きではなく近隣諸国との連携も視野に入れ組織化し，行政に働きかけるパワーも必要であろう．一方，博物館内部においては弛まぬ改革が前提となる．博物館の改革とは，単なる効率化ではなく，事業のあり方や事業の進め方を見直すことであり，しかも常に見直し改善・改新を繰り返す組織こそが求められている．

参考文献

里見親幸　週間教育資料「ミュージアム・ナウ」連載記事：
兵庫県立歴史博物館．週間教育資料「ミュージアム・ナウ」200708.
島根県立古代出雲歴史博物館．週間教育資料「ミュージアム・ナウ」200710.
三方町縄文博物館．週間教育資料「ミュージアム・ナウ」200410.
福井県立歴史博物館．週間教育資料「ミュージアム・ナウ」200405.
指宿市考古博物館．週刊教育資料「ミュージアム・ナウ」199605.
北九州市立文学館．週間教育資料「ミュージアム・ナウ」200703.
東京国立博物館．週間教育資料「ミュージアム・ナウ」200802.
昭和文化がテーマの博物館．週間教育資料「ミュージアム・ナウ」199906.
師勝町歴史民俗博物館．週間教育資料「ミュージアム・ナウ」200303.
三州足助屋敷．週刊教育資料「ミュージアム・ナウ」199312.
鉄の歴史村．週刊教育資料「ミュージアム・ナウ」199310.
墨田区小さな博物館づくり．週刊教育資料「ミュージアム・ナウ」199109.
「ミュージアム物語プロジェクト」．AVISO　2007年10月号.

瑞浪市化石博物館研究報告 no. 35 (supplement) (2009)， p. 21–24, 1 table.
特集「博物館－現在と未来－」糸魚川淳二・柄沢宏明（編）
© 2009, Mizunami Fossil Museum

瑞浪市化石博物館と研究報告

柄沢宏明 * ・糸魚川淳二 **

* 瑞浪市化石博物館

** 〒 509-6251 瑞浪市日吉町 5125-4

Mizunami Fossil Museum and Bulletin of the Mizunami Fossil Museum

Hiroaki Karasawa* and Junji Itoigawa**

*Mizunami Fossil Museum

**5125-4 Hiyoshi-cho, Mizunami, Gifu 509-6251, Japan

Abstract

We provide a brief overview of the history of the Bulletin of the Mizunami Fossil Museum and analyze the papers published in it. The Bulletin of the Mizunami Fossil Museum was first published in 1974 and is one of the oldest museum journals in Japan. The papers dealt with paleontology, geology, and museology of the world. Since 1994, contributors from outside Japan increased. The Bulletin is becoming an international journal for researchers of the world.

Key words: Mizunami Fossil Museum, Bulletin of the Mizunami Fossil Museum

はじめに

博物館の出版物は，研究報告・目録・図録・たよりなど様々なものがある．この中で研究報告（紀要）に相当する出版物は，学芸員あるいは研究員といった館に籍を置く研究者や館の研究協力者の行った研究発表の場の 一つである．世界中の多くの博物館で発刊されており，展示と並び館を象徴するいわば“顔”でもある．

瑞浪市化石博物館は 2 種の研究報告類に相当する出版物を持つ．一つは，年に 1 冊発刊の瑞浪市化石博物館研究報告で，もう一つは，不定期に発刊される瑞浪市化石博物館専報である．本特集の中で，瑞浪市化石博物館研究報告を例に挙げ，研究成果の公表誌としての博物館研究報告について考えてみたい．

1. 概　要

瑞浪市化石博物館研究報告は 1974 年に創刊，発刊は年 1 回で，本号で第 35 号を数える．日本でも古株の研究報告類に相当するものとなった．第 1 号 (1974) は，開館記念号（中央自動車道調査報告書を兼ねる）とし B5 版 475 ページ，瑞浪層群に関する 34 論文を掲載した．

第 2 号（1975 年）以降は，その投稿規定に「古生物・地質・博物館に関する原著論文・短報・総報・ノート」を掲げ，投稿を受付・発刊している．瑞浪市化石博物館研究報告（以下，研究報告とする）の特色は，地方博物館の出版物ではあるが，古生物学・地質学・博物館（学）に関する論文であれば，地域を問わずだれでも研究論文を投稿可能なことである．同じ投稿規定をもつものに福井県立恐竜博物館紀要がある．博物館研究報告類には，その博物館に関係した制約（例えば，館収蔵資料を含む，館員の研究など）がある中で，稀な編集方針を持つものといえよう．但し，投稿された論文すべてが掲載される訳ではなく，編集長（編集責任者）あるいは該当分野の査読者によって投稿原稿が査読された結果，掲載不可の場合もある．

研究報告は古生物・生物関連の大学研究機関や博物館などに交換・寄贈雑誌として送付し，代わりに大学・博物館などから研究報告・図録等を受け入れ博物館における文献資料の収集に役立っている．2007 年の送付先は国内 210 機関と国外 113 機関であった．

表 1 で研究報告の掲載論文の分析を試みた．

編集長（編集責任者）は，第 1 号〜第22 号（1995 年）を糸魚川（当時　名古屋大学　兼　瑞浪市化石博物館嘱託学芸員）が努め，第 23 号（1996 年）から柄沢（現学芸員）に交替した．途中，第19 号（1992 年）は糸魚川淳二博士記念号として発刊されたため，招聘編集長として柴田　博博士（当時　名古屋大学，現　豊橋市自然史博物館）が編集に尽力された．

発刊 20 年が経った後，第 21 号（1994 年）から A4 変形版 2 段組の体裁とした．近年の傾向として学術雑誌の電子出版媒体化が進んでいるが，研究報告も同様に第 28 号（2001 年）以降，瑞浪市ホームページを通じて掲載論文の PDF 版を無料公開し現在に至っている．

第 34 号までの掲載論文は 451 編，総ページは 6,000 ページを超える．中でも，第19 号（糸魚川淳二博士記念号）は 557 ページ，40 掲載論文，第 1 号（開館記念号）は 475 ページ，34 掲載論文とボリュームのあるものであった．両者を除いても，平均で 158 ページ，12 掲載論文がある．

表１．瑞浪市化石博物館研究報告の掲載論文の解析.

号	発行年	ページ	論文数			著者別			対象地域別			対象種別			
												分類			
				和文	英文	日本人	（内館員）	外国人	瑞浪	日本	外国	微化石	植物	軟体動物	棘皮動物
1	1974	475	34	34	0	34	10	0	34	0	0	3	1	1	1
2	1975	116	13	10	3	13	7	0	7	4	0	1	1	4	
3	1976	244	21	16	5	21	12	0	8	9	0	1	1	6	1
4	1977	180	17	11	6	17	6	0	5	8	0		1	4	
5	1978	191	12	9	3	12	8	0	2	5	0			4	
6	1979	160	14	12	2	14	2	0	0	11	0	1	1	4	1
7	1980	123	14	11	3	14	3	0	0	11	0	2		4	
8	1981	206	16	11	5	16	6	0	2	12	0	4		8	
9	1982	128	13	9	4	13	3	0	3	7	0		1	4	1
10	1983	206	16	11	5	16	3	0	2	13	0	2	1	6	1
11	1984	114	12	4	8	12	3	0	4	7	0	1		4	1
12	1985	214	12	10	2	12	3	0	1	10	0	2	1	5	1
13	1986	132	9	7	2	9	3	0	1	7	0	1		3	
14	1988	152	12	11	1	12	1	0	1	10	0		2	3	
15	1988	78	7	5	2	7	1	0	1	4	0	1		3	
16	1989	132	11	5	6	11	2	0	3	7	0			7	
17	1990	105	8	5	3	8	1	0	2	6	0		1	3	1
18	1991	124	12	5	7	11	0	1	1	10	1	2		5	
19	1992	557	40	27	13	39	3	1	12	27	1	9	1	10	1
20	1993	189	5	2	3	5	1	0	1	4		1		3	
21	1994	81	11	4	7	9	6	2	1	8	2	1		4	
22	1995	132	12	6	6	9	2	3	0	9	3	1		6	
23	1996	161	8	2	6	4	2	4	0	4	4	1		2	1
24	1997	201	9	3	6	4	0	5	0	4	5	3		2	1
25	1998	125	8	3	5	5	0	3	0	5	3			4	
26	1999	171	11	5	6	8	2	3	0	6	3		1	5	
27	2000	200	11	3	8	7	4	4	1	6	4			4	
28	2001	243	7	2	5	2	0	5	0	3	4			3	
29	2002	178	13	2	11	6	2	5	0	6	7			4	
30	2003	172	12	4	8	5	1	6	0	5	7		1	3	
31	2004	102	13	6	7	9	2	4	2	5	3	1	1	3	
32	2005	254	12	3	9	5	1	7	0	5	7			3	
33	2006	133	12	4	8	5	2	7	1	4	7	1		1	
34	2008	119	14	7	7	9	3	5	0	9	5	1		4	
計		6098	451	269	182	383	105	65	95	251	66	40	15	139	11

注）14 号を除き出版は 12 月，但し 34 号より 1 月と変更；館員の研究は嘱託学芸員も含む；筆頭著者が外国人の場合は，

投稿論文の英文比率は約 40％を占める．年によりその比率の差はあるが，第 16 号（1989 年）以後，英文投稿原稿は増加し，近年では英文論文が和文論文を超える傾向にある．これは，新タクサの記載論文の増加と外国人著者の増加に起因する．

投稿論文の著者の内訳は，85％が日本人で占められ，その内，化石博物館の館員（嘱託を含む）の研究論文は 27％であった．第 18 号（1991 年）で初めて外国人研究者の投稿があったが，第 21 号（1994 年）以後，外国人研究者の研究論文の掲載が増加した．イギリス・オランダ・デンマーク・ベルギー・アメリカ・イタリア・メキシコ・ロシア・中国・ニュージーランドに国籍を置く外国人研究者である．そのため．投稿論文の対象地域は，日本のみならず様々な国々に及ぶ．

分類，それに加えて古環境・古地理・生層序を議論したもの，博物館資料に関するものなど，投稿論文の性格は様々である．特に，分類に関する研究論文が多く，軟体動物（31％），甲殻類（16％），脊椎動物（15％）の順に多い．また，分類•記載学的研究の中で，332 の新タクサが創設された．興味深いことは，分野別の投稿論文の偏りが見られることである．糸魚川が編集長の時，軟体動物に関する投稿論文が多かったが，柄沢に交代するに至って甲殻類に関する投稿論文が増加した．このことは，編集長の専門分野と投稿論文の傾向に密接な関係があることを示す．

その他，特記すべきことには，学位論文の掲載とボリュームのあるモノグラフの掲載にある．

学位論文

1．Shibata, S. 1978. Molluscan paleoecology of the Miocene First Setouchi Series in the eastern part of the Setouchi

甲殻類	昆虫	脊椎動物	層序など	博物館	新タクサ	編集者	備考
1	12	3	6		0	糸魚川	開館記念号
		4		1	16	糸魚川	
		6		3	18	糸魚川	
		9		2	3	糸魚川	
		1	1	1	1	糸魚川	Shibata学位論文
		3	1	1	1	糸魚川	
1		3	1	1	2	糸魚川	
				1	10	糸魚川	
		4	1	1	4	糸魚川	
		3	2		4	糸魚川	
1		4			9	糸魚川	
		1	1		0	糸魚川	松浦学位論文
	1	2	1		0	糸魚川	
2		3	1		0	糸魚川	
		1			4	糸魚川	
1		1	1		14	糸魚川	
1			1		7	糸魚川	
1		3	1		1	糸魚川	
4		5	10		26	柴田博	糸魚川博士記念号
1					40	糸魚川	Karasawa学位論文とモノグラフ
3		3			12	糸魚川	A4変形版に変更
4		1			3	糸魚川	
4					4	柄沢	Tomida学位論文
2		1			58	柄沢	Sugiyama学位論文とモノグラフ
1	2				2	柄沢	Kafanov monograph（ー31号）
1	1	1			4	柄沢	Kafanov et al.チェックリスト（ー28号）
4		2			9	柄沢	
1		1			15	柄沢	オンライン化開始
7					0	柄沢	
7	1				18	柄沢	
3					4	柄沢	表紙刷新
6			2		14	柄沢	Paul and Donovan monograph
9		1			21	柄沢	
6					8	柄沢	
71	17	66	30	11	332		

著者別として外国人に区分した；対象種別の分類は主なものである．

Geologic Province. 5: 23–110.

2．松浦信臣 . 1985. 北陸地方の鮮新世から完新世に至る軟体動物群の変遷．12: 71–158, pls. 32–42.

3．Karasawa, H. 1993. Cenozoic decapod Crustacea from southwest Japan. 20: 1–92, pls. 1–20.

4．Tomida, S. 1996. Late Neogene tropical and subtropical molluscan faunas from the South Fossa-Magna region, central Japan. 23: 89–140, pls. 24–34.

5．Sugiyama, K. 1997. Triassic and lower Jurassic radiolarian biostratigraphy in the siliceous claystone and bedded chert units of the southeastern Mino Terrane, central Japan. 24: 79–193.

モノグラフ類

1．Karasawa, H. 1993. Cenozoic decapod Crustacea from southwest Japan. 20: 1–92, pls. 1–20.

2．Sugiyama, K. 1997. Triassic and lower Jurassic radiolarian biostratigraphy in the siliceous claystone and bedded chert units of the southeastern Mino Terrane, central Japan. 24: 79–193.

3．Kafanov, A. I. and others. 1999-2001. Checklist and bibliography of the Cenozoic marine Bivalvia (Mollusca) of Northeastern Asia (Russian Far East). 26: 1–76, pl. 1; 27: 13–107; 28: 1–138.

4．Kafanov, A. I. 1998—2004. Recent and fossil Clinocardiinae (Bivalvia, Cardiidae) of the World. I–VIII. 25: 1–28; 29–45, pls. 1–4; 26: 77–97, pls. 2–5; 27: 109–123, 2 pls.; 28: 139–178,

7 pls.; 29: 1–18, 3 pls.; 30: 1–23, 13 pls.; 31: 25–32.

5．Paul, C. R. C. and S. K. Donovan. 2005. Quaternary and Recent land snails (Mollusca: Gastropoda) from Red Hills Road Cave, Jamaica. 34: 109–144, 39 pls.

このような他の学術出版物では掲載の難しい長大な論文の投稿を受付，発刊することも研究報告の特色である．

2. 評　価

研究報告は，Zoological Record, Geolis 等の収録対象誌ではあるが，ISI 登録雑誌ではない．そのため，研究報告を客観的に評価するものはないが，Google Scholar beta 版で，研究報告の検索を試みた（2008 年 8 月現在）．研究報告の一致件数は 158 件で，引用元の多い上位 3 論文は，Sugiyama (1997) の放散虫（38 件），Karasawa (1993) の十脚類（35 件），Collins et al. (1996) の十脚類（23 件）であった．引用元件数の評価は難しいが，いずれも分類学的研究を中心としたものであるため相対的には高い件数と思われる．

糸魚川 (1999) が述べたように日本の研究機関で博物館研究報告類の評価は低い．研究者の業績の中では，レフェリー制を引く学会誌・商用学術雑誌と区別され，「その他の研究論文」として扱われるためにある．しかし，研究報告の投稿者の傾向を見てみると，外国人研究者のものが増加している．これは，外国人研究者が研究報告を高く評価し支持していることの現れであろう．それを示す一例として， The Decapoda: new initiatives and novel approaches (R. M. Feldmann. 2003. Journal of Paleontology, 77, p. 1023) に次の記述がある．

「瑞浪市化石博物館研究報告は．世界中の研究者から投稿された化石十脚類及び他のタクサに関する論文を受理する良いレフェリー制度を持った古生物学関連雑誌に成長した．」

終わりに

瑞浪市化石博物館研究報告は，「開かれた研究報告」であり，当初から自由投稿としたことで成功したといえる．掲載論文は，瑞浪の古生物・地質の研究に始まり，日本の新生代へ，そして，世界へと年を経るにつれて拡大・発展していき，研究報告は国際的にも通用する風格を備えるものとなってきた．これは，「古生物学の発展に寄与すること」という瑞浪市化石博物館や研究報告の理念に基づいた着実な成果である．また，時代の変革に合わせ，パリ国立自然史博物館の Zoosystema や Geodiversita，シンガポール国立大学・Raffles 博物館の Raffles Bulletin of Zoology と同様に早期に掲載論文の電子媒体化を行い，その研究成果を広く一般に公開したことも成功の理由に挙げられるであろう．

今後の課題として挙げることは特にないが，研究成果を更に広く公表するため自然科学関連の他データベースの収録対象雑誌となることが望まれる．

引用文献

糸魚川淳二 (1999)，新しい自然史博物館．229 p. 東京大学出版会．

瑞浪市化石博物館研究報告 no. 35 (supplement) (2009)， p. 25–35, 11 figs.
特集「博物館－現在と未来－」糸魚川淳二・柄沢宏明（編）
© 2009, Mizunami Fossil Museum

中津川市鉱物博物館と長島鉱物コレクション

荻野義雄

中津川市鉱物博物館　〒508-0101 岐阜県中津川市苗木 639-15

Nagashima Mineral Collection and Nakatsugawa Mineral Museum

Yoshio Ogino

Nakatsugawa Mineral Museum, 639-15 Naegi, Nakatsugawa 508-0101, Japan

Abstract

The museum was opened in May, 1998 at Naegi, Nakatsugawa City, Gifu. The Naegi district is famous as a site which is occupied by granites with pegmatites. Rock crystal, topaz, beryl, mica, cassiterite and so on have been known from the Meiji Period. The occurrence of rare element metals is well known in the district. Naegi is the first locality discovered Fergusonite and Naegite. The Nagashima Mineral Collection deposited in the museum is presented by Mr. Otokichi Nagashima and Dr. Kozo Nagashima. The father, Otokichi was a pioneer amateur investigator of mineralogy and his son, Kozo, the professor of the Tsukuba University was a specialist of geochemistry. This collection made by them consists of about 3,200 specimens, most of which is minerals of rare element. Organization and activities of the museum are shortly explained.

Key words: Gifu, Naegi, Granitic pegmatites, Nagashima Mineral Collection, Nakastugawa Mineral Museum, Otokichi Nagashima, Kozo Nagashima

はじめに

中津川市鉱物博物館は，岐阜県中津川市苗木に所在する鉱物をテーマとする国内でも特色ある自然史系の地方博物館で，今年開館 10 周年を迎えた．

学校教育において理科の授業時間が少なくなり，なかでも地学は小学校から高校まで教える単元もわずかな，マイナーな分野になっている．中津川市苗木地域は古くから知られた鉱物産地であるが，各地の鉱物産地と同様にかつてのように採集ができなくなった状況にある．その中で，鉱物を中心とした博物館を地方の行政が建設したのは，それなりの理由があったのである．

博物館建設に至る背景となった地域，直接の資料である長島鉱物コレクション，博物館建設及び開館後の活動について紹介し，今後を展望してみる．

1. 苗木地方と鉱物

岐阜県中津川市苗木を中心とした花崗岩地帯は，明治期より「苗木地方」として，鉱物がよく採集できる産地として知られていた．これらの産地を含む中津川市，恵那郡 6 町村（蛭川村，福岡町，坂下町，付知町，川上村，加子母村），長野県木曽郡山口村は，まるで鉱物が取りもつ縁のように 2005 年（平成 17） 2 月 13 日市町村合併をした．旧町村の蛭川村・福岡町・坂下町・山口村と，中津川市苗木あたりは，苗木花崗岩が露出し，花崗岩中に巨晶花崗岩と呼ばれる「ペグマタイト」が脈状や晶洞（ガマとも呼ばれる）状に発達し，多くの鉱物を産出し，さらには砂鉱として見いだせ，煙水晶，トパズ，緑柱石，ホタル石，正長石・微斜長石，曹長石，スズ石，玉滴石などの他に，希元素鉱物（放射性鉱物，希土類元素含有鉱物，ジルコニウム含有鉱物などを総称する）と呼ぶ一群（モナズ石，フェルグソン石，変種ジルコンなど）が特徴的に産出したのである（長島・長島，1960）．

苗木花崗岩は「苗木•上松花崗岩体」のひとつで，細粒〜粗粒，灰白色の黒雲母花崗岩で，灰色を特徴とする石英，カリ長石，斜長石の 3 種がほぼ等量あり，チタン鉄鉱，ジルコンを含む．白亜紀末期の花崗岩で，CHIME 法年代は 67.2 ± 3.2Ma（鈴木ほか，1994）であり，67Ma 頃には定置したと考えられる．本岩は濃飛流紋岩，伊奈川花崗岩を貫き（山田，2005；山田・赤羽，2005），濃飛流紋岩との接触部分に鉄マンガン重石や錫石，硫砒鉄鉱などの小規模な鉱床が分布する（豊，2005）．

苗木地方は，福島県石川郡石川町の「石川地方」，滋賀県大津市田上の「田ノ上地方」とならび，日本三大ペグマタイト産地と呼ばれている．苗木地方には，今も採集を目的に専門家をはじめ，小学生から鉱物愛好家までよく訪れるが，かつてのように採集はできなくなった．それでも多くのホームページにはルートや採集ポイントを紹介し，成果を誇らしげに掲載することもあり，より競争心を煽っているようでならない．これもかつての栄光故の負の遺産なのだろうか．苗木地方は明治初期から鉱物産地として知られていた．

大久保利通は殖産興業のため勧業博覧会を建議し，1877 年（明治 10）第一回「内国勧業博覧会」が東京上野で開催された（石井，

1908)．この時全国から各種鉱物が出品され，標本は購入または閉会後寄贈されたりした．これらは後に和田維四郎により 1878 年（明治 11)「本邦金石畧誌」に,内務省博物局により 1880 年（明治 13)「博物館列品目録　天産部第三　鉱物類」に記載されている（田賀井，2001)．

第一回内国勧業博覧会に岐阜県の部で当地方から出品されたものをみてみよう（内国勧業博覧会事務局，1877 ？)．

○黄硫銅鉱：恵那郡付知村字羽子屋／黄硫鉄鉱：付知村中ン谷／滑石：字正脇／雲母：字東別当（現中津川市付知町）／同村曽我長四郎.

○鉱石（黄硫鉄鉱か)：中津川村字黒井沢（現中津川市中津川)／同村市川升七.

○鉱石（黄硫鉄鉱か)：恵那郡加子母村字銚子口・字丹ノ堂／白水晶：字白山（現中津川市加子母）／同村内木善衛.

○雲母：美濃国恵那郡中津川村字恵下（現中津川市中津川）／同村間半兵衛.

○黄土（陶土・粘土の一種）／紅土 一名鬼板粉（褐鉄鉱の一種)：恵那郡茄子川村字広久手（現中津川市茄子川）／同村篠原利平治.

○箔砂（雲母小片含有か)：恵那郡苗木字浅間山（現中津川市苗木）／同村中根助市.

○白絵土（粘土)：恵那郡東野村字白坂（現恵那市東野）／笠原村各務平七.

○白水晶／黒水晶：恵那郡田代村字通沢（現恵那市山岡町田代）／中津川村菅井森之助.

○水晶／黒雲母：恵那郡田代村字西山（現恵那市山岡町田代）／同村西尾仙右衛門.

○白水晶：蛭川村字井稲倉（現中津川市蛭川）／黒白交水晶：高山村字若山ノ内地獄谷／黒水晶：字同夕立峰・字水晶ヶ峰（現中津川市高山）／銀雲母（白雲母か)：蛭川村字狭間石（現中津川市蛭川）／中津川村高木勘兵衛.

○水晶：美濃国恵那郡大井村字奥戸（現恵那市大井町奥戸）／同村古屋善藏.

このうち，伊藤圭介（1803 ～ 1901)（1877 ？）によれば，付知「滑石」,山岡田代「黒雲母」,蛭川「銀雲母」が買上となっている．この頃は水晶（図 1)，雲母，黄鉄鉱，粘土などが知られていた．

図 1．煙水晶：中津川市苗木岩須珪石山産出.
Fig. 1. Smoky quartz, Keisekiyama, Iwasu, Naegi, Nakatsugawa City, Naegi District, Gifu Prefecture.

和田維四郎（1856 ～ 1920）が 1878 年（明治 11）に著した日本最初の鉱物誌「本邦金石畧誌」(和田，1878）には，当地方の鉱物はつぎの 4 種類が記載されている．

○黒水精（煙水晶)：美濃恵那郡田代村（現恵那市山岡町田代)．

○苦土雲母［黒雲母］：恵那郡中津川村外数村（現中津川市中津川他)．

○磁土（カオリン)：恵那郡東野村その他各郡（現恵那市東野他)．

○黄玉石（トパズ)：この鉱物は 3・4 年前に初めて近江で発見され，近江には多数産するが，美濃産（恵那郡中津川村）は唯一塊のみ，とある．

なお，田代村には稀に水晶の双晶（日本式双晶）が産出するとある．

翌 1879 年に出された「日本金石産地」(武藤（編),1879）には，黄玉石は恵那郡蛭川村とある．

1879 年（明治 12）1 月 25 日付,朝日新聞（大阪）第 1 号には「高麗橋筋壹町目・・美濃産の水晶を種々の器に製し販売せり誠に奇麗で有升」と水晶の加工品が報道されている．

石井研堂は「明治事物起原」(石井，1908）に,「黄玉の始」として「本邦黄玉の発見者は，神田小川町金石舎の主人となれる高木勘兵衛氏なり．実に明治三年中，美濃国えな郡苗木山の畑の砂中より，細くして糸の如きを得たるを口きりとなす.」と記し，高木は 1877 年（明治 10）杉村なる者に売り，その 2 ・ 3 年後に博物館へ売って，初めて黄玉であることを知ったとある．産地は高山村と蛭川村（現中津川市高山，同蛭川）の 2 村をあげ数多く発見するとし，駒場・苗木（現中津川市駒場，同苗木）の 2 村も少しは出ると紹介している．

美濃でトパズの発見は和田の「本邦金石畧誌」によれば出版された 1878 年には，世に知られるほどではなく，後述する「日本鉱物誌初版」(1904）では錫石発見以後，知られるとしている．また 1881 年（明治 14）第二回内国勧業博覧会の岐阜県出品解説抜粋（農商務省，1883）では，銅鉱，水晶，雲母等の産地として恵那郡が紹介されているが,錫石,トパズはまだ紹介されていない．

1882・83 年頃（明治 15・16）に錫石が発見され（和田，1904)，1884 年以降に砂錫の採掘が本格的に始まり（高山尋常高等小学校，1927)，範囲は蛭川・福岡・苗木・坂本・大井（現恵那市)・日吉（現瑞浪市）辺りまで，春から秋までは農事のために採掘は休んでいた．高山地内に精錬所を設け，1885・86 年頃は盛業で次第に小規模で行うようになった（中西，1893)．平野部では，家屋の周囲やお墓を除き多い所では 2 度以上掘り返したともいわれる（筆者がかつて行った古老らの聞き取り調査による)．採集はスズの比重が重いのを利用した水洗選別であった．採掘した土砂を大型の樋に入れ水を流すと軽い鉱物や小礫は流れ，重い鉱物が残る方法であった．その際，錫石の他にトパズ・緑柱石・電気石などの各種鉱物が見つかり，苗木地方の鉱物種は増え，鉱物産地として世に知られていくのである．

1890 年（明治 23)，第三回内国勧業博覧会が開催され，出品された宝石類の標本に美濃産黄玉石（図 2 ）の名があり，さらに鉱物標本に東京府高木勘兵衛の名がみられる（第三回内国勧業博覧会事務局，1891)．1891 年出版された一般教養書「初等教育小金石学」には，美濃はトパズ，錫石の著名な産地として紹介がある（須永，1891)．

1892 年，比企 (1866 ～ 1927)（1892）は「恵那郡の鉱石に富む

図２．トパズ：中津川市苗木井汲産出.
Fig. 2. Topaz, Igumi,Naegi, Nakatsugawa City, Naegi District, Gifu Prefecture.

は我が国中最たるもの」として産出鉱物 13 種名を紹介し，続く報文(比企, 1895)では「恵那郡の地鉱物産出の夥事は学者間に喋々せらるる所にして，屡々諸専門学者の踏査を受け，黄玉石の如きは海外に轟き，続々新鉱石の産出する望みある所なりとす」の書き出しで始まり，錫鉱，黄玉石（高山地方と苗木地方の 2 種類を説明），石英（黒水晶，水晶），長石（正長石，斜長石），雲母（黒雲母，白雲母），鉄砂，緑柱石，青玉，電気石，砂金，褐鉄鉱，蛍石，タングステン鉱，フェルグソ鉱？の 14 種類の産出鉱物を紹介している．その中で「フェルグソ鉱？は高山地若山にあり，分析未だ結了を告げず，地学雑誌第 65 巻（周山生，1894 のこと）に詳なり，誠に珍奇の鉱石と云うべし，是れ方言ルチールと称するものなり」と記し，さらに方言（地方での呼び名）で「緑星石」と呼ばれる不明鉱物を紹介している（のちの苗木石のこと）．明治の中頃には，学会をはじめ世間の注目を集る一級の産地になっていたのである．なお 1893 年（明治 26）シカゴ・コロンブス博覧会に高木勘兵衛は美濃産トパズ約 200 個，市ノ川鉱山産輝安鉱を出品し銅牌を得たという（長島・長島，1960，p.350）．前述の比企の「海外に轟き」は，この博覧会が契機になったのである．

和田維四郎の研究成果として結実した「日本鉱物誌初版」は 1904 年（明治 37）に発行された．同書には 130 種，産地未記載・追加も含めると 153 種が記載されており，当地方はつぎのように産状と鉱物が紹介されている（和田，1904）．

鉱物産地

○花崗岩中に産出するもの（ペグマタイト）

主産地：磐城石川附近，常陸山ノ尾，美濃高山附近，近江田ノ上等（三大鉱物産地が明らかになっている）．

○漂砂鉱床中に産出するもの／主産地は美濃高山附近．

鉱物

○石英 Quartz ／恵那郡（煙褐色をおびるものは甲州に少なく美濃の各地他）．

○金紅石 Rutile ／恵那郡高山村の河砂に混ざり，錫石採取の際に得られる．

○錫石 Cassiterite ／高山産は崩壊した土砂中にあり主として砂錫である．1882•83 年（明治 15•16）の発見により黄宝石，緑柱石，電気石，石英，狼鉄鉱（鉄マンガン重石）等と共伴する．

○藍宝石 Sapphire（鋼玉 Corundum）／恵那郡高山村地方で錫石等と河砂中に産する．錫石採集の際に副産物として得る．

○蛍石 Fluorite ／高山地方等においても少量ある．

○狼鉄鉱 Wolframite（鉄マンガン重石）／恵那郡高山地方の産は河砂中に錫石と共伴する．

○磁鉄鉱 Magnetite ／加茂郡飯地．

○金緑石 Chrysoberyl ／恵那郡高山地方の河砂中砂錫と共伴するが，著者所蔵の 1 粒あるのみ．

○フェルグソニット Fergusonite（フェルグソン石）／高山地方の河砂中に砂錫と共伴して産出する（ウランの含有を初めて確認された鉱物である）．田村典瑞による 1904 年と年不詳の分析値が併記されている（図 3 ）．

図３．フェルグソン石：中津川市高山木積沢産出.
Fig. 3. Fergusonite, Kizumisawa, Takayama, Nakatsugawa City, Naegi District, Gifu Prefecture.

○苗木石 Naegite ／フェルグソン石と同様に河砂中から産出する．新鉱物として苗木石と命名される．

○黄宝石（黄玉）Topaz ／近江産は古くから産出していたが黄宝石とわかったのは 1875・76 年（明治 8・9）頃で，1877 年の内国勧業博覧会で世に広まる．美濃産はその後の発見で，1884 年(明治 17）頃より砂錫採取の副産物として大量に発見されるようになった．産出地は同郡福岡村高山，苗木町周辺で花崗岩からなる若山を中心とする．最大のものは第 5 回内国勧業博覧会(1903 年）に出品したもので短軸径 7.5 センチ，長軸 10 センチ，主軸 15 センチあり，産地は若山の内鳶岩巣山．

○電気石 Tourmaline ／恵那高山地方には淡青色のものが産出する．

○黒雲母 Biotite ／恵那郡高山附近．

○加里雲母 Muscovite（白雲母）／恵那郡高山産．

○緑柱石 Beryl ／美濃高山村附近は，多くは河砂中より産出．

○正長石 Orthoclase ／恵那郡苗木向山（または東山），同地方福岡村高山（若山）附近の産.
○曹達長石 Albite（曹長石）／美濃等の産.

以上 17 種が結晶の特徴や産地状況などが紹介されている．特にトパズの結晶についての詳細な報告，希土類元素を含み日本で最初の含ウラン鉱物として確認されたフェルグソン石や，希土類元素やウラン・トリウムを含む新鉱物を苗木石（図 4 ）と命名し世に紹介したことが特筆する点であろう.

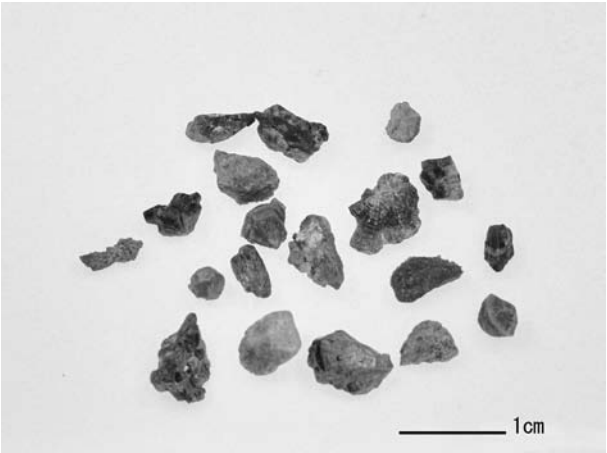


図 4．苗木石 (変種ジルコン)：苗木地方産出.
Fig. 4. Naegite “var. Zircon”, Naegi District, Gifu Prefecture.

1891 年（明治 24），菊池安（1862 ～ 1894）東京帝国大学理科大学助教授は鉱物採集に美濃・近江へ出かけ（石井，1894），美濃国中津川近傍で未知の鉱物を 2 つ採集した（小川，1904）．ひとつは 1892 年の冬，地質調査所田村典瑞に分析を依頼し（水野，1991），菊池が没した（1894 年 2 月）後の 4 ・ 5 月頃に，定量分析は完了していないが田村によりフェルグソン石とわかった（周山，1894；小川，1904）．その後，田村は 1897 年（明治 30）11 月に雑誌にフェルグソナイト（磁器黄色顔料）を発表する．最初に顔料とした寺内信一は，この黄色顔料を「アスカイ黄」と名付け 1899 年に発表した．苗木地方産のフェルグソン石は顔料となることが判明した以後，陶磁器の黄色釉薬として貴重品となり高価格で売買されるようになった．1903 年夏頃には，フェルグソン石に「金黄石」と名付け，大阪で発売されていた（小川，1904；水野，1991）．なお，当時苗木地方ではフェルグソン石のことを，その形状から「ネズミのクソ石」と呼んでいた（長島・長島, 1960, p.350）．陶芸家加藤卓男（1917 ～ 2005）は生前, フェルグソン石は「金鉱石」と呼び，還元焔で焼成すると 1200℃で鮮明な黄色に発色する，と話された.

未知のもうひとつは苗木石のことで，田村が和田に分析値を報告したとあり（小川，1904），和田「日本鉱物誌初版」フェルグソン石本文中（p.161）に記載がある.

福地（1905）によれば，和田は苗木石の化学成分をさらに垰和為昌（1856 ～ 1914）東京帝国大学理科大学教授に依頼し，1905 年垰和は，分析値を示すが希土類元素の分析には，困難を極めたためさらに研究を要するとした.

この 2 種類の鉱物の正確な化学分析はこの後，柴田雄次（1882 ～ 1980）がパリ大学で希土類元素分析に有効である発光分光分析法を習得し，帰国後，東京帝国大学理科大学教授となって木村健二郎（1896 ～ 1988）と開始した「東洋産含稀元素鉱石の化学的研究」（柴田・木村，1921）によって明らかとなり，その後この研究は，長島乙吉の子息である長島弘三まで引き継がれ（1973 年まで発表），実に 53 年間にわたり研究発表されるテーマとなり，日本の地球化学の出発とその発展に大きな貢献をしたのである（山崎，1982a・b）．なお，この研究の中で「恵那石」（木村・三宅，1932）「山口石」（木村・弘中，1936）と産地に因んで命名された鉱物があった.

粟津秀幸（1886 ～ 1945）は，それまで砂鉱として発見されていた各種鉱物がペグマタイト中に発見されるのを得て，産出地における特徴や，漂砂鉱床との関係についてまとめた（粟津，1910a ～ 1910d）．後年粟津は「苟しくも鉱物を研究する学生たるものは，一度はこの名所を訪れねばならぬという不文律が出来上がってしまった．この 3 大名所は各々特色があって，・・・苗木は錫石の他美しい黄玉・緑柱石・黒水晶の産地として又，種類の豊富と結晶鉱物に富んだ点で有名であり，田ノ上山も黄玉・長石・黒水晶で有名であったが苗木には及ばなかった」と語っている（粟津，1945）.

櫻井欽一（1912 ～ 1993）は苗木地方について「日本三大産地の一を占め産物の種類多きこと，産量の豊富なることに到っては正に我国第一のペグマタイト産地であろう」と語り，鉱物種の特徴とその産状をわかりやすく紹介した（藤浪，1933a ～ 1934g）.

東京高等師範学校鉱物学教室の柴田秀賢（1903 ～ 1981）は「美濃国恵那郡苗木地方の花崗岩類及びペグマタイト」（柴田，1939a ～ 1939d）を発表し，これまでの研究が砂鉱や母岩から分離した単結晶が主であったものを，ペグマタイト及び母岩の花崗岩を研究対象にし，苗木花崗岩と周辺の花崗斑岩との関係及びペグマタイト鉱物の進化過程を明らかにするなど現在の研究基礎を確立させた.

このように明治期から昭和期にかけて鉱物学者，地質学者，化学者らの研究者や学生，さらには鉱物趣味のアマチュアまで多くの人がこの苗木地方へ訪れたのである．また現地には，標本情報や現地案内などをした小川弥次郎・峯太郎父子がいて，現地の普及に大きな貢献をした.

長島弘三は地元の中学校で，教師が鉱物クラブを作り，鉱物誌の作成，採集して標本室を作る，また輝水鉛鉱，方鉛鉱の新産地を発見するなどの成果を挙げたことを紹介している（長島，1953）．このように地元では 1970 年頃までは家庭の玄関などに煙水晶やペグマタイトが置かれたり, 小中学生の夏休みの研究では，鉱物標本を作り出品したり，友達と山へ水晶拾いに遊びに行っていたのである．生活や教育などさまざまな面で鉱物・岩石が身近にある風土がこの地域には育まれたのである.

その後山間部での採集も次第に減り採石場が中心になるが，1950 年代（昭和 30 年代）以後，採石や鉱物採集は蛭川地域が中心地となった．しかし近年では採石の操業も減り，苗木地方での鉱物採集は困難になってきた．どこでも鉱物が拾えた時代は，過ぎ去ったのである．以上のように苗木地方は日本有数の鉱物産地であり，希元素鉱物の宝庫であった．そしてフェルグソン石・苗木石にはじまる日本の地球化学の発祥の地といえる．放射性希元素鉱物の研究者については糸魚川忠平が簡潔にまとめている（糸魚川，1998）.

2. 長島乙吉・弘三父子と長島鉱物コレクション

長島乙吉（1890 ～ 1969）は苗木町津戸（現中津川市）に生まれ，1899 年（明治 32），9 歳で東京神田小川町の金石舎へ勤めに出た．金石舎は中津川出身の高木勘兵衛（1837 ～ 1911）が 1844 年（明治 17）に開業した鉱物標本・宝石販売店であった．高木はスズ鉱やトパズ，鉱物標本の販売と商才に長け，「トパーズ勘兵衛」とも呼ばれた人であった．一名，雷勘兵衛ともいわれるほどよく怒ったが，心の正直な人で，乙吉は勘兵衛夫婦に可愛がられて育てられる．夜学に通いラベル書きを覚え，実地の採集や標本づくりを経て，その才能を開花させていく．ブック型標本箱，ガラス蓋付丸箱なども考案した．

1913 年（大正 2），乙吉は独立して神田三崎町に鉱物標本店を開業し，1917 年，後に生涯の友となる益富壽之助（1901 ～ 1993，京都を拠点に地学普及に貢献し，現在の財団法人益富地学開館を創設した）とこの店で出会う．

1919 年，秩父鉄道の「鉱物標本陳列所」のために親交がある東大教授の神保小虎（1867 ～ 1924）らの指導を得て秩父地域の標本採集をし，1921 年「鉱物植物標本陳列所」として開設された（標本は旧埼玉県立自然史博物館を経て現埼玉県立自然の博物館へ引き継がれている）．

1929 年（昭和 4）には「鉱物同好会」を組織し「趣味の礦物」を発刊して地学・鉱物学の教育普及に尽力する．この会には当時中学生だった櫻井欽一（日本鉱物誌 3 版（上）を共著，世界有数の櫻井鉱物コレクションを収集し，鉱物界の牧野富太郎とも評された）も参加していた（会は後に解散するが，これを惜しんだ益富が櫻井の協力を得て 1932 年「日本礦物趣味の会」を結成「我等の礦物」を刊行し，現在の「地学研究会」，「地学研究」へ続いている）．

またこの年に長野県山口村（現岐阜県中津川市）で，乙吉が発見したペグマタイトの一部を，分析した東大理学部の木村健二郎は，新鉱物を発見し，山口石（変種ジルコン）と名付けた（木村・弘中，1936）．このペグマタイトからはさらに褐簾石・ガドリン石などの希元素鉱物が明らかとなり，これが契機となって乙吉は，生涯の研究テーマである希元素鉱物探査と薬用鉱物のさらなる研究をはじめたのである．その後乙吉は新たな産地や鉱物を見つけては，東大木村研究室と理化学研究所飯盛研究室（主宰飯盛里安，1885 ～ 1982）へ提供していった．

1936 年（昭和 11），理化学研究所飯盛研究室嘱託となり，希元素鉱物・放射性鉱物の探査に従事し，この年には，福島県川俣町飯坂水晶山から，阿武隈石（Hata，1938）や他の希元素鉱物を多く含むペグマタイトを発見した．以後国内や東南アジア・中国各地へ探査に赴く．1945 年の東京空襲で自宅が焼失し長年苦心して採集した多くの鉱物・書籍を失ってしまう．

戦後の 1953 年（昭和 28），日本学術振興会希元素調査委員に選ばれ調査に従事する．1958 年（昭和 33）長年の希元素鉱物調査の功績により紫綬褒章を受章し，多くの関係者はその栄誉を慶んだ．1960 年（昭和 35）これまで研究してきた希元素鉱物を子息であり当時東京大学教養学部助教授で分析化学者であった長島弘三と鉱物種の記載のみでなく，産地紹介や地球化学，化学分析などの観点からも論究した大著「日本希元素鉱物」を上梓した．表紙は前田青邨画伯による苗木方面から見た恵那山であった（青邨は中津川市出身で，四女が弘三夫人である）．

戦災後，乙吉・弘三の二人で集めてきた鉱物標本を，乙吉は，1964 年（昭和 39）2 月，弘三に無断で中津川市，蛭川村，岐阜県立中津高等学校に寄贈の申し入れをした．ふるさとの苗木地方が，国内でもすぐれた希元素鉱物の産地で，美しい鉱物やめずらしい鉱物が数多くあること，ふるさとの人をはじめ多くの人に鉱物に対する知識を深めてもらうためであった．当初，弘三は無断でされたことに呆れ腹がたったそうだが，標本が展示されることは賛成であったため，それぞれの現地を訪れラベル書きや展示を手伝った．蛭川村は恵那峡の北岸にある紅岩山荘の敷地内に 1965 年，蛭川郷土館を新築し「長島コレクション陳列所」として公開し，乙吉を名誉村民として表彰した（蛭川村史編纂委員会，1974）．

中津川市は 1966 年新築した苗木公民館の一室を「長島鉱物コレクション展示室」として開設した．1967 年，乙吉は市制施行 15 周年記念にて，中津川市教育文化功績により表彰された（中津川市鉱物博物館，1999b）．以後乙吉は標本整理に年に一度は来訪した．

県立中津高等学校は，1965 年に地学準備室に新たに戸棚を設置し標本を納めた．4 月には乙吉，弘三の二人が生徒を前に記念講演をし，乙吉は金石舎での奉公の体験や採集のことなど，弘三は学問的な話をし，平常の授業では得られないものを生徒に与えた（長村，1978）．

乙吉は 1969 年（昭和 44）12 月 4 日享年 79 歳で逝去する．多くの人が別れを惜しんだ．家族により墓石は苗木産の花崗岩，骨壺には木積沢の苗木石，フェルグソン石，関戸川のトパズが入れられ，墓地には苗木津戸の父母の墓地の土がまかれ，乙吉翁は安らかに眠る（長島，1962；長島，1970；中津川市鉱物博物館，1999a；同，2000；同，2003）（図 5）．

図 5．常設展示室テーマ 5「鉱物に魅せられた人々」（長島鉱物コレクション）．
Fig. 5. A permanent exhibition room, Theme 5 “Those who loved minerals” (Nagashima Mineral Collection).

長島弘三（1925 ～ 1985）は，乙吉の長男として生まれる．考古学を志すも，父の勧めにより化学を専攻し，東京大学理学部化学科に入学して，木村健二郎の指導を受け分析化学を修め，師である木村から引き継いだ「東洋産含希元素鉱物の化学的研究」に従事し，鉱物の分析化学にめざましい業績をあげ，地球化学の第一人者となった．

1952 年（昭和 27），箱根火山岩の地球化学的研究で東京大学か

ら理学博士の学位を受け，1973年（昭和48）には鉱物分析の研究により日本分析化学会学会賞を受賞し，1975年（昭和50）には，新鉱物飯盛石の発見の業績に対して櫻井賞を受賞する．

東京大学教養学部・理学部，東京教育大学・筑波大学などで教鞭をとり後進の育成•指導にあたり，温厚でやさしい人柄でいて，緻密で適切な指導で，多くの逸材を育て，敬愛された．また中学・高校・大学での理科，化学の教科書や入門書，専門書の執筆をし，その著書は今でも高い評価を受け多くの人に利用されている．1977年(昭和52)には古代オリエント博物館の理事に就任し，遺跡出土品の化学分析なども行った．

父乙吉が亡くなった後は，父の意志を継ぎよく苗木や蛭川に立ち寄り，標本の手入れや標本整理，ラベルの書き換えなどを行った．1978年，中津川市はコレクションを，さらに多くの人に見てもらおうと苗木字岩須にある森林公園「夜明けの森」管理事務所に鉱物展示コーナーを設けた．弘三は協力して，益富壽之助に標本を依頼し，益富は快く開設記念として貴重な標本20点を贈り，コレクション10点と合わせて展示した．当時の新聞に弘三は「父親がこよなく愛したふるさと中津川市の市民，またここへくる人たちに天然の造化の妙を見てほしい」と話していた（岐阜日日新聞，1978；益富，1978）．

弘三は1985年（昭和60）1月6日，享年59歳で逝去する．病気であったが胸中はきっと無念であったに違いない．多くの人はこれから斯界でさらなる指導と活躍を期待していたため，その損失を悲しんだ．お墓には木村石と弘三石が入れられている(黒田，1985；中津川市鉱物博物館，2000)．

長島弘三が記載に関わった新鉱物．

①飯盛石 Iimoriite-(Y)，1970年，$Y_2(SiO_4)(CO_3)$

②水酸エレスタド石 Hydroxylellestadite，1971年，
$Ca_{10}(SiO_4)_3(SO_4)_3(OH,Cl,F)_2$

③益富雲母　Masutomilite，1975年，
$KLi(Mn,Fe)AlSi_3AlO_{10}(F,OH)_2$

④サラバウ鉱 Sarabauite，1978年，$CaSb_{10}O_{10}S_6$

⑤磐城鉱 Iwakiite，1979年，$Mn(Fe^{3+},Mn^{3+})_2O_4$

⑥欽一石 Kinichilite，1981年，
$Mg_{0.5}[(Mn,Zn)Fe^{3+}(TeO_3)_3]\cdot 4.5H_2O$

⑦木下雲母（木下石）Kinoshitalite，1981年，
$(Ba,K)(Mg,Mn,Al)_3Si_2Al_2O_{10}(OH,F)_2$

⑧アンモニウム白榴石 Ammonioleucite，1986年，
$(NH_4, K)\ AlSi_2O_6$

⑨木村石 Kimuraite-(Y)，1986年，$CaY_2(CO_3)_4\cdot 6H_2O$

⑩逸見石 Henmilite，1986年，$Ca_2Cu\ (OH)_4B_2(OH)_8$

⑪ストロナルシ石 Stronalsite，1987年，$SrNa_2Al_4Si_4O_{16}$

飯盛石は飯盛里安と長男飯盛武夫／木下石は木下亀城／益富雲母は益富壽之助／欽一石は櫻井欽一／木村石は木村健二郎／逸見石は逸見吉之助と子女逸見千代子にちなむ(松原・宮島，2001；石橋，2005～2008)．

木村石が新鉱物として承認されたのは，弘三が亡くなってからであった．なお，松原聰・加藤昭は長島乙吉にちなんで1980年「長島石」，宮脇律郎•松原聰らは長島弘三にちなんで2000年「弘三石（その後ネオジム弘三石，ランタン弘三石の2種類に分かれる)」を命名している(松原・宮島，2001；中津川市鉱物博物館，2000；同，2006)．

長島鉱物コレクションは，アマチュア鉱物研究家のパイオニアである長島乙吉と子息で鉱物分析による地球化学の第一人者であった長島弘三の二人が収集された希元素鉱物を主体とした鉱物コレクションをいう．コレクションは，1964年に中津川市，蛭川村，中津高等学校の3ヵ所に分散して寄贈された．

中津川市分は，1992年から博物館建設に向けて資料調査を始め，その全容の把握に努めた．博物館の建設中の1997年には中津高等学校寄贈分が中津川市に寄託された．また2002年には蛭川村寄贈分も中津川市に寄託された．ここに元はひとつであったコレクションが38年振りに再会したのである．場所は3ヵ所から1ヵ所になるが，これまでの10倍以上の規模となり，展示のみでなく博物館としての活動が加わり，寄贈された長島父子お二人の願いは，これまで以上に叶えられることになった．

標本点数は，中津川市分約1700点，蛭川村分約900点，中津高校分約600点の合計約3200点である．国内では福島県（石川地方・川俣地方）が535点（約17%），岐阜県（苗木地方）385点（約12%），長野県（山口，田立）150点（約5%），茨城県（高萩，山ノ尾）135点（約4%），山形県（宮内，東田川）134点（約4%）とつづく．また国外では，朝鮮半島，中国東北部が各約60点と最も多く，世界29の国と地域に広がっている（中津川市鉱物博物館，2006）．

主体となる希元素鉱物の希元素とは，地殻中の存在量が少ないか，やや多くてもまとまった鉱床をつくることが少ない元素をいい，対象となる元素は明確な定義はない．長島乙吉•長島弘三（長島・長島，1960）は，花崗岩質ペグマタイトに濃縮される元素に限定して，周期表の1族リチウム，ルビジウム，セシウム，2族ベリリウム，3族希土類元素（スカンジウム，イットリウム，ランタン，セリウム，プラセオジム，ネオジム，サマリウム，ユウロピウム，ガドリニウム，テルビウム，ジスプロシウム，ホルミウム，エルビウム，ツリウム，イッテルビウム，ルテチウム，）トリウム，ウラン，4族ジルコニウム，ハフニウム，5族ニオブ，タンタル，13族ホウ素としている．

コレクションのうち希元素鉱物が約25%を占め，そのうち希土類元素鉱物グループがもっとも多い．

主な希元素鉱物．

○ウラン鉱物：閃ウラン Uraninite，燐灰ウラン石 Autunite，人形石 Ningyoite.

○トリウム鉱物：トール石（ウラノトール石）Thorite “uranothorite”，トロゴム石 Thorogummite.

○希土類元素鉱物：褐簾石 Allanite-(Ce)，モナズ石 Monazaite-(Ce)，ゼノタイム Xenotime-(Y)，ガドリン石 Gadolinite-(Y).

○ニオブ・タンタル鉱物：フェルグソン石 Fergusonite-(Y)，鉄コルンブ石 Ferrocolumbite，ユークセン石 Euxenite-(Y)，サマルスキー石 Samarskite-(Y).

○ジルコニウム鉱物：ジルコン Zircon，変種ジルコン var. Zircon【苗木石 naegite，山口石 yamaguchilite】.

○ベリリウム鉱物：緑柱石 Beryl

○希アルカリ鉱物（リチウム，セシウム他）：リシア雲母 Lepidolite，チンワルド雲母 Zinnwaldite，リシア電気石 Elbaite.

○ホウ素含有鉱物：鉄電気石 Schorl，ルドイヒ石 Ludwigite，ダンブリ石 Danburite.

○北投石（Pb を含む重晶石）：Barite“Hokutolite”．＊放射能を含む．

なお，中津川市分と中津高校分のコレクションついては博物館収蔵資料報告第１号として標本目録をまとめた（中津川市鉱物博物館，2001；同 1999a ～ 2000；同，2006．現在蛭川分を整理中のため本文中の数値等は修正になる場合がある）．

3．博物館建設

長島父子が，寄贈したコレクションは３ヵ所とも各施設の機能に応じて公開等利用されてきた．二人は機会ある毎に訪れて標本整理をされたが，二人が亡くなられてからは，整理や展示替えもさほど行われなくなった．

中津川市では 1990 年第三次総合計画に鉱物資料館建設を位置づけ，博物館建設に向けて動き出した．1994 年，鉱物資料館建設準備委員会が「鉱物博物館（仮称）建設基本構想」（中津川市鉱物資料館建設準備委員会，1994）をまとめ，1995 年，鉱物博物館（仮称）研究委員会の提言を得て，市教育委員会が「フィールドミュージアム鉱物博物館（仮称）基本計画書」（中津川市教育委員会，1995）をまとめた．それにより長島父子の意志（苗木地方が希元素鉱物・美しい・珍しい鉱物の産地である，鉱物の知識を広める）と長島鉱物コレクションを多くの方に紹介するために，地球の贈り物「鉱物・岩石」を通して自然の不思議・偉大さを学習する自然科学の学習拠点施設として「鉱物博物館」を，さらに植物を含めた自然とのふれあいの場として岐阜県生活環境保全林「夜明けの森」を位置づけ，一帯をフィールドミュージアムとして活用することになったのである．1995 年度～ 1997 年度の３ヶ年をかけて建設整備を行い，1998 年５月１日開館した（図６）．

図６．博物館外観．
Fig. 6. Museum appearance.

長島鉱物コレクションは，1992 年度から教育委員会文化課にて，標本調査をはじめ，標本の再整理・登録をすすめ 1998 年完成した博物館に収蔵した．調査は当初専門外の筆者が担当したのであるが，益富壽之助や櫻井欽一のお二人をはじめ多くの関係者に調査等について協力をお願いしたところ，快く応じていただいた．特に益富は面会の日を決める最初の電話で，「標本がいるならもっとあげるから」と自ら言われた．自身が標本を贈った 1978 年から筆者が連絡をするまでの 14 年間の時の隔たりを何ら感じさせず，それも素人の私にそんな言葉を掛ける益富の広き心に敬服するばかりであった．また櫻井も長島父子や鉱物のこと，さらに歌舞伎のことなど３時間余にわたり江戸っ子特有のテンポのよい語り口で話をされ，最後に「僕の標本も展示してもらうから」とにこやかな顔で言われたことを昨日のように思い出す．かつて益富が，石が取りもった長島乙吉との出会いを「奇（く）しき縁（えにし）石」（益富，1929；同，1970）と呼んだが，筆者がこのお二人の偉大な先達にお会いできたのは，「長島」の名前によるものであり，さらに「鉱物」「苗木」この言葉の広がりと重みを感じずにはいられなかった．残念でならないのは博物館の建設をまたず，1993 年に二人が相次いで亡くなられたことである．

石の縁は，さらなる人のつながりを拡げ，放射化学の見地から幅広く指導をいただいた阪上正信（1921 ～ 2002）金沢大学名誉教授ら実に多くの方々の協力や助言を得て，博物館が形作られていったのである．

博物館運営は，基本構想，基本計画により進めた．視点として「人と物の交流を図る施設」をキーとして，つぎのように展開した．

全体をフィールドミュージアム－知的レクリエーションゾーン－として，各ゾーンはつぎの内容とした．

○博物館は学習をキーとして実物にふれ，楽しく学ぶ：常設展示室，レファレンスコーナーなど．

○きらら広場は体験をキーとして鉱物と親しむプレーゾーン：ストーンハンティング，結晶の積み木，石の楽器など．

○フィールドは遊びをキーとして自然にふれる：フィールドアスレチック，大型遊具，ネイチャーオリエンテーリング，樹名板など．

展示では，基本方針をわかりやすい展示，楽しく参加できる展示とし，基本テーマを「人と自然のかかわり－鉱物や岩石のでき方とその利用」とした．それを導入部（水晶のトンネル）と７テーマを設けてつぎのように展開した．

①苗木地方の鉱物と花崗岩（ペグマタイと，苗木産鉱物など）
②石の姿（造岩鉱物，鉱物の結晶構造など）
③中津川市の地質（昇降式立体地質模型，阿木の化石など）
④鉱物の世界（鉱物の属性紹介　元素，結晶や鉱物標本）
⑤鉱物に魅せられた人々（長島鉱物コレクション，苗木と歩んだ研究者らの紹介）
⑥暮らしの中の岩石・鉱物（スズ鉱，石材，希土類鉱物など）
⑦地球から宇宙へ（隕石，地球のあゆみ紹介）

テーマ③を中央に配置し（図７），出入り口を４ヵ所設けて自由導線とした．全体的には実物資料を優先するオーソドックスな

図７．常設展示室テーマ３「中津川市の地質」．
Fig. 7. Permanent exhibition room, Theme 3 “Geology of Nakatsugawa”.

図 8．常設展示室テーマ 4「鉱物の世界」.
Fig. 8. Permanent exhibition room, Theme 4 “Mineral world”.

展開を図った．準備段階当時の自然史系の博物館はパソコンや映像・駆動装置などの仕掛けが主体であったが，標本をじっくり見せることを選択した．特に導入部やテーマ④では，美しさと不思議さのわかる標本を入れることにした．また，

○参加体験できる展示（テーマ①：各花崗岩の自然面と研磨面サンプル，テーマ③：阿寺断層駆動模型，テーマ④：周期表，測角，磁性，パソコンコーナー（図 8），テーマ⑥：希土類鉱物蛍光体顔料，製品分析，テーマ⑦：隕石）

○気軽に楽しめる展示（テーマ①：さまざまな水晶の映像，テーマ③：自然や地震の映像，テーマ⑥：カラー TV 用蛍光体，石垣施工の映像）などを配置した．

テーマ①の苗木産鉱物展示では，1996 年に個人から苗木地内で見つかった晶洞標本と，1997 年に恵那ラヂウム（株）がかつて展示していた標本を寄贈いただき，それらを中心に展示することで，テーマ⑤の長島鉱物コレクションと併せて，見応えのある標本展示が可能となった．またテーマ⑥の希土類鉱物の紹介では，足立吟也大阪大学工学部教授（現名誉教授）の協力を得て，貴重な試料などの展示ができた．その他各展示においても多くの方々の寄贈寄託があって展示室ができあがったのである．

1997 年には館名を公募し，応募された 1187 件の中から「夜明けの森きらめきパーク　中津川市鉱物博物館」に決定した．1998 年 4 月，鉱物博物館の職員辞令交付がされ，組織として正式に発足し，開館を迎えたのである．なお建設準備委員会から現在まで糸魚川淳二名古屋大学名誉教授，藤原卓財団法人益富地学会館主任研究員，及び糸魚川忠平元中津川市教育委員長には，顧問として専門的指導，助言をいただいている．また調査開始から今日まで長島照子夫人をはじめ長島家関係者のみなさんには多大なご支援をいただいている．

図 9．企画展示室.
Fig. 9. Plan exhibition room.

4. 開館後の主な活動

企画展示事業は，自主事業の他に，一般参加の個人・団体との共催で開催する「私の展示室」を開設した．目的は主に自然科学分野で調査収集されている方々に，公開する機会と場所を博物館が提供すること，また展示やリーフレット・ポスター作成などをとおして博物館のしくみや現状を理解いただき，博物館応援団になっていただくことである．毎回展示解説書を展示者と作成している．

なお展示者には，説明会等を開催すること（収集等でわかったことや得られた喜びなどを自らの言葉等で語っていただく）をお願いしている．開館した 1998 年度から 2008 年 5 月までに 22 回開催【内容：鉱物化石 4 回，自然 4 回，植物 8 回，歴史 2 回，地質・美術・産業・趣味各 1 回】している．

自主企画展は，毎年約 1 回のペースで開催し，2008 年 8 月までに 12 回開催【内容：鉱物岩石 8 回，自然放射能・人物史・ガラス・天然記念物各 1 回】している．毎回展示解説書（有料頒布）を作成，関連講演会を開催している． なおこの他にミニ企画展等も 5 回開催【姉妹都市紹介 2 回，寄贈寄託標本・市内の岩石・科博巡回展各 1 回】した（図 9）．

教育事業では，2000 年度に開催した吉原賢二東北大学名誉教授の講演会をきっかけに「ミュージアムレクチャー」と名付け，自然科学に関する市民向け講演会を毎年開催し，シリーズ化した．これまでに 8 回開催【内容：鉱物 2 回，地震 2 回，科学史・化学計測・化石・地質学各 1 回】した．何れも講演録等資料を作成（有料頒布）している．

教室事業で，特徴的なものを紹介する．小さな水晶を使った「ペグマタイトをつくろう」を 2003 年度から毎年実施している．これは後で紹介するストーンハンティングで，水晶が少なくなった土砂を入れ替えているが，その残土に含まれている小さな水晶を活用する方法として，拳大の花崗岩に水晶・長石・雲母などを接着剤で貼り付ける「ペグマタイトづくり」を思い立った．最近では採集が困難になったペグマタイトを実際の鉱物を使って実物に似せて創るかまたは，思い思いに貼り付けてもらう．花崗岩やペグマタイトのでき方や水晶の特徴なども学習している．夏休み期間に開催し，最近では遠方からの参加者が目立ち盛況である．なおこの教室は，地元の苗木小学校の体験活動「親子ふれあい教室」のメニューにも加えられ人気がある．

自然環境に関する実践者と博物館が連携して講座形式の事業を行っている．実践者は市内で活動している環境教育一般指導者，森林インストラクター，ネイチャーゲーム指導者らで構成し，年 4 回の活動をとおして子どもや保護者らに里山のしくみや四季をつうじた遊びなどを体験により理解を深め，自然・郷土への愛情を育む活動を行っている．2003 年度は「夜明けの森で遊ぼうよ」

図 10．ストーンハンティングの様子（水晶広場）．
Fig. 10．State of the stone hunting “A crystal open space”.

でスタートし（荻野，2004），いくつかの反省を踏まえ，2004 年度からは「こんもり山プロジェクト」と改称し現在に至っている．活動にあたっては博物館近傍の市有地の雑木林を借り受け，活動の中心地としている．親子で参加できるため，毎回人気が高い．

体験事業として特徴的なものが二つある．ひとつは入館者が参加できるストーンハンティング（当館では水晶探しのこと，参加料は無料）である（図 10）．鉱物採集の楽しみを体験してもらおうと発案し，基本計画書にも盛り込んだ．ところが実際に検討をはじめると，コストがかからず，継続できるものは，なかなか見あたらなかった．オープンを翌年に控えなかばあきらめかけた 1997 年の秋，地元の鉱物産地に大変詳しい深谷忠雄友の会員が苗木地内で小さな水晶（俗称コメ水晶）が採れる場所を案内してくれた．現地はかつて石英を採掘した際の小規模なズリであった．水晶は平均 1.5cm 前後の透明で非常にシャープな結晶で，量も一定量あった．一部乱掘により土砂崩れの危険が生じていたため，崩落防止工事をする際に採取できる土砂量を確保した．地元苗木産の水晶を持ち帰れる「水晶探し」が可能になったのである．水晶の量は予想より多くあり，現在まで継続できている．持ち帰りはひとり 1 個としている（採集は 30 分以内）．ストーンハンティングの入館者数に対する利用率は 2003 年度から入館者数の半数を超え，5 年間の平均は 55％である．ちなみに 2007 年度はこれまでの最高 62.8％であった．水晶の魅力と，探す楽しみや気軽に親子や家族で参加できることが要因であろう．2008 年度から，館正面のオープンスペース（水晶広場）で対応し，雨天時は当初対応していた屋根付のきらら広場で実施している．県外からの問い合わせも増えており，水晶探しが当館の顔となっている．

図 11．石割体験の様子（苗木花崗岩）．
Fig. 11. State of the stone assignment experience “Naegi granite”.

もうひとつは「石割体験」の実施である（図 11）．石材として利用される苗木花崗岩（みかげ石）がどのように割れるのか，普段では見ることができない小割の一部を参加者に体験してもらい，地域産業の紹介を兼ねた企画である．これは第 6 回私の展示室「苗木みかげ」（2000 年）で，開催した石割実演が大変好評であったため，同年 11 月に再度開催し，参加者の体験も実施した．その後 2002 年度に開催した教室事業の「鉱物探偵団」とミュージアムレクチャーの講演会に「石割体験」を実施し，課題などを検討して，2003 年度から鉱物博物館友の会（石材業を営む中根軍平会員が講師となり親子で協力いただいている）と共催で開催することになり，以後毎年開催している．講師の実演の後，参加者はセリヤをゲンノウで叩き，硬い石が意外と簡単に割れていくことに驚きの声をあげ，貴重な体験を楽しんでいる．

全国でも当館独自のもの，あるいは特徴的な取り組みとして「ペグマタイトをつくろう」，「ストーンハンティング：地元産水晶探し」，「石割体験：みかげ石の小割体験」を紹介した．いずれも実物を介して，参加者に鉱物・石の魅力を伝えようとするもので，鉱物博物館らしさの活動である．その他の活動については，博物館の年報を参照されたい（中津川市鉱物博物館，1999b；巻末参考資料：中津川市の博物館年報）．

開館 10 周年を迎えるにあたり 2008 年 1 月，岐阜県教育委員会へ当初計画にもとづく登録博物館の申請をした．現地審査を経て，同年 5 月博物館登録原簿に登録された．本来はもっと以前に申請する予定であったが，組織体制などで遅れてしまった．岐阜県内では 11 館目，自然史系では 2 館目となり，中津川市では最初の登録博物館である．

5．今後の展望

当館は地域博物館として，延床面積 1865.53 ㎡，敷地面積 7013 ㎡であり規模として大きくはない．職員体制は 2008 年 8 月現在，市職員 3 人，委託職員 3 人，委託臨時職員 3 人（勤務は月 10 日以下），職種別では館長兼学芸員 1 人，事務兼学芸員補 1 人，施設管理 2 人，受付 2 人，教育フィールド管理 1 人，事務補助 2 人という体制である．さらに当館は市内の他の博物館 3 館の事務管理，博物館 6 館（青邨記念館，苗木遠山史料館，子ども科学館，中山道歴史資料館，東山魁夷心の旅路館，鉱物博物館）の調整館である．また鉱物博物館長は 4 館の館長も兼務している．他館には市職員は常駐せず委託職員のため，他館での問題や課題を処理・対応するために当館の業務やサービスなどの対応は遅れがちとなる傾向にある．職員は必然的に多忙となり，長期運営計画，調査研究，企画事業，教材開発などじっくり掘り下げ考えたい課題に対して十分な時間が確保できないでいる．現状は，業務量からみればスタッフの数が不足している．解決策は，業務量を減らすか，またはスタッフ（ボランティアも含めて）を増やすか，さらには市内の博物館体制を根本的に見直すかである．

博物館の運営上の在り方については，適正な予算措置，専門職

員の拡充，技術力向上の職員研修，調査研究体制，専門的魅力ある教育事業の提供,インターネットを活用した博物館事業の展開,新学習指導要領に対応した学校向けメニュー開発など課題は山積しているが，博物館そのものがどうあるべきか，何を伝えていくべきか，原点に立ち返り，個々の課題に取り組むことが今，突きつけられている．当館のような小さな地域博物館は，まさに今，生き残りを賭けた極めて厳しい試練の時を迎えている．

現在全国どの自治体も行政改革により，職員定数の見直しが進み，自治体組織そのものが大きな岐路にある．その中で博物館はどうであろうか．市町村合併により博物館施設を複数抱える自治体が増えたことだろう．それぞれの施設には，建設に到る経緯があり，運営してきた経過，関わり合った多くの人がいる．資料を寄贈・寄託した人がいる．歴史を積重ねてきたのである．かたやコストのかかる施設は廃止すべきだと言う人がいる．ここ10年来の国や自治体の施策はまずコスト削減が第一であり，すべての事業費圧縮を推し進めてきた．大半の博物館もそれにより事業費を縮小してきた．博物館が担ってきた文化，芸術，歴史，自然は経済施策に対して本来は優位であるべきはずが，実態は，到底叶わぬ夢の状況であろう．

平成の大合併が新たな枠組みのなかで落ち着くには，まだ数年はかかろう．その間に日本中から一体いくつの博物館が消えてゆくのだろう．自治体が存続するためにはやむを得ないことではあるが，廃止する前に本当にその博物館は不要なのかを地域住民は考えていただきたい．自分たちの祖先が歩んできたことを誰がつぎの世代に伝えるのかを．そして自分たちが子ども達に何を残し得るのかを．その地域を残すということはどういう意味があるのか．遺産は地域だけのものではないということを．地域固有の自然，言語，習慣，芸術，文化，歴史を1枚の紙にまとめ，どこかの施設の隅に置かれていいのですか．あなたの故郷はどこにありますか，住民同士そう問うていただきたい．

地域の博物館は，扉が閉じられる前に，持っている資料とさまざまな情報を，地域住民に提供し，目指すべき方向を共に考え模索し，連帯し，歩まなければならない．博物館は何のためにあるのか，誰のためにあるのか，何ができるのか，本当に博物館は必要なのか．自問自答し進まなければならない．

謝辞

本原稿作成にあたり，糸魚川淳二博士には，全般にわたり多大なご指導をいただきました．文献資料の一部は財団法人益富地学会館主任研究員藤原卓氏に提供と助言をいただきました．希元素鉱物に関する研究史や苗木地方に関する資料は糸魚川忠平氏がまとめられた資料を利用させていただきました．また伊藤圭介資料（複写）は杉村啓治氏（当時東濃教育事務所）からいただき，アスカイ黄と収録された文献は，名古屋大学名誉教授山崎一雄博士からご教示いただいたものです．博物館データの一部は当館学芸員補木村良徳氏の協力を得ました.ここに記して深謝いたします.

引用文献

粟津秀幸（1910a），美濃国恵那郡中津付近に於ける沖積鉱床並に鉱物．地質学雑誌，**17**（201），243–257.

粟津秀幸（1910b），美濃国恵那郡中津付近に於ける沖積鉱床並に鉱物（二）．地質学雑誌，**17**（202），299–314.

粟津秀幸（1910c），美濃国恵那郡中津付近に於ける沖積鉱床並に鉱物（三）．地質学雑誌，**17**（203），340–347.

粟津秀幸（1910d），美濃国恵那郡中津付近に於ける沖積鉱床並に鉱物（四）．地質学雑誌，**17**（204），379–384.

粟津秀幸（1945），明治大正の移り変り時代の放射能鉱物研究．研究報告，**1**（7），107–114.

豊　遙秋（2005），濃飛流紋岩とその周辺の火成岩類に伴う鉱床．地団研専報，53，137–142.

第三回内国勧業博覧会事務局（1891），第三回内国勧業博覧会審査報告 第6部，87–90.

藤浪紫峰（櫻井欽一）（1933a），おにみかげ紀行（其の1），長野県西筑摩郡山口村（一）．我等の鉱物，**2**（9），304–307.

藤浪紫峰（櫻井欽一）（1933b），おにみかげ紀行（其の2），長野県西筑摩郡山口村（二）．我等の鉱物，**2**（10・11），344–347.

藤浪紫峰（櫻井欽一）（1933c），おにみかげ紀行（其の3），岐阜県恵那郡蛭川村新田．我等の鉱物，**2**（12），408–412.

藤浪紫峰（櫻井欽一）（1934a），おにみかげ紀行（其の4），岐阜県恵那郡苗木地方．我等の鉱物，**3**（1），33–37.

藤浪紫峰（櫻井欽一）（1934b），おにみかげ紀行（其の5），岐阜県恵那郡苗木地方．我等の鉱物，**3**（2），77–81.

藤浪紫峰（櫻井欽一）（1934c），おにみかげ紀行（其の6），岐阜県恵那郡苗木地方．我等の鉱物，**3**（3），123–128.

藤浪紫峰（櫻井欽一）（1934d），おにみかげ紀行（其の7），岐阜県恵那郡苗木地方．我等の鉱物，**3**（4），163–166.

藤浪紫峰（櫻井欽一）（1934e），おにみかげ紀行（其の8），岐阜県恵那郡苗木地方．我等の鉱物，**3**（5），207–210.

藤浪紫峰（櫻井欽一）（1934f），おにみかげ紀行（其の9），岐阜県恵那郡苗木地方つづき．我等の鉱物，**3**（6），242–244.

藤浪紫峰（櫻井欽一）（1934g），おにみかげ紀行（其の10），岐阜県恵那郡苗木地方．我等の鉱物，**3**（7），274–276.

福地信夫（1905），苗木石の化学成分．地質学雑誌，**12**（140），169–170.

岐阜日日新聞（1978），長島氏の遺志実現．朝刊東濃飛騨版，4月25日，12.

Hata, S. (1938), Abukumalite, a New Yttrium Mineral. *Sci. Pap. Inst. Phys. Chem. Res.*, **34**, 1018–1023.

比企　忠（1892），美濃恵那郡鉱所産ノ鉱石．地学雑誌，**4**（41），245.

比企　忠（1895），美濃恵那郡鉱産地の記．地質学雑誌，**2**（18），240–244.

蛭川村史編纂委員会（編）（1974），長島鉱物コレクション．蛭川村史，937–941.

石井研堂（1908），明治事物起原．橋南堂，307–309，441–444.

石井八萬次郎（1894），旅行家として故理学博士菊池安先生を追想す．地質学雑誌，**1**（5），248–250．＊残された記録からみると菊池は，1891年に美濃で鉱物採集しているので，この時苗木地方で未知の鉱物2点を採集した可能性が高い．

伊藤圭介(1877？)，明治十年八月廿一日開場十一月三十一日終会内国勧業博覧会場買上鉱物目録．＊本資料(名古屋東山植物園所蔵)は内国勧業博覧会審査官であった伊藤が作成したとされるもの．

糸魚川忠平（1998），わが国の放射性希元素鉱物研究の歴史．1998年度化学史研究発表会講演要旨，化学史研究，**25**（1），71–72.

木村健二郎・弘中佳夫（1936），東洋産含稀元素鉱石の化学的研究（其二十三），長野県山口村産変種ジルコン（山口石）に就いて．日本化学会誌，**57**（11），1195–1199.

木村健二郎・三宅泰雄（1932），東洋産含稀元素鉱石の化学的研究（其十九），岐阜県苗木産ウラノトール石の一変種恵那石に就いて．日本化学会誌，**53**，93–100.

黒田六郎（1985），長島弘三先生をしのぶ．ぶんせき，**2**，125–126.

ＫＭ　生（益富壽之助）（1929），奇しき縁石．趣味之鉱物，**1**，24–27.
益富壽之助（1970），続々「奇しき縁石」．地学研究，**21**（11・12），369–384.
益富壽之助（1978），中津川市苗木町「夜明けの森」に鉱物展示．地学研究，**29**（7–9），292.
松原　聰監修・宮島　宏（2001），日本の新鉱物 1934-2000．フォッサマグナミュージアム，124 p.
水野信太郎（1991），愛知県．日本窯業史総説，第５巻，（解題），柏書房，287–290．＊本書は，大日本窯業協会（編）（1916）「日本近世窯業史」の復刻（第三編陶磁器工業）.
武藤　寿（編）・田中芳男・和田維四郎閲（1879），日本金石産地．金石学附録，博物館，97.
長村新平（1978），長島コレクションのこと－長島乙吉氏寄贈鉱物標本について－．旭陵，1，岐阜県立中津高等学校，10–11．＊秋開催と記述あるが４月８日開催.
長島弘三（1953），岐阜県福岡中学鉱物クラブ．地学研究，**6**（5），239–241.
長島弘三（1970），個人略歴．地学研究，長島乙吉先生追悼特集号，**21**（11・12），303–310.
長島乙吉（1962），回顧録．薬石の研究．ミネラル綜合研究所，11–40.
長島乙吉・長島弘三（1960），日本希元素鉱物．長島乙吉先生祝賀記念事業会，436 p.
内国勧業博覧会事務局（1877？），明治十年内国勧業博覧会出品目録．内国勧業博覧会事務局，岐一ノ一－岐一ノ七.
中西準太郎（1893），飛騨鉱産地旅行記．地学雑誌，**5**（56），409–411.
中津川市鉱物資料館建設準備委員会（1994），中津川市苗木鉱物博物館（仮称）建設基本構想．18 p.
中津川市鉱物博物館（編）（1999a），鉱物に魅せられた人々，常設展示解説書．中津川市鉱物博物館，26-33.
中津川市鉱物博物館（1999b），開館までの経緯，年報第１号－平成10年４月－平成11年３月．中津川市鉱物博物館，2–17.
中津川市鉱物博物館（編）（2000），第４回企画展図録長島鉱物コレクション展－希元素鉱物への探求－．中津川市鉱物博物館，32 p.
中津川市鉱物博物館（編）（2001），中津川市鉱物博物館収蔵資料報告第１号　長島鉱物コレクション標本目録．中津川市鉱物博物館，120 p.
中津川市鉱物博物館（編）（2003），第7回企画展展示解説書　飯盛里安博士97年の生涯－放射性鉱物研究の先達－．中津川市鉱物博物館，76 p.
中津川市鉱物博物館（編）（2006），第10回企画展図録　長島鉱物コレクションと蛭川の鉱物．中津川市鉱物博物館，28 p.
中津川市教育委員会（1995），中津川フィールドミュージアム鉱物博物館（仮称）基本計画書．31 p.
農商務省（1883），［第二回］内国勧業博覧会報告書　第1–4区．農商務省博覧会掛，付録6–12.
小川琢治（1904），新鉱物苗木石に就きて．地質学雑誌，**11**（130），263–268.
荻野義雄（2004），中津川市の子ども科学教室－子ども科学館・鉱物博物館－．平成15年度地域NPOとの連携による地域学習活動活性化支援事業　岐阜県研究大会，岐阜県教育委員会，38–41.
周山　生（1894），故菊池博士発見の新鉱物，地学雑誌，**6**（65），290.
柴田秀賢（1939a），美濃国恵那郡苗木地方の花崗岩類及びペグマタイト（其の１）．地質学雑誌，**46**（552），465–480.
柴田秀賢（1939b），美濃国恵那郡苗木地方の花崗岩類及びペグマタイト（其の２）．地質学雑誌，**46**（553），503–518.
柴田秀賢（1939c），美濃国恵那郡苗木地方の花崗岩類及びペグマタイト（其の３）．地質学雑誌，**46**（554），547–559.
柴田秀賢（1939d），美濃国恵那郡苗木地方の花崗岩類及びペグマタイト（其の４）．地質学雑誌，**46**（555），583–593.
柴田雄次・木村健二郎（1921），東洋産含稀元素鉱石の化学的研究（其一），美濃苗木産苗木石フェルグソン石及びモナズ石の分析（予報）．日本化学会誌，**42**，1–16.
鈴木和博・森下泰成・梶塚　泉・仲井　豊・足立　守・柴田　賢（1994），三河－東濃地域の領家変成岩と花崗岩のCHIMEモナザイト年代．名古屋大学古川総合研究資料館報告，10，17–38.
須永友四郎（編）（1891），通俗教育全書，16，初等教育小金石学．博文館，148–150，194–195.
田賀井篤平（2001），東京大学コレクションXI和田鉱物標本．東京大学総合研究博物館，64–134.
高山尋常高等小学校（1927），岐阜県恵那郡福岡村　郷土読本．高山尋常高等小学校，180–181，121–127．＊本書には錫の発見は明治16年頃，錫鉱記念碑には同17年と異なる年が紹介されている.
山田直利（2005），濃飛流紋岩の形成史．地団研専報，53，173-183.
山田直利・赤羽久忠（2005），濃飛流紋岩を貫く花崗岩類．地団研専報，53，89–97.
山崎一雄（1982a），柴田雄次先生の業績とその解説（第一部），化学史研究，**19**，81–87.
山崎一雄（1982b），柴田雄次先生の業績とその解説（第二部），化学史研究，**20**，97–103.
和田維四郎（1878），本邦金石畧誌，日就社，46–47，56–57，66–69，75.
和田維四郎（1904），日本鉱物誌，初版．東京築地活版製造所，281 p.

参考資料

Geological Survey of Japan（1970），Introduction to Japanese Minerals. Geological Survey of Japan, 208 p.
石橋　隆（2005），長島先生ゆかりの鉱物（4）長島弘三先生研究による新鉱物．鉱物博物館友の会会報きらら，21，2.
石橋　隆（2005），長島先生ゆかりの鉱物（5）長島弘三先生により記載された新鉱物．鉱物博物館友の会会報きらら，22，2–3.
石橋　隆（2006），長島先生ゆかりの鉱物（6）長島弘三先生により記載された新鉱物・飯盛石．鉱物博物館友の会会報きらら，23，2.
石橋　隆（2006），長島先生ゆかりの鉱物（7）長島弘三先生により記載された新鉱物・水酸エレスタド石．鉱物博物館友の会会報きらら，24，2.
石橋　隆（2006），長島先生ゆかりの鉱物（8）長島弘三先生により記載された新鉱物・益富雲母．鉱物博物館友の会会報きらら，25，2.
石橋　隆（2006），長島先生ゆかりの鉱物（9）長島弘三先生により記載された新鉱物・逸見石．鉱物博物館友の会会報きらら，26，2.
石橋　隆（2007），長島先生ゆかりの鉱物（10）長島弘三先生により記載された新鉱物・磐城鉱．鉱物博物館友の会会報きらら，27，3.
石橋　隆（2007），長島先生ゆかりの鉱物（11）長島弘三先生により記載された新鉱物・欽一石．鉱物博物館友の会会報きらら，28，3.
石橋　隆（2007），長島先生ゆかりの鉱物（12）長島弘三先生により記載された新鉱物・木下石．鉱物博物館友の会会報きらら，29，2.
石橋　隆（2007），長島先生ゆかりの鉱物（13）長島弘三先生により記載された新鉱物・アンモニア白榴石．鉱物博物館友の会会報きらら，30，2.
石橋　隆（2008），長島先生ゆかりの鉱物（14）長島弘三先生により記載された新鉱物・木村石．鉱物博物館友の会会報きらら，31，2.
石橋　隆（2008），長島先生ゆかりの鉱物（15）長島弘三先生により記載された新鉱物・ストロナルシ石．鉱物博物館友の会会報きらら，32，2.
石橋　隆（2008），長島先生ゆかりの鉱物（16）長島弘三先生により記載された新鉱物・サラバウ鉱．鉱物博物館友の会会報きらら，33，2.
松原　聰（2002），日本産鉱物種第５版（2002）．鉱物情報，116 p．＊本文中の化学式は本書による.
中津川市鉱物博物館（2001）–（2007），中津川市の博物館年報，１，平成11年度（1999）～8，平成18年度（2006）．中津川市鉱物博物館.
東京国立博物館，館の歴史．東京国立博物館の歴史，http://www.tnm.go.jp/jp/history/index.html（2008年８月８日）

瑞浪市化石博物館研究報告 no. 35 (supplement) (2009)， p. 37–51, 18 figs., 1 table.
特集「博物館－現在と未来－」糸魚川淳二・柄沢宏明（編）
© 2009, Mizunami Fossil Museum

包括的展示論

糸魚川淳二

〒509-6251 瑞浪市日吉町 5125-4

Comprehensive Exhibition in Natural History Museums

Junji Itoigawa

5125-4 Hiyoshi-cho, Mizunami 509-6251, Japan

Abstract

"Comprehensive exhibition", a new image of museum exhibitions is proposed. Exhibitions in museums in Japan is mainly divided into 3 categories such as A (exhibition by "mono"-material), B (exhibition by "koto"-story) and C (comprehensive exhibition). In general, C category exhibition is seen in some advanced museums. Getting hints from exhibitions of the National Natural History Museum in France and of the Lake Biwa Museum in Shiga, Japan, concept of comprehensive exhibition is certainly invented.

It means C category exhibition which comprises comprehensively A and B category exhibitions. Characteristics of the concept are presented as key words as follows;

comprehensive, barrier free in soft and hard sides, simple, bright, various, dispersive and convergent, evolutionary, human being and nature, museum activities.

Key words: exhibition, comprehensive exhibition, natural history museum, National Natural History Museum (Paris), Lake Biwa Museum

はじめに

博物館の機能を見るとき， 中心に据えられるのは収集・保存と展示である．この２つは博物館成立の基本として初期の博物館までたどることができる．特に展示は博物館の顔といわれるほどで，一般性をもち，社会とつながる機能である．

展示を歴史的に見たとき，そのはじめは「もの」を見せることであった．いわゆる珍・奇・新・古・変の「もの」を人々の興味を呼ぶ対象として扱い，展観に供したのであった．それらは自然物・人工物にかかわらず，外国からもたらされたもの，発掘されたもの，数が少ないもの（世界にひとつしかない！），美しいものなど，まさに非日常のものが主体であった．

展示の次の段階は「もの」に「こと」を語らせることであった．いくつかの「もの」をつなぎ・意味をもたせ・物語を作ることがそれであり，単なる鑑賞や興味の対象だけであった「もの」たちがそこで本来の意味をもってくることになる．シナリオをつくり，展示の中にそれを展開させれば，人びとはその流れに沿って展示を見，理解し，ステップアップした興味をもつことになる．

現在の自然史博物館の展示の多くはこの「こと」展示の段階にあり，もちろん，そのベースとしての「もの」の面白さを見せる展示がある．多くの博物館の展示制作にかかわってきたが，これまではこの段階であることがほとんどであった．そんな中で，いくつかの博物館（後で主題として紹介するフランス国立自然史博物館（パリ），滋賀県立琵琶湖博物館など）の展示を見て，一つのヒントを得た．それがここでいう，「包括的」展示である．それは，「もの」段階，「こと」段階の展示を包括してさらにステップアップした展示を目指すものである．その骨子は糸魚川 (1999) において，「自然史博物館の系統分類あるいは進化論」として述べられているが，A（「もの」展示），B(「こと」展示)，C（「包括」展示）の３つの型としてまとめられている．

改めて考え方の整理をし，いくつかの事例を挙げて実証し，新しい博物館展示論としたい．

この問題に関して議論していただいた倉田公裕氏，佐々木朝登氏，里見親幸所長初め（株）丹青研究所の皆さんに感謝する．また，資料・写真の使用を許可された宮崎県総合博物館，瑞浪市化石博物館，滋賀県立琵琶湖博物館，富山市科学博物館，豊橋市自然史博物館にお礼申し上げます．

1．自然史系博物館の展示

現在の，博物館の展示では実物を示して，具体的に，わかりやすく，「もの」によって「こと」を示す，ことが行われている．展示に使われている材料は自然や歴史など，私たちの身近なものから地球規模のものまで，きわめて多岐にわたる．利用する側は楽しむことから始まって知ることに及ぶ．さらにいろいろ考えてみることができればいうことは無い．

糸魚川 (1999) は見る側のレベル（階層）とそれに対応した展示の類別についての考えを示している．それを少し変えて示すと，見る側のレベルとして Ⅰ．見る•楽しむ　Ⅱ．学ぶ•理解する　Ⅲ．考える，展示の類別として A．「もの」　B．「こと」　C．「包括」

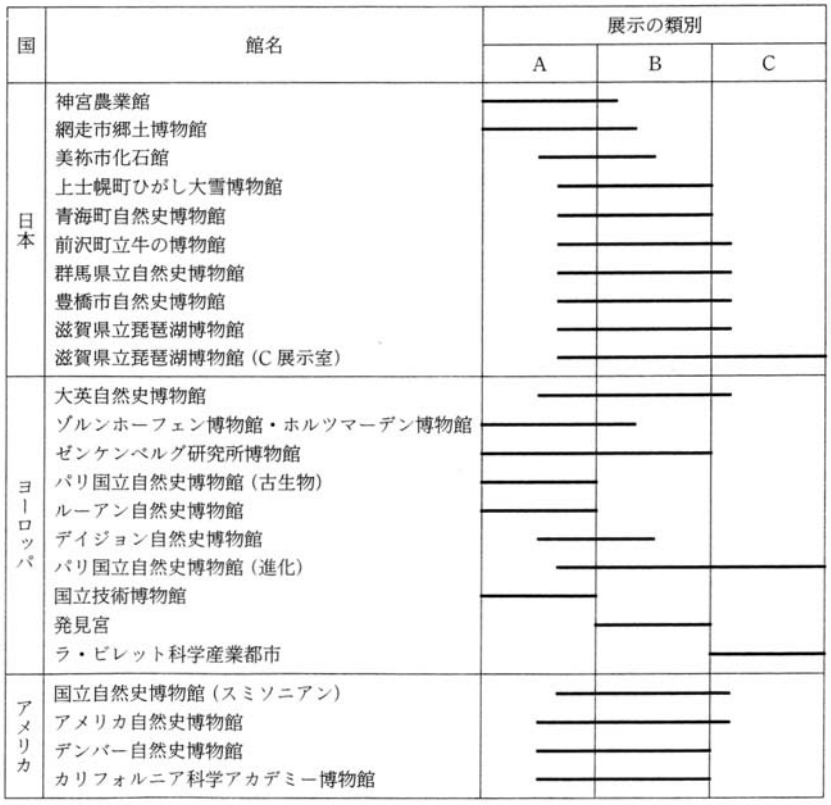


図 1．各国の自然史博物館展示の類別（糸魚川　1999）．
Fig. 1. Classification of grade of exhibitions in some museums in the world.

となる．

博物館の利用者はおよそ I が 60–70%, II が 30–20%, III が 10% の割合であろうと推定される．展示は A, B が多く，現在の段階では C は限られたいくつかの館，それも部分的に見られるだけである．C の「包括」的展示を本稿で考えてみようというのである．

自然史系博物館の展示の類別は糸魚川 (1999) に示されている（図 1）．この図からも現在の自然史系博物館において，多くの館の展示が A ～ B の類別に含まれることがわかる．それは欧米においても同様で，むしろ日本のほうがよりステップアップした B を多く含むとさえいえる．

もう少し一般化して，いくつかを例示して見る．

1）1974 ～ 1980 年代のヨーロッパの博物館（糸魚川 1979　ほか）

A（「もの」展示）の博物館

ルラルライフ博物館（イギリス　レデイング大学, 農機具）
石切り場博物館（イギリス　ウエールス，採石場利用）
クリューニュー博物館（フランス　パリ，美術）
時計博物館（スイス　ジュネーブ）
ホルツマーデン博物館（ドイツ，化石）
地質鉱物博物館（オランダ　ライデン）その他大多数

B（「こと」展示）の博物館

地質学博物館（イギリス　ロンドン）Story of the Earth の展示
スイス交通博物館（スイス　ルツエルン）通信も含めた展示

2）1980 ～ 2000 年代の日本

A の博物館

寄生虫博物館（東京　目黒）
生命の海科学館（愛知　蒲郡）
魚津埋没林博物館（富山）

現在の日本には多くない　B の要素も含むことが多い

B の博物館

中津川市鉱物博物館（岐阜）
美濃加茂市民ミュージアム（岐阜，総合）
野尻湖ナウマンゾウ博物館（長野）
JT 生命誌研究館（大阪　高槻）

現在の博物館の多くはこの類別に入る．A の要素を含み，C の類別の要素を持つものもある．

最近展示替えのあった博物館の事例を見てみる．

3）市立大町山岳博物館（長野県）

展示室は 1 階と 2 階に分かれ，1 階の第 1 展示室は「登山」，2 階の第 2 展示室は「山岳の自然」がテーマである．このほかに特別展示室と展望室，屋外に付属動植物園がある．自然の展示室は「地形・地質」と「動植物」に分かれる．基本的に B の類別に入る．それぞれはきっちりと，わかりやすく解説され，ハンズオンの要素も取り入れられている．展示情報ノート，展示かわら版，資料ボックスなどの副解説も親切な方法である．自然の内で，「地形・地質」と「動植物」が別室で展示され，両者の関係が示されていない．「登山」と「自然」の関連も，展示室を 2 つの階に分けなければならない条件の下で，困難なことではあるが，なされていない．2 つの場合とも，なんらかの関係付けがされたらより「包括的」展示になったであろう．室内展示と付属動植物園，展望室（ここからの北アルプスの展望はすばらしい，人間のつくったものは自然－実物には勝てないことを実感させられる）との間についても同様なことがいえる．

4）富山市科学博物館

以前の富山市科学文化センターで，改装•改名された館である．自然史系の展示のほかに，「宇宙へのたび」（天文分野）があり，「おもしろ実験ひろば」－体験コーナー，「トヤマ・ノーベル賞受

図 2．富山市科学博物館展示．
Fig. 2. Exhibition of the Toyama Science Museum.

賞者コーナー」がある．自然史展示は1階の導入の「富山県の自然を一望すると」に続く「とやま・時間のたび」（地質）と2階の「とやま・空間のたび」（地形・環境・動植物など）（図2）である．前者は　時間軸に従って，地質年代順に「大陸だった富山」，「日本海の誕生」，「日本列島の形成と富山」，「立山の形成」，「現在の富山へ」と展示が展開されている．35億年の生命史が描かれ，恐竜やデスモスチルスなどの化石の世界のスターが登場する．展示物が多く，やや手狭で窮屈な感じがするが，資料が多い場合にしばしば起こることである．

「空間のたび」は山から海へ，「高山と亜高山」・「山地」・「急流河川」・「丘陵と平野」・「海」と展示が続く．こちらは自然環境と動植物の関係を有機的に捉えて，それぞれの単位空間の中でまとめられていて，「包括的」な考え方に連続する可能性をもっている．それと，「丘陵と平野」では人の暮らしとの関連が示されていて，今までと違って，より拡がった新しい自然史展示の方向を示している．この展示でもアイテムが多く，手狭な感じは争えない．ジオラマの多いのも少々気になった．映像展示があまり多くないのはよい．

全体として，新しい技法も取り入れて，わかりやすく・丁寧に展示がつくられている．建物の構造上の点からして，展示室が上下に分かれるのは止むを得ないところで，時間と空間の2つの展示を関連させることが難しい．なんらかの工夫が欲しいところで，それが出来れば「包括的」展示と呼ぶ展示に近づくだろう．

5）福井市自然史博物館

1952年設立の福井市立郷土自然科学博物館にルーツのある，歴史のある館である．1992年に現在の福井市自然史博物館となり，最近展示替えを行った．福井市郊外の足羽山山上にある．豊かな自然に囲まれた場所で，自然史博物館にふさわしい立地である．

常設展示室は1階にあり，3つに分かれる．導入に相当する「足羽山自然大図鑑」は足羽山の自然－なりたち・植物・動物－を紹介する．トピックスの，「サクラをめぐる生きものたち」，「タヌキが土に還るまで」，「しゃく谷石と石棺」，「生命のゆりかご　都市の孤立森林」はここの材料を使って，身近な話題を取り上げたもので面白い．話が具体的なのはこれまでの調査・研究の成果を取り入れたもので重みがある．

「郷土の生い立ち」は地質年代順に福井の地史をたどったもので，資料を使って簡潔にまとめられている．「人々の生活と福井平野」では福井地震のことも含めて，自然と環境の間の関係を扱っている．「地質と有用鉱物」と共に現在的なテーマである．地史を扱ったループがあるがあまり面白くない．

「郷土の自然」は「町」，「村里」，「山」，「川」，「海」に分かれているが，これも自然環境を軸として区分したもので，富山市科学博物館と同じ発想で，ある意味では自然な分け方である．それぞれはジオラマと標本で成立している．わかりやすいが，もう少し標本が多くてもよかったと思われる．館の歴史から見て，十分な資料の保有があるはずである．

この館の場合も自然環境の基盤をつくる地質や地形と，そこを拠りどころとして暮らす生きものとの間がつながらないという問題がある．さらに，そのすべてに依存して人間の暮らしがあるわけで，そこまで関連付ければ「包括的」といえるだろう．

2階の白山テラスからは福井市街とそのバックに広がる平野・山々が一望できる．市立大町山岳博物館と同じ設定である．館内には多くの子供たちがノート持参で見学していて，福井市内の学校の利用が多いと思われた．

6）北九州市立自然史・歴史博物館（いのちのたび博物館）

自然史と歴史の両部門からなる，複合（総合）博物館である．1975年開館の北九州市立歴史博物館，1981年開館の北九州市立自然史博物館，1983年開館の北九州市立考古博物館が合体し，2002年11月，北九州市八幡区（新日鉄跡地）に新しくオープンした．展示面積約6000㎡の，日本での最大級・最新の展示をもった博物館で，自然史ゾーンと歴史ゾーンで構成されている．

自然史ゾーンはいくつかの要素からなる．アースモールは導入に地学現象を取り上げ，あと年代順に古生代・中生代・新生代と展示が展開される．それぞれが多くの資料を使って興味を引くが，圧巻は中生代で，多くの恐竜模型が見るものを圧倒する．中でも体長35m，推定体重42トンのセイスモサウルスは世界最大の草食恐竜でこの館の目玉となっている．

エンバイラマ館（エンバイロメント－環境とジオラマの合成語）は白亜紀ゾーンとリサーチゾーンからなり，前者は太古の北九州にタイムトラベルする設定で，約1億3000万年前の北九州の状況が再現されている．シダの密林のなかで多くの恐竜動刻が動き，鳴き声が聞こえ，迫真的である．動刻を利用した，この種のジオラマとしては最大級で，復元も最新であろう．動刻については，とくに色・鳴き声などについては疑問視する声もあったが，ここまでくればもうこだわることはないかも知れない．ただ，それ自体のもつ問題点を把握しておくことは必要であろう．ある部分にはよく考えられた，こだわりと思えるほど，細かい設定がされている．白亜紀前期にこの地域にあった湖（脇野湖）は魚をはじめ多くの淡水性化石などを産しているが，研究成果を基にして，コンピューターグラフィックで復元した湖の様子が復元されている．

リサーチゾーンには復元に使用された材料をはじめ，この館の長年の研究成果を物語る標本類が展示されている．地質学・古生物学のありようを示す展示ということが出来る．

生命の多様性館は各種の動植物の標本を使って，現在の地球上に見られる生物の多様性を展示したものである．最近問題にされている絶滅，外来種問題，ひいては自然保護を理解するのに役立つだろう．自然発見館は北九州の代表的な自然をジオラマや標本で紹介したもので，干潟，磯と浜，川，池，林，草原など多様である．バイオリウムは小水族館で，生きた動物（オオサンショウウオ，野ネズミ類，カブトムシなど）が飼育展示されている．

ポケットミュージアムはいくつかのテーマ（自然史部門で9）についてより詳しく解説したもので，2段階展示のひとつの方法である．以前の自然史博物館をつくるきっかけになったデイプロミタスがそのテーマの一つになっている．神奈川県立生命の星・地球博物館のジャンボブックと共通するアイデアの展示である．このほか，野外に自然学習園があり，生きた動植物を野外で観察できる．こども館は親子がぬいぐるみやおもちゃを使って，自然や歴史について遊び・学ぶコーナーである．

規模が大きいにもかかわらず，よくまとまっている．エンバイロマ館に見られるように，楽しく・わかりやすく・興味の持てる展示である．「わかりやすさ」は最近の展示の傾向だが，それと対極にある「考え・理解する」という点にも配慮がされている．

こうした大規模の博物館では「包括的」であることはなかなか難しい．自然史の中の各部門（地質，動物，植物など）の間の関係，室内と野外の展示の比較，時間の軸でのつなぎ，空間（地理）的な広がりの捉え方など，多くの問題が残されている．自然史分野と歴史分野の間も同じ館の，近い展示フロアにあるのだから何がしの連係を求めたい．具体的にいえば，アースモールの中生代の展示とエンバイロマ館のジオラマとの間にある同時代性を，見る人びとは理解しているだろうか．こうした包括（総合・複合など）という視点も将来の問題として考えてゆきたいものである．

建物の形は展示のシナリオに基づいて，資料の配置や展示の演出に必要な空間に配慮してつくられており，この博物館の機能を十分に発揮できるようになっている．また順路の設定がされてなく，来館者が自由に，好きなところを選んでみることができるのも現在の博物館の利用を考えたとき，自然な選択かも知れない．現在の自然史博物館展示のトップレベルにあると思われる．

2．フランス国立自然史博物館（パリ）と滋賀県立琵琶湖博物館

最初に触れたように2つの博物館が「包括的」展示論のきっかけとなった．その他の，その後に気づいた館，部分的に包括的である展示も含めて，例示し，その発想の原点を解析してみたい．

1）フランス国立自然史博物館（パリ）－進化の大ギャラリー

糸魚川(1999)にアウトラインが示されている．また丹青研究所（編)(2001）に紹介されている．それらを中心に，新しい見方を加えて検討する．

この博物館はパリの植物公園に植物園と共にある．博物館の最初は1793年にさかのぼり，いくつかの建物に分かれている．遊歩道の北側は植物園であり，南側に，東から古生物学•比較解剖学，植物学，昆虫学，鉱物学とギャラリーが並び，それぞれの分野の展示がある．その先，遊歩道の突き当たりにかっての動物学のギャラリーがあり，1889年に開館，活動していたが1965年に休館した．1991年から再開館の準備を始め，1994年6月に「進化の大ギャラリー」として新装開館した．

古生物学などの館は1994年段階ではAかBの類別に属するもので，特に古生物・比較解剖学の館は19世紀の名残をとどめた展示であった．

「進化の大ギャラリー」はパリ復興計画プロジェクト（グラン•プロジェ）によって再生した自然史展示である．このプロジェクトによってラ・ビレット，オルセー美術館などもつくられ，パリ市の博物館・美術館のイメージが変ったといわれる．この建物は大きく，地階とレベル0（グランドフロア，日本の1階)・レベル1（日本の2階）があり，そこから大きな吹き抜けになっていてまわりにバルコニー風のテラス（レベル2，3）がある．展示面積は約6000㎡，2つのフロアと2つのテラスが常設展示に当てられている．以下に展示の内容を示す．

地階	特別展用			
レベル0	海の環境	・浮遊性生物	・北極と南極	・沿岸
		・サンゴ礁	・熱水泉	・深海底
レベル1	陸の環境	・アメリカ大陸の熱帯林		
		・アフリカのサバンナ		
		・フランスの動物，植物と自然保護		
		・北極と南極	・サハラ砂漠	
レベル2	人，進化の1要素（人のかかわったこと）	・導入	・狩，漁，採集	
		・家畜化	・移住	・景観の変更
		・汚染	・より複雑になったこと	
		・絶滅危惧種と絶滅種		
		・現在の地球		
レベル3	生物の進化（地球の歴史）	・人とその考え－生物変移説から進化まで	・繁殖と遺伝	・細胞とDNA
		・遺伝と選択	・生命史の復元－古生物学，分子生物学，比較解剖学	
		・生命史のマイルストン－いくつかの生物史の例　出現，消滅，植物・動物による陸地の征服		
		・進化の新段階－進化機構解明への1ステップ		

レベル1（図3）の「アフリカのサバンナ」は進化の大行進と呼ばれ，評価が高い．フロアの中心に，ゾウ・サイ・キリンなど，数10頭の脊椎動物の剥製が並んでいる．照明が変り，朝・昼・夜の情景が現われる（図4）．

展示は資料，文章・イラスト・写真のパネル，映像，音などあらゆる手法を使って構成されている．文章の理解は語学力にもよるが，全般的にバランスの取れた構成である．「もの」資料は歴史のある館だけに豊富で，進化の大行進も収蔵庫に眠っていた剥製標本を活用しようと発想されたという．これらの展示の多くは間近から見ることが出来る．「進化の大行進」は目前で見ることによりさらに迫力が増し，逆に遠くから見て全体の雰囲気を感じることによりイメージが広がってゆくといえる．

それぞれの展示はAであったりBであったりする．なぜこれを「包括的」(C）というかというと，糸魚川（1999）は10項目を挙げている．追加して示せば

（1）考え方が明快である
（2）テーマが集中的で統一されている
（3）「自然と人のかかわり」が主テーマの1つになっている
（4）「もの」資料が豊富に使われている
（5）変化にとんだ手法が使われている
（6）ダイナミックである
（7）古典的なことから現代の最先端までを扱っている
（8）展示がオープンである
（9）わかりやすい「もの」•「こと」から高いレベルのものまで展示にグレードがある－多様な来館者への対応ができている
(10) 広いが全体を見渡せる空間である－雰囲気を感じ，自分をその中におくことができる
(11) 展示が美しい（アート的である）
(12) 以上をまとめると，包括的なセンスで展示がつくられている

あまり具体的でないので，理解しにくい面があろうかと思うが，ここから出発して論を進めたい．その他の博物館の要素として，デイスカバリールーム，オーデイトリウム，ショップなどの設備は整っている．

地球という場における，これだけ多様な環境を「自然と人」という視点にたって，うまくまとめた展示は他に知らない．既存の

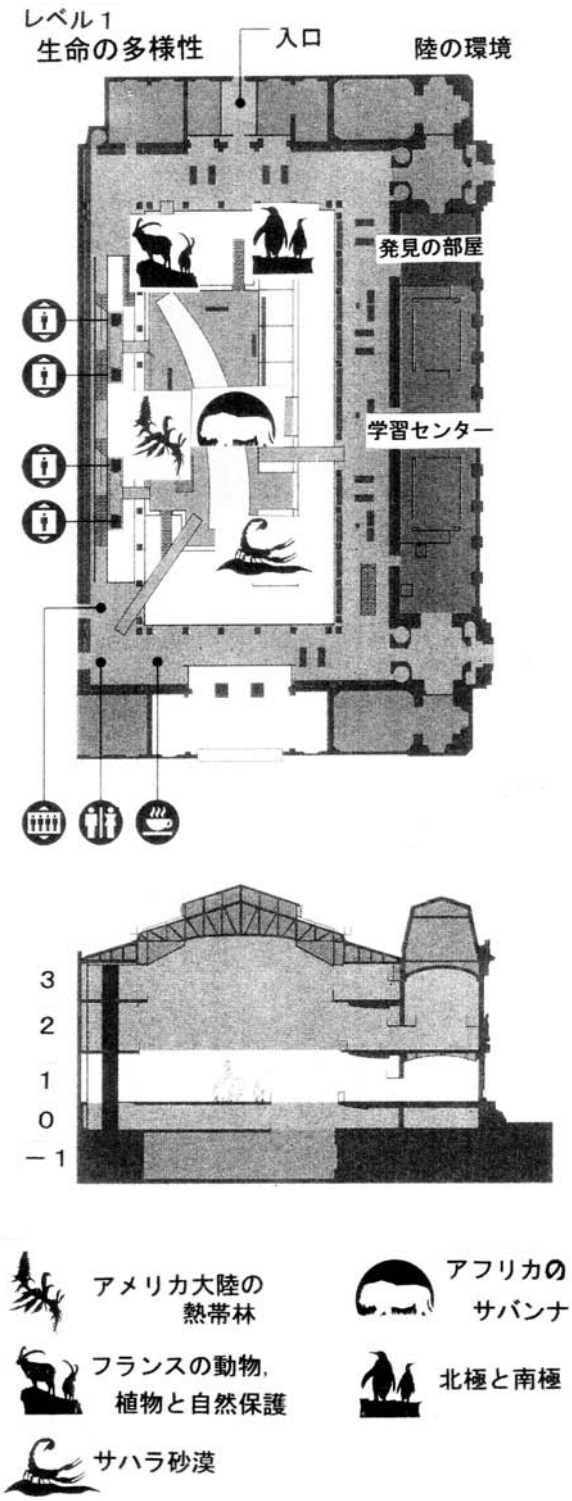


図３．フランス国立博物館プランマップ（レベル１）（同館展示案内により作成）．
Fig. 3. Plan map of Level 1 exhibition in the National Museum of Natural History of France.

建物の，広い空間をうまく使って，多くのアイテムをこなしている．展示相互は直接関連するものばかりでなく，そのつもりで見ないとなかなかわからないが，空間全体の空気から，包括的であることは読み取れる．

ただ，隣接してあり，同じ博物館の部分としてある，古生物学

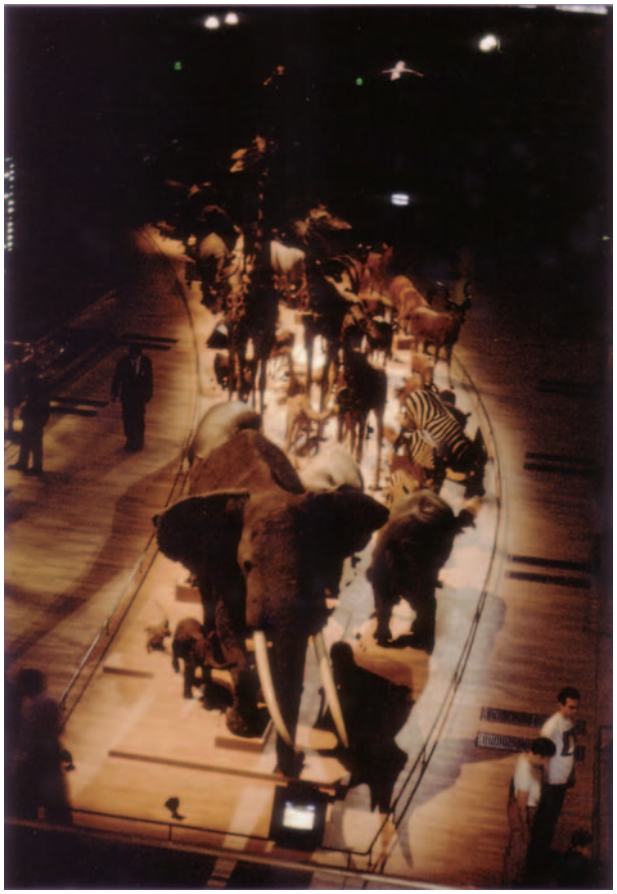


図４．フランス国立自然史博物館展示（進化の大行進）．
Fig. 4. Grande Galarie de l'Evolution (exhibition of the National Museum of Natural History of France).

などの他館との関連はどうなのだろうか．建物が別であり，展示の仕方も違うので，結びつけることはほとんど不可能であろうが，さらに大きな構想の，地球博物館という考えはありえないだろうか．エコミュージアムのコアとサテライトといった関係は成立しうると思われる．

なお，フランスの国立自然史博物館は大きな組織で，以上の館や植物園のほかに動物園・人類博物館・動物公園・海事博物館などを含み，パリ以外の国内各地に分布している．単に展示を持つ博物館だけでなく，動植物園・公園や実験研究施設をもつ研究・教育機関といえるだろう．

２）滋賀県立琵琶湖博物館

1996 年に開館した総合博物館である．琵琶湖は滋賀県の約 6 分の 1 の面積をもつ古い湖であり，滋賀県地域の生い立ちと深く関連している．そして同時に，この地域の人びとの暮らしとも切り離せない存在である．そうしたことから県立の博物館に「琵琶湖」という名前が使われ，博物館の主テーマとなっても不思議ではない．

1996 年に開館，展示面積 5790 ㎡の大規模館である．フランス国立博物館の「進化の大ギャラリー」と共に，この館の「C 展示室－湖の環境と人びとのくらし」が「包括的展示」のモデルとなった．

展示は A．琵琶湖の生い立ち，B．人と琵琶湖の歴史，C．湖の環境と人びとのくらし　からなる．全体の流れの中で，それぞれの展示室は特性をもち，お互いに連携し，うまく機能している

が，特に注目されるのがC展示室である（図5）.

図5．滋賀県立琵琶湖博物館C展示室.
Fig. 5. C exhibition room of the Lake Biwa Museum.

C展示室は「湖の環境と人びとのくらし」と淡水水族館である「淡水の生き物たち」とに分かれる．その内容は展示ガイドによれば次のようである.

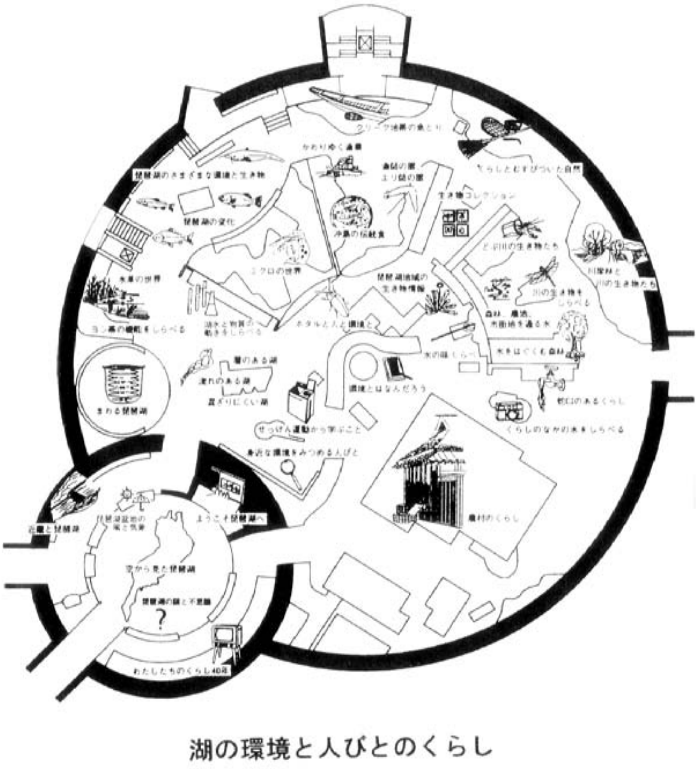


図6．滋賀県立琵琶湖博物館C展示室プランマップ（同館展示案内による）.
Fig. 6. Plan maps of C exhibition room of the Lake Biwa Museum.

「湖の環境と人びとのくらし」

＊琵琶湖盆地の自然　＊くらしの変化と琵琶湖の環境
＊農村のくらしと水　＊くらしのまわりの自然
＊湖辺のくらしと琵琶湖の自然　＊琵琶湖の環境と生き物たち
＊湖水と物質の動き　＊みつめてみよう身近な環境

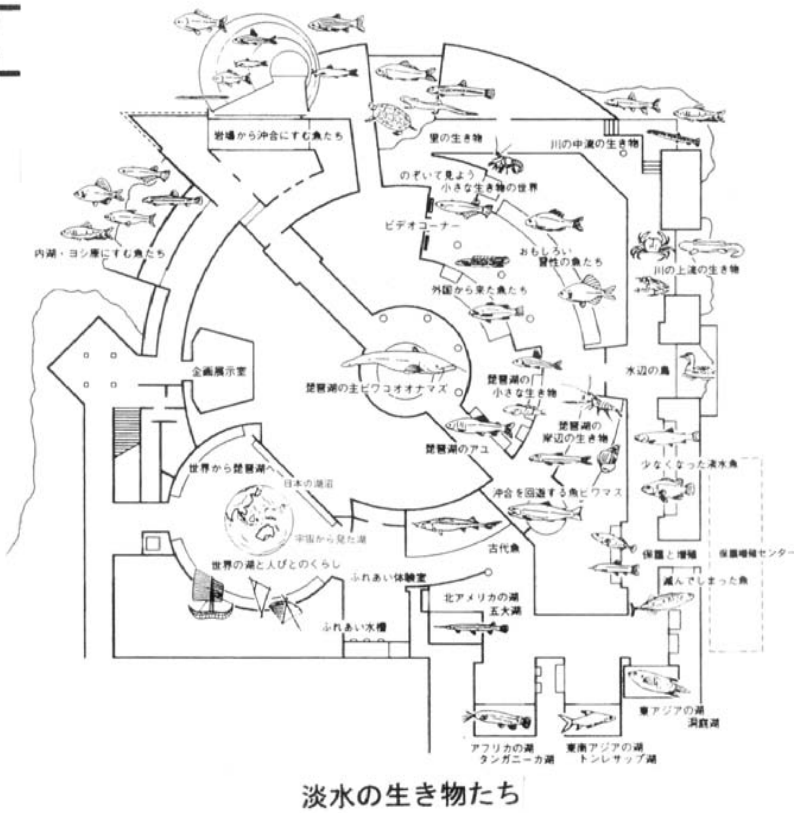
「淡水の生き物たち」

導入には床に滋賀県の空中写真がプリントされ，拡大鏡を使って場所探しができる仕掛けがつくられている．県民の皆さんは自宅探しに熱中されている．壁面を飾る40年間の生活事情を物語る展示は面白い.

C展示室の主体はさまざまなアイテムによって構成されている．琵琶湖という自然の姿，そしてその中で人びとがどのように自然と付き合い，くらしをしてきたか・しているか　である．琵琶湖というテーマが本来収斂的であることもあって，かなり広い・大きい展示室であるが，展示は散漫ではない．展示資料も実物から，ジオラマや製作物など，多様であり，それらがうまく組み合わされていて見やすい.

それぞれはさらにこまかく区分され，具体的である．展示プランマップ（図6）にそれが示されている．そして，それらがお互いに関連付けて構成され，一つ一つの展示，そしてそれらのつながりはこの論文でいうA, B　の類別に属し，さらにまとまった（包括的）な形（C）で捉えることもできる.

「淡水の生き物たち」は日本で最大規模の淡水水族館で，実際に琵琶湖を中心とした淡水生物を見ることができ，別の意味で「包括的」である．博物館が乾燥標本・液浸標本などでなく，生き物を展示するのは最近の傾向であるが，「もの」を見せることの意味が変ってきたことを示している.



この博物館の活動は多様で，見るべきものがある．そのことは後で触れることにする．

3）その他の館

（1）大英自然史博物館

イギリス・ロンドンにある，歴史ある自然史博物館である．1990年代に隣にあった地質博物館と合体し，さらに大きくなった．常に展示の更新を図っており，訪ねるたびに部分的ではあるが，新しくなっていて驚かされる．ここで紹介するのは，2004年に見た，アースギャラリー（地質部門）の展示の一つである．地質博物館時代，ここには1970年代に「Story of the Earth」という展示があり，当時斬新なものとして注目されていた．　ここでいう，Ｂの類別に入る展示である．

新しい展示は入り口からフロア2（日本で言えば3階）まで,「地球のビジョン」,「今日・明日の地球」,「地球のはじまり」,「地球の宝物（岩石・鉱物）」を経て，61「地球内部の力」と62「変化し続ける地表」にたどり着く．中二階の「地球ラボ」は展示のほか，質問・体験などができ，参加体験型の場である．

注目されるのはフロア2の，61の展示である．地震と火山の活動がテーマであるが，その原因となる地球内部の様子の説明から始まり，火山の内部構造，ポンペイの遺跡の復元と続く．地震の展示ではあの阪神大震災が取り上げられており，神戸のスーパーの店内が復元されていて，それがあっという間に震災を受けて破壊されるという設定がされている（図7）．現実に起こった事実から始まってその科学的な解説をする仕組みである．地震の少ない国であるにもかかわらず，地震体験の出来る設備があって驚いた．

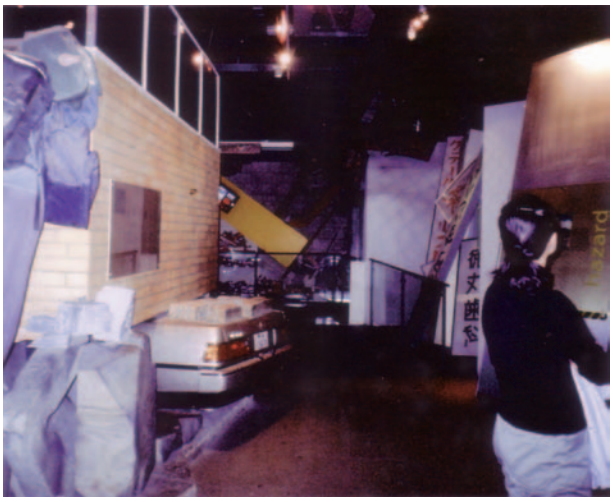


図7．大英自然史博物館震災展示．
Fig. 7. Exhibition of “Earth within” (earthquake disaster) of the British Museum of Natural History, London.

固体地球について，すべてではないがポイントをおさえて展示が構成されており，特に「地球内部の力」は斬新である．「包括的展示」への方向を示すものとして注目される．

ライフギャラリーがこの館のメインで，多様な展示が展開されている．1974年以来，何度か見学しているが，常に新しい何かがある．最近は特に，わかりやすい，一般性をもったテーマの展示が増えている．直接的ではないが,「包括的展示」を考えるとき，参考になる．

博物館活動全体についてみれば，2002年に開設された「ダーウィンセンター」は裏方公開で，長年にわたって蓄積されたコレクションとそれについての研究及び研究者を表舞台に出すものである．動物から始まり，昆虫・植物と続いて実施されている．これまでなかった，新しい試みをこの館が手がけたことは画期的である．

（2）アメリカ自然史博物館

ニューヨークにあって，ワシントンＤＣのスミソニアン協会自然史博物館（国立）と共にアメリカを代表する私立の自然史博物館である．4層からなる展示フロアがあり，人類学部門を含む自然史学全般にわたる展示がある．

ここで対象とする展示は4階の「脊椎動物の進化」である（図8）.「脊椎動物の起源」（魚，両生類，は虫類）に始まり，「竜盤目恐竜」,「鳥盤目恐竜」,「哺乳類と絶滅した仲間たち」の4部門で構成され，最後の哺乳類は「初期」と「高等」の2室に区分されている．豊富な資料が系統樹に沿って配列され，動物界の進化のたどった道筋を明らかにしている．その多様さには驚かされる．

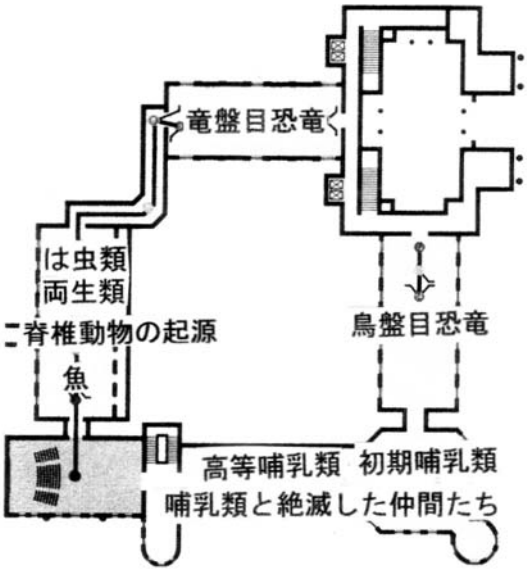


図8．アメリカ自然史博物館4階プランマップ（同館展示案内より作製）．
Fig. 8. Plan map of the exhibition of the fourth floor of the American Museum of Natural History, New York.

図9．アメリカ自然史博物館展示（*Paleoparadoxia*）．
Fig. 9. Exhibition of *Paleoparadoxia* of the American Museum of Natural History, NY.

日本のパレオパラドキシアのレプリカが展示してあって（図９），この博物館のコレクションの豊富さを物語っている．こうした展示が出来るのは世界でもそれほど多いとは思われない．ある部門に限られた，かなり高度な展示であるが，丁寧に見ればその意図するところは理解できる．一つ一つの資料はＡ類でそれぞれに面白いし，それぞれのユニットの展示はＢ類の展示であり，全体のＣ類につながる．高度な「包括的」展示である．

（３）豊橋市自然史博物館

この２つの事例は展示全体にわたるのではなく，ある展示の一部に見られるものである．

a. 中生代展示室のショー

1988 年に開館したこの博物館の展示は年代的に古生代，中生代，新生代と配列され，他に「進化」と「郷土の自然」が別のテーマとしてある．中生代展示室は大きな１室で，中央に２頭の恐竜，１頭の首長竜のレプリカを配し，周りに実物標本といくつかのジオラマを備えたものである．静的で迫力が無いとの批判を受けて手直しが行われた．

それが「恐竜たちの時代」と題し，音と光で中生代を紹介する３分 40 秒のファンタジックドラマである．30 分ごとにおこなわれるが，開始の予告があり，暗くなってスタートする．状況の説明があり，続いてスポットがあたっていくつかの骨格標本が浮かび上がる．明るくなり，次のナレーションが破滅の時期が来たことを予告し，照明が点滅し，ついで赤くなり，終焉のときを告げる．主役が面前にある恐竜たちであることを語るナレーションがあり，明るくなって終りである．ダイナミックになったことは事実で，効果が生まれたが，見学者側にその意図がよく伝わらない．暗くなって・照明が変化すること，恐竜の骨格が恐ろしく見えることなどにより泣き出す子供さんがあったりして，マイナスの面も生まれた．なお，この展示は 2008 年の展示更新により変更されて今は見ることが出来ない．

ｂ．郷土の自然展示のうちの，「汐川干潟」の展示はジオラマと標本で構成されているが，映像とライテング，音声を加えてちょっとしたドラマを演出している．干潟の一日が上映され，それの説明ナレーションとスポッテイングが同調する．時間的に短く，導線中にあるので足を止める人が多く，成功している（図 10）．

（４）宮崎県総合博物館

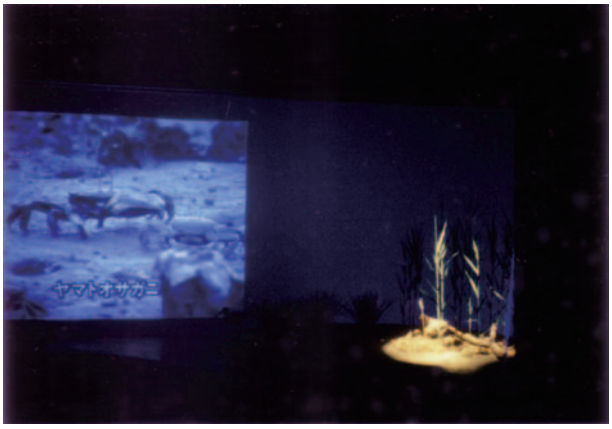


図 10．豊橋市自然史博物館　汐川干潟の展示．
Fig. 10. Exhibition of the Shiokawa tideland of the Toyohashi Museum of Natural History.

総合博物館であるが，自然と歴史（考古）の展示をうまく組み合わせて包括（総合）化している．それは１階に「照葉樹の森」の自然のジオラマ展示（図 11）があり，その中に鹿がいる．その鹿を２階の考古展示のジオラマの古代人が弓で狙うという設定

図 11．宮崎県総合博物館展示室．
Fig. 11. Exhibition room of the Miyazaki Prefectural Museum.

である．ちょっとしたショットであるが，２つの違うジャンルの展示をうまく結び付けている．

（５）ダイノソアファクトリー

岡山市の林原自然科学博物館が東京有明のパナソニックセンターにサテライトとして造ったのがダイノソアファクトリーである．2002 年９月から 2006 年５月まで期間限定で開館した．林原自然科学博物館はまだ開館していないが，準備が進んでいて，特にモンゴルでの恐竜発掘の共同調査は長い間継続している．その成果を公表したのがこのサテライト展示である．

一般的な資料の解説から始まり，現地調査の様子，得られた標本の作製，それに基づく復元，その学問的な位置づけ，総合的な結果とつながる展示は新しい視点に立ってのもので，恐竜という一つのアイテムについてのものではあるが，包括的である．来館者に対する対応もエデユケーターの起用など，いろいろな工夫がされていて高い評価を受けた．

新しい試みなので，さまざまな意見があったと思うが，展示における新しい，一つの方向を示すものとして評価される．早い時期に，更なる改良を加えて，本館の展示として戻ってくることが期待される．

この他，国立科学博物館は何年間をかけて行っていた増改築を

終えて新装開館した.当然新しい視点での展示が試みられており，興味のあるところである．何度か経目したが，大規模であり，アイテムが多くて，全体を包括的に捉えることが難しい．それぞれの展示室を扱うことはもちろん可能であるが，今回は取り上げないことにする．

3．考え方の整理と見直し

糸魚川（1999）にまとめたこと，1，2節で述べたことを参考にして，考え方を整理し，見直しをする．

1）基本的な考え

（1）包括的ということ

「包括」という用語であるが，広辞苑によれば，「一つに合わせ締めくくること．ひっくるめること.」という意味である．英語では「comprehensive」と表記できる．研究社：英和大辞典では，2．包含的な,包括的の,範囲の広い,包容力の広い　が相当する．(com) は together(共に，a. 一緒に，b．合わせて，c．互いに など)，(prehendere) は to grasp（a. つかむ，b. 把握する など）の意味で，その2つを連結すると grasp together（まとめて把握する） の意味となる．

類義語として，総合的（synthetic)，　統合的 (integrated)，複合的 (composite) などがあるが，　これらの言葉は，例えば「総合」のように，これまで博物館においてよく使用されており（例えば総合博物館，総合展示)，厳密には意味の違いがあり，混乱する恐れもあるので，新しくこの用語を使用した．

「包括」の意味は上記の言葉からもわかるように，「個」（A）をつないで「群」（B）とし，さらに多くの群をまとめて「群集」（C）とすることである．展示と直接的には関係しない事柄もあるがいくつかの事例を挙げる．

木―林―群落，種―種群―生態系，分類学―生態学（生物地理学）―進化学，化石記載学―古生態学―地球生物学，地域地質―構造地質―地史，層序学―地層学―地球史学，村・町―地域―地方，泉・支流―川―湖・海

基本的に階層性があるが，それだけでなく複数の事柄を含んで総合する（包括する）ことを意味している．

（2）展示

・包括的展示のポイント　展示全般についても共通していえる．

・資料を基本として拡げ・レベルを上げる　・レベルに対応した展示をつくる　・ファジイなセンス　・人の来る展示

・感性と感動　　包括的展示の基本として，人の感性に訴え，感動させる展示が考えられる．感性は感覚器官を通じて「もの」の実態をとらえ,それに反応する知的能力である.感覚は五感(視・聴・嗅・味・触）を五官（目・耳・鼻・舌・皮膚）で捉えることである．展示をすべて同じレベルで感じることは出来ないが，不可能と思われる感覚（例えば嗅覚や味覚）でも，それらが初めからなしと考えることは間違いである．展示は五官を使って理解できるものと考えたほうがよい．人の感性は皆それぞれ違い，したがって感動も異なる．

・感動を与えるもの　　感動は多様で，さまざまなレベルがある．以下のようなアイテムが考えられる．

・珍奇新古変　・美しい　・意外　・未知－未見　・非日常　・なつかしさ　・面白い　・楽しい　・心を打つ

・発見－なぞ解き－復元　・アイデア　・技術　・雰囲気

・しかけ　・ニュース性

・感動を生み出すもの　感動は固定したものでなく，変化する

・感動が深まる　　・個から全体へ目が向く　　・より広く－より深く－多様なものへ　　・好奇心を生む

・リピーターになる　　・ステップアップへのひきがね

（3）前提とする考え　　・「もの」の集積⇔人（学芸員－コーディネイター）⇔構想⇒展示⇔設計・施工者

（4）姿勢　　・わかりやすく・楽しい展示を目指す　　・考えてわかる展示も必要　　・21世紀にふさわしい展示　　・積極的な姿勢

（5）展示の類別　　・A（「もの」展示)，B（「こと」展示)，C（「包括」展示）の3類別

（6）見る側のレベル　　見る側の感性は一人ひとり違い，見方も変わる．　レベルによる比較をすると

Ⅰ（見る・楽しむ）	Ⅱ（学ぶ・理解する）	Ⅲ（考える）
見世物	好奇心	知的総合
もの	ものの意味	＋αと包括
面白かった	わかった	考え，次を

（7）展示の形　　包括的展示（C）はその基礎にB，Aの展示を含むが，最終的な形は多様な，相互関連のある，点・線から発展した立体的な面を持つ展示である．いくつかのパターンの例を図12に示す．

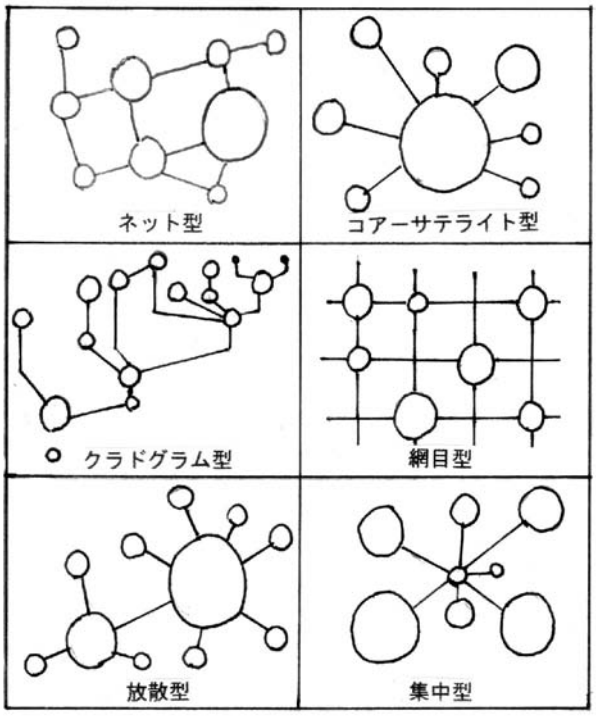


図12．包括的展示の基本的パターンの例.
Fig. 12. Example of basic pattern of the comprehensive exhibition.

（8）展示のセンス　　ある地域の自然を軸として，アイテムにウエイトをつける例を表1に示した．

（9）つくり方　　・考え方の把握・理解　・資料（もの・データなど）を使って具体的プランをつくる

・建築・展示施工者との協働

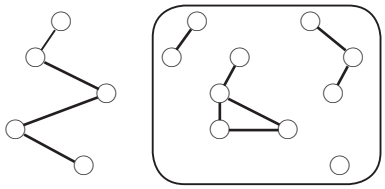
表1．自然を軸としてとらえたアイテムのウェイト．（◎ 大 ○ 中 ・ 小）．
Table 1. Weight of items of the exhibition from the standpoint of nature. (◎ large ○ medium ・ small).

	山	川	平野	海
地形	◎	○	○	・
地質	◎	―	○	・
植物	◎	・	○	・
動物	○	○	○	◎
人	―	―	◎	○
仕事	・	・	◎	◎
産物	○	・	◎	◎
行事	・	・	◎	○
昔	○	○	○	○
今	・	・	◎	○
環境	○	○	◎	○
その他	・	○	◎	○

・つくる人　中心となるリーダーを選ぶ
・学芸員　センス能力・アイデア・知識
・製作業者　センス・アイデア・技術
・一般市民の知恵を借りる
・協力して

(10) 展示の具体例

	A	B	C
	「もの」	地域の自然	地球・生物
	美しい・珍しい	地域史・地球史	進化・多様性
	（恐竜・カブトムシ）	（植生・生態系）	（自然保護・環境問題）
	「もの」	事実	総合・理論化・抽象化
	○　○　○○　○		
	（点）	（線・面）	（面・立体・ネット）
見る側	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
解説	インタープリンター	ビデオ	解説書，学芸員



2）ハード面

（1）空間設定

・一室構成　・単純な形（四角・矩形・円・楕円）　・基本的には1000 ㎡±（より広くて，2～3室構成でも可能）・天井高　4～5 m

・明るい（トップライト）　・壁で仕切らない　・ユニット展示　・交換・移動可能　・フリー動線（つなぐ・切る）　・川の流れ動線－ショッピング動線

（2）展示の構成

	A	B	C
「もの」	ハンズオン（見る）	いわゆる展示（知る）	展示のすべて（考える）
	発見	つながり	多様性・発展
パネル	イラスト・50字	100字	200字＋
ジオラマ	体感	復元・（古）環境	科学の確かさ
ビデオ	映像	ドラマ	複合「もの」との連関
パソコン	Q and A	クイズ	検索
見る時間	30分	1時間	2時間＋
見る側	一般	興味を持つ人	関心を持つ人・研究者
	地域・観光	見たくて来る	調べたくて来る
	楽しむ	学ぶ	考える
学習関連	クイズ・ゲーム	指導・ガイダンス	自立
資料関連	集める	調べる	まとめて成果が出る

3）ソフト面

（1）アイテムの選択　・公募する　選ぶ　ウェイトをつける
・なんでもよい　地域のもの　グローバルのもの

（2）具体的な例　「生命の歴史」をテーマとして

a．～古生代

テーマ　「もの」の面白さ　発見　意外性　古環境　進化
1生命の発生－原核生物・真核生物　S　2エデイアカラ動物群　S
3三葉虫　L　4バージェス・澄江動物群　M
5脊椎動物（魚～両生類～は虫類）　L　6生物の上陸　M
7海の生きもの　M　8森ができる　L

b．中生代

テーマ　恐竜　絶滅　復元　古地理　ドラマ
1恐竜王国　L　2哺乳類の出現 S　3花の咲く植物 S
4海生は虫類 M　5アンモナイト M　6二枚貝の進化 S
7空では　S　8鳥は恐竜か　M　9絶滅 L
10大陸移動　M

c．新生代

テーマ　進化　多様性　ヒト　古環境－生態系　けもの
1ウマとゾウ　M　2けものの世界（脊椎動物の多様性）　L
3ヒト　L　4氷河期　M　5日本が熱帯だったころ　S
6現代の絶滅　S　7深海の生きもの　S　8レリック　S
9生活の跡－生痕・化石林　S　10自然保護と環境問題 M
11人と自然　L　12これからの地球　M

☆通史は別に　・時代を超えてテーマをつなぐ　・アイテムを結ぶ
・ユニットの規模の大きさ：L 大，　M 中，　S 小

4）利用者対応

・バリアフリー（ハードとソフトの）を設定する　・体験型（ハンズオンを多く）・レベルに応じての対応（展示全体が3段階）
・自主性の尊重　・レベルアップをはかる　・ボランテイアとの協働
・Ⅲレベルの利用者との対応・・・協働者を作る，知識の拡散をはかる

4．事例研究

1）瑞浪市化石博物館

1974年に開館した，化石を材料とした単科の博物館である．この地域には新生代中新世の地層が発達し，保存のよい多くの化石を含んでいる．中央自動車道の建設に伴い多量の化石が産出したこと，地層・化石の研究が進んだことがきっかけになって計画され・つくられた．

展示のメインテーマは「瑞浪市を中心とした地域の，自然の変

遷」である．展示室は 336.69 ㎡，一室である．当時はこの種の自然史関連の館が多くなかった時代で，展示はもちろんのこと，研究報告の出版，標本の収蔵，各種の普及・教育活動などが注目され，多くの来館者を迎えた．

図 13．瑞浪市化石博物館展示室．
Fig. 13. Exhibition room of the Mizunami Fossil Museum.

展示は豊富な化石の材料を使い，「もの」を見せ（図 13），それから復元された古環境・古地理を解説したものである．関連していわゆる古瀬戸内地域から日本の同時代の様子，岐阜県の地質，瑞浪の考古・自然などを展示した．1980 年に一部を展示替えした．設計・施工の不備を補い，新資料を加え，ハード面の補修をしたものである．その結果は図 14 に示されるが，最初の展示と基本的に変りはない．

その後，開館 20 年を経て，ソフト・ハードの両面においての老朽化が目立ってきたので，1995 年度に増改築が計画され，展示設計が行われたが，諸般の事情により中止となった．そのプランの概要を以下に示す．

•現展示室を改装し第 1 展示室とする　•第 2 展示室（約300 ㎡）の新設　•学習広場（図14 のJ）の改造　•収蔵庫 •作業室の増築

展示プランの項目

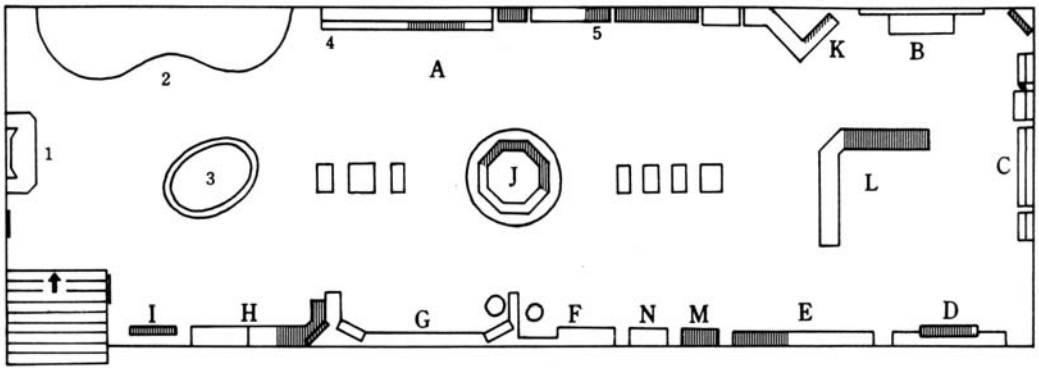
A．第 1 展示室
- 導入－瑞浪の地層と化石
- 瑞浪の化石－陸のいきもの　海のいきもの
- 瑞浪の地層－分布と対比　地層　地形・地質　古環境　古景観
- 昔の瀬戸内海－分布と対比　化石　古地理図
- その頃の日本－地層　化石　古地理図　マングローブ沼とサンゴ礁
- その後の瑞浪－沼と古木曽川　人の住む場所
- サブテーマ－研究史　資源　岐阜県の地質　おさがり物語
- その他（ロビー）－瑞浪の自然　化石を調べる　協力者一覧

B．第 2 展示室
- 導入－化石の世界
- 古生物の変遷－標準化石　先カンブリア時代　古生代　中生代　新生代
- 進化－進化と系統発生
- 古生物の生活と環境－示相化石　古生態　古環境　古気候　古生物地理　化石の産状　化石の復元
- 化石百科－化石とは　化石を含む地層　生物の分類（種）　生きている化石　珍しい化石
- 化石と私たちのくらし－資源　化石燃料　暮らしの中の化石　未来を考える
- 学習広場
- 映像
- Q and A
- 観察コーナー

このプランは主として地域の材料を使用した，以前の展示と比べ，より規模を大きくし，そこに，より一般性のある展示（時代的・地理的・学問一般　など）を作ろうとしたものである．いくつかの特徴を挙げてみると，

a．資料を増やす（瑞浪だけでなく，購入・交換なども含めて他の地域の材料），b．第 1 展示室は以前の展示の踏襲，改新が中心，c．第 2 展示室は化石・古生物学についての一般事項，d．人とのつながりがテーマの一つになり，エピソードなども含めて，少しゆとり（遊び）が見えている，e．体験型が少し導入されている　などである．

このプランは基本的に「もの」によって「こと」を語らせる展示で，3 段階で考える展示の類別では，いくつかのCの面も無くはないがBに含まれ



A　瑞浪の地層の化石，1　地質柱状模型，2　デスモスチルス類，3　地質と地形模型，4　その頃の生物（海の生物，陸の生物），5　日本のサメ・世界のサメ，B　まわりの様子（岩村と可児），C　その頃の海と陸，D　古瀬戸内海，E　新生代の日本，F　瀬戸湖と古木曽川，G　コハクと昆虫の世界，H　地のめぐみ，I　瑞浪の自然（以上メイン・テーマ）；J　学習ひろば；K　化石と現生の対応，L　岐阜県の地質と化石，M　化石のいろいろ，N　瀬戸内海（以上サブテーマ）．
縦しまは新しく作製した部分を示す．

図 14．瑞浪市化石博物館プランマップ（瑞浪市化石博物館展示替え設計グループ，1981）．
Fig. 14. Plan map of the exhibition of the Mizunami Fossil Museum.

る．最初の展示(いくつかの手直しはされたが現在も存在する)と，そのセンスにおいては変更が無い．

これを包括的なC展示にするにはどうしたらよいか，以下に検討することにする．

(1) 基本的な考え方

a．瑞浪の地層と化石が中心テーマで，資料をベースとすること(以前と変らない)

b．軸をはっきりさせる．例えば　時間(地質年代)と空間(地理的分布)，わかりやすさとむつかしさ，遊び(楽しさ)と学び(学習)，

c．アイテムを整理する・・いくつかの主題を選ぶ，ウエイトをつける

d．時間軸には生物の始まりから現在まで，空間軸には瑞浪から岐阜・日本・地球規模までを設定

e．自然と人のかかわりに重点を・・現代的な問題－資源・化石燃料・環境なども

f．あらゆる階層の利用者に対応する

g．ハードだけでなくソフトの面でもレベルに応じたバリアフリーを目指す

(2) ハード面

a．一つの空間で構成する．または重なる2つの空間

b．600 ㎡＋で，シンプル．四角－矩形，または楕円－円形

c．天井高　4 m±

d．明るく，トップライトもある

e．色は3色使い分け

f．可動展示，壁面・床．島(立体)展示など

g．多様な技法(五官で捉える)

h．自由動線から流れ動線へ

i．展示に3～5段階のウエイトをつける

(3) ソフト面

a．5つの主アイテム(1次)

・瑞浪の地層と化石　　標本中心(哺乳類　サメ　貝　カニ　その他)，地層の区分と分布

・化石のいろいろ　　「珍奇新古変」からその意味，意味すること

・時間(地質年代)と空間(日本～世界)　　恐竜　マンモスを初めなんでも　　体系的に

・古地理と古環境　　復元の面白さ　熱帯古環境　　ダイナミックに

・自然と人　　むら・まちの自然から環境・資源・エネルギーまで

b．主アイテムに関連する「ぶらさがり」を作る　　各5～10項目

c．副アイテム(2次)・3次アイテムをつくる

d．アイテム同士をつなぐ　　2次・3次には独立するものもある

e．珍奇新古変をつなぐ，つないだものをつなぐ　　ネットができる

ひとつのイメージを図15に示した．

2) 三重県立博物館

三重県立博物館は自然・人文の両部門を持つ総合博物館として1953年に開館した．自然史部門をもつ県立博物館としてもっとも早い例である．当然のことであるが，時間の経過と共にハード・ソフト共に老朽化し，新しく博物館をつくる構想が生まれた．1990年代の初めに計画が進行し，1995年にまとめられたが，時

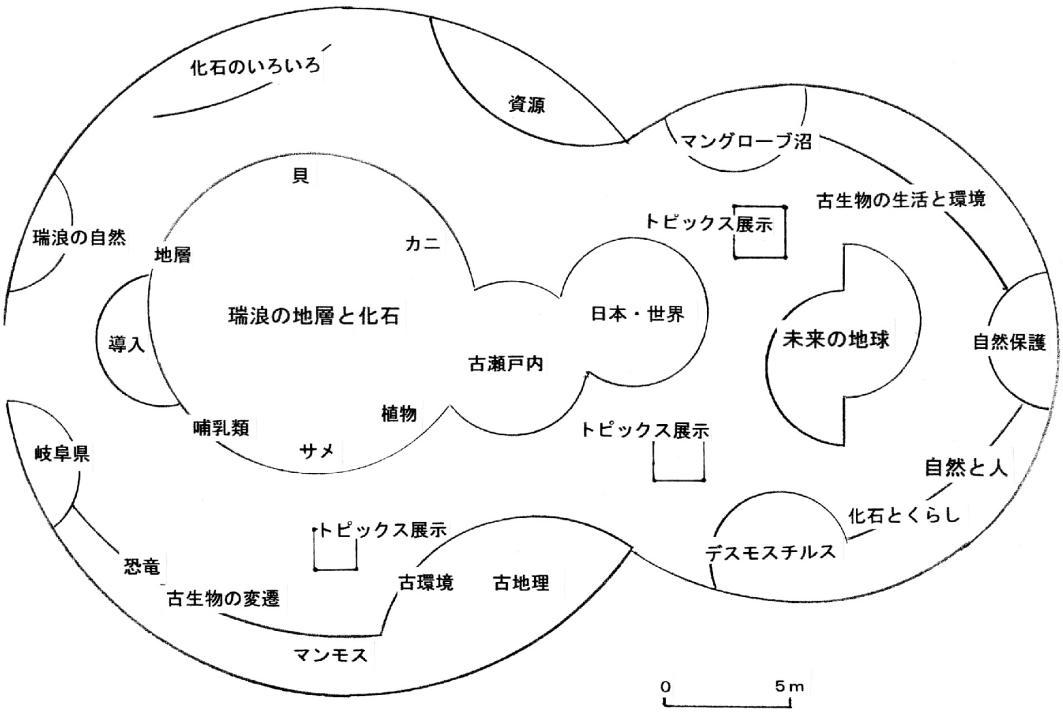


図15. 瑞浪市化石博物館新展示の基本プラン(案).
Fig. 15. Proposal of the basin plan of the new exhibition of the MIzunami Fossil Museum.

代の流れの中で計画は休止と決まった．その後，1998・1999年に新しい博物館を考える懇話会が開かれ，県内外のいろいろな階層の人びとを集め，前の構想の見直しが行われた．その後，県立博物館は休館に入り，一方，最近になって計画の見直し・新博物館建設の方向が打ち出されて作業が進んでいると聞いている．

前回の計画，懇話会の作業に関係したので，そのときの考えを紹介し，さらに進めた「包括的」展示を提示してみたい．

前回のセンター博物館構想と新しい博物館を考える懇話会の議論とを比較しながら展示を中心に要点をまとめる．

	センター博構想	懇話会
基本	人文＋自然　総合	自然系に重点
	交流と国際化	未来を模索
	県民に開かれている	面白く・刺激する
	専門化	県民参加
テーマ	自然・人間・環境	自然と人の交差点
機能	基本的な機能	創造・協働・基礎調査
	情報センター	情報収集
	総合研究	
	人材育成と交流	
展示	自然と人のかかわり	本物，楽しめる，参加型
	知的感動を与える	出前展示，知的刺激
	遊び・学び・参加体験	いきもの
	国際性と地域性－情報	一人ひとりの感性で
	地域を結ぶ	わかりやすい展示
	展示学習サロン(展示と学習の融合)	
ネットワーク	県内外，博物館，学校	情報の収集と発信
	その他	現在のネットワークの活用
	県民参加	人と人の交流
	ＮＧＯ　ボランテイア活動	民間とのネットワーク
		ボランテイア
		県民参加の保証

センター博物館構想の中での展示のかたちは次のようにまとめられていた．

自然・人間・環境の博物館　屋内展示（常設）　総合　自然と人のかかわり［水とくらし］

部門１　自然史［自然の多様性］分類

部門２　人文［人のいとなみ］分類

屋内臨時展示(企画・特別)，屋外展示(共生)

展示学習サロン（サロンミュージアム），情報センターが他にあり，総延べ面積18000㎡，展示面積3600㎡，収蔵面積4140㎡で，３層の建築である．展示室は１室で，ほぼ正方形，総合展示は自由動線，部門展示は動線をシンプル化してある．中央に総合展示の「水とくらし」があり，その両サイドに自然と人文が並び，進行方向に３展示が並列し，相互関連を意図した展示である．自然と人文はそれぞれ時系列に従って構成されており，自然は地質年代順の展示があり，現在の生物が生息場をキーとして続く．人文は旧石器時代から近・現代まで時代順である．

こうした３列展示で相互関連を探り，総合化をはかったものである．さらに学習したければ，サロンミュージアムで学習する．

この展示はA,B類別の展示である．別にあるサロンミュージアムをＣ類別としてとらえれば，全体としてはある種の「包括的」展示である．

それでは，以上のことを参考にしながら，改めて考えてみよう．三重県は日本のほぼ中央に位置し，面積5777km^2（日本で22位），人口165.7万人（23位），南北に約180kmの長い県である．自然が豊かで国立公園，国定公園がそれぞれ２つ，全県面積に占める自然公園の比率35%は全国３位である．歴史も古く，京都・大阪・名古屋をつなぐ位置にあり，伊勢神宮や熊野古道（世界遺産），東海道にそれが残っている．自然も歴史も多様である，この三重県を包括（総合）する展示というのはどのようなものであろうか．

以前の展示計画や懇談会の意見にも見られたように，「自然と歴史（人）の交わる地」が主題であり，第一に挙げられるのは自然－（人と自然）－人　というつながり・からみである．これを主軸として，３つの副軸がある．まず時間軸の区分　過去－現在，１つは伊勢（北勢と南勢）・紀伊（熊野）・志摩・伊賀という地域区分，山－丘陵・平野－海という自然（地形）区分，である．さらにこれらはいくつかの細かい要素からなる．

自然の要素：地質　岩石　地形　植物　動物　気象　地下資源

山：養老山地　鈴鹿山脈　布引山地　高見山地　紀伊山地

平野：伊勢平野　伊賀盆地

海：伊勢湾　熊野灘

川：木曾三川　鈴鹿川　安濃川　雲出川　櫛田川　宮川　熊野川

その他：志摩半島　的矢湾　英虞湾　尾鷲湾など　安乗崎　御座岬　三木崎など　答志島　菅島　自然災害

温泉：長島　湯ノ山　榊原

国立・国定公園：伊勢志摩　吉野熊野；鈴鹿　室生赤目青山

人（歴史）の要素：産業（農林　水産　工商）　衣食住　まつり　民俗　美術・工芸　歴史上の人物　今の人　東海道　熊野古道　国道１号線　高速道など　お伊勢さん　公害（四日市ぜんそくなど）　博物館　水族館など　スポーツ　芸能

主軸（自然　自然と人　人）のうち，自然と人を両側に置き，その中間に自然と人のかかわりを据える．位置はきっちり分けないで，入り混じる形にする．流れの軸はいろいろ考えられるが，地域でもよいし，自然（山－平野－海）でも可能である．アクセントをつけるため，くびれをつくってもよいし，一部が重なってつながる大小２～３室でもよいが，別室にはしない．要素は大，中，小の３つのグレードに分け，さらに細分する．結ぶ基として「川」と「道」，「海」がある．その他，結ぶ要素を選ぶ．

大小を問わず，要素は多く選び，その中からさらに選抜する．残りは展示替えのための予備とする．壁面，造作物をうまく使って変化をもたせる．展示技法はさまざまでよいが，映像主体としない．ハンズオンはうまく導入する．遊び・楽しみ・わかりやすさ　の要素は重要だが，学ぶ・理解する・考える　の要素をないがしろにしてはいけない．

利用者のためには主題をはっきりさせておくこと，流れはつくってあるが，見学者は自由に動くこと，多様なアイテムを多様

な技法で展示すること，それぞれのレベルで見てもらうこと，一度で見切れない・わからないなら，リピーターになってもらうこと　などがあるだろう．図 16 は考え方の一つの表現の例である．

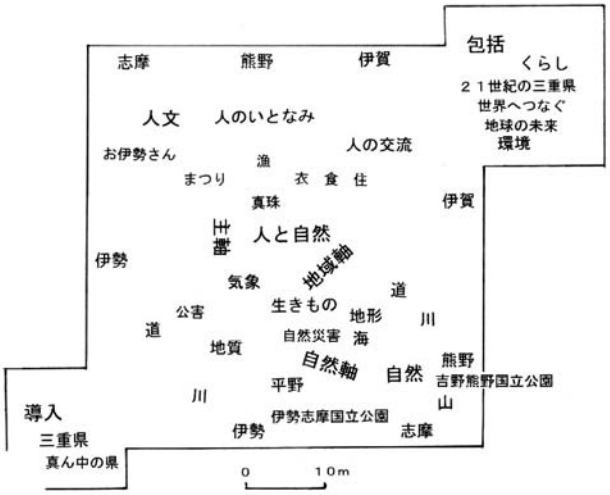


図 16．三重県立博物館展示コンセプト．
Fig. 16. Concept of the proposal of the exhibition, the Mie Prefectural Museum.

3）環境の博物館

糸魚川 (1999) には自然保護・環境問題と博物館の 1 節があり，基本的な問題を論じている．また，各地の自然史系博物館，総合博物館には環境の展示があり，地域における環境問題の博物館もいくつか誕生した．例えば，千葉県立中央博物館は「自然の中のいとなみ」,「都市化と人間」のテーマで幅広い・高い内容の展示をしている．すでに述べたように，滋賀県立琵琶湖博物館の「湖と人々のくらし」はこの問題を正面から取り上げた展示で，具体的でわかりやすく，ひとつのモデルである．兵庫県立人と自然の博物館は環境問題，自然保護，暮らしの中での人と自然などの優れた展示をもっている，北九州市立環境博物館は北九州工業地帯における市民生活の中での公害から現在の環境問題まで，参加体験を交えてうまく展示している（図 17）．自然保護に関しては各地の自然公園などのビジターセンターやネイチャーセンターにおいて扱われるようになった．

図 17．北九州市立環境博物館展示．
Fig. 17. Exhibition of the Kitakyushu Museum of Environment.

近年は環境や自然保護に関する問題が多様化し，また増えている．関連する事項も広がってきている．さまざまなレベルで，いろいろな地域・場所に環境の博物館ができても不思議ではない．研究・調査の成果を公表して一般化すること，知識の普及を図ることは重要である．問題を整理して，一つのモデルを提示してみる．

展示に関するキーワードはら次のように，重要なほうから A, B，C の 3 つのレベルに分けて考えることが出来る．

A レベル	B レベル	C レベル
環境	自然	海　大陸　島　平野　丘陵　山岳　高山　氷床（氷河）　砂漠　熱帯　温帯　寒帯　極　植生　生態系
	人	国　先進国　途上国　人口　産業
環境問題	地球規模	温暖化　オゾンホール　酸性雨
	日常	ゴミ　排水　排熱
	公害	大気汚染　水質汚染　放射性　廃棄物　鉱害　薬害　地盤沈下　伝染病　砂漠化
	災害	台風　竜巻　集中豪雨　ひでり　地震　火山爆発　土砂災害　虫害　断流
自然保護	生物	絶滅　絶滅危惧　侵略　生態系の混乱　種の保存
	人の作用	狩　飼育　栽培　略奪　遺伝子操作
その他	資源問題	化石燃料　希金属　水不足
	食糧問題	食糧不足　バイオエネルギー
	人口問題	飢餓　過密　生活環境　強制移住

このほかにもアイテムはあると思うが，環境に関する博物館の展示は

1）テーマをはっきり決める　2）範囲を決める　3）アイテムを選ぶ　4）わかりやすさ　5）具体的な　身近な材料を使う　6）問題を結び・拡げる（限定しない）　7）映像を多用する　などが重要である．

4）その他の例

総合あるいは自然史総合といった場合だけでなく，自然史－各分野との間でも可能である．特に自然史－人文，自然史－歴史－民俗などは「人と自然」を主テーマとしたときには包括的にしやすい．

美術との場合の 2 つの事例を検討して見る．2005 年 12 月に美濃加茂市民ミュージアムで開催された［栗田宏一　足元の土展」は東海地方の各地（528 ヵ所）で採取した「土」を一辺 25cm の紙の上に約 18cm の方形に広げ，縦・横各 23 列に，畳の部屋に並べた作品の展示である．自然の素材を使ったユニークな作品であるが，そこに示された色の変化は自然の多様性を反映して見ごたえがあった．別室では栗田さんの指導で，市民ら 414 人が参加して行われた講座「土のかお－色・いろいろ」で，受講者が約 1000 ヵ所から集めた土が標本瓶に入れられて展示されている．多様性，市民参加，自然の素材といった点でこの作品は包括的であるといえるが，さらに一つ，場所，地質学的なデータ（元の岩石の種類），植生のデータ（木・草など）を加えたらどうなるか．アートの作品としては不要な要素であろうが，何らかの形で提示され

れば，Ⅲクラスの見学者にも満足を与えるのではないだろうか．

半原版画館（岐阜県瑞浪市）で 2003 年 5 月に開催された「西村正幸展－イラクのこどもたちへ」はそのタイトルの示すように，コソボから始まってアフガン・イラクへと続く戦争とこどもたちをテーマとしたもので，作家が一つのコンセプトを強く打ち出した展示で，社会（歴史あるいは戦争・平和）と美術を包括した展示である．さらに，用意された 5 角形の，いくつかの小黒板を使って，誰でもメッセージをかけるという設定はある意味での参加型の展示であり，厚みを増しているといえた (図 18).

「包括」ということは博物館の他の活動，ひいては博物館全体についても考えられることである．大英自然史博物館のダーウィンセンターの設立は活動を包括的にする典型的な事例だろうし，琵琶湖博物館の活動・「えこ」ミュージアムの考え（糸魚川，2009）も同様な立場である．博物館の包括的活動については稿を改めて議論したい．

5．包括的展示――一つの博物館展示像（まとめ）

ここまで述べてきた「包括的」展示の考えをまとめると，次のようになる．

図 18．西村正幸展（半原版画館）．
Fig. 18. Exhibition of N. Nishimura Works in the Hanbara Hanga Museum.

1）「つなぐ」，「まとめる」，「包み込む」が基本理念である．
2）基本方針に基づいてつくられた設計にしたがって，優れたリーダーの元，確かな技術を駆使して展示施工をする．
3）ソフトとハードの両面でバリアフリーである．
4）「人と自然」が典型的な大テーマである．
5）多様な，多数の，レベルの違うアイテムを整理し包括する．
6）放散的であり，同時に収斂的である．進化する展示である．
7）1 つの大きくない（1000 ㎡±が理想的）空間，ときに 2 ～ 3 の複数空間（～ 3000 ㎡）でシンプルな形をとる．
8）明るい，単純な色彩構成とする．
9）多様な展示手法を使用するが，「もの」主体であり，映像は多くしない．
10）A, B, C の 3 つの類別の展示を含み，レベルに応じた対応があるので，誰でも理解でき，楽しく面白く利用して，ステップアップできる．
11）すべての人に満足を与える展示である．
12）利用者に迎合するイージーな方向だけに向かわない．基本的な本来の姿勢を崩さない．
13）総合館・郷土館など，複数の分野をもつ館に向いた展示である．
14）ある部門，2 つの部門，複数の部門とあらゆる形で構成できる．例えば，自然史系，自然史系－歴史系，美術系－自然史系などでも可能である．
15）博物館活動を包括し，博物館全体を包括的にできる．
16）他機関，他博物館との間にも包括的関係をつくりうる．「えこ」ミュージアムはその一つの例である．

引用文献

糸魚川淳二(1979)，博物館だより　ヨーロッパに原点を求めて．220 p. 共立出版．
糸魚川淳二 (1999)，新しい自然史博物館．229 p. 東大出版会．
糸魚川淳二 (2009)，自然史博物館から「エコ」ミュージアムへ．瑞浪市化石博物館研究報告，35(Suppl.), 83–92.
瑞浪市化石博物館展示替え設計グループ（1981），瑞浪市化石博物館展示替え，瑞浪市化石博物館研究報告，8，191–195.
丹青研究所（編）(2001)，Environmental Museum. 104 p. 丹青研究所．

瑞浪市化石博物館研究報告 no. 35 (supplement) (2009)， p. 53–62, 33 figs.
特集「博物館－現在と未来－」糸魚川淳二・柄沢宏明（編）
© 2009, Mizunami Fossil Museum

博物館の展示技術（2008）

里見親幸

（株）丹青研究所　〒110-0005 東京都台東区上野５－３－４植木ビル

Exhibition Technology of Museums

Chikayuki Satomi

Tansei Institute Co., Ltd., Ueki Bldg., ５－３－４ Ueno, Taito-ku Tokyo 110-0005, Japan

Abstract

This article discusses various museum exhibit techniques from twelve important viewpoints as follows: “the science and artistry of exhibits”, “exhibits showing what cannot be seen”, “exhibit narrative”, “sympathetic exhibits”, “exhibits and communication”, “hands-on exhibits”, “exhibit illumination”, “exhibits and educational programs”, “representations with mannequins”, “exhibits and humor”, “devising tour routes”, and “exhibits and video representations”. The point is how many visitors museums lead to understand their messages by arranging material objects and facts/truth accessibly and enjoyably. Exhibits based on such techniques require thorough collaboration between curators involved in academic research activities and specialists on the science and artistry of exhibits. Supporting mutually and making the most of their strengths create exhibits impressive to museum visitors.

Key words: the science and artistry of exhibits, exhibits showing what cannot be seen, exhibit narrative, sympathetic exhibits, exhibits and communication, hands-on exhibits, exhibit illumination, exhibits and educational programs, representations with mannequins, exhibits and humor, devising tour routes, exhibits and video representations

はじめに

博物館の展示方法にはさまざまな展示の技術があるが，紙数の関係からここでは重要な 12 の視点を事例をもとに紹介したい．いづれにしても博物館の展示技術は実物資料を扱い，それを補足してより分かり易く，楽しみながら，いかに多くの人々に理解して貰うかが重要である．今後もさまざまな展示手法の開発が行われると思うが，学問としての研究を司る学芸員と展示の科学性，芸術性を踏まえた展示専門家との十分なコラボレーションで実現するものである．両者が支え合い，それぞれの力を十分に発揮してはじめて観覧者に感動を与える展示を生み出すことができるのである．

１．展示の科学性と芸術性

１）展示の科学性

ミュージアムにおける展示論は大きく２つに分けられる．一つが，保存科学や照明工学，見易さや疲労度といった人間工学的視点，飽きずに最後まで引き付ける視覚心理学的視点からのアプローチといった「展示の科学性」である．保存科学としては，資料を公開すると言うことは展示物が傷むと言うことであるので，まずは展示室における温度と湿度の管理が重要である．照明に関しても赤外線や紫外線を取り除いた照明にして，展示する対象物に当てる照明の明るさにも気を付けなければならない．さらに，新しいコンクリートによる建造物はコンクリートによるアルカリガスが無くなるまでは展示物を入れないようにしなければならない．その他，車の排気ガスやさまざまな有害ガスを室内に取り込まない空間をつくり，且つまた，虫害やカビの発生を防ぐ必要がある．照明工学としては，展示物が正しい色で見やすい明るさを確保することが大切であるが，一方で展示物が光によって傷むことの条件を配慮した計画がなされることが大切である．そして，光の演出によって観覧者の心に響く計画も重要になる．人間工学の面からは，視線計画を立てて見やすい高さと位置，目の構造から視野の範囲，確認できる情報量の計画，立って移動するという展示の条件から疲労度についても十分に考慮しなければならない．見やすい姿勢，手すりや椅子など疲れない工夫を行い休憩スペースなどの適切な配置計画も大切である．そして明るいところから急に暗い空間に入ったときの見にくさを防ぐために目が順応（暗順応）する空間の計画などに配慮が必要である．視覚心理学では，展示の単調さなどで飽きが来ない工夫が大事であり，入り口から出口に至るまで単調な展示方法ではなく，リズムを付けることで，興味を持たせ最後まで引きつけて見せる工夫が必要である．そのためには，イメージの転換の為に視覚的な工夫，空間のボリュームの変化，色彩心理学による工夫，照明の明暗などの計画が大切になる．

２）展示の芸術性

もう一つが，「展示の芸術性」である．どのように美しく感動をもって見せられるか，すばらしいもの，美しいものを見たときは気高い感動が起こる．その感動によつてより深い理解へつながる．美しいと言うことは重要なエデュケーションの一つであ

図1．アメリカ自然史博物館展示.

る．ニューヨークにあるアメリカ自然史博物館のジオラマは，美しい自然の瞬間を捉えて表現しており，観覧者にとって心の安まるシーンであると共に，自然のすばらしさ大切にする心を育てるエデュケーションである（図1）．同じくアメリカ自然史博物館の美しいジオラマであるが，効果を発揮するために室内の照度を低く押さえるためガラスが鏡のように映り込みが生じることを避ける工夫が必要になる．ここでは前面に取り付けられたガラスは観覧者側に傾斜しており，ガラス面に反射する光が観覧者の目に入らないようにするテクニックを採用している（図2）．ま

図2．アメリカ自然史博物館展示.

た，アメリカのスミソニアン自然史博物館にあった「自然の輝き」（SPLENDOR OF NATURE）という．自然界の美しいものを集めた展示室では，展示技術によって，さら美しさが強調された展

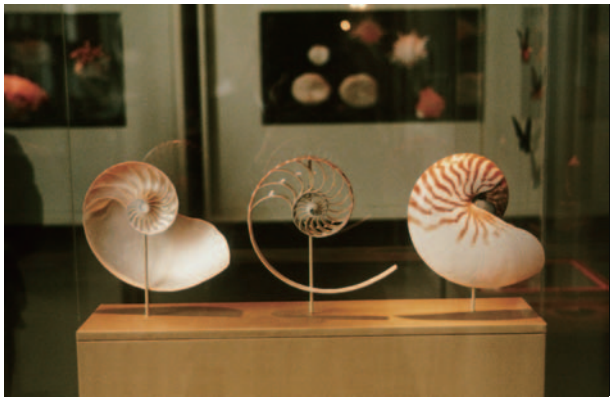


図3．スミソニアン自然史博物館展示.

示が試みられている．自然系博物館の中に感性を大切にする美術館的な展示室を設けた事例としてユニークな事例である（図3）．

神奈川県立生命の星・地球博物館と北九州市立自然史・歴史博物館の標本展示では，昆虫の展示の方法として，生きているような動きのある表現・美的な表現をしている．専門家を対象とする分類展示とは違うテーマ展示室は，いかに感性に訴え観覧者の興味を引きつけるかが重要になる（図4）．浜松市楽器博物館は，

図4．神奈川県立生命の星・地球博物館（左）と北九州市立自然史・歴史博物館（右）の「昆虫展示」.

目にも耳にも美しくを実現している事例である．展示物は，できればガラス越しでなく，オープンに見せることがその感動は伝えやすいものである．ルネッサンスの頃の楽器は，楽器本来の美しい音を出す機能の他に，目を楽しませる機能も強く要求されたと言われる．美しい調べを奏でる楽器は，機能的なフォルムとともに，美しい形にまとめられたものが多く，工芸品としても美しい図柄を施された楽器が多く見かけられる．「浜松市楽器博物館」では，その感動を伝えるために管理者の視点でなく，観覧者の視点に立つという考えで多くの資料がオープン（むき出し）である．また，その楽器で演奏された名曲を耳にすることにより，視覚と聴覚の刺激が忘れがたい印象を見る人に与えることができる（図5）．イタリア北部ピエモンテ州のバルキュウゼラは，アルプスの麓に位置しトリノの街から50㎞の距離にある．そこには「ダマヌール」と呼ばれるヨーロッパ最大のコミュニティ（44のコミュニティから成る）連合体がある．ダマヌールは，1975年の創立以来，新しい社会を提案し続け，今ではエコロジカルな社会の実現，精神性を高めて人間として成長する活動や芸術性を学ぶ活動などが行われている．特に創造性や精神性を飛躍的に加速させるのに芸術は大きな効果を果たすとして，鑑賞するだけにとど

図5．浜松市楽器博物館展示.

まらず，共に創り出す活動を重要視している．ダマヌールの施設内には，各種の芸術活動のためのアトリエの他，芸術家の教育を行うピエモンテ州公認「芸術専門学校」，芸術品の修復工房などの養成機関も設置されている．ここでは「芸術とは私たちの心の中にあるものを，外にイメージとして表現し現実に生み出す事であり，内面の美しさを外に出すことである．芸術の創作活動を通じて心の未知なる領域を開発する訓練として役立ち，まだ使っていない自らの偉大な可能性を引き出す」と主張している．総合的な芸術空間として生み出された「人類の神殿」は，ダマヌールの人々の手によって集結された芸術的表現の傑作であり，芸術活動が市民生活の日常生活に入り込んだ事例としてミュージアムの活動に参考となる（図６）．

図６．ダマヌール　人類の神殿．

２．見えないものを見せる展示

再現展示において基礎となるのは，正確な「情景シナリオ」を作ることがポイントである．そして，細部までこだわりが重要である．家の再現であれば，時代，季節，時間，建築様式，建物の周辺環境，家具調度品や小物といった空間的なもの，それから演出のために家族構成の設定などを行い，場合によっては家族の一人一人の趣味や嗜好に至るまで詳細に想定すると観覧者のイメージを刺激してイマジネーションが膨らむ．情景の再現は，今しがたまで行っていたやりかけの仕事の様子が窺える描写や，時間帯をイメージさせる差し込む日差しまで図面化する．目には見えない

図７．福井県立歴史博物館展示「昭和の暮らし－駄菓子屋」．

このような再現まで行うことで，一層リアリティがでる．再現や復元などの生態展示は，情景シナリオでの情報量が成否の分かれ目となる．福井県立歴史博物館の「昭和の暮らし」展示はその１例である（図７）．アメリカのコロラド州にある「デンバー自然史博物館」は，自然史系のジオラマを先駆的に開発しており高い評価を得ている．ジオラマの中に配置される動物の剥製の制作は，昔から，皮の中に詰め物をして形を整える方法が取られてきた．アメリカには剥製作成の方法として，開発者の名称をとった「エークレー法」という剥製制作方法がある．デンバー自然史博物館は剥製の作り方も，骨格からポーズを取らせ，それに肉付けして，その上に皮を張るという．カール・エークレーが開発した剥製技術を中心にジオラマをつくっていることで有名である．動物解剖学にそって，動物の動きに合わせた骨格・筋肉を忠実に再現して原型をまず作り，型取りして樹脂成形したものに皮をかぶせるというやり方である．特に動物の襲いかかるポーズなど瞬間的な動きを表すには，このエークレー法でなければリアリティが出せない（図８）．福岡市には「山がさ」という有名なお祭りがある．

図８．デンバー自然史博物館ジオラマ．

福岡市博物館の祭りの展示コーナーでは祭りで着る法被（はっぴ）を展示する際に，祭りの動きに合わせた形で法被を展示して祭りの雰囲気を表現している．目には見えない祭りのエネルギーが伝わってくる（図９）．北海道立北方民族博物館の導入部における環境音の展示は，北の街のイメージが描き出され感動的な気持ちにしてくれる．常設展示室の導入部において，約 15 メートルの

図９．福岡市博物館「法被の展示」．

緩やかなカーブを持つ導線上で音の演出が行われている．「北のファンタジー」というテーマから連想される「流氷」や「氷結」，「オーロラ」などの自然情景をモチーフにした演出音と，大自然の厳しさの中で生活する人々の温もりを音で表現しており，音響による五感への刺激は展示イメージの広がりを一層深める効果が大きい（図 10）．

図 10．北海道立北方民族博物館「環境音によるイメージ展示」．

3．展示の物語性

展示の物語性は重要な要素の一つである．一般論として「観念的に言えば，人間は論理を理解するようにできていない．人間は物語を理解するようにできている」（認知科学者ロジャー・C・シャンク），また，「語りによるイメージ作り，すなわち＜物語＞は思考の根本的な道具である．（中略）理性的な能力は物語に依存している．私たちの経験や知識，思考の大部分は物語という形で構成されている」（認知科学者マーク・ターナー）などといえる（Pink，2006）．

今日，インターネットの普及で事実はどこでもほとんど無料で，瞬時に手に入れることができる．誰にでも瞬時にアクセスできるようになると，一つ一つの事実の価値は低くなってしまう．そこで，それらの事実を「文脈」に取り入れ，「感情的インパクト」を相手に伝える能力が，ますます重要になってくる．そして，この「感情によって豊かになった文脈」こそ，物語を語る能力の本質なのである．このことは展示は編集の技術と言われる重要な要素である．しかしながら「物語は分析的思考に取って代わるものではない．物語は新たな将来的展望や，新しい世界をイメージさせることで，分析的思考を補完するものである（Pink，2006）．抽象的な分析は，厳しく検討されより選りすぐられた物語を通して分かりやすくなるのである．

「大阪城天守閣」は，徳川幕府が誕生する 1615 年の戦いの様子を「大阪夏の陣図屏風」として描いた屏風絵を題材にシナリオをつくり映像表現で展示している．屏風に描かれたさまざまな場面が編集されストーリーを作り，各場面がクローズアップされ展開されている．戦いの激戦の場面，勝者の誇らしげな様子，我先に逃げまどう敗残兵，豊臣軍の女性に乱暴する勝者の兵，戦火を必死で逃げる市民達の有様，待ち伏せて身ぐるみを剥ぎ取る盗賊に手を合わせ命乞いする女性など，戦いは常に弱い者が犠牲になる様子がナレーションで解説されている．屏風には多くの場面が色々な思いをこめて描かれているが，それを短時間で理解することは難しい．屏風の全体像と各場面をマルチハイビジョンによって鮮明にズームアップして見せる「絵解き」の手法は，物語展示として大変分かり易く，説得力があり，観覧者の心に印象深く残る展示である（図 11）．

図 11．大阪城天守閣博物館「大阪夏の陣図屏風映像展示」．

2007 年 4 月に完成した東京国立科学博物館の「日本館」では，当初から物語性（ストーリー性）を重視することに定め，研究官自ら「ストーリーブック」を作成することからスタートした．そして，展示に参加した展示プランナー，展示デザイナー，展示制

図 12．東京国立科学博物館日本館ストーリーブック．

作者がストーリーの実現に向かって一つになれたことが，新しい展示実現の重要なプロセスとして評価できる．このストーリーブックは，現在も教育ボランティアの方々の研修に使われている．また，見逃せないのは，小さな展示ケースの中に観覧者の身近な生活との繋がりを模型で表現した「コラム展示」を随所に配置したことである．例えば「沖縄の昆布料理」と書かれたコラム展示では，器に昆布料理が一点置かれてある．文章には，北海道に分布する昆布が古くから京料理や沖縄料理に使われているのはなぜだろう．室町時代の交易や江戸時代の北前船で広まった食文化によるというコメントが付いている．自然科学を扱う博物館の主流ストーリーではないが，博物館を身近に感じさせるソフトとして評価したい（図 12）．

4．共感する展示

「滋賀県立琵琶湖博物館」では，歴史展示室の入り口に設置された映像において，世界の考古学者から環境に対するメッセージが寄せられている．考古学者は人類の誕生から今日までの人と環境を見つめてきており，環境の変化について具体的に語りかけ，警鐘を鳴らす言葉に説得力がある．環境展示を人文科学の視点から捉える展示ソフトウエアも重要である．また，琵琶湖は日本で多くの小説や歌に取り上げられている．解説文として，多くの文学に表現された琵琶湖の歌や洗練された「ことば」を引用することで，伝えたい事象を的確にしかも情感が膨らむことによりイメージの広がりに効果を発揮している（図 13）．「市川市東山魁夷記念館」は，画家の思いと共感する解説が書かれてある．通常の美術館の場合，作品と作品名・制作年が記された「ラベル」のみであるが，ここでは作者の思いや視点を誘導する鑑賞のための言葉が添えられている．「夕明り」と付けられた作品には，「夕べの薄ら明かりに浮かびあがる白馬．静かで，穏やかな風景です．この一瞬ができることならばいつまでも続いてほしいと思うようなときって，皆さんにも経験がありませんか？」という解説があり，観覧者の心象風景に訴えかけ，絵画と一体になれる展示になっている（図 14）．

図 13．滋賀県立琵琶湖博物館展示．

図 14．市川市東山魁夷記念館．

5．展示とコミュニケーション

カナダのサドバリーにサイエンスノースという博物館がある．ここでは大変ユニークな方法で，研究者，ボランティアが展示室で観客とコミニケーションを行っている．展示室は多くのボランティアがインストラクターを務めている．そしてボランティア養成のプログラムも充実しており，多くのボランティアが登録している．展示室はボランティアとのコミュニケーションを前提にした構成となっている．展示コーナーの構成は，ショッピングセンターの店のように，展示物はカウンターの上に置かれ，自由に触れることができる．内側に立つボランティアは店員のように展示物を説明したりする．さらに詳しく知りたい場合はカウンターの囲いの内側に入って，実演スペースとして使える中央部分において，ボランティアの人や研究者とともに，さらに深く知ることができる．各展示コーナーのいくつかには，研究者と観客がコミュニケーションできるように，研究室のサテライトオフィスが設けられ，気軽に展示質問に対応してくれるのも他にない特色である

図 15．サイエンスノース（カナダ）．

図 16．ミネソタ科学博物館展示．

(図15).「博物館ファンは顔の見える博物館職員で作られていく」という考えは，重要な指摘であると思う．

ミネソタ科学博物館では，「博物館に参加しよう」ということで，コレクターズ・コーナーを設けている．「何か面白いものを見つけよう」と呼びかけ，コレクションをする活動を通じて，自然への観察へつなげる試みが行われている．博物館のコレクション・コーナーに各自の登録口座をつくり，自然からの収集物を持参するたびにポイントが記録され，獲得ポイントによって，コレクションの交換や追加ができるようなゲーム感覚の楽しみも取り入れている．こうした試みは，1970年代より「博物館は，それぞれの価値観に基ずく場である」という理念のもとに展開されてきた．コレクションのモノ自体がもつ価値ではなく，コレクションを通して思い出を蓄積する場として，また，博物館が利用者の文化を伝える場として機能している（図16).

6．参加型展示

静岡市登呂博物館，ここでは常設展示の中に参加体験の方法をうまく取り上げている．展示室は壁面全体に弥生時代の村が描かれており，それを背景にしてステージ（舞台）に道具が置かれ，観覧者はそこの道具を使って弥生時代の生活の一端を体験することができる．観覧者が演じるドラマのスタートは，まず，弥生時代の衣服の貫頭衣を着ることから始まる．そして，ここでは体験作業を通して，道具の機能や意味を理解するようになっている．メカニックな装置に頼りがちなコミュニケーションを5名の体験指導員が体験者に助言や指導を行っており，土器づくりや田植え，稲刈りなど体験指導員の適切な問いかけから体験意欲を高め，問題を発見し学習に組み立てていくといった大切な役割を果たしている．体験展示室で行われる本物でない田植えや稲刈り，土器づくりに抵抗がある事も確かであるが，指導員とのコミュニケーションをもとに面白がることを出発点にして，疑似体験から博物館が屋外で季節毎に田植えや稲刈りを開催している本物のプログラムに繋げることで，より広がりを持った博物館の楽しみになっている（図17).

図17．静岡市登呂博物館展示.

7．展示照明

ライティングの方法は，展示手法の中でも筆頭にあげてもいい重要なことである．まず，光の演出性として，秋田県立農業科学館は，四季の移り変わりによる光の変化を，白っぽい光を出す照明，赤っぽい光を出す照明と言った色温度の違う照明を使い分け，色の発色をコントロールして季節感を演出している．また，間接光，補助光，残像や影などを巧みな演出で雰囲気を創出している．例えば，春の緑のみずみずしい輝きを引き出すためには，白っぽい光の色温度が5千ケルビンのライトを使用．秋の紅葉の鮮やかさを発揮させるためには赤っぽい光の3千ケルビンのライトを使い効果を上げている（図18)．また，盆踊りや秋祭りの人物へのライティングは影をうまく作り出し，動きや情感を表現している．さらに，吊るされた布の背景に風を送ることによって，影が動き一層情感が表現されてくる．光による対象のシンボライズ化は，心に余韻を残す効果を果たす（図19).

図18．秋田県立農業科学館展示.

図19．秋田県立農業科学館展示の照明.

厳しい条件の下に保存科学的な配慮した事例としては，2005年秋，東京で行われたレオナルド・ダ・ビンチ展が挙げられる．重要な展示資料を公開する上で注意すべき点は，盗難や破損の防止は勿論のこと，資料を劣化させないようにいかに見せるかである．保存と公開は二律背反する行為であり，特にレオナルド・ダ・ビンチ展のような貴重な資料の展示においては保存科学上の配慮が最も求められる．実物資料を納める展示ケースは温度・湿度を一定に保つための気密度の高いケースが設計された．そしてケースのウインドウ部分は，同じ厚みのガラスの200倍の堅さを持つポリカーボネート板が使用され，不測の衝撃に対応できる素材が選ばれている．また，室内を暗くする際に生じる鏡面現象からくるグレア（反射光のまぶしさ）を避けるために，ポリカーボネート板に低反射フイルムを蒸着して反射光による見づらさを防いで

いる．照明計画では，色の見え方の工夫，明るさから生じる劣化への対策，長時間照明による資料の劣化対策が講じられた．そして選ばれた照明ランプは，紫外線や赤外線などが少なく，低照度でもモノの持つ色彩を損なわない発色を可能とする白色ＬＥＤランプが採用された．資料への１日あたりの照明条件は，明るさは上限の 30 ルックスの場合で 90 分間しか見せてはいけないという厳しい条件だった．この条件を基本として一般公開するために実施された計画の概要は，まず，明るさを 10 ルックスに設定して 60 秒間の点灯時間，その間観覧に供し，60 秒間消灯するという繰り返しを行なう方法が採用され，全部で 18 台あるケースを奇数・偶数に分けてコンピュータ制御で半分づつ点灯して見せるという方法により１日の鑑賞時間である 10 時間を可能にした照明方法である（図 20）．

図 20．モリアーツセンター　レオナルド・ダ・ビンチ展．

次に演出性と保存科学的な配慮をしつつ絵画の魅力を最大限引き出そうと工夫した展示の事例としては 2006 年，東京国立博物館において行われた「伊藤若冲と江戸絵画」特別展が挙げられる．日本の作品のコレクターであるアメリカ・カリフォルニアのジョー・プライスご夫妻によるプライスコレクション約 600 点の絵画作品から選んだ 109 点が展示公開され，約 31 万 8 千人の観覧者があった．特筆されることはガラスケースを用いず，光の効果に工夫を凝らした展示室が一室設けられた点である．「江戸時代の絵画鑑賞にガラスケースは無かった」という．プライス氏の鑑賞に対する考えによって，作品をガラス越しでなく直接見ることができるとともに，様々なライティングが可能となり光によって表情が変化してみえる多様な楽しみが実現された．プライス氏の絵画の楽しみ方を取り入れた展示は，短期の特別展示で限られた数の展示という条件下であったが，古い文化財を展示する際，危険をともなう展示であることも忘れてはならない．賛否両論のあった展示方法ではある（図 21）．

図 21．東京国立博物館特別展「伊藤若冲と江戸絵画」．

神奈川県生命の星・地球博物館の化石の展示では，照明のあて方で長い時間の中で石になった無機的な古生物の化石も生き生きとよみがえっている（図 22 －左）．パリ自然史博物館では，中央ホールに「サバンナの行進」という展示がある．サバンナで生きる数多くの「ほ乳動物」が行進している展示であり，朝の光，昼・夜と照明が変化してドラマチックな演出が剥製動物に命を吹き込んでいる（図 22 －右）．アメリカ自然史博物館のアフリカ象の展示では，薄暗い中に浮かび上がるアフリカ象は躍動感があり，今にも動き出しそうな臨場感のある展示になっている（図 23）．

図 22．左．神奈川県立生命の星・地球博物館　右．パリ自然史博物館．

図 23．アメリカ自然史博物館展示．

ポルトガルにあるグランキャン美術館には，日本が鎖国時代に交流のあったポルトガルだけに多くの浮世絵が渡っている．ここでは浮世絵の部分だけに光が当たるようにマスキングした照明で浮世絵だけが見事に浮かび上がっている（図 24）．福井県立歴史博物館では 15・６世紀に描かれた絵（絵馬）をローソクの明かりの中で見せる展示を行い，当時の人々が鑑賞した光で見せる方法を採用している（図 25）．

アメリカのクリーブランド美術館では，小さなハーフミラーを

図 24．グランキャン美術館（ポルトガル）．

図 25．福井県立歴史博物館蝋燭による照明．

図 26．クリーブランド美術館の照明．

展示台に取り付けリユトンに彫られた絵に反射光を当ててくっきりと画像を浮かび上がらせている（図 26）．

8．展示と教育プログラム

パナソニックデジタルネットワークミュージアム「林原自然科学博物館ダイノソアファクトリー」は，林原自然科学博物館と松下電器産業の二つの企業が，それぞれの専門分野を活かして共同開発した恐竜専門の博物館で，2002（平成 14）年 9 月に誕生した．現在は役割を終えて廃館となったが，特徴ある教育プログラムを行っていた．古生物学者の研究活動を肌で感じられる工夫が随所に考えられ，研究者の好奇心や感動，化石技術者の標本完成の喜びなどに光を当て，その思いが伝わるよう構成されていた．現在も進行中の研究を研究者の一人称で語り，「ここはかって川で，恐竜は川を流されてきたらしい」とか，研究者自身が現場を分析する声が流れる．このように研究者がどのように考察し，推論するのかといった思考の過程が紹介され，観覧者を興味深く引きつけ説得力のある展示が実現していた．携帯情報端末（ＰＤＡ）を用いて行われる展示解説はユニークで，入り口で手渡される手帳サイズのＰＤＡ装置を首から下げて，展示室の各コーナーに置かれたポール（コンピュータ端末）に近づけると画面とイヤホーンから研究者自身が語る解説や関連画像などのデータが見聞きできる．ハードとしてのＰＤＡ装置は多くで利用されているが，大事なことはそこに入れるソフトであることを十分に理解しておく必要がある．この事例では，恐竜を題材にしてそれを研究する「人間」と，その活動の過程に光を当て，研究者がどこに着目し，どんな仮説を立て，実証していくのか，ＰＤＡという新しい装置が有効な力を発揮している．そして，単なる解説ではなく視点や疑問点を誘導し，興味を喚起して掘り下げていくコミュニケーションツールとしてソフト開発を行った点において，教育的効果の高い展示を生み出している．また，この装置はデータを見学者個人用のホームページに保存，パスワードを使って後日アクセスし，復習する事もできるようになっている．さらに博物館としては，来館者の展示場での滞在時間や見学ルートなどのデータを知ることができて，展示評価の視点から今後のマーケティング，展示改善に役立てることができると考える（図 27）．

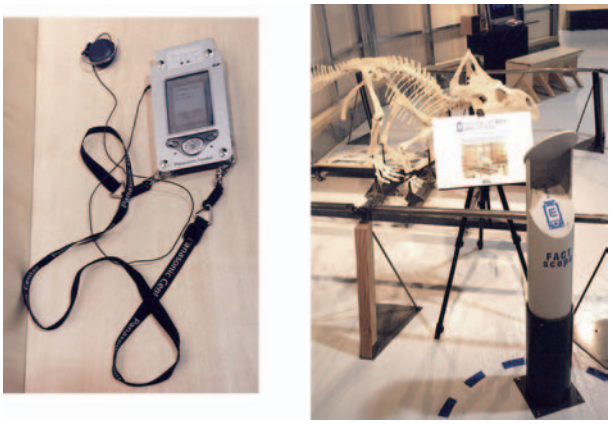


図 27．林原自然科学博物館ダイノソアファクトリー携帯情報端末を使った展示解説システム．

9．人形表現

船の科学館にある「羊蹄丸パビリオン」という展示室は，青森と函館を結んでいた青函連絡船に使われていた船の中を改造して展示室にしている．ここでの人形の表現は子どもが怖がらないように幾分小さめに作り，顔は多少デフォルメしてユーモラスに表現したり，それぞれの情景の会話も笑いや懐かしさを誘いイメージを膨らませてくれような展示を行っている．連絡船の待合室で酔いつぶれたお客の様子が笑いを誘い，展示室では観覧者同士の

図 28．船の科学館展示「羊蹄丸パビリオン」.

図 29．フォード博物館展示.

図 30．福岡市博物館展示.

多くの会話が聞こえてくるように構成してある（図 28）．アメリカのフォード社が設置したフォード博物館はフォード社が製造した古い時代の車が数多く展示されている．人形を乗せた車の展示であるが，展示物の車の方に注目して貰うために人形の表現は着色しない白い像で表現して展示の邪魔にならない配慮をしている（図 29）．福岡市博物館では，人形を作らず想像させ，見せたい着物や使われた道具を宙に浮いた状態にして，展示資料だけに集中するような表現をしている（図 30）.

10．展示とユーモア

ユーモアは人間特有の洗練された知能の表れであり，コンピュータで真似ることはできないものである．「滋賀県立琵琶湖博物館」の自然展示室では，手にとって触れるキットを用意し，「なめてもかまいません．ただしあなたの前に誰かがなめたかもしれませんご注意ください」とか，研究室の再現展示では，「骨格標本制作中ぜったい開けるな」と書かれたポリバケツがあり，禁止されると開けて見たくなる心理を突いた展示を展開して思わず笑える展示になってる（図 31）．　指宿考古博物館では時代の違う縄文人と弥生人の代表が，現代のリビングルームのテーブルをはさみ，木の実や海の幸，赤米など，それぞれの時代のグルメを自慢しあうユニークなコーナーも用意されて当時の食事の様子を分かりやすく，楽しい表現で展示している（図 32）.

図 31．滋賀県立琵琶湖博物館展示.

図 32．指宿考古博物館展示.

11．展示見学コースの工夫

観覧者のニーズを調査し，それに応じた見学コースが選べるように，いくつかのコースを用意することは一度見たら終わりではなく再来を促し，常に新しい発見ができる展示を提供できることになる．展示内容に奥行きと幅を持たせるためには，展示の見方が一つではなくテーマ別コース，ワークシートやＰＤＡ装置などの教育プログラムによるコース，ミュージアムツアーなどの人によるインタープリテーションコース，対象者別（子どもやお年寄り，外国人，障害者），などさまざまなコースを各館の内容に即した形で考えることが展示の計画を考えるときに重要である．

ここでは時間のない急いでいる人の為の「概要コース」，一般的な見学コースとしての「通常コース」，何回でも訪れじっくりと調べものができる「詳細コース」などの基礎的なスタイルとし

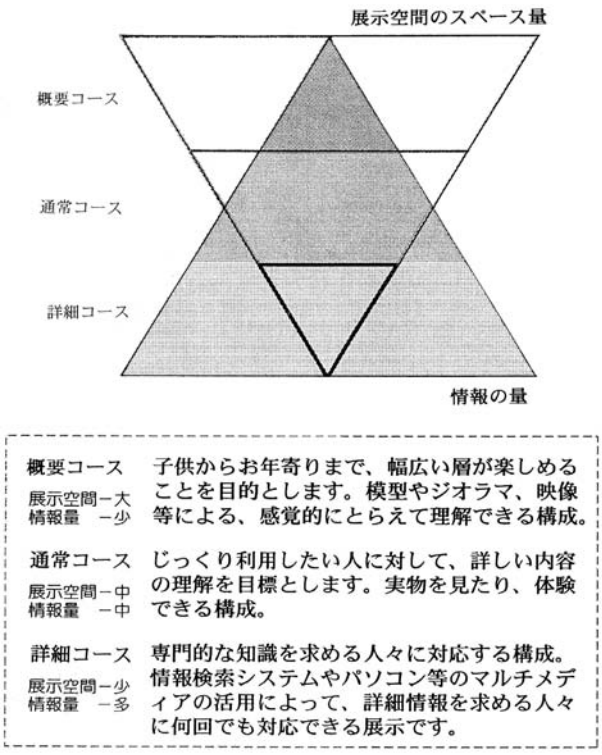


図 33. 展示見学の 3 つのコース.

て 3 つの考えを提示する（図 33).

「概要コース」は，視覚情報を中心に子どもからお年寄りまで，幅広い層が楽しめるように模型やジオラマ，映像などで構成し，感覚的にとらえて理解できる構成．また，時間のない観光客にも短時間で概要が理解できるコースである．

「通常コース」は，体験情報を中心に実物を見たり，体験する構成にして,比較的に時間の余裕のある人を対象に構成するコース．

「詳細コース」は，詳細情報を提供し，じつくり観察し専門的な情報を求める人々に対応する展示を構成し，情報検索システム，パソコンなどのマルチメディアの活用によって，視覚情報展示や体験情報展示で知的な触発がなされて，何回でも対応できる展示を行うもので，場合によっては展示室において学芸員や専門家とのコミニュケーションの機会まで用意されるコースである．

大阪歴史博物館は，このような考えに近い構成がなされている事例である．観覧ルートは，再現された模型やパノラマ，立版古の手法を用いた積層ジオラマなどを見ながら，大阪の歴史を約 1 時間で体感する忙しい人のために用意された「ハイライトコース」と,実物資料やグラフィックなどじっくり見て回る「全周コース」を設定している．

12. 展示と映像

映像の展示室における活用はさまざまな形があり多様なタイプに分類できる．ここでは詳述は避けるが，基本的に映像の技術は今日まで，2 つの目的と分野で発展してきた．一つが「人から人へ向けられる情報伝達」を目的とした報道，広報，教育，娯楽，コミュニケーションなど，社会的メディアから芸術作品にいたる分野と「目の延長の技術」として，肉眼ではとらえることの出来ない現象を視覚化する分野，衛星搭載カメラのセンサーによる地球資源の調査であるとか，顕微鏡による微生物の生態観察や高速度映画による運動の解析など，見えないものを可視化して実物の代わりに扱う方法である（牛窪，1996)．この二つの分野で，博物館映像教育に大きな役割を果たしてきている．博物館における映像活用のためには 2 つの基本的特性について押さえておくことが肝要である．

1)「忠実な描写力」という事実を脚色しない客観的で厳しく科学的な側面.

2)「時間と空間を自在に操る」という演出を加えた創造的な表現手法という側面.

この二つの特性を目的に応じて使い分け，あるいは組み合わせることによって，効果的な展示手法を作り出すことができる．

たくさんの事例がある中で新しい映像技術の成果として注目されるのは,兵庫県立歴史博物館が採用した映像技術が挙げられる．ここではお仕着せのソフトではなく観覧対象者に応じた展開に変化できるシステムが考えられている．「バーチャル歴史工房」と呼ぶ映像室において，コンピュータ・グラフィックスによる大スクリーン上に，兵庫県の歴史に関する多くの素材を用意し自由に選択し物語りが作れる映像であり，決められたストーリーに従って進めることも，説明者の専門領域にもとづいたり，来館者の反応を見ながら横道に逸れることもできて，歴史の面白さを来館者と共有できる新しいシステムである．

引用文献

Pink，D.（大前研一訳）(2006)，ハイコンセプト．三笠書房.

牛窪　正(1996),展示と映像技術．展示学事典,p. 104–105. ぎょうせい.

参考文献

里見親幸　週間教育資料「ミュージアムナウ」連載記事　教育公論社：

浜松市楽器博物館．週刊教育資料「ミュージアム・ナウ」199512.

アートセンター－人類の神殿．週間教育資料「ミュージアム・ナウ」200612.

見えないものを見せる展示．週刊教育資料「ミュージアム・ナウ」199511.

ジオラマ展示の舞台裏．週刊教育資料「ミュージアム・ナウ」199411.

世界にも例のない北の文化紹介．週刊教育資料「ミュージアム・ナウ」199104.

大阪城天守閣．週間教育資料「ミュージアム・ナウ」199708.

国立科学博物館「日本館」．週間教育資料「ミュージアム・ナウ」200711.

滋賀県立琵琶湖博物館．週刊教育資料「ミュージアム・ナウ」199612.

市川市東山魁夷美術館．週間教育資料「ミュージアム・ナウ」200603.

サイエンス・ノース．週刊教育資料「ミュージアム・ナウ」199404.

静岡市登呂博物館．週刊教育資料「ミュージアム・ナウ」199502.

秋田県立農業科学館．週刊教育資料「ミュージアム・ナウ」199412.

青函連絡船「羊蹄丸」パビリオン．週間教育資料「ミュージアム・ナウ」199804.

レオナルド・ダ・ビンチ展．週間教育資料「ミュージアム・ナウ」200512.

「若仲と江戸絵画展」．週間教育資料「ミュージアム・ナウ」200610.

パナソニックデジタルネットワーク・「林原自然科学博物館ダイナソアファクトリー」．週間教育資料「ミュージアム・ナウ」200304.

瑞浪市化石博物館研究報告 no. 35 (supplement) (2009)， p. 63–72, 4 tables.
特集「博物館－現在と未来－」糸魚川淳二・柄沢宏明（編）
© 2009, Mizunami Fossil Museum

美濃加茂市民ミュージアムの博学連携活動
－子どもの学びと地域博物館－

可児光生

美濃加茂市民ミュージアム　〒505-0004 美濃加茂市蜂屋町上蜂屋 3299-1

Cooperative Works of Minokamo City Museum and Schools－ Learning of Children and Museum in a Community －

Mitsuo Kani

Minokamo City Museum, Kamihachiya 3299-1, Hachiya, Minokamo, Gifu 505-0004, Japan

Abstract

Children have utilized Minokamo City Museum as sources for their learning for 8 years. Although some problems can be pointed out, our cooperation is succeeding at some extent. According to the surveys on children, it can be said that children have got various knowledge through the people or the museum as a meaningful space, as well as getting information through “objects”. To support their activities, it is essential to arrange the surroundings of the museum as “the space of the learning in the community”. Similarly, consideration about the way to respond to the children, which has clear vision of museum, is required. I am sure that children, who utilized and enjoyed museum casually, will come back to museum as “understanding cooperators” and live in the communities as “citizens who love culture”.

Key words: museum, school, cooperative works of museum and school, community

はじめに

美濃加茂市は，岐阜県のほぼ中央部の南端に位置している．江戸時代，中山道 52 番目の宿場として太田宿が置かれたほか，木曽川，飛騨川水運の中継地としても栄え，今も道路や鉄道が交差する交通の要衝である．現在の人口は約 55,000 人，名古屋から 35 ㎞の距離にある小都市である．

「みのかも文化の森・美濃加茂市民ミュージアム」は，この地域の自然史，考古，歴史民俗，美術などを分野とする「地域博物館」で，教育センターを併設する美濃加茂市立の教育機関となっており，2000（平成12）年 10 月にオープンした．展示棟，学習棟，実習棟のほか，昭和 30 年代の養蚕家屋を復元した生活体験館「まゆの家」＋民具展示館，アーティストが滞在して制作できるアトリエ棟などで構成されている．市域のほぼ中央の丘陵地に立地し，主要建物はコナラ，アラカシやヒノキなどの里山の樹林に囲まれた約 9 ヘクタールの森の中にある．

市の条例では「みのかも文化の森」と称され，その中の組織として「美濃加茂市民ミュージアム」と「美濃加茂市教育センター」がある．教育センターは，教員研修，教科研究，教育相談，不登校児童生徒の学習などを主な業務としている．職員は市民ミュージアムが教育委員会文化振興課に，教育センターが教育委員会学校教育課に所属している（開館当初は両者とも教育委員会文化の森に属していた）．

「美濃加茂市民ミュージアム」と「みのかも文化の森」の名称表記について，その明確な定義はなくやや混乱しているが，前者は資料の収集保存，調査研究，展示といったいわゆる学芸的側面を意識した時に使われ，後者はそれを含めて総合的で包括的な側面を考える時，または敷地のある空間や森を示す時に使っている．今回は，学習活用という一体的活動に関してのことであるので，「みのかも文化の森」もしくは「文化の森」という名称で扱う．

「文化の森」に庶務係，学芸係，学習係の 3 係が置かれ，職員は常勤臨時職員 6 名を含め 14 名で，内学芸員は 5 名である．博物館業務にあわせて，文化財保護業務や人物顕彰に関わる文化振興事業も行っている．

「みのかも文化の森」は次のような理念で設立されている．

「①自然との共存

「みのかも文化の森」には， 9 ヘクタールの敷地に里山としての豊かな森があります．この森と，その「たたずまい」を，子どもも大人も「体感」できる場でありたいと考えています．人が自然から学ぶことの大事さ，得られるものの大きさをあらためて考えてみたいと思います．

②学校教育との連携

「みのかも文化の森」は自然の中に立地し，地域の文化的，歴史的資料が収集展示されている施設です．学芸員やボランティアなど人的資源もそなえられています．そのような素材や条件を生かし，様々な体験学習や深まりのある学習が可能となります．モノからそして人から学んだ子どもたちが，将来文化を支える人々になることを願っています．

③市民参画

「みのかも文化の森」では，ボランティアのみなさんをはじめ

として多くの市民の方々が森の活動を支えます．館の事業への協力や参加にとどまらず，自由な発想と自発的な気持ちで活動に参画する，そんな協働しておこなう新しい取り組みや企画は館の新しい力となって次へつながっていきます．

④地域づくり

「みのかも文化の森」は，いわゆる「博物館」や「教育・文化」といった限られた枠にとらわれず，ふだんの生活の一部として利用され，地域の様々な人々の交流の場となることをめざしています．活動をとおして「文化力」を徐々に蓄積し，社会的存在として地域の中で機能していかなければならないと思います．

20年近い長い準備期間のなかで，設立までに煮詰められたこの理念は，今も基本的に変わることはありません．日常の業務のなかで，こんなことをいつも意識しながら活動をすすめていかなければと思っています．

施設の業務評価というものは，この設立理念にどれだけ近づけているかが第1のポイントだと考えています．次の5年そして10年20年先の姿はどうあるべきか，設立理念を基本に社会の状況を見極めて中長期計画を立て，達成すべき具体的指標を立てて取り組んでいきたいと思います．」

（以上『みのかも文化の森年報』2007年（注1））

1．貴重な準備期間

1983年から始まった建設計画は紆余曲折があった．当初は美濃加茂地域の『市史』の編さん終了をふまえ，歴史民俗資料の収集保存と展示を目的とする「資料館」的発想であったが，時代と社会背景の変化にともなってその設立目的も変わっていった．仮称ではあるが名称も「資料館」から「博物館」となり最終的には「市民ミュージアム」「文化の森」となった．その間，さまざまな人々が関わり，議論の積み重ねから前述したような理念が築かれた．準備計画の間，3年ほど中断の時があった．それはある意味，財政難による計画の凍結もしくは白紙をも意味するものであった．プランの練り直しなどをおこなって建設計画が再開されたのは1996年．そのポイントとなったのは隣接する場所で別々に準備を進めていた「博物館」と「教育センター」の両者を複合合体して建設するという案だった．複合することにより両者の機能が向上すること，管理運営面でもより効率的であることが認められ，その方針のもと改めて準備が始まることとなった．「学校と博物館の連携」の準備は建設の4年前に動き出したのである．

当時は川越市立博物館や戸田市立博物館，また琵琶湖博物館など学校連携に先進的に取り組んでいる例があったものの，全国的にはまだ試行錯誤の状況であった．

一方，1994年の社会科の学習指導要領の改正により，小学校では「博物館や郷土資料館等の活用を図るとともに，身近な地域及び国土の遺跡や文化財などの観察や調査を行い，それに基づく表現活動が･･･」とあるように，博物館の活用を積極的に図ることが規定された．また1996年の中央教育審議会「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」の提言を踏まえ「総合的な学習の時間」の導入が2002年に決まり，2000年にはその試行がされることになった．市教育委員会でもそれを受け，その実践の場として「文化の森」を位置付けるようになっていた．

複合施設案での計画再開と中教審の提言がいずれも1996年だったというのは偶然のことであったが，いずれにしてもその流れの中で準備がすすめられた．

博物館としては児童生徒により多く利用してもらいたい，学校としては「総合的な学習」も念頭においた体験学習をとりいれていきたい，そんな両者の考えがあいまって何度も話し合いが重ねられ連携のあり方について検討がなされた．

全教員のアンケートなどを通し，設備や組織として必要なものが提案され，その結果，児童生徒の足となるバスや給食設備が備えられた．支えるスタッフである「学習係」や「学習支援ボランティア」など人的応援体制が敷かれた．

学芸部門から，博物館として提供できる資料や作品，森の中の付帯施設などを提示し，一方学校部門からはそれらを教材として活用する手法などが提案された．開館2年前の1998年度には，博物館資料を活用した学習指導計画案『みのかも文化の森活用の手引き』（注2）がまとめられ，翌年にはその第2集が発行されるなど，開館する前に，具体的活動のイメージづくりと活用の働きかけを行った．このように，学芸部門と学校部門の開館前の共同作業をとおして，漠然とながら「博物館を利用して学習すること」「社会見学でなく授業を博物館でおこなうこと」という共通意識が両部門のなかで芽生えていった．市内にある12校の次の学校「13番目の学校」と文化の森を表現する人もいた．

建設の準備段階の出来事が今の学校活用の現在につながっていると考えている（注3）．

2．活用の現状

2007年度の利用の現状は次のとおりである（表1）．通年の利用率は73％であるが，学期始業時や終業時，また各種学校行事のあることを考えるとほぼフル活用の状態である．時には1日に3団体が訪れることもある．10月は年間最も利用の多い月であるが，一利用日に対して平均すると1.9学年，3.4学級，97名が来館していることとなり，対応に混乱が生ずることもある．市外の学校の利用も増えており，2007年度は周辺の加茂郡，可児市などから，年間1,167名が来館した．市内小学校だけに限ると平均して1人2回程度来館している計算になり，利用のマナーなども身についてきていることを感じる．中学校は教科担任制ということもあって授業時間数が柔軟に組めず「総合的な学習の時間」における利用などにとどまっているのが現状であり，今後の課題のひとつである．支援する学習ボランティアは年間のべ294名である．さまざまな面で活動を見守り，指導し，学習活動になくてはならない存在となっている．

1）支援体制

幅広い体験学習と深まりのある学習は，学校が文化の森を計画的・継続的に利用することが前提となる．ここでの学習は，学校の年間指導計画（カリキュラム）に位置付けられた学習であり，単元の目標を達成するための学習である．学校の授業と同様に，またここでしかできない授業ができるようにと様々な支援体制をつくってきた．

組織として「文化の森活用委員会」を置いている．教育センターに事務局を置き，市内の小中学校の教諭など14名で構成，新規の活動プラン作りやそれぞれの学校への活動紹介や活動の評価な

表１．2007 年度　みのかも文化の森　学校利用者数.

項目・月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
学校としての来館可能日	11	15	16	10	0	14	16	16	12	12	15	12	149
利用日数	4	12	15	8	4	6	16	16	7	10	8	3	109
利 用 率	0.36	0.80	0.94	0.80	−	0.43	1.00	1.00	0.58	0.83	0.53	0.25	0.73
学 年 数	9	14	21	16	5	8	30	31	7	14	18	11	184
学 級 数	9	32	41	19	6	13	54	45	16	24	23	11	293
利用者数	210	1,059	1,247	431	84	363	1,557	1,398	508	727	610	344	8,538
給食利用回数	1	0	3	1	0	1	1	3	0	2	0	1	13
支援した学習ボランティア数	8	38	57	16	0	9	51	35	11	30	26	13	294

2007年度利用者数の内訳
（幼・小・中別）

幼稚園・保育園児	372	(4.4%)
小学生	7,923	(92.8%)
中学生	243	(2.8%)
計	8,538	

2007年度利用者数の内訳
（市内・市外別）

市内学校	1,167	(13.7%)
市外学校	7,371	(86.3%)
計	8,538	

開館以来の利用者数の変遷

2000年度	8,174
2001年度	8,080
2002年度	8,442
2003年度	7,751
2004年度	6,248
2005年度	7,552
2006年度	8,258
2007年度	8,538
累計	63,043

（参考）2007年度　美濃加茂市内の学校数及び児童生徒数

	小学校	中学校	計
学 校 数	9	3	12
学 級 数	126	51	177
児童生徒数	3,298	1,682	4,980

＊中学校には、加茂郡富加町との組合立中学校1校を含む。

どを行っている．

みのかも文化の森には「学習係」が置かれている．係長は教育委員会学校教育課との兼務であり教諭がその職にある．学習係は現在4名（うち非常勤2）で，学校との連絡調整や学習内容の検討，来館した児童生徒の指導等を行っている．その中で最も大切にしているのは事前の打ち合わせである．学習のねらいを共通理解し，学習内容や時間配分のほか，担任，学習係，学芸員，学習支援ボランティア四者の役割分担を確認する作業をおこなう．

学校と同様，授業を中心に進めるのは担任であるが，学芸員，学習係，学習支援ボランティアが支え全体で授業を行う．文化の森のボランティアには展示ガイド，アート，生活体験，伝承料理，イベント，学習支援の6分野があり，全登録者数は153名である．学校活用においては主に学習支援ボランティア（登録26名）が，児童生徒の引率や館内の案内，学習の補助などの支援を行っている．主婦，教員退職者，大学生等が各自の都合に合わせて活動している．

2）設備

文化の森は市のほぼ中央に位置しているが，徒歩で来館して授業時間を十分確保できる学校は1校のみである．児童生徒の便宜を図るために準備段階から要望し導入したのが文化の森専用のバス（愛称「ぶんぶんバス」）である．2005年度からは運行が外部委託になったが，市内学校と文化の森間の送迎，必要に応じて文化の森と他の学習施設間の送迎も行っている．

終日の学習活動に際し，多くの学校は弁当持参で来館するが，通常の学校と同様に文化の森でも給食をとれる設備を整えた．実習棟に給食用ワゴン，冷蔵庫，配膳台等を用意し事前に市給食センターに連絡をとって，必要な数の給食が配送されるシステムをとっている．

3）学習の実際とプロセス

（1）日程調整と準備

活用の前年度，3月までに各学校の利用できる優先日を割り振り，学習係が各学校へ連絡する．各学校では年度が始まると教務主任が中心となって学校の行事予定を考慮して学習係と調整を行い日程がほぼ決まる．利用日が近づくと文化の森でどの教科（領域)でどのような活動を行いたいか担任から学習係へ報告がある．市内の学校は活動の概略が書き込める活動案テンプレートが送れるようにネット（逍遙ネット）で結んでありこれを共に活用する．

（2）事前打ち合わせと活動案の作成

授業のおよそ2週間前までに打ち合わせを行う．時には学芸員も参加し，学習のねらいや内容について，準備するもの，バスの送迎時刻，昼食の有無などみなが共通理解を得られるようにじっくりと話し合うようにしている．通常は授業が終了した16時以降に，活用予定の学校の学年の担任が3名前後来館する．多いときには三校の打ち合わせを係員が手分けして同時に平行して行う光景も見られる．

事前打ち合わせをもとに,学習係が学習活動の細案を作成する．担任の指導を中心としながらも学芸員や学習係，学習支援ボランティアがどの段階でどのような支援を行うかを明確にし，関係者全員が学習のねらいを共通理解できるように配慮する．活動案は学校にはE-mailで届けるとともに学習支援ボランティアを含むスタッフにも配布する．

（3）授業とその後

学校と同様，授業を中心に進めるのは担任である（T1)．授業の中に学芸員が入る場合はT2となり，学習係がT3，学習支援ボランティアがT4となってTTを行い，丁寧な支援が行えるように心がける．その結果については文化の森HPでその都度公開している．1年間に行った活動はその年毎にまとめ，さらに文化の森活用委員会や学芸員による新プラン，利用したワークシート類を編集して「活用の手引き・活用実践集」（注4）を作成する．これが次年度以降の大きな参考資料となる．

3．学校活用例

活用例として（表2)，学習活動の実践例（表3，4）を示す．

4．現状から思うこと

1）「ねらい」連携とは

文化の森に隣接する「太郎洞池」は，周囲には雑木林が茂って野鳥が飛来し，里山としての良好な景観を形作っている．この池は江戸時代に作られた溜池で，堤防を改修したことを裏付ける古文書や古地図が残り，またそれを推し進めた人物について社会科副読本に郷土の偉人として紹介されているなど，地域を知る教材として恰好のものである．子どもたちは現在の堤防を見学するほか，収蔵庫にある古文書の実物を使った学芸員による歴史資料の扱い方を含めての解説を聞いたり，当時の土木工事のために使ったと考えられる運搬具「もっこ」をボランティアに実演してもらって，そのあと実際に肩に担いで土を運んでみたり，という盛りだくさんの内容である．まさにモノを生かした博物館ならではの授業というものであった．

しかし，アンケートによる児童の感想は期待したほどではなかった．事実の歴史背景に関心を持つとか，当時の人々の知恵の出し方といったところまで踏み込むようなものはなく表面的な感想にとどまっていた．それは，2，3時間という限られた時間の中で，内容を詰め込みすぎたことも影響しているのであろう．教材や場所をしっかりと見せ，考えるきっかけになるような工夫や時間配分をすることが大事だと考えた．ねらいを明確にし，そのための教材化を学校との事前の話し合いで作りこんでいくことが必要であろう．

文化の森は教育委員会の文化財保護行政も担当しているところでもあるため，埋蔵文化財の発掘調査やその後の遺物整理も業務としておこなっている．また，施設のある森は「尾崎遺跡」として主に古墳時代から奈良時代の集落があった遺跡でもあり，建物整備に際し必要部分について発掘調査がおこなわれた．そして発掘された竪穴住居址のうちの古墳時代の1軒が地表の保存処理が施されて当時のまま保存されている．

小学校6年生の社会科に「米づくりのむらから古墳のくにへ」という単元がある．その活用も想定して，時期をあわせる形で毎年5月前後に関連する企画展を開催している．

このように学習の条件が整えられていることもあり，「古代の人々のくらしに関心を持つこと」「自分たちの身近なところにも，古代の人々の暮らしに関した場所があることを知ること」をねら

表２．2007 年度の主な学習内容.

学年/教科/時期	学習活動	主な内容
小５、６年／社会 ／4～6 月、1･2 月	●常設展示室での土器等出土品の見学・尾崎遺跡の見学・修復作業の見学 ・土器づくり・自分達の学区からの出土品見学	・常設展示室、保存住居跡、土器整理室などを使いながら、この地域の縄文・弥生時代の人々のくらしなどについて学習をする。縄文土器を作る、森の中で出土品を探す、石器づくり等の活動を行うこともある。
小３年／社会、理科 ／5～7 月	●森のタワーから市内の様子を観察 ●フィールドビンゴ ●常設展示室にて美濃加茂の蝶の展示を見学	・森のタワーから、市内の様子を観て、南部に建物やスーパーがあり、北部には果樹園や山が広がっていることを観察。 ・チョウやトンボなどの昆虫についての学習。標本を使い、学芸員から地域の昆虫の話を聞き、森の中でチョウを探したり、チョウの模型を作る。
全校／家庭科、総合的な学習の時間 生活単元、特別活動 ／5･9～11 月	●たけのこ掘り・山菜探し ●かまどを使った炊飯・おむすび、五平餅 ●おもちつき	・学習者の活動目的に合わせ、ゆっくりと時間をかけて自然を楽しんだり、仲間と協力したり、ボランティアと関わったりする活動。
小６年／社会 ／6～9 月	●室町文化体験　・茶華道体験	・生活体験館などを使い、生け花や茶道を体験する。逍遙大賞受賞者の記念公演ビデオを鑑賞する。
中学校／総合的な学習の時間 選択英語、生活単元 ／6･11･2 月	●館内見学・調べ学習 ・テーマごとの調べ学習・課題テーマづかみ ・ホタル・ネコギギの学習など ●美濃加茂市美術展見学	・常設、民具、生活体験館などの展示室を見学し、各自のテーマを探す。また、個人の追究テーマが定まり学習が進んだ段階で、学芸員から、その後の調べ方やミュージアムにある資料を見て学習を深めていく。 ・美術展の鑑賞により、作品の解説文を英文で作成する。
小３、４年／社会 ／6～10、1･2 月	●文化の森と他の施設をつないだ学習 ・商店街・ささゆりクリーンパーク・山之上浄水場 ・消防署・図書館・自動車工場・中山道会館 ・文化の森の消火施設調べ	・市内の他施設を見学にいく学習。文化の森では、その見学先の施設と関わる学習をする。
幼稚園・保育園／園外活動 ／6～2 月	●葉っぱの模様の陶器づくり ・遠足・卒園制作：親子で制作	・タタラにした粘土を使い、表面に、森でとった木の実や葉で模様をつけた皿を作る。
小1,2,3,5 年／生活、社会 総合的な学習の時間 ／7･9・11･2 月	生活・社会 ●昔の遊び道具, 手作りおもちゃづくり ・昔の暮らしの話を聞く・伝承遊び	・めんこやぶんぶんごま、紙こま、たこなど手作りのおもちゃを作る。また、竹や紙をつかって手作りのおもちゃを作る。 ・お手玉や竹馬などのむかしの遊び道具で遊ぶ。
小５年／理科 ／9～11 月	●流れる水のはたらき ・上流と下流の川の観察	・市内を流れる川へ出かけ、川の上流と下流の、川岸の様子や川の流れの速さの違いなどを観察する。
小６年／理科 ／9～12 月	●大地のつくり ・化石林公園・岩石標本・中部台地層・常設展示 ・化石レプリカづくり	・市内にある化石林公園や地層の露出場所を見学し、私たちの住む大地のつくりを実際に観察する。常設展示室の地質柱状図や岩石標本を観察し、大地を構成している層や岩石について学ぶ。
小４、５年／社会、総合的な学習の時間 ／9～11、2・3 月	●変わってきた人々の暮らし ・七厘で火起こし, もち焼き, なべやき、五平餅づくり、・くどの火起こし ・洗濯, 炭火アイロンがけ	・「暮ラシカル道具展」にあわせ、生活体験館（まゆの家）にある昔の道具を見て、触れて体験する。道具を見学するだけでなく、七厘での火おこしや炭火アイロン、洗濯板を使った洗濯などの道具を使った体験学習をおこなう。
小４年／社会 ／10・11 月	●郷土の偉人 ・太郎洞池の見学 ・堤防づくり体験 ・資料見学と調べ学習	・郷土の偉人「福田太郎八」をとりあげ、太郎八の人柄や業績、当時のため池の工事の様子（もっこかつぎ）などを体験する。池を造成したときの契約書や昔の絵地図など所蔵資料などを使い、当時の様子や太郎八が工事をおこなった理由などを考えながら学習する。
小１、２年／国語 ／2 月ほか	●みのかも「声のドラマの会」朗読鑑賞	・「みのかも声のドラマの会」による絵本や物語の朗読を聴く。
小２、５年／生活、総合的な学習の時間 ／9～10 月	●文化の森のやさしさ見つけ ・障がい者、高齢者疑似体験と施設のバリアフリーみつけ	・文化の森のなかの、点字ブロックや点字パネル、段差の有無など、バリアフリーの状況について調べる。

表 3. 学習活動の実践例－１「米づくりのむらから古墳のくにへ」.

小学校６年生　社会

「米づくりのむらから古墳のくにへ」

1.『ねらい』

- **縄文・弥生時代の人々のくらしを体験することを通して、古代の人々のくらしに関心を持つことができる。**
- **自分たち身近なところにも，古代の人々の暮らしに関した場所があること知ることができる。**…など

３：人数	４：活動月	５：予定
６０名前後まで活動可能	４、５月	終日（９：００頃～１５：００頃）

２：児童の服装・持ち物	弁当、水筒、探検バック、筆記用具、長袖、長ズボン、赤白帽子、ワークシート、軍手、タオル、ビニール袋、（雨天時：雨具）

６：人員の有無　（○…必要　△…活動に応じて必要　―…必要無し）					
声のドラマの会	―	生活体験ボランティア	―	学芸係	―
伝承料理の会	―	展示ガイドボランティア	△	学芸員	○
教育センター	―	学習支援ボランティア	○	学習係	○

7. 学習内容

事前の学習

・私たちの住む美濃加茂市には、教科書に載っているようなものがあるのか、知るにはどのような方法があるのかを話し合う。‥など

事後の学習

・自分が作った土器と、実際に出土した土器を比較して、当時の人々の知恵や工夫について考える。
・修学旅行の学習につながる
…など

時間	1組	時刻	2組	先　生	ボランティア	学芸員	学習係
	◆文化の森到着						
１０分間	**◆始めの会　場所：エントランスホール** ・展示ガイドボランティア、学習支援ボランティア、学芸員、学習係の紹介・先生の話			・司会の補助 ・課題の確認	・自己紹介	・自己紹介	・自己紹介 ・注意事項
１２０分間	**◆活動A：縄文土器づくり　場所：工芸室** ・土器の形を作る ①団子状にした粘土をつぶし、底を作る ②粘土ベラで、底に名前を書く ③粘土をひも状にして、一段ずつ積み上げる ④形が完成したら、口べりを整える ・土器に模様をつける ①土器の表面を磨く ②縄を転がしたり、小石や貝殻などで模様を付ける ③細い「粘土ひも」などを「どべ」を使って張り付ける ・片付け	３０分間 ３０分間 ６０分間	**◆活動B：古墳と土器の学習** **場所：常設展示室** ・市内の遺跡・古墳について ・縄文土器・弥生土器などの見学 **◆活動C：『土の記憶ｖ』の見学** **場所：企画展示室** ・『土の記憶ｖ』の見学をして課題を追究する **◆活動D：住居跡見学・遺物探し** **場所：南の森　※** ・住居跡の見学 ・森の中で遺物探し・鑑定	**活動ＡＢＣＤ** ・整列、移動の指示 ・安全確保 ・声かけ ・活動支援 ・片付けの見届け	**●展示ガイド** **活動ＢＣＤ** ・展示物の説明 ・展示室の案内 ・学習支援 ・安全確保 **●学習支援** **活動ＡＢＣＤ** ・声かけ ・活動支援 ・安全確保	**活動C** 『土に残る記憶ｖ』の解説 **活動D** ・住居跡の解説 ・遺物探しの説明 ・出土品の鑑定 ・学習のまとめ	**活動A** ・土器作りの説明 **活動B** ・常設展示室での解説
４０分間	**◆昼食　場所：芝生広場　（雨天時：生活体験館）**						
３０分間	**◆活動B：古墳と土器の学習　場所：常設展示室**	１２０分間	**◆活動A：縄文土器づくり** **場所：生活体験館** ・土器の形を作る ・土器に模様をつける・片付け				
３０分間	**◆活動C：『土の記憶ｖ』の見学　場所：企画展示室**						
６０分間	**◆活動D：住居跡見学・遺物探し　場所：南の森※**						
１０分間	**◆終わりの会　場所：エントランスホール** ・児童の感想・学習支援ボランティア、学芸員の話、学習係の話・先生の話			・司会の補助 ・まとめのお話	・振り返り ・感想	・振り返り	・振り返り
	◆文化の森出発						

8. 安全面への配慮

・遺物探しで森の中のウルシや毒虫に気をつける。※

１０. 雨天時の活動予定

・活動Dは小雨の場合は決行します。大雨時は土器整理室を見学します。
・昼食は生活体験館または、工芸室、研修室で食べます。

１１. 備考

・縄文土器づくり：粘土の底に名前を書きます。同様に下に敷くわら半紙にも名前を書きます。
（返却時の混乱を避けるために名前と番号は鮮明に残したいと思います）
・活動Bは班ごとに見学します

9. 用意する物

学校	粘土代ひとり１００円、ワークシート（作成）
文化の森	【活動A】粘土、粘土べら、模様を付ける縄、粘土板、わら半紙 【活動D】遺物の見本（土器、須恵器）、遺物を入れるカゴ

表 4. 学習活動の実践例－２ 「たぬきの糸車」「ぶんぶんゴマを作ろう」.

小学校１年生
国語「たぬきの糸車」
生活「ぶんぶんごまを作ろう」

１．『 ねらい 』
・**『たぬきの糸車』の時代情景に近い生活体験館で、物語を再現しながら朗読を聞くことにより、より一層、物語を身近に感じることができる。**
・**ぶんぶんごまなどをつくって６年生へのプレゼントを作ることができる。**・・・など

３：人数	４：活動月	５：予定
１００名前後まで活動可能	２～３月	半日（９：００頃～１２：００頃）

２：児童の服装・持ち物	油性ペン、色鉛筆、国語の教科書、ビニール袋（作品を持ち帰るため）

６：人員の有無 （○…必要 △…活動に応じて必要 ―…必要無し）					
声のドラマの会	○	生活体験ボランティア	△	学芸係	―
伝承料理の会	―	展示ガイドボランティア	―	学芸員	―
教育センター	―	学習支援ボランティア	○	学習係	○

７．学習内容

事前の学習
・たぬきの糸車を読んでいる
・道具の安全な使い方を確認する
…など

事後の学習
・生活体験館の様子を思い出しながら、学習をする
・自分でお話をつくり、紙芝居を作る。
…など

時間	1組	2組	3組	先生	声のドラマの会	生活体験ボランティア	学習支援ボランティア	学習係
	◆文化の森到着（場所：正面玄関）							
１５分間	◆始めの会 （場所：エントランスホール） 声のドラマの会、学習支援ボランティア、学習係の自己紹介・先生の話			・司会補助 ・学習のまとめ	・自己紹介	・自己紹介	・自己紹介	・自己紹介 ・注意事項
５０分間	**◆活動Ａ：たぬきの糸車（場所：生活体験館）** ・朗読を聴く ・感想を発表する ・糸車を回したり、板戸、板の間、土間などを見学したりする	**◆活動Ｂ：ぶんぶんごまを作ろう※（場所：工芸室）** ・作り方の説明を聞く ①紙を貼り合わせる ②キリで穴を開ける ③糸を通す	**◆活動Ｃ：むかしあそび※** ・３つのグループに分かれて、順番に遊ぶ ・竹馬（場所：芝生広場） ・竹とんぼ（場所：芝生広場） ・お手玉（場所：研修室）	**活動Ａ** ・交代、整列などの指示 ・安全確保 **活動Ｂ** ・進行 **活動Ｃ** ・交代の指示 ・安全確保	**活動Ａ** ・『たぬきの糸車』の朗読（児童が音読した場合はその感想）	**活動Ｃ** ・遊び方の指導	**活動Ａ** ・糸車の使い方の見守り **活動Ｂ** ・製作の見守り ・安全確保	**活動Ａ** 『たぬき糸車』の上映 **活動Ｂ** ぶんぶんごまの作り方の説明 **活動Ｃ** 安全確保
１０分間	**◆トイレ休憩，移動**							
５０分間	**◆活動Ｃ：むかしあそび※**	**◆活動Ａ：たぬきの糸車**	**◆活動Ｂ：ぶんぶんごまを作ろう※**					
１０分間	**◆トイレ休憩，移動**							
５０分間	**◆活動Ｂ：ぶんぶんごまを作ろう※**	**◆活動Ｃ：むかしあそび※**	**◆活動Ａ：たぬきの糸車**					
１５分間	◆終わりの会 （場所：エントランスホール） ・児童の感想・学習の振り返り・先生の話			・司会補助 ・学習のまとめ	・学習の振り返り・感想	・学習の振り返り・感想	・学習の振り返り・感想	・学習の振り返り
	◆文化の森 出発（場所：正面玄関）							

８．安全面への配慮
・活動Ｂ、活動Ｃでは、道具の使い方や周りに注意し、けがに気をつける。※

１０．雨天時の活動予定
・活動Ｃは、屋内で行える昔遊びに変更します。
【例】竹とんぼ→けん玉、竹馬→おはじきに変更します。（場所：けん玉が会議室、お手玉とおはじきが研修室。研修室は２部屋に仕切ります。）

１１．備考
・活動Ａでは、時間に余裕があれば、児童が音読します。
・活動Ｂでは、ぶんぶんごまが完成した児童はそれで遊ぶ時間にします。
・活動Ｃでは、３つのグループに分かれて全員がすべての遊びができるようにします。

９．用意する物

学校	救急セット
文化の森	【活動Ａ】糸車、パソコン、プロジェクター、ラジカセ、たぬきのしっぽ 【活動Ｂ】ぶんぶんごまの材料、キリ、木工用ボンド、救急セット 【活動Ｃ】竹馬、竹とんぼ、お手玉（雨天時：おはじき、けんだま）

いに，毎年多くの学習が行われている．

活動は，展示室で土器の特徴を見学したり，土器整理室で破片のままの土器を観察する．まず大量の土器片を見て，展示室での土器は収集整理された資料のほんの一部に過ぎないこと知る．土器の割れ口から焼成や胎土の様子を観察し，また実物に触れて土器の質感や重みといったものも感じ取る．また，整理し報告書を作る業務もあわせて見学し，それを通し歴史を調べたりまとめたりすることの大事さを感じているようである．住居址そのものを見学し，実物としての迫力を感じている．また，最近でこそ減ってきてはいるが，森には当時の土器の破片が散布している．それを探す学習は非常に人気があり，子どもたちの関心はきわめて高い．

その前後に，工芸室にて「土器づくり」を行うことがある．ユニークな作品作りに熱中し，創作活動としてのねらいは達成できるが，社会科と関連付けた教材化が必ずしもできていない．つまり，土器の器壁の厚さの違いと時代の変遷を考えたり，自分で作った土器と当時の土器を比較観察しその目的などを理解しようとする活動がうまく進んでいないのが現状である．

「太郎洞池」「米づくりのむらから古墳のくにへ」，これら二つの例は，館がもつ特有な素材を扱いつつも，有効に使い切れていないということであろうか．教育課程でのねらいだけでなく，一歩踏み込んで博物館としてねらいや考えを主張していく必要があるだろう．現在授業の際作られている学習活動案のねらいの部分について，両者がもう少し協議し，時には両者のねらいがそれぞれ別に示されてもいいのではないかとも思う．

システムとしてはそれなりに軌道に乗りつつある学習活動であるが，学校教育としてのねらいだけに博物館は迎合していないか，単なる学校の「サービス」に陥っていないか絶えず検証が必要であろう．改めて，博物館側として「伝えたいこと」，学校側として「学ばせたいこと」は何なのか，両者の「連携」とは何なのかをもう一度考え，お互い流されないよう主体性と理念を持って，取り組むことの大切さを最近感じている．

2）「博学連携フォーラム」から

2004年度から，博学連携の実態を報告しつつより多くの関係者と意見交換をする場として，毎年秋に「博学連携フォーラム」を行っている．公開授業と講演もしくは事例報告，文化の森活用委員会の3部構成を基本として実施している．

2006年度の博学連携フォーラムは，炭火アイロン，洗濯板，炭火の七輪などを使う「昔のくらし」から学ぶという公開授業のあと，関係者や見学の保護者をふくめて，座談会を行った．そこに参加した保護者のひとりがのち，ある新聞にその感想を投稿した．

「・・・炭火をおこすなど手間のかかる作業の過程に子どもたちが目を生き生きとさせていたことだ．・・・この過程こそ必要なんだ．大人はすぐ結果を得ようとし，子どももまた，それに慣れてしまっている．何事にも過程があることを忘れてしまっているのだ，と気付かされた．・・・挫折や反抗期があってこそ成長していくことを心にとめて子育てをしていきたい．・・・」

文化の森での子どもたちの学習を，子どもの成長や人生にまで思いをひろげながら理解をしている保護者の存在を知った．何気なく行っている活動であるが改めてその本質を見つめ充実させていく必要性を感じている．

5. 子どもの意識・アンケートから

開館当時小学1年生だった子どもたちが2005年度末，卒業をむかえた．これを機に博物館を活用した学習を通しての結果を検証し，今後の進め方や改善の参考にしようと6年間をふりかえってのアンケートを実施しはじめ，その後継続して行っている．2007年度末は469名から回答があった（回収率84.3%）．印象に残っている学習を選ぶ設問のほか，学習で気づいた点，発見したこと，これからの思いなどを聞いた．

アンケートの回答の考察のキーワードとして

(a) 知識・技術・・・学習活動を通して新しい発見や気づき，自己実現があったか．

(b) 心・感性・・・学習活動の経験を通して文化の森の「もの・ひと・こと・場」への思いがどうであったか．

(c) 行動の広がり・発展・・・博物館や社会・生活とのかかわりを積極的に持とうとするようになれたか．

の3点をあげて分析した．まずは（a）学校教育の観点から授業の教育課程として学習に取り組めたか→(b) 文化の森特有なものを感じてさらに高めることができたか→(c) 文化の森での体験をふまえて，社会にある施設やものをより必要なものとして感じたり働きかけたりする行動がみられるか，その傾向や動向を知りたいと考えた．

学校活用の評価については，何を指標にし，どこを到達点にするのか，さまざまな議論があるところであるが，文化の森では，まずはここで経験した子どもたちの反応と具体的行動を検証し，これからの手がかりにしていきたいと考えている．

この内容は『みのかも文化の森活用実践集ダイジェスト版』に詳細が記してあり，また全体の考察もされている（注3）ので，それを参考にしていただきたいが若干考えたことを記したい．以下に紹介する回答は，2006年度と2007年度から抽出したものである．

(a) に関して

「写真だけじゃなくって近くで見ることができて楽しかったから，歴史のことが少し好きになった．」

「円空さんのほった，仏のじつぶつをみれてよかったです．」

「火山でできた地層とか水でできた地層とかは教科書でしか見たことがなかったので，本物を見た時はびっくりしました．」

「たて穴じゅうきょを初めて見て，びっくりした．だいぶ広いということが分かった．昔のものがそのままの形で残っていたからすごいと思った．」

など，実物やそれが残っている現地を観察し，驚きと楽しさを率直に感じているようである．

館が所蔵する資料は膨大である．それぞれデータベース化をすすめ，画像も含めて公開を徐々に進めているところであるが，学習の効果的活用のためには，関わる教員に活用できる資料の内容を伝えていくことが第一である．夏休みに研修を設けたり，通常の来館時に，できるかぎり資料の見学や観覧の機会を設けているが，さらに周知し，理解してもらえるよう努力していきたい．

(b) に関して

「文化の森ではいっぱい木があるから木のことについてもうちょっとしらべたいと思いました．」

「文化の森の施設を使ってゴミ問題の学習ができると思う.」

「夏休みの研究でアゲハチョウのことを調べました．その時に，文化の森の人に聞いたりした.」

などである．学習活動をとおして,それぞれの問題関心が高まり，向上心が芽生えていることを感じる.

これらがさらに発展した形として，夏季休暇に取り組む理科と社会科作品がある．夏休みが始まる前や休暇中には，最近相談に来館する子どもが増えてきている．また何度も足を運び，学芸員に聞く姿が目立つようになった.

毎年夏休み終了後，９月上旬に文化の森では「美濃加茂市科学作品展･社会科作品展」が開催される．自らの問題意識から課題を設定し進められた研究について選考され，文化の森で出品された作品のうち優秀なものはさらに県作品展へ出品される．なお校内選考で選ばれない，つまり文化の森では展示されない作品が７０％以上あり，出来る限り各小中学校での作品も関心をもって観覧している．校内での選考を経て，2006 年度には 338 点（全出品点数 1,249），2007 年度は 287 点（全出品点数 1,148）が展示された．そのうち文化の森での授業や催し物をきっかけにした作品，文化の森での相談や調査をふまえた作品を調べると，2006 年度は 16 点,2007 年度は 13 点あった（注 5）．企画展「鳥とひと」をきっかけにした野鳥の研究,「蚕とまゆ展」をきっかけにした「かいこ日記」,「古墳展」にかかわって地域の土器の研究，室町文化と能の講座に参加しての研究など多岐にわたる．目立って件数が多いわけでないが，森での学習をきっかけにして子どもたちが関心を持って幅広く学習に取り組む純粋な姿勢を感じる．館としてどのような題材をどのように提供するかが，子どもたちの学習の可能性，広がりに大きく影響を与えると感じる.

子どもたちに対して積極的な問題提起や動機付けを行い，学習活動や創作活動がいろいろな形で出来る場所だということを伝えようと最近新しいプログラムを実施している．今年度「子どもわくわく文化の森展」というテーマで夏休み特別企画を行った.「今年の夏は文化の森がおもしろい！○○博士になってしらべたり，アーティストになって芸術作品を発表したりみんなで展覧会をつくってみよう」がその趣旨である．第１期は,過去の科学作品展･社会科作品展での優秀作品を改めて借用して展示し研究のヒントを与えたり,またその展示室の中で相談コーナーを設けたりした．第 2 期は「つながる」をキーワードにしてデジカメを使って写真作品づくりをし企画展示室に展示をした．200 点を超える参加者が森の中の「分割されたおもしろい場所」を選んで作品に仕上げ「つながる輪」となった.

また，夏休み中の水曜日は「ふらっとみゅーじあむ」の日とした.自分で考えたオリジナルマークを考えたり,はりがねをつかった工作などいつ来ても参加できる定員のない催しを行った．何か楽しいことがあるよと，今年は平均約 50 名の参加者があった.

これらは，誰でも気軽に参加できるプログラムであるが，一方，より深く関わってもらうという考えから「フォレスタくらぶ」「文化の森たんけんたい」というプログラムを設けている．前者は会員制の子ども向けクラブで年間をとおした定期的学習活動を行うが，時には子ども向け講座の手伝いを博物館スタッフとともにしてもらうものである．また後者は，子どもの関心からテーマをそれぞれ決めて，深めまとめる作業を行っていく.

子どもたちへのこれらのプログラムは，いずれも博物館を単なる授業における体験的学習の場だけでなく，それぞれの生活の一部として総合的にそして多面的にとらえて利用していってほしいという願いからの企画である．子どもたちも大事な文化を愛する一市民という視点でみていきたい.

6. 人と場から学ぶということ

「レプリカ作りなどいろいろ体験して，文化の森の人達におせわになってわからないことをやさしくおしえてくれてありがとうございました.・・・」

「文化の森の人は笑顔でいるので，気分もいいし，話を聞こうと思う.」

「おじいさん，おばあさんとふれあい，ボランティアでなにができるか，考えることができる．理由は１人ぐらしの人でも楽しむことができるからです.」

「文化の森で環境をテーマにした，ボランティア活動をやることができそうだ.」

アンケートではこのような回答が目立つ．これは観点（ｂ）に関してのことである．子どもたちはモノに対する感想のほかに，自分たちの学習活動に関わってくれている人々への関心，文化の森という場への関心が強いことがわかる.

ある日，小学校のあるクラスが来館し，ボランティアのみなさんからのお話しを聞く会があった．ある子どもが「おじさんたちはいくらもらってるの？」と質問したのに対し,「１円ももらってないよ」「でも来た人のお世話や手助けをしたりすることが楽しいんだよ．自分たちが楽しいと思ってるからやってるんだよ．それがみんなから喜ばれる．そんなありがたいことはないよ．それがやりがい.」との話にとても驚いた様子だった．子どもたちにとって無償で働くことの意味，職業に対する新たな価値観をおぼろげながら考えるきっかけになったと思われる.

ここ数年，市内の中学校の 2 年生が職業体験として来館している．対象の子どもたちは，小学校の 6 年間に平均１０回以上来館し博物館での学習を体験をしている．その「経験」を生かし,「博物館学習の卒業生」が現役小学生の学習の手助けをするというほほえましい光景が見られる．森での学びの方法とともに，関わってくれた人々への感謝の気持ちも次の世代へ伝えられていこうとしている．学習機会を継続し蓄積していくことの大事さを感じている.

次に観点（ｃ）に関して，つまり博物館や社会・生活とのかかわりを積極的に持とうとすることについて，次のような感想が見られる.

「中学生になっても調べたいことがあったら行きたいと思います.」

「文化の森は，他の市にはないし，学校で学習した以上のことが分かるのでとてもいい施設だなあと思いました.」

「いろいろな色の砂が展示してあるのを見に行って，砂にもピンク色などいろいろないろがあることが分かって，かわった場所に行くとそこの砂を見るようになった.」

「文化の森に行き，化石のこととかをもっとしりたかったので，他の博物館へ行きました.」

文化の森という場を理解し，さらに自分の行動を広げていこうとする可能性や夢を感じることができる．こんな子どもが一人で

も増えていくこと,そしてそれが蓄積されていくことを願いたい.それが博物館の仕事である.

7. これから

文化の森を活用した学習活動が8年間継続されてきた．見直すべき点，これからの課題がいろいろあるものの，ある程度軌道に乗りつつあることを感じている．そんな中，学習活動をしてきた子どもたちの反応について当初あまり想定していなかったことがある．それは前述したように，モノだけでなく，関わる人々や森という場からいろいろ感じ取っていることが多いということである．活動を終え帰る時の子どもたちの明るい表情は学習の充実感だけでなく，こんな人に会えた，こんな場所で学習できたという満足感から出ている，そんな気がしてならない．学芸員が学校へ資料を持ち込み実施する，いわゆる出前講座，アウトリーチ活動では実現できない効果をここに見出すことができるのではないだろうか.

情報は，最近驚くほど高度にデジタル化，ネット化され，極めて効率的に伝達されている．しかしそれはある意味表面的で,「深層」「真相」が伝わらないことも多い．それは場の雰囲気やたたずまい，ひとの息づかいなどはネット上では決して知らせることができないものだからである．モノとともに，それを包んでいる空気を伝えることも博物館としての大きな役割だと感じる.

文化の森として活用するモノと効果的な授業の充実は当然であるが，授業があるかないかにかかわらず子どもたちがここを「半日常」としての生活の一部として感じることができるような，さまざまなものを包含した環境づくりが大切である．博物館での授業で関わったことを一つのきっかけにして，その子どもたちは博物館という空間を「普通」に利用し，楽しむ人となってほしいと思う.

このたびの新学習指導要領の改訂により，学校は学力〈知識，技術の習得〉の向上につとめ，豊かな心の部分についてはむしろ家庭や地域の教育力がそれを支え，補完すべきである，との考え方が示されている.「博物館」としても，地域の教育力としてその役割を果たすべくこれからの活動が期待されている．子どもたちを取り巻く博物館の機能，地域博物館としての存在意義をみのかも文化の森はこれからも考えつづけていきたい.

（注1）みのかも文化の森『年報』（みのかも文化の森，2008年）
（注2）美濃加茂市教育センター『みのかも文化の森活用の手引き』（美濃加茂市教育センター，1999年）
（注3）文化の森の建設経緯及び現状については，拙稿「枠にとらわれない地域の文化的拠点をめざして」（『博物館研究』№.403，日本博物館協会，2001),同「人から学ぶ,こころを伝える」（『ミュゼ』№.81,（株）アム・プロモーション，2007)，同『南山大学オープンリサーチセンターシンポジウム「さまざまな博学連携」報告書』（南山大学オープンリサーチセンター，2007）などに記してある.
文化の森の学習活動の詳細と考察等については次にくわしい.
西尾円「博物館と学校の連携」（『博物館雑誌』第28巻1号（通巻37号)，全日本博物館学会,2002),同「つながる文化の森のネットワーク」（『月刊社会教育』№.625，国土社，2007)，同「学校の博物館利用における学習活動の評価」（『博物館雑誌』第33巻2号（通巻48号)，全日本博物館学会，2008）
（注4）みのかも文化の森『みのかも文化の森活用実践集ダイジェスト版』（みのかも文化の森，2007年，2008年）
（注5）西尾円・藤村俊「夏休みの科学作品・社会科作品における博物館の利用について」（『美濃加茂市民ミュージアム紀要第7集』，美濃加茂市民ミュージアム，2008年）

参考文献

廣瀬隆人（2006)，美術館教育をめぐって．NORTHERN OWLS., **16**，北海道美術館学芸員研究協議会.
金山喜昭（2003)，博物館学入門．慶友社.

瑞浪市化石博物館研究報告 no. 35 (supplement) (2009)， p. 73–81, 8 figs.
特集「博物館－現在と未来－」糸魚川淳二・柄沢宏明（編）
© 2009, Mizunami Fossil Museum

世界と日本のエコミュージアム（2008）

里見親幸

（株）丹青研究所　〒110-0005 東京都台東区上野５－３－４植木ビル

Ecomuseum of Japan and World （2008）

Chikayuki Satomi

Tansei Institute Co.,Ltd., Ueki Bldg., ５－３－４ Ueno, Taito-ku Tokyo, 110-0005, Japan

Abstract

Considering how to develop Japan-specific ecomuseums from now requires knowing different efforts in existing overseas and domestic ecomuseums. Therefore this article discusses the following ecomuseums in Japan and other countries: “Ecomusée de la communaute urbaine le Creusot Montceau les Mines - the adventures of Creusot (France)”, “Ecomusée de L’Avesnois - pupils participating in developing the ecomuseum (France)”, “Ecomuseum of Norway - the farmer culture”, “Ekomuseum Bergslagen - regaining the identity (Sweden)”, “Ecomusée du fier monde - the proud world (Canada)”, “Ecomuseu do Seixal - the community museum (Portugal)”, “Does Britain have an ecomuseum? - Ironbridge Gorge Museum”, “Asan Live Museum in Tokushima Prefecture (Japan)”, “Toba Ecomuseum (Japan)”, and “Amami Park (Japan)”. Although ecomuseums, which were born in France, have spread worldwide, any country has evolved them in its own way. Understanding their concept partially, Japan has often developed ecomuseums just domestically. Considering the current circumstances of the country that ecomuseums belong to, we should seek ways of developing them.

Key words: ecomuseum, European ecomuseum, Japanesque ecomuseum

はじめに

エコミュージアムは，1960年代にフランスで地域及びコミュニティに密着したミュージアムとして誕生した.当時フランスは，大都市に人口が集中して地方は過疎化が進み産業が衰えていた．ポンピドー政権は地方分権策として，環境大臣，ロベール・プージャットの意見を取り入れて，全国に25の地方自然公園をつくり，同時に自然公園の中にエコミュージアムという新しいミュージアムをつくり活性化を図った．地域の文化に光を当て住民に開かれたミュージアムをつくろうという考えが誕生の背景にあった．エコミュージアムの考え方は，世界のミュージアムをリードする国際博物館会議の初代会長としてミュージアムを指導していたジョルジュ・アンリ・リヴィエール（Georges Hhenri Rivière）らによって世界に広められていった．

エコミュージアムは，エコロジーという言葉とミュージアムという言葉の合成語であり，従来のミュージアムが一つの建物の中で完結するのに対して，一定の地域（エリア）に残るさまざまな遺産（自然,歴史,文化,産業）を現地で整備保存し,全体をミュージアムとして捉えるのがエコミュージアムである．

エコロジーの語源はギリシア語のオイコス（Oikos）であり，オイコスとは，家とか家族・家計という意味で，生活の記憶をもつ器としての「家」の保存だけでなく，人間とその環境の関係性について探求することを意味している．日本では，人間の生活環境について探求するという意味で,「生活・環境博物館」（新井，1995）という表現もされている．

これまでのミュージアムが，文化や学術・教育に寄与するという目的があるのに対して，エコミュージアムでは，その地域社会の発展・振興に寄与することを目的としている．そして，行政主導でつくられ運営されるミュージアムではなく，行政と住民の力を合わせてミュージアムを企画・運営しようという考えを理念にしている．自分たちが生きている地域を歴史的・空間的に認識して，未来に向けた地域づくり目指すものである．

現在，世界では急速な勢いでグローバル化が進んでいる．そのような中でそれぞれの国の固有の文化を大切にすることがますます重要性を増しており，文化戦略面からもミュージアムの重要性を再認識すべき状況下にある．

エコミュージアムは地域住民が地域を理解し地域固有の遺産を発見することにより，地域アイデンティティを獲得することを重要視する考え方であり,時代が求めるミュージアムの一つである．

1．世界のエコミュージアム

フランスで生まれたエコミュージアムの考えは，現在フランスにおいて138が誕生し，ベルギー，ポルトガル，ノルウエー，カナダ，そして南米，アジアの諸国に拡大している．

地方自然公園の中から誕生したフランスのエコミュージアムは，農村建築の保存を中心に周辺の生活環境の整備と生活文化の記録の収集から始まった．

1）クルゾーの冒険－クルゾー・モンソ・レ・ミーヌ・エコミュージアム

図1．クルゾー・モンソ・レ・ミーヌ・エコミュージアム．

1972年，パリとリヨンの中間に位置するブルゴーニュ地方に誕生したクルゾー・モンソ・レ・ミーヌ・エコミュージアムは，公園型エコミュージアムとは異なる都市型エコミュージアムとして新しい展開を見せた．産業革命以降，鉄鋼業の町クルゾー，石炭業の町モンソ・レ・ミーヌという2つの町の住民が核となり，地域の工業遺産を保存し，未来に繋げていこうと周辺の16のコミューン（市町村）が連合してエコミュージアムがつくられた（図1）．所管は公園型エコミュージアムを管轄していた環境省から文化省に移管され，エコミュージアムは公園でなく博物館として公認されることになった．こうしてエコミュージアムは新しいタイプの博物館として市民権を得ていくことになる．

エコミュージアムの理念である住民参加を原則にする考えは，なかなかその実現がなされていなかったが，当該エコミュージアムは最初から住民を主体とするアソシアシオン博物館として自主的，民主的な運営形態をとったことで注目される．1901年に制定されたアソシアシオン法は，結成・活動の自由が大きく保証され活動に公益性が認められれば補助金を得ることができる．当該エコミュージアムは，運営などさまざまな新しい試みを意欲的に行ってきたことから「クルゾーの冒険」と呼ばれ，その後世界の多くのエコミュージアムに影響を与えた．

2）エコミュージアムづくりに小学生の参加－アヴェノワ地域エコミュージアム

産業遺産を中心とするフルミ・トレロン・エコミュージアムは，

図2．アヴェノワ地域　エコミュージアム．

26年にわたり活動を続けてきたが，現在，地域を拡大してアヴェノワ地域エコミュージアム（図2）として新しい展開を図っている．ベルギー国境近くのフランス東北部（ノール地方アヴェノワ地域）に位置し，パリからは約2時間半ほどの距離にある．

フルミ・トレロン地域は，羊毛織物，ガラス産業を中心に19世紀には大きく栄えた歴史を持っている．とくにフルミ地区は世界でも有数の毛織物工業地帯であった．だが2度の世界大戦，大恐慌など社会と経済の危機に直面して1970年代には衰退してしまった．こうした地域で，エコミュージアムが設置されることになったのは，工場の解体に端を発し，工場と紡績機械を遺産として保護するために，地域住民を中心にフルミ・トレロン地域エコミュージアム協会が結成され，1981年フランスで11番目のエコミュージアムとして設立された．

開館までの活動として注目されるのは，小学校と組んで「フルミ地方の100年の社会経済生活」と名付けて子ども達に祖父や父親がどのような仕事をし，どのような暮らしがなされたかを調べさせ，その過程で資料収集をはかった点である．エコミュージアムに集まった資料5万点は全て市民の寄贈によるという．また，60才以上の人たちを中心にアソシアシオンが結成され，思い出を収集する活動や子ども達の集めた資料に地域特有の意味づけを行って遺産に価値を与えていくという作業がなされた．これらの一連の活動はエコミュージアムを支える層を広げ，事業の継続性から見ても意義のある活動である．

コアの施設は，1874年に建てられた紡績工場を「織物と社会生活の博物館」に活用した．ここは毛糸から織物になるまで当時の機械で実演してみせる毛織物博物館と19世紀末から近年までの100年間の庶民の生活を展示する社会生活博物館で構成されている．展示内容，展示デザインともに極めて優れており，ヨーロッパミュージアム大賞に輝いているのも頷ける施設である．このアヴェノワ・エコミュージアム内には，5つのサイトミュージアムが点在し，コア施設との様々なネットワークを図り運営されている．そして，地域を理解するためのディスカバリートレールは，建築物を見るコースや，自然の中を見て回り季節のリズムを知るコースなど5つの小径を設け，サインや解説板が整備され地域をより深く理解させている．

エコミュージアムの意義について，初代館長のM.グジャル氏は「産業時代の100年間を跡づけ，住民がこの地域をつくりあげたことに誇りをもち，未来をつくりだすということである」と報告している．一般的なミュージアムとの違いについて，「エコミュージアムはコレクション自体に価値があるものではない．人間の営みを見せるところであり，時代と共に進化するミュージアムであって今も動いて現代の問題に取り組むミュージアムである」という考えを示している．

次に北欧におけるエコミュージアムの導入について見ると，スカンジナビア地域においてエコミュージアム研究会の会合がもたれたのは，1992年5月のデンマークで行われたのが最初である．参加国はデンマーク，フィンランド，ノルウエー，スエーデンの4ケ国であり，研究会の目的は，スカンジナビア諸国のエコミュージアムの発展のために，お互いに協力していこうというものであった．スカンジナビア地域におけるエコミュージアムの出現は，ノルウエーが最初で，続いてデンマーク，3番目がスェーデンである（Maure, 1993）．

3）農民文化－ノルウェーのエコミュージアム

ノルウエーのエコミュージアムについてヒヤリングした折りにマルク・モールは，ノルウエーの博物館というのは，ヨーロッパの中でも特別な背景があると言う．強国として栄えたバイキングの時代が過ぎ，1400年代にデンマークの植民地になった．それが1800年代まで続き，ノルウエーでは，「400年の夜を過ごした」と植民地時代のことを呼んでいる．そして1800年代のナポレオン戦争でノルウェーを支配下に持つデンマークはフランス側につき，スエーデンは戦勝国イギリス側についた．そして今度は，スエーデンの植民地に変わってしまった．その後1905年に独立するという歴史的背景を持つ国である．ノルウェーでは，1840年代に愛国心が高まり，ノルウェー独自の文化の発掘が始まった．ノルウェーにしかない文化，それが特に必要だった．そして農業文化がノルウェー独特のものであるとして，古い農家や木造教会を集めた野外博物館をつくった．これがノルウェーの博物館の始まりであったという．マルク・モールは「フランスの文化はキングの歴史で，ノルウェーは農民の文化，それが分からないとノルウェーの文化は分からない」と話した．この野外博物館を出発点として，80年代にもう少し違う方向での博物館づくりが始まった．エコミュージアムと同じように，古い家をその地に置いたままで，そこを博物館にした方が良いという考えである．そして当時，画期的な言葉として世界にデビューしたエコミュージアムという言葉を使う方が，予算確保や支援に便利であるということもありエコミュージアムでの新しい方向の展開が始まったという．エコミュージアムの重要な要素である住民参加はフランスよりスムースであったとマルク・モールは述べている．中央集権の強いフランスでは我々が調査した80年代の印象だと住民参加の実現はほとんどなかったように感じている．この点ノルウェーは民主主義百年の歴史と誇りがあり，住民参加は最初からできていたという違いをマルク・モールは強調した．またノルウエーの社会構造で重要な地位を占めているオルガニザシオン（NPO，アソシアシオンに類似組織）の組織が地域社会に大きな根強い力を持ち博物館運営を支えているという．現在はエコミュージアムもニューミュージアムの一つと位置づけ，社会に貢献する博物館を目指すという性格が強く打ち出されている．

4）アイデンティティの回復－ベルグスラーゲン・エコミュージアム

ベルグスラーゲン・エコミュージアムは，スエーデンの代表的な産業であった製鉄に関わる遺産を，広大な範囲にわたり公開しているエコミュージアムである（図3）．テリトリーは7つの市町村にまたがり，52のサテライトがある．ここでは各市町村の評議員で組織された協議会によって運営の方針が決定され，多くの住民ボランティアの活動によって支えられている．館長のピーター・ラッセン（Peter Larsson）は，ベルクスラーゲン・エコミュージアムの第一の目的として，「地域の歴史を知り，地域に対する誇りとアイデンティティーを回復すること」を挙げている．スエーデンでは不況が長年続き，多くの失業者を抱えている中で，人々のモラルと自信をどのように高めるかが課題であった．そのため，地域の良さを再認識し，誇りを持ち，自ら学ぶ姿勢を身につけることをエコミュージアムの大きな目的にしたという．エコミュージアムを運営していくためには，様々な分野にわたる調査・研究が必要であり，地域の大学や地域の博物館，地域の学校との連携を積極的に推進している．さらに，画家や音楽家や俳優といった芸術家たちとの相互協力にも努め，地域の歴史や文化を上手に表現するのに役立っていると言う．この主張は「ベルクスラーゲン・エコミュージアムは，あくまでもミュージアムとして計画され運営されている．私たちは，観光地をつくるのが第一の目的ではなく，地域の人々のためのミュージアムをつくることである」であり，行政の強い観光指向を牽制し着実な地域づくり優先させている．フランスとの違いについても，ベルクスラーゲン・エコミュージアムでは，地域のボランティアの参加が圧倒的に多いことを挙げ，民主的運営という点ではリードしていることを強調している．

図3．ベルグスラーゲン・エコミュージアム　露天掘鉱山跡のサテライト．

5）誇り高い世界－フィエール・モンド・エコミュージアム

カナダのフランス語圏，ケベック州モントリオールの市街地，サントル・スッド地区は，19世紀後半から20世紀半ばにかけて，モントリオールがカナダの首都であった時代，工業・産業を支えた心臓部であり，住民の多くが都市労働者であった．しかし，1960年代から1980年代にかけての不況のあおりを受けて，多くの住民が失業して町は荒廃した．フィエール・モンド・エコミュージアム（図4）は，このような状況の中で生まれてきた．このミュージアムは，住民の連携とコミュニティ意識，まちづくりに関する自発的な活動の拠点として位置づけられている．掲げるテーマは地域の産業と労働者の歴史であり，産業革命から19世紀半ばにかけて，時系列に労働者の待遇や生活の変化が展開されている．このテーマに基づいて展示会の開催，刊行物などの発行を行い普及活動が行われている．コア施設は，かつて労働者階級の公衆浴

図4．フィエール・モンド・エコミュージアム．

場であったジェネルー公衆浴場で，モントリオール市より提供を受け，エコミュージアム本部になっている．フィエール•モンド•エコミュージアムは常設展示づくりに特色がある．地域の人々が参加し，スタッフとともに地域の歴史の調査を行い展示をつくっている．また，この地区に住む多くのアーティストが参加し，コンセプトづくりから制作,展示まで,アーティストとのコラボレーションによる成果が大きい．過去の過酷な労働条件という暗くなりがちなテーマを，象徴的でインパクトのある形で来館者に伝えることに成功している．展示の最後のコーナーには，住民による今日的な課題が展示され，2週間ごとに変えられるという．そしてそこには「現在こそが未来そのもの」というタイトルが付けられている．

現在，取り組んでいる事業は，かって使われていた青空市場を地域の人々の交流の場として再生し，また，観光事業としても成功させたいというものである．労働者の過去と歴史的遺産の過去を知り，地域の人々が自らの手による環境づくり，まちづくりを行っていきたいというアイデンティティは，フィエール•モンド：「誇り高い世界」という館名に思いのエネルギーとして表されている．

6）コミュニティミュージアム－セイシャル・エコミュージアム

ポルトガルにおけるエコミュージアムの発展は，1974年の革命以降，各地に地域の特色を生かした民主的な地域博物館を創造しようという動きが背景にある．

セイシャル・エコミュージアムの初代館長のアントニオ・ナバイス氏は，コミュニティの全住民とより接触の多い新しい博物館の在り方を求めた．フランスで生まれたエコミュージアムの考えを採り入れ，まず，あらゆる分野（歴史，芸術，産業）にわたって企画展を行ったという.そのことにより市民の興味を喚起して，収集や保護すべきだと思っていたことを実行に移したのである．例えば，かって行われていた海の潮汐を使っての粉ひき場や造船所を守るべきだと訴えるとともに，昔使われていた生活用具などを使えるように補修し，小さなものも含めて収集を行った．そしてモノが集まってきて博物館のかたちを具体化するにあたり，それは一ヶ所に集めるのではなく，セイシャル市内に分散して博物館を作る形をとったのである．また,古い帆船も復元され(図5),

図5．セイシャル・エコミュージアムの帆船（ディスカバリートレイルに使用）.

河口をガイド付きで周遊し，町の歴史や産業，あるいは干潟に集まる野鳥の生態観察など，船による約1時間半のクルージングがエコミュージアムで言うディスカバリートレイル（発見の小径）にあたる.「エコミュージアムは常に変化していくべきであり，誕生から40年以上経った今日，また別の見方をしなければならない．それはエコミュージアム自体がダイナミックで常にコンスタントな活動を行うことにより住民が反応してくれる．社会の変化に対応しなければエコミュージアムは意味がなく社会の対応とエコミュージアムのビジョンは常に見直していかなければならない」と言う方針を掲げている．ナバイスは「エコミュージアムと名前を付けているが，フランスのモデルにはとらわれない．セオリーが大事なのではなく，プラクテス（現実）が重要である」と述べている．

エコミュージアム誕生の初期にリヴィエールと共に指導に当たったユグ•ド•ヴァリンは,ポルトガルでの指導において「コミュニテイミュージアム」と名付ける方がより理想的かたちで社会に貢献するだろうという意見に従い，セイシャル市はエコミュージアムと名前は付けているが，コミュニテイミュージアムにより近いかたちを模索している（Nabais，1985）という．それはエコミュージアムの発展型として,「エコミュニティ・ミュージアム」（エコロジィー＋コミュニティ＋ミュージアムの造語）という言葉の方が相応しいのかもしれない．フランスが最も理想的なエコミュージアムを実現していると考えているのではなく，ポルトガルの国情に合ったミュージアムをめざしている姿がある．

7）イギリスにエコミュージアムはあるか－アイアンブリッジ・ゴージュ・ミュージアム

世界のエコミュージアムのリストでは，イギリスにはエコミュージアムが存在しないことになっている．本当に無いのだろうか．多くの人が共通に認識しているのは,「名称にエコミュージアムという語の使用されたミュージアムは存在しないが，エコミュージアムと呼ばれていなくても，エコミュージアムを自称している一部の場所より本来の概念に近い場所が多数存在している」（Davies，1996）ということである．その一つは，リビエールも最も完全なエコミュージアムであると言ったアイアンブリッジ・ゴージュ・ミュージアムである．アイアンブリッヂ地区は，イングランド中西部の都市バーミンガムの北西60kmのところに位置するセバーン河の渓谷部にあり，世界最古の鉄橋がある（図6).

図6．アイアンブリッジ.

ここは18世紀中頃，イギリス製鉄業の中核的位置を占めた場所である．産業の衰退に伴い人々から忘れ去られ，過疎のまちに

なっていたが，1960年代にニュータウンの開発が行われることになり，渓谷一帯に点在する数多くの産業遺跡が注目され，博物館として再生しようとトラストが設立された．保全されている遺跡は38ケ所で，それらはみな，人々が生活している地域の一般住宅や事業所に混じって点在しており，一定のエリアがまるごとミュージアムとなっている．

8）時代と共にたゆまず発展する機関

エコミュージアムはフランスで誕生し，その理念や目的が各国に受け入れられたが，発展の道筋は一様ではない．それぞれの社会風土も違い，経済的な基盤も違う．あるいは差別や貧困という状況下で政治的な利用も一部には見られる．ただ共通するのは従来のコレクションである「もの」が中心ではなく，「人」が中心であり，人々の誇りやアイデンティティを蘇らせ，未来の良き社会を目指す処に共通するものがある．

フランスは今でこそアソシアシオンによる運営やボランティアの活動が活発になっているが，約15年ほど前は，スエーデンやノルウエーの事例の中で述べたように，住民主導は少なく北欧の方が進んでいた．日本も神戸・淡路大震災頃を境にボランティア活動等も盛んになっており，成熟社会の到来の中であらゆる面で住民が参画する社会を迎えつつある．地域づくりにおいてもエコミュージアム的展開が受け入れられる機が熟してきたように考えられる．

リヴィエールは，エコミュージアムの定義を作成するにあたり，次のように述べている．「エコミュージアム，それは時代とともにたゆまず発展していく機関である．よって常に新しく，活力あふれた姿がはっきりと現れてくる．私はエコミュージアムの定義を準備し，それをその都度，エコミュージアムづくりに取り組むグループに委ねる．（中略）ある時が来れば，彼らが彼らのやり方でエコミュージアムの概念を打ち立て，それをさらに充実させ，そして，修正していくことを願う（Riviére, 1989）．」このように，リヴィエールが考えるエコミュージアムとは，理念的には統一するが，その実態・形態はそれぞれのエコミュージアムの自由裁量とする意図があり，恒常的，画一的な博物館ではなく，人間が成長し社会環境が変化をしていくように発展していくもので，時代により地域によって，様々なエコミュージアムが生まれることを推奨している．

2．日本のエコミュージアム

1）エコミュージアムと地域社会

1980年代末より丹青研究所では，エコミュージアム研究会を発足させ勉強会を行ってきた．そして，1992年，研究所の新井重三顧問を中心に都道府県会館で「エコミュージアムフオーラム」を開催し，地域に貢献する新しいミュージアムのあり方を紹介した．当時，ふるさと創生事業などにより各地で「まちづくり」運動が盛んな時期であり，まちづくりに関する研究者やまちづくり活動家がエコミュージアムの考えに飛びついたのに反して博物館関係者は少なかった．それはまだ十分に世界の評価の定まっていないエコミュージアムという考えに否定的な面と，エコミュージアムとの違いを明確にする意味から今までの博物館を伝統的博物館と位置づけた点に一因があったのかも知れない．また，自治体においても文化担当部局でない観光課や商工課が担当するところが多く，エコミュージアムはミュージアムであり，ミュージアムの専門家が不可欠であるとして，調査・研究，収集保存を推進しなければならないとする視点が欠けて育った傾向は否めない．

本来，エコミュージアムには重要な機能として，研究機能，学習機能，保存機能という3つの機能を掲げ，フランスでは日本の学芸員にあたるコンセルバッールが推進に当たることを条件にしている．エコミュージアムの展開では，単なる一過性の観光事業やまちづくり・地域おこしに終わることがないように，専門家による継続的な調査・研究機能は決して欠かせないことを銘記しなければならない．

現在，国内の博物館数は類似施設を含めると約8千館に及ぶ．しかし，博物館が日常的に親しまれ，利用されているとは言い難い．特別なイベントや展覧会など，非日常への興味からの利用が中心である．これからの博物館は，幅広い活動をもとに，地域に生活する人々の生活課題を調査・研究の軸として，さまざまな課題に答えていくことを目的にする活動が求められる．地域と共に日常的利用といった役割を積極的に果たしていくミュージアムであるエコミュージアムの役割に期待する面が大きくなっている．

日本でエコミュージアムの実践を最初に取り組んだのが山形県朝日町である．朝日町では，エコミュージアム研究会を通して，地域に残る歴史，文化，自然，産業を一つの理念で統一して町を見直そうという運動が起こり，行政と住民が一緒になって，町づくりが行われ，1989（平成元）年にエコミュージアムの構想が作られた．朝日町は，最上川が町の真ん中を流れており，日本海側には，国立公園の朝日連峰が聳え，自然に恵まれた山間地域にあり自然と共生する地域の発展を目指した自然環境型のエコミュージアムである．現在はNPO団体による運営がなされている．

エコミュージアムは，その後さまざまな地域でさまざまな捉え方がなされて展開されてきた．環境省が国立公園内のビジターセンターの改装を行うにあたり，エコ・ミュージアム（エコとミュージアムの間に・を付ける）として自然環境に特化する形の類似施設もできた．また，農水省は，フランス生まれのエコミュージアムをヒントに，日本人の原風景であり，心のふるさとともいえる豊かな農村の景観や伝統と文化を守り育てる為に，「田園空間博物館事業」を行っており，現在，全国の56地域で展開されている．フランスの地方自然公園計画は，都市部に住む人々に対してレジャーの場を提供するとともに，農村地域を活性化させるという性格を持っていた．日本の田園空間博物館構想のコンセプトにも単に生産を支える生活の場ではなく，都市との共生をめざしていく事が明記されている．

2）徳島県あさんライブミュージアム

徳島県は，1998年春に明石海峡大橋が完成し，陸路で関西圏と直接結ばれることになった．この架橋による効果を活かすために，交通網の整備や交流の場づくりなど，さまざまなプロジェクトが進められ，徳島県の誇る豊かな自然を新たな発想で演出し，県外客にも魅力あふれるふれあいの場を創り出そうと，エコミュージアムの考えに基ずく，「あさんライブミュージアム」という事業が進められ今日に至っている（図7）．あさんライブミュージアムは，徳島県の北東部，吉野川の北側，阿讃山麓の南側に位置する板野町，上板町，土成町の3町全体を1つの広域まるごと博物館として整備する事業である．地域に点在する自然，文化，伝統産業，遺跡などの資源（サテライト）を再発見し，護

り育てていこうとする計画であり，３町の連携と住民の参画を基調とした地域活性化策として取り組まれている．

（１）コンセプトとテーマ

ここでは，地域の資源を掘り起こし，アピールする言葉として「彩・技・餐」と言うコンセプトを設定.「彩」は心を和ませる自然やこの地を愛した人の歴史などを表し,「技」は自然の中から暮らしに必要な物を生み出す技術,「餐」は人々のもてなしや自然の恵みを活かした食を表している．各町は「彩・技・餐」という統一テーマで展開しつつ，特に重きを置いているテーマでテーマセンターを設置している．

板野町ではテーマセンターとして,板野町歴史文化公園内に「彩りの館」(1996 －平成８年４月開館）という展示施設を設置した．古来より讃岐との往還に使われた大坂峠に関するエピソードや，朱塗りの古代土器やその生産の工房跡の紹介など，実物，模型，映像を用いて紹介している．

上板町は「技の館」(1997 －平成９年11月開館）をテーマセンターとして，古くから地域に伝わる伝統的な工芸，藍染め，高級和菓子に使用される阿波和三盆糖などの製作過程が体験できる体験工房，世界の藍やサトウキビが見られる温室ガーデンなどが設けられた．

土成町(現阿波市)は「餐の館」(1996 －平成８年10月開館)をテーマセンターとして，名物のたらいうどんをイメージした建物でシンボライズし，たらいうどんの手打ち体験ができるコーナーを中心に，地域の歴史，文化，観光スポットなどに関する様々な情報を提供しており，道の駅「どなり」としても機能している．

（２）サテライト

サテライト整備案は，各町において検討が図られており，平成８年度より逐次着手され，楽しくサテライトを巡るために，案内板や解説板の設置が平成８年度より開始され，理解を深めるガイドブックや解説員が活躍している．

＜サテライト具体例＞

- 板野町……大坂口御番所跡，郡頭の郷，五百羅漢，藍染庵，だるま窯，五穀の丘　等
- 上板町……阿波藍製造所，阿波和三盆糖製造元，上板町立歴史民俗資料館，だいやま陶芸村，小笠原流のし店，丸山徳弥史跡・糖源公園　等
- 土成町……秋月城址，土成町郷土歴史館，太鼓坂，御所温泉，たらいうどんの店，じんぞく狩り　等

図７．徳島県アサンライブミュージアム　ロゴマークの付いた案内サイン．

（３）推進体制

アサンライブミュージアムは，３町の連携と住民の参画を基にした地域活性化策として，地域住民と行政が協力してアイデアを出し合い，つくりあげていくということが基本とされた．推進にあたり,計画づくりや全体イメージづくりの他,オリエンテーションセンター（集客施設）の整備といった事業全般に関わるものは県行政が，テーマセンターやサテライトなど地域固有のものは，地元町行政が主体となって取り組んだ．

一方，アサンライブミュージアムの基盤ともいうべき活動としては，サテライトの掘り起こしや再活用，そして，地域の誇りやもてなしの心の醸成などを目的とするソフト活動を推進する体制として，1994（平成６）年度に３町の行政と住民代表による「アサンライブミュージアム運営協議会（当初会員21名)」が組織された．1996(平成８)年には運営協議会の他に,「ワーキンググループ」が各町に組織され，サテライトに関する情報をより充実する活動を行った．行政と地域住民が共に構想し，具体化し，活用するといったエコミュージアム的な取り組みで展開しているが，まず行政が先導し，次に住民を巻き込んだ取り組みとして，広がっていることがアサンライブミュージアムの特徴である．

（４）推進上のポイント

県行政と地元町行政の先導による事業であったが，地元住民に参画してもらう上で，まず，地元まちづくりグループの方々に運営協議会メンバーとして参画してもらったことが，事業推進の大きな要因であったと考えられる．事業当初から住民の積極的な理解，参画は難しいため，地域活性化策に不可欠なキー・パーソンの参画はかなり重要な要素である．

アサンライブミュージアム事業の理念や概要について普及啓発を図るために，イベントの開催等が繰り返し行われたが，まちづくりグループの方々の積極的な協力なくして，これらの事業は成功しなかったと思われる．地元住民の参画が必要となる事業においては，視察研修やシンポジウムの実施，イベントの開催，オリジナル商品の開発，シンボルマークの制定，情報誌の発行等，絶えず活動を行うことによって，周知してもらい，多方面からの活動を通じて，事業に対する理解の促進を図る必要がある．

アサンライブミュージアム事業は，現在も進行中の長期事業であるため，こうした長期事業への行政の継続的な推進が課題であるが，県担当者の予算申請に対する努力などによって，毎年，継続的に事業活動が実施できたため，実現までたどり着いたと考える．地元から持ち上がった事業ではなく，県が地元３町に働きかけた事業であったため，事業推進当初は必ずしもスムーズに地元の協力を得ることができたわけではない．地元町行政，そして地元住民の理解・協力が得られるまでは，県行政のこうした継続的な支援・働きかけが必要であろう．

３）観光とエコミュージアム

わが国の成長産業として，ものづくり立国の先の展望で注目されるのは観光立国への変貌といわれる．今や世界は大交流時代に突入しており，それぞれの国は独自のアイデンティティ形成を打ち出して，いかに魅力ある観光地を形成するかが課題となっている．国内各地の観光地づくりにおいては，国際観光にうち勝てる質の高さを備える必要が求められる．観光振興とは，従来の名所旧跡に頼るだけでなく，本来それぞれの地域が独自の輝きを高めることであり，観光地で成功しているスペインや南仏などを見る

と生きている生活文化そのものに魅力があるところに人々は引き寄せられ，人が集まることにより地域が活性化することが確認されている．従って観光に活路を見いだそうとする各地域は，外国の人が来たいと思う前に，まず自分たちの生活に喜びを感じることが必要であり，文化遺産のようなものと同時におのずと日本の気候や環境の中で生み出された暮らし良さこそ海外との違いでありそこに旅行者は魅力を感じるものである．これからはそれぞれの地域における暮らし良さと景観に磨きをかけることが大切になる．観光客のためでなく，自然とそこに住む人の暮らしがミックスした独自の文化に多くの観光客が共感・感動するという発想を持つことが重要とされる．

しかし，現状を見渡してみると，自然と一体化した暮らしと景観は,経済効率が最優先され戦後の開発の中で散々壊されてきた．河川や農業用水路はコンクリートで固められ，かって世界にもまれな美しさを誇っていた農村風景なども破壊し尽され，公共事業の決定に当たって景観は考慮されたことはほとんどない状態（額賀，2004）と言っても過言ではない．便利さと引き替えに美しい景観を失って見せるべき風景がどこにあるのかと言わざるをえないが，現在各地において高度成長以前の暮らしを評価したり景観を取り戻す試みも増えてきた．

景観法が 2004（平成 16）年 6 月制定され，また，2008（平成 20）年 5 月には歴史まちづくり法，正確には「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」が成立した．これは従来のブランド力のある京都や奈良，鎌倉など以外のまちでも，歴史文化は必ず存在するもので歴史まちづくりを進めようという法律である．国の文化行政（文化庁）とまちづくり行政（国土交通省，農林水産省）が積極的に支援する制度も整備されつつある．

エコミュージアムは地域全体をミュージアムとして捉え，住民が学芸員として地域を語り魅力を伝える考えである．歴史•文化•自然・産業遺産を探求して地域の宝を再確認し，地域の良さを語ることが基本にあり，エコミュージアムづくりは自ずから地域のアイデンティティを浮き彫りにする作業になる．推進に当たっては計画段階から住民主体のワークショップをはじめ，住民と行政が一体となって将来の地域社会へのビジョンを描くことにより，観光地づくりと地域づくりを一体化させることができる．エコミュージアムには「記憶を前面に」という言葉が大切にされ，失われた記憶の再現を重視している．

これまでの「ものづくり」中心の世界では，人は語らないでモノに語らせれば良かった．国際競争に勝つための大量生産に適した人は，できるだけ均質で平均値が高い方がよかった．しかし，人が直接競争するということになると，個人としての人の力が試されることになり，一人一人がより個性的で魅力的であることが重要な要素となってくる．エコミュージアムでは人づくりへの役割も大きい．究極の観光資源は人であり，一人一人がどれだけ魅力的になれるか，人づくりのソフトを充実させることこそ観光の将来を決定することになろう．

4）鳥羽エコミュージアム

美しいリアス式海岸を持つ鳥羽市は，戦後，伊勢志摩国立公園の指定を受けて以来,三重県内有数の観光地として発展してきた．鳥羽市を訪れる観光客は年間 500 万人前後で推移しているが，近年では景気低迷，観光のあり方の多様化などにより観光客数は減少傾向にある．そのような中で国土交通省の「観光ルネサンス事業」の支援を受け，鳥羽商工会議所を中心に地域の新たな観光地づくりをめざしている．これまでのマスツーリズムを脱却し，この地にしかない価値を再発見する手法として，地域全体を博物館ととらえるエコミュージアムの考え方にもとづく活動を展開している．

活動にあたっては，事業者や住民による研究会活動を行い，地域に残る自然，文化，歴史，産業を洗い出して 3 つのポイントで展開している．

1．エコミュージアムによる新しい観光の提案として地域に残る地域資源や展示施設などの仕掛けを整備し，それらを巡ることにより，単なる観光では出会えない知識や体験の機会を提供するシステムの構築．

2．大正〜昭和の初めに建設された民家や庁舎などさまざまな機能と魅力を持つ建築空間を，地域を語るテーマを通して，地域独特の歴史を語る展示施設へと再生．

3．商工会議所が主体となり，計画立案から施設整備や運営にいたるまで，地域の事業者や住民と幅広く協働で推進．

（1）テーマの検討

テーマの策定にあたって鳥羽の海の特色を再確認する方向で検討された．鳥羽の海は静かな伊勢湾と雄大な外洋との 2 つの表情を持っている．歴史的には水軍の活躍の舞台となった海であり，また海上交通の拠点であつたが航海の難所でもあり，恐れられた海でもあった．一方，島と島とを隔てて独自の文化を育み，豊富な海の幸という恵み，リアス式海岸による景観美と真珠を育む海である．これらの検討結果から以下のテーマが導き出された．

＜鳥羽の海女文化＞

- 海とともに生きるくらしかた［習俗，方言，祭祀］
- 海をめぐる生態系［人を含む自然環境］
- 海と人が培った技術［造船，操船技術］
- 海と人が培った産業［漁業，養殖業，水産加工業］
- 海と人が培った芸術［文学，絵画］

（2）メインテーマとエリア展開

鳥羽エコミュージアムのメインテーマは「海（あま）文化のくに＜青都（あおのみやこ）＞とば」とし，色彩は青色を中心に据えている．

鳥羽の青とは，海の青，どこまでも澄み切った空の青，そして木々の緑を表し，鳥羽の自然の豊かさと若々しくいきいきした様を象徴し，鳥羽の活力あふれる様子を表現している．また，鳥羽の特産でもあるアワビは朝日が昇る東側の入り瀬に生息する習性を持っており，アワビの「アワ」は東を表す「アオ」が訛ったものである．また大和朝廷及び伊勢神宮の真東に位置する鳥羽の五行思想による「青龍」にあたる意味あいなど鳥羽を表現するに相応しいところから青都と名付けらた．

エコミュージアム事業による観光まちづくりの展開では，まず市域を文化的特色のある 11 のエリアに分け，それぞれの地域には，コンセプトを明快にしたテーマが設定され，全体の青の色と共に地域特性に合わせたそれぞれのエリアのテーマカラーも以下のように設定されている．

- 答志島エリア：水軍の粋［空色］
- 菅島エリア：海女の暮らし［白色］
- 神島エリア：祈りの心［真朱］
- 浦村エリア：船の技［刈安］

・石鏡エリア：漁の技［海老茶］　・国埼エリア：常世の海［貝紫］
・相差エリア：［海の活［常盤緑］　・堅子・千賀・畔蛸エリア：海の幸［柑子色］
・加茂エリア：古代の浪漫［土器色］　・鳥羽エリア：海の泊［紅梅色］
・坂手島エリア：［海松色］

そして，エコミュージアムの活動を展開する上で，来訪者に存在を伝え，地域をめぐる際の目印となるよう，ロゴマークを設定し，施設や発行物などに使用している．

これまでに鳥羽，浦村，石鏡，相差の4地区で取り組み，浦村地区では和歌の散策路の整備に向けて，自然の草花や海辺の景観を楽しむ歌碑が設置された．石鏡地区では海女が体を休める海女小屋と漁師が魚群の回遊を見張る魚見小屋の再現整備が行われ，鳥羽地区では2003年に「鳥羽みなとまち文学館」が整備された．画家であり，風俗研究家でもあった岩田準一がその大半を過ごした家の保存と共に，内部では彼の絵画や研究資料，交流のあった江戸川乱歩や竹久夢二などとの書簡を展示している．同敷地内に2004年に乱歩館，2006年に幻影城の二つが新たにオープンした．鳥羽は江戸川乱歩の妻，隆（りゅう）の故郷でもあり，青年時代の一時期を過ごした鳥羽との関わり，著作や乱歩の愛用品が展示されている．また，隣接する土蔵を利用して土蔵に愛着を持って書いた作品の中からワンシーンを模型などで再現し，乱歩の頭の中でつくり上げた世界を垣間見る「RAMPO幻影城」と名付けた展示室も完成した．相差（おおさつ）地区には女性の願いなら必ず一つは叶えてくれるといわれる石神さんと呼ばれる小さな社がある．伝承や伝説も重要な遺産に位置づけるエコミュージアムの視点を大切に鳥居も新しくされた．マラソン金メダリスト野口みずきさんが持ったというお守りを求めて全国から多くの女性が訪れているという．2007年4月には「相差海女文化資料館」(図8）

図8．鳥羽エコミュージアム　相差海女文化資料館．

もオープンした．国内で海女が最も多いのが三重県であり，鳥羽にはその半数を超える海女がおり，豊かな海の恵みと共に生活を営んできた．まちを歩き人々と語らい，海女小屋で海女さんの話を聞きながら新鮮な魚貝類に舌鼓を打ち，地域の人々の生活文化そのものに共感する新しい観光の姿である．

5）奄美パーク

暖かい黒潮が流れ，白い砂浜とエメラルドグリーンのサンゴ礁の海，濃緑の原生林，奄美群島は日本においてまだ多くの手つかずの自然が残る数少ない地域である．そして，日本人が忘れかけているすばらしい人情と独特の地域文化を持つ奄美には，失われつつある人間としての大切なものがまだ確かに息づいている．

平成13年9月に奄美大島笠利町に，旧空港の7.3ヘクタールを活用して「奄美パーク」がオープンした．「奄美パーク」は奄美群島全体をフィールドとしたエコミュージアムの中核施設として位置づけられ，奄美の島々への導入部であり，来館者を現地へ誘導する装置としての役割を持つものである．また，島々の自然や人，産業，歴史，芸能などの文化的資源を継承・保存していく中心施設として設置された．パーク内の施設は，奄美の自然と文化をビジュアルに紹介し人々の交流の場を提供する「奄美の郷」と，奄美の自然を描き続けた日本画家，田中一村の作品を紹介する「田中一村記念美術館」の二つの施設を中核として，多目的広場，展望台，野外ステージ，特有の植物なども植栽され，奄美群島へいざなう観光拠点施設の機能を果たしている．「奄美の郷」は，白い貝殻をモチーフにした外観の中に，奄美を紹介する総合展示ホールをはじめ，奄美群島（喜界島，奄美大島，徳之島，沖永良島，与論島）の情報を提供するゾーンやハイビジョンによる映像シアター，島唄や八月踊りなど各種イベントを開催するイベント広場，レストラン，ショップで構成されている．なかでも総合展示ホールは，奄美の美しい海を紹介する「海の道」，本土や沖縄の影響を受けながらも独自の歴史・文化を育んできた多様な側面を集落の情景再現の中で紹介する「シマ（集落）の道」，貴重で多様な動植物を体感的な演出で紹介している「森の道」，独特の文化であるノロの行事や年中行事・人生儀礼など奄美の宇宙観を展開する「テーマウオール」で構成されている．

コア施設としての奄美パークが先に完成しているが，現在は奄美群島のそれぞれの島においてエコミュージアムとしての地域資源が検討され構想が進められている．

おわりに

日本の博物館は，類似施設を含めると8150館あり十分な数に達している．新たにエコミュージアムという施設をつくるのではなく，これからは既存の博物館がリニューアルしてエコミュージアムになる方向で考える方がよい．今までの博物館の多くが総合博物館は別にしてそれぞれ分野別に専門的な博物館として活動してきたが，エコミュージアムは人々の生活環境ための博物館であり，地域の振興に寄与するためには分野別に分けるのではなく横に繋げる学際的な情報が求められている．国内の博物館の中で地域に密着した博物館として郷土博物館がある．その郷土館，郷土博物館，郷土資料館と呼ばれるものは，約636館程であるが，ほとんどが十分に活用されているとは言えない．この郷土博物館がエコミュージアムとして再生できればと考える．本来，郷土博物館は，地域の自然，歴史，文化財，産業など，縦割りではない学際的な視点を通して地域の価値について，再認識させる機能をもつものである．これらの郷土博物館は時代のニーズに合った地域博物館として再編整備されることが望まれる．そうすることにより，今を生きる人々に役立ち，日常的に利用される博物館の姿が見えてくるように思える．

引用文献

新井重三（編者）（1995），実践エコミュージアム入門．171 p．牧野出版．
Davies, M.（1996），エコミュージアムを定義する．エコミュージアム研究，1.
Maure, M.（1993），Ecomusée, quelques reflexions sur l'apparition, la signification, la diffusion et l'utilisation de ce terme dans divers pays.
Nabais，A.（1985），The development of ecomuseums in Portugal. Museum 148.
Riviére, G. H.（1989），La Museologie.

参考文献

丹青総合研究所（編）（1993），ECOMUSEUM. 138p. 丹青総合研究所.
里見親幸－週間教育資料「ミュージアム・ナウ」連載記事　教育公論：
クルゾー・モンソ・レ・ミーヌエコミュゼ．週間教育資料「ミュージアム・ナウ」200706.
アヴェノワ•エコミュージアム．週間教育資料「ミュージアム•ナウ」200705.
ノルウエーのエコミュージアム．週刊教育資料「ミュージアム•ナウ」199703.
フィエール•モンド•エコミュゼ．週間教育資料「ミュージアム•ナウ」200009.
セーシャル市エコミュージアム．週刊教育資料「ミュージアム•ナウ」199610.
アイアンブリッジ渓谷博物館．週刊教育資料「ミュージアム・ナウ」199401.
観光とミュージアム．週間教育資料「ミュージアム・ナウ」200801.
鳥羽エコミュージアム．週間教育資料「ミュージアム・ナウ」200707.
奄美パーク．週間教育資料「ミュージアム・ナウ」200409.

瑞浪市化石博物館研究報告 no. 35 (supplement) (2009)， p. 83–92, 8 figs., 3 tables.
特集「博物館－現在と未来－」糸魚川淳二・柄沢宏明（編）
© 2009, Mizunami Fossil Museum

自然史博物館から「えこ」ミュージアムへ

糸魚川淳二

〒509-6251 瑞浪市日吉町 5125-4

From the Natural History Museum to the “Ecomuseum”

Junji Itoigawa

5125-4 Hiyoshi-cho, Mizunami 509-6251, Japan

Abstract

The new concept “ecomuseum” (「eko」museum) is presented as one of styles which museums especially natural history museums in Japan should be selective in the 21 century. Under the severe circumstances of Japan now, museums have to look for new ways to continue their activities. The “ecomuseum” is an advanced form of the ecomuseum which is proposed in France in 1970s as a new style of museums. It composed of 4 elements such as a territory, a core museum, a satellite one and a discovery trail and is managed under participation of habitants, and acts conservation of inheritance of nature, culture and industry in the area.

Adding new elements such as “planet museum”, “star” one and “nebula” to the ones of ecomuseum, concept of “ecomuseum” is constructed. It comprises an idea of expanded activities, namely, various, flexible, composite, comprehensive and Japanese style ones. Some models of new “ecomuseum” as in Minokamo City, Higashiyama Region in Nagoya City and Mizunami City and so on are shown.

Key words: ecomuseum, new museum, “planet” museum, “star” museum, “nebula”, Minokamo City, Higashiyama district, Mizunami City

はじめに

日本には約 4000 館（広く捉えれば 9000 館という）の博物館があり，市民の利用もあり，世界的に見ても日本は博物館大国といえる．自然史系分野をもつ博物館は総合館・郷土館を含めれば 20%近くになり，社会的に認められている機関といえるだろう．しかし，最近の社会の変化は著しく，かつ速く，博物館のすべてが現在の形で，存続出来る保証があるとは思われない．世界的に環境・資源・食料などの問題が大きくクローズアップされている現在，自然史系博物館は重要な役割をもつといえようが，これまでの考え・体制でこれらの問題に十分に対応できるとも思われない．

この問題に対応するために，また博物館をより活性化するために新しい視点に立って，「えこ」ミュージアムを提案したい．エコミュージアムはフランスに始まり，世界各地に及び，日本でもいろいろな形で運動が広がっている．これは「新しいタイプの博物館」としてよく知られている博物館であるが，これを基本において，違った概念をもった「えこ」ミュージアムを構築しようというのである．

執筆に当たり，博物館について議論し，ご教示を頂いている倉田公裕氏，故新井重三氏，佐々木朝登氏，里見親幸氏を初め（株）丹青研究所の所員の方々に深く感謝申し上げる．

1．自然史系博物館

一口に自然史系博物館といっても，そのあり方はさまざまで，活動様式も多岐にわたる．自然史博物館はその中で総合的な館もあるし，単科の，あるいは複数の専門分野をもつ館がある．最近では「自然と人」のかかわりをテーマとしてもつことも多い．総合博物館や郷土博物館は複数の分野を含むのが本来の姿だから，当然自然史分野も含まれる．生物館園の中には自然史系の展示を持つものがあるし，最近増加しているビジターセンター・ネイチャーセンターも自然史博物館的要素をもつている．

複雑な社会的環境とそれ自身のもつ多様性から，一概に論ずることは出来ないが，自然史系のみならず博物館全体について見たとき，活動の指標として次の 10 項目が考えられる．

- 基礎力（人･もの･金）
- ミュージアムサービス
- 組織トップ（首長）の認識
- 学芸員のやる気
- 運営機構トップ（館長･事務長など）の指導力
- マネージメント力
- 学芸員の能力･資質
- 自由度
- 支える人たちの力(友の会･ボランテイアなど)
- 社会的評価(人気)

一般的に博物館の活動を見たとき，研究（収集・保存，調査・研究），教育（展示，教育・普及），情報，社会活動の 4 つがある（糸魚川，1999）．これらのうち，前 2 者は博物館の基本的な活動として古くから考えられてきたことである．情報は最近の情報機能の著しい発達によって変貌した社会に対応した活動で，博物館

の機能に密接に関連しており，これがなくてはいまや博物館活動は考えられない.最後の社会活動はもちろん必要なことであるが，後述するように，新しい概念の博物館「えこ」ミュージアムにふさわしい.

これらの活動をそれぞれの博物館はどのように具体化すればよいか．規模（特に学芸員数と財政力），専門性，体制，地域における位置づけなどの違いにより，それぞれ異なる.大型の，総合館・自然史総合館，特性を持った単科の自然史館では独自にこれらの活動が可能であろう． そして，独自性をもち，多様な活動をし，市民と交流し，運営への確かな対応（非営利を守る，新しい方策を探る，柔軟な姿勢をもつ　など），横断的連携（専門別・地域別－他館・学校・地域　など）を維持する姿勢をもてば博物館として存在する意義が社会的に認められるだろう.

こうしたことが困難な，あるいは不可能な館も存在する．したがって従来どうりの活動を維持するよりない，先の見えない，見通しのない　という状況が生まれる．誰しもこうしたことを望むわけではないが，現実としては起こりうることである．こうした状況に気づかないで過ごせば，最終的には休館・廃館・併合ということも起こりうる．どのような対応が考えられるだろうか.

自然史系のみならず，博物館全体について，これから選ぶ道は３つある．第一は活動的な博物館として継続活動すること，第二は新しい形に転換すること，第三は現状のまま維持することである．第三の道が必ずしも悪い結果を生むとは限らないが，出来れば避けたいことである．第一の道はある意味での王道であり，この道を行ければ，特別な事情の発生がなければ正統派の博物館として存続が可能であろう． 第二の道がこれから検討し・確立しようとしている，「えこ」ミュージアムへの道である.

２．エコミュージアム

1970 年代の初め，フランスで生まれたエコミュージアムの考えは 1974 年には日本に導入された．それ以後，新井重三，丹青研究所，大原一興らによって調査・研究が進められ，その後日本エコミュージアム研究会が結成された．外国のエコミュージアムの紹介，日本におけるエコミュージアム運動の報告など，その成果は新井（1987, 1988, 1989, 1995, 1996, 1997），日本エコミュージアム研究会(編)(1997)，大原(1999a, b)，丹青総合研究所(1993)などの著書・論文に見ることが出来る．日本エコミュージアム研究会は 1995 年に設立され，爾来毎年総会を開き，1996 年にエコミュージアム研究１号を創刊し，2008 年の 13 号まで至っている．筆者も自身の外国のエコミュージアム調査を含めて解説している（糸魚川 1993, 1999）． これらの資料を使って，エコミュージアムのアウトラインをまとめてみる.

１）エコミュージアムの成立

エコミュージアムは 1971 年，リヴィエール（G. H. Riviére）によって発想され，提案された．フランス語で Ecomusée（英語では Ecomuseum）で，発想の原点には「博物館と環境」があった．それ以前，1960 年代後半のフランスでは急速に都市化が進み，都市へ人口が流入した．この反動として，農村は過疎化し，疲弊が起こった．こうした国内のアンバランスに対応するために，さまざまな運動が起こった.

都市－農村のバランスを保つこと，環境や遺産（自然・文化・産業）を保全することの必要性が考えられ，また，バカンスの行き先として国外でなく国内を考えたとき，観光対象としての自然・文化・産業の遺産が残っている地方が取り上げられた．1967 年に成立した「地方自然公園法」による公園整備も進められ，こうした状況が総合されて「エコミュージアム」の発想に結びついたのである． 一方，北欧に以前からある，野外博物館が参考にされた．多くの建築物が集められ，生活がくりひろげられているこの博物館は建物の中に展示物をもつ在来型の博物館と違った構成・機能をもっている.

フランスのエコミュージアムは３つの世代に区分されている(大原, 1999b). 第１世代は地方自然公園と共に誕生したタイプで，ウエッサン島エコミュージアムがその例で，1968 年の設立である．第２世代は都市コミューンによる都市部における産業遺産などを中心に作られた館である．1972 年に最初の博物館が誕生し，その後エコミュージアムとして認定されたル・クルゾーモンソーのエコミュージアム（リヨンとデイジョンの間にある）がその例である．第３世代は小規模のアソシアシオンなどがつくり・運営するもので，地方都市の産業・文化・生活についてのもので，1977 年以降に多くつくられた.「小さなエコムージアム」である．フルミ・トレロン・エコミュージアムが代表的である.

２）エコミュージアムの概念

エコミュージアムの名称はギリシャ語のオイコス（oikos）に起源のある eco と museum（muse）の合成語である．eco は ecology（生態学）と economy（経済学）の２つの言葉に使用されるように,「生態」と「経済」という２つの側面を持つ.エコミュージアムはまさにその「環境」と「生活」の２つの意味をもつていて，言い換えれば「自然」と「人」であり，その意味では新井（1987）が「生活・環境博物館」と訳したのは的確である.

エコミュージアムの考えの基礎には (1) 博物館である，(2) 遺産の保全，(3) 住民参加である（大原，1999a）．博物館活動（M-museum），自然・文化・産業の３つの遺産を現地保存する（H-heritage）， 住民が管理・運営に参加する（P-participation）がその活動の中心である.

形として，エコミュージアムには４つの要素がある．まず，(1) ある広がりをもった領域（territory），(2) コア博物館 (core)，(3) サテライト施設 (satellite) またはアンテナ (antenna)， (4) 発見の小径 (discovery trail）である.

その他の要素も加味して，エコミュージアムをキーワードで捉えれば，次のようになる.

博物館　住民参加　領域（テリトリー）コア　サテライト　発見の小径　野外　地域　自然遺産　文化遺産　産業遺産　保存　記憶

また，従来の博物館とその活動を比較すれば次のようである.

	従来型	エコミュージアム
収集保存	実物　館内	無くてもよい　現地保存
調査研究	地域内外	地域内
展示	室内が主	野外が主　室内も可
教育普及	室内　野外	野外　室内もある

３）外国のエコミュージアム

発祥の地フランスを中心に世界的にエコミュージアムは広がっている．マルクモール(Marc Maure)のまとめが日本エコミュージアム研究会（編）(1997) に紹介されている.

フランス　34　カナダ　15　ノルウエー　6　ポルトガル　4

デンマーク　4か3　イタリア　3　スペイン・ベルギー　3か4　など

全世界では86〜82あり，ヨーロッパに多く，カナダに多いのはフランス語圏が存在することに関係がありそうである．ヨーロッパの国で，博物館の多いドイツに2，スイスに1と少なく，イギリスには無い．イギリスにはリヴィエールが「エコミュージアムである」と認めたアイアンブリッジ峡谷(Ironbridge gorge)博物館があるにもかかわらず，である．エコミュージアムがイギリス人の認識する博物館とは認められないことが原因かも知れない．対仏感情もあるかもしれない．

世界のエコミュージアムにはどのようなタイプのものがあるのだろうか．本来，自然・文化・産業を3つの柱として扱い，地域や住民参加の考えに基づいているのだから，当然多様な形をとる．日本に紹介されているエコミュージアムのうちから，中心となるアイテム，活動のウエイトなどを基準として区分できるものをあげてみる．

(1) 自然公園・環境・人と自然型：ウエッサン島　グランドランド　バスセーヌ　プレスギニヨン　ヴィロワン(べ)　クリスチャンスタッド(ス)　グレンスランド(ス)　クリーブランド(ア)
(2) 産業・都市型：ル・クルーゾ　フルミ-トレロン　サントル(べ)　ベルグスラーゲン(ス)　ルロス(ノ)(図1)　サイエンスノース(カ)
(3) 地域型：セイシャル(ポ)　トーテン(ノ)
(4) 社会教育型：フィエル・モンド(カ)
(5) 農村型：ファルビグデン・エトラダレン(ス)

無印：フランス　べ：ベルギー　ス：スエーデン
ア：アメリカ　ノ：ノルウエー　カ：カナダ　ポ：ポルトガル

図1．ルロスエコミュージアム　コア博物館（ノルウエー）．
Fig. 1. Core museum of the Røros ecomuseum, Norway.

新しい博物館界の運動として注目されたエコミュージアムであるが，その割合に広がっていないというのが実感である．ヨーロッパの中でもない・少ない国がある．その理由として，(1) 国対国の関係（ユーロに統一されたが，それぞれの国の独自性が保たれている），(2) 個人主義的傾向が強い，(3) リーダーの欠如，(4) 伝統的博物館の力が強い　などがあげられよう．開館後，運営がうまくいっていない例もある．このことは最初のリーダーが退いて，後が続かない場合に見られた．

理念と実践の間にギャップがあり，実行が難しい側面もある．しかし，新しい形の博物館としてスタートしたのであるし，優れた概念に基づくことであるから，更なる発展が望ましい．

4）日本のエコミュージアム

新井重三によって導入されたエコミュージアムは，その後日本エコミュージアム研究会の結成，各地でのエコミュージアム開設の運動，国際シンポジウムとつながり，　日本においても花開くことになる．おりしも日本中に拡がっていた「町おこし・村づくり」とあいまって，各地に，多様な“エコミュージアム”あるいは類似施設が生まれた．その中には一過性で，計画だけで実現しないものもあったが，エコミュージアム研究会の大会が各地の“エコミュージアム”で開催されたこともあって活動は広がっていった．大会では外国からエコミュージアムのコンセルバトゥールを招いての講演会なども行われた．

外国と同様，日本でもその拡がりは必ずしも大きくないし，速くもない．以前，新井(編・著)(1995) はエコミュージアムを10の類別に分けているが，それも参考にして，現在の，日本におけるエコミュージアムを整理すると，以下のようになる．

(1) エコミュージアム型：山形県朝日町　あさんライブミュージアム（徳島）
(2) 丸ごと博物館型：川根地域（現川根本町）　松本市　犬山市
(3) 市内ネットワーク型（ミニ・街博物館）型：新宿区　墨田区　板橋区（以上東京都）伊勢市　平野区（大阪市）
(4) 産業遺跡型：吉田鉄の村（現雲南市，島根県）
(5) 産業振興型：富浦町（現南房総市，千葉県）
(6) 自然公園型：三瓶フィールドミュージアム（島根県）
(7) 国主導型 - 1（田園空間整備事業）：全国に56，東和町（岩手県），恵那市（岐阜県）など
国主導型 - 2（天然記念物整備活用事業）：水窪町（現浜松市，静岡県）…カモシカ　瑞穂町（現邑南町，島根県）…オオサンショウウオ　入善町（富山県）…沢スギ（図2）など

図2．富山県入善町沢スギ自然館．
Fig. 2. ”Sawa-sugi” museum in Nyuzen, Toyama.

現在の，日本のエコミュージアムについてのポイントを挙げる．

(1) 日本エコミュージアム憲章は2001年に制定された．大原(2002)は憲章と作成の経緯を説明している（表1）．強調したい点として・学校　研究機関　保存機関の機能を明示・地域社会の持続的な発展が目的　・常設機関である　・学術的な組織と専門性の保証　を上げている．また，未解決の部分として　・博物館か否か　・行政とは協力か協働か　・領域についてのコメン

表1．日本エコミュージアム憲章2001（大原　2002）．
Table. 1. Constitution of the ecomuseum in Japan.

■日本エコミュージアム憲章２００１

＜定義＞
エコミュージアムは、環境と人間との関わりを探る博物館システムである。それは、ある一定の地域において、住民の参加により、研究・保存・展示を行う常設の組織であり、地域社会の持続的な発展に寄与するものである。

＜対象＞
エコミュージアムは、ある一定の地域の多様な自然環境とそこにおいて成立した有形無形の生活・文化・産業の遺産や記憶・様式等を、過去・現在・未来を通じて、総合的・統合的に対象とする。

＜組織＞
エコミュージアムは、住民と行政が協働し、住民の参画のもと、広義の非営利組織がおこなう。推進にあたっては、各分野からの参加による企画運営の委員会、専門家との連携による学術的研究の委員会、利用者の委員会をそれぞれ組織する。

＜学校＞
エコミュージアムは、地域を学び知り、地域をつくる担い手を育む住民の学校として、展示、教育、普及活動をおこなう。

＜研究所＞
エコミュージアムは、地域のための研究所として、専門家と共に科学性をふまえ学際的な調査・研究をおこなう。

＜保存機関＞
エコミュージアムは、地域環境の多様な遺産や生活文化の保存機関として、記憶の収集および保全をおこなう。

この憲章は、エコミュージオロジーの正しい理解に基づき日本におけるエコミュージアムの健全な発展を祈り、その基本的な意義と役割を相互に確認するために、2001 年５月の時点での社会状況を鑑み、日本エコミュージアム研究会第７回大会において提唱された。

2001 年５月 26 日　日本エコミュージアム研究会

トは　をあげている．

(2) 現代の日本におけるエコミュージアムの意味（大原　1999a）
- 自分探し…アイデンテテイの確認
- ネットワーク…つながることの重要性
- コミュニテイ…地域づくり学習

(3) 現在のエコミュージアムの問題点を挙げる．
a．日本での基本的な考えは町づくり・村おこし
b．住民運動的色彩が濃い
c．博物館としての捉え方が不足している
d．行政と NGO との関係があいまい
e．“eco”の誤解 「生態」の意味で使われることが多い
f．いわゆるエコブームに便乗
g．本来の概念の拡大解釈…なんでもあり
h．観光重視（人集めのため）
i．学芸員の位置づけが十分でない
j．補助金・交付金頼り…期限付きで終了後の対応不能
k．縦割り行政による分割補助の影響
l．リーダーが少ない
m．目先にとらわれている…早い成果
n．豊かさに惑わされている

上に挙げたことのうちにも，問題ではあるがあってもよいことがある．「なんでもあり」や「勝手解釈」は日本的なエコミュージアムを構築するにはその方がよいかもしれない．エコブームも環境や自然保護に関連して，プラスに働く側面をもつ．既存の博物館をエコミュージアムに取り込む（加える）ことはなかなか難しい．特にその館が歴史をもち，実績があり，活動的である場合はである．コア博物館として参加してもらうことが出来ればよいが，サテライトでは無理であろう．

問題は誰が，どのようにやるかであろう．問題点を整理して，糸魚川 (1999) は日本のエコミュージアムについて次のようにまとめている（表２）．

表 2．日本のエコミュージアムの現在（糸魚川　1999）．
Table. 2. Problems of the ecomuseums in Japan.

①現地性総合博物館である，②地域の独自性が必要である，③ヨーロッパで確立された基本的な考えは尊重するが，それにこだわらない，④地域内（住民・町おこし）-地域外（観光など）のいずれを対象とするか，目的をはっきりさせる，⑤日本的スタイルを確立する，⑥いろいろなかたちがあってよい，⑦名前にこだわらない（「エコ」を使ってもよいし，「ライブ」「まちかど」「まるごと」など），⑧行政と住民がかかわるが，その関係はさまざまで，バランスがとれていればよい，⑨住民参加のかたちは個人，グループ，ボランティアなどきまりはないが，住民の力はぜったい必要である，⑩アイテムは遺産から現在・未来のものまで，文化・自然・産業にわたる，⑪地域の人，研究者，学芸員など，だれでもよいが，しっかりした指導者が必要である，⑫ひとつのかたちとして，コア-サテライト-ディスカバリートレイルという形式があるが，とくにこだわらなくてもよい，⑬広がりとして行政単位を利用すると便利である，⑭従来の博物館機能（展示・収集など）をもってもよい，⑮わくをゆるやかにし，フリーな組織をつくる，⑯既存の博物館をコアやサテライトとして利用するとよい，⑰既存の郷土博物館をコアとしてエコミュージアムをつくることができる（里見，1998）．

キーワードとして表現すれば，(1) 博物館，(2) 地域，(3) 住民参加，(4) 人と自然，(5) 遺産（自然・文化・産業）の調査・保存　であろう．生活レベルが上がって豊かになり，多様化した社会の中で，楽しみ方も多様化している．地域づくりの尖兵ともいえるエコミュージアムはこれから先，どのようにしたらよいのであろうか．

3．「えこ」ミュージアム

「えこ」ミュージアムとして，これまで述べてきたエコミュージアムと区別するのは日本の在来の形と異なることを提案しようとしているからである．基本は従来のエコミュージアムのそれと変らない．前節の５つのキーワード（博物館，地域，住民参加，人と自然，遺産の調査・保存）は有効である．

理念：従来の考えに付け加えるキーワードで示せば，(1) 多様性，(2) 柔軟性，(3) 複合的，(4) 包括的，(5) 日本的　である．基本にあるのは地域における，ある形の包括的博物館つくりである．目的とすることは博物館活動を住民参加の地域運動として進めることである．町おこしは目的としないが，結果として町おこしに役立つことはある．

形：本来の概念に従って，領域（territory）を決める．範囲の大きさはさまざまであるが，行政単位を基準として，１）集める，２）単独，３）分けるの３つの形がある．本来は自然・歴史・それらが複合した風土などによって区切るほうがよいが，実際に

は難しいので，多少の違いにはこだわらないで，この単位で扱うことにする．

コア博物館（core）には既存の，確かな博物館を選ぶ．総合館・郷土館のような多分野をもつ館が適当で，特に地域的な広がりが限定されたときは，博物館の活性化も生まれる郷土館が適切である．自然史館・歴史館のような単科の館であってもかまわない．むしろ，博物館としての活動を拡げるという意味ではこの方がよいかもしれない．

サテライト施設(satellite)は何でもよい．博物館はもとより，公民館・図書館などの社会施設，公園・運動場など，お寺や神社などの自然環境をもつ場所，もちろん里山を含めた，地域に広がる自然は大きな要素である．自然・文化・産業に関する遺産のみならず，現在活動している場・施設でもよい．民・公・官，大小，新古を問わない．

発見の小径(discovery trail)も自由に設定できる．自然歩道・公園の道などは最適である．コアやサテライトを結んであるのが普通であるが，そうでなくてもかまわない．領域には私有地も含まれるから，立ち入りには十分配慮しなければならない．ルートそのものが「展示物」でもある．

「えこ」ミュージアムの場合にはこの他にいくつかの要素が設定される．まず，領域内にある他の博物館で，サテライトとならない高いレベルの館・関連機関はプラネット（惑星）として，独立存在させ，コンタクトを密にする．領域外の，関連する博物館・機関，近接する博物館はスター（恒星），博物館以外の研究・教育・市民活動の機関・施設はネブラ（星雲）と位置づける．これらのすべてはネットで結ばれる．この考えを模式的に表わしたのが図3である．

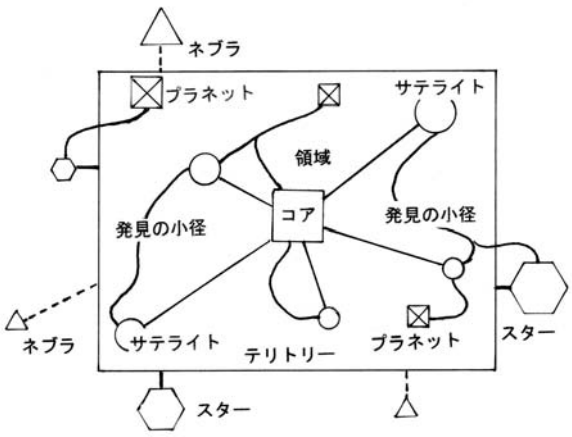


図3.「えこ」ミュージアム概念図.
Fig. 3. General figure of the “ecomuseum”.

機能：博物館の基本的機能を果たす．社会活動の面がより重要となり，情報機能もより広くなることが考えられる．全体の活動をリードする有力なリーダー（コーデイネイター・コンセルバトゥールなど）が必要でこの機関の要である．活動の中心を担うのはいうまでもなく学芸員，あるいはそれに相当する役割を果たす人である．研究者でなく市民である場合もありうる．資格は問題ではない．NGOを含めた市民の参加が大前提で，それが無い「えこ」ミュージアムはありえない．運営は行政と市民グループとの協働で行われる．

「えこ」ミュージアムにはさまざまなパターンがある．弾力的に考え，運営・活動をする．調査・保存の面と教育普及の面のバランスは場合によって異なる．主要なテーマあるいは中心となるアイテムによって，性格が変わってくる．例えば，自然重視の場合，都市型の場合，産業に重点がある場合などである．いずれにせよ，市民にとって楽しい場であることが大切であるが，学習の場であることも忘れてはならない．

1）事例研究

(1)　岐阜県美濃加茂市

岐阜県の中央南部に位置し，南の部分が木曽川で限られ，愛知県に接する都市である．木曽川およびその支流のつくった平野・段丘（平地・台地），新しい地層からなる丘陵が主体で，北部には古い時代の岩石からなる低い山地が拡がる．昭和の市町村合併で美濃加茂市となった．中心は中仙道の宿場があり，ＪＲ高山線と太多線の合する美濃太田駅のある，かっての太田町の地域である．人口は約55,000人，面積は74.81km^2，果樹栽培（ナシ・カキ）が盛んで，最近は工業団地が造成され，道路網が整備されて，多くの製造業が誘致されている．それに伴って，外国人（主にブラジル人）も多い．中仙道太田宿跡，日本ライン下り，日本昭和村などの観光地もある．

この地域で「エコ」ミュージアムを考えてみたい（図4）．領域は美濃加茂市全体としよう．この市には「美濃加茂市民ミュージアム」という．小型の総合博物館がある．自然，歴史，民俗，美術などの複数部門をもち，教育センターと並存して，周りを含めて「みのかも文化の森」という．活動は盛んで各分野にわたり，市民参加，博学連携，企画展，各種行事と多彩である．コアとなるのは当然この館である．図4をベースにしてこの「エコ」ミュージアムを考えてみる．

コア：美濃加茂市民ミュージアム（みのかも文化の森）
サテライト：
　自然：御殿山キャンプ場　ゲンジボタルの里　みのかも健康の森　古井の天狗山　飛騨木曽川国定公園　化石林公園
　文化：龍安寺　正眼寺　瑞林寺　小山観音　旧太田宿　太田宿中山道会館　太田渡し跡
　産業・レジャー：山の上観光果樹園　道の駅・昭和村　日本ライン下り　堂上蜂屋柿　ゴルフ場（各地）
発見の小径：奥山自然歩道　旧中山道
　・商工会議所発行の散歩案内帖（まちなか・自然・歴史の3つのコースがある．
　・まちなか：太田宿と木曽川めぐり　　逍遥のふるさとめぐり　みのかも・まちなか彫刻めぐり
　・自然：みのかも・初夏めぐり（ホタルの里）　美濃加茂秋めぐり～秋祭りと蜂屋柿　みのかも・春満喫～秋満腹
　・歴史：みのかも祭りめぐり　みのかも・津田博士の足跡と城址めぐり　みのかも・さくらと歴史めぐり
プラネット：昭和村　　岐阜県生物農業研究所　　岐阜県畜産研究所　国際たくみアカデミー
スター：
　自然史館：岐阜県博物館　瑞浪市化石博物館　日本最古の石博物館　中津川鉱物博物館　など
　まわりの館：可児郷土資料館　　中山道みたけ館　など
ネブラ：花フェスタ記念公園

以上のように，豊かな自然があり，流通の道として木曽川・旧

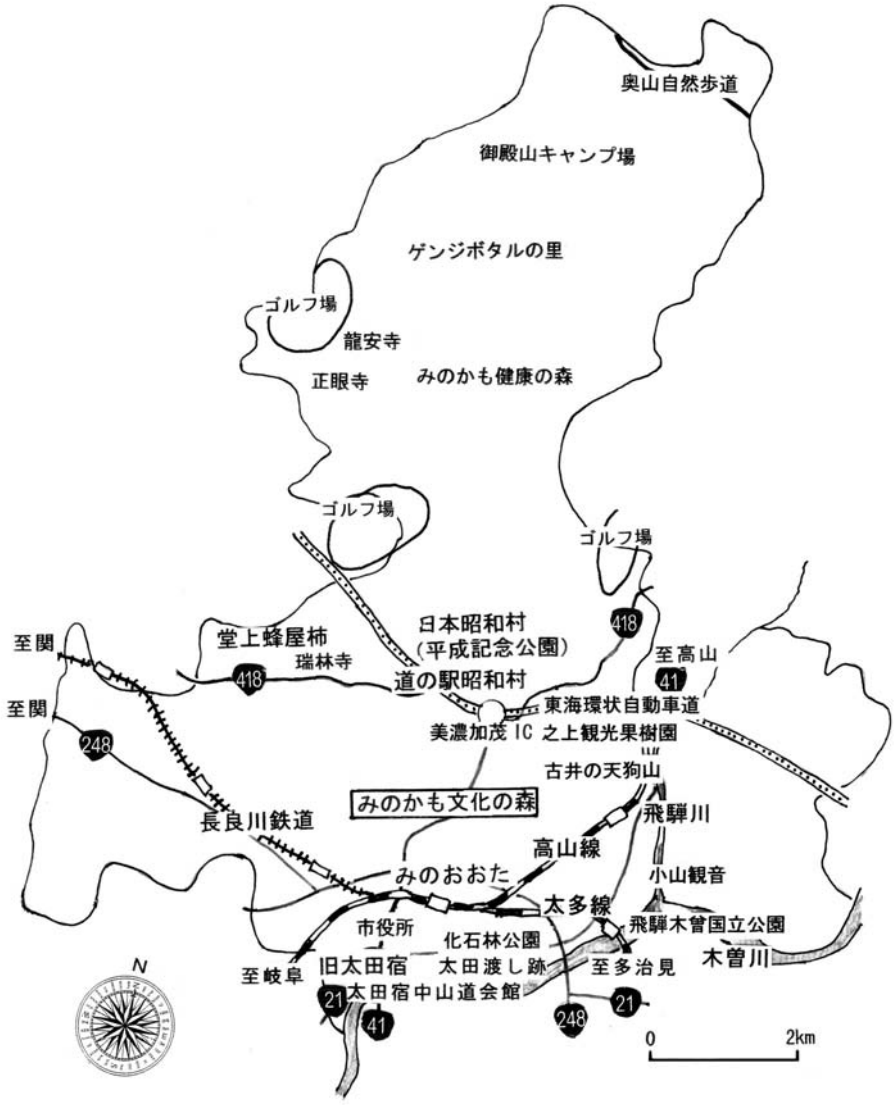


図 4．美濃加茂「えこ」ミュージアム　プラン．
Fig. 4. Plan of the Minokamo “ecomuseum”

中山道があり，現在の交通網も発達していて，要素となるアイテムには事欠かない．上にあげた他にももっと多くのアイテムがあろう．幅を拡げ，ファジイな対応をしたらよいと思われる．

コアとなる美濃加茂市民ミュージアムの現在の活動はすでに「えこ」ミュージアム的である．周りも含めての「文化」の森は「発見の小径」的要素をもっている．これまでより輪を広げ，内外の要素とつなぐことに重点をおけばよい．

(2)　名古屋市千種区東山地区

名古屋市千種区は市の東部にあり，文教・住宅地区である．1937 年に区として独立した．その東に位置する東山地区は地形的に見ると，台地から丘陵に移るあたりで，更新統の地層が分布する．戦後開発され，都市化が進み，地下鉄や都市高速道路ができ，道路網が整備され，住宅地として発達した．千種区の面積は 18.24km^2，人口は約 157,000 人である．

図 5 に示されるように 4 つの地域に分かれる．一番北側の地域（図の左側）は「平和公園」（墓地公園）である．戦後，焼け野原と化した名古屋市中心部を再開発するに当たり，市内にあった寺の墓地をここに集めたのである．北より 3 つ目の地域は東山公園（動植物園を含む）であり，昭和 10 年代より公園として市民に親しまれてきたところである．北から 2 つ目および南端の地域は割合人手が入らず，最近では一万歩コースとして，また自然観察の場のための里山として利用されてきた．東山動植物園は年間 100 万人を超す利用者があるが，最近では利用者減が目立ち，旭山動物園などの活動に刺激されてか，多額の予算を投じて再開発が計画されている．

最近の環境問題・自然保護運動の高まりに連動して，生物多様性条約第 10 回締結国会議（COP10）が 2010 年に名古屋市で開催されることが決まった．愛知万博の成功がひとつの引きがねとなったとおもわれる．それに関連して，この地域に「生物多様性センター」をつくろうという計画がある．時間的に差し迫った計画であり，その性格もはっきり知らないが，博物館をつくるということではないようである．さしづめビジターセンター的要素と市民学習の場をまとめた施設といったところであろうか．

この地域に関して，東山「えこ」ミュージアムを提案する（図 5）．4 つの地域を連結し，その中心は 2 番目の里山公園で，ここにコア施設をつくる．領域内にある各種の施設はコアのほかに，基本的なサテライトと発見の小径が用意され，既存の大きな施設・機関（動植物園，平和公園など）は独立したプラネットとして扱う．ネットで結ばれるスター・ネブラはここの立地条件からして多数あり，多岐にわたる．

交通の便もよく，自動車での利用もあるが地下鉄利用が可能で，都市部における自然を中心としての「えこ」ミュージアムとしての存在意義は十分にある．利用者の切り口は次のようであろう．

	平和公園	里山公園	動・植物園
利用者	家族	家族	家族
	高齢者　成人	成人　子供	子供　親子づれ
アイテム	歴史　生活	そのままの自然	つくられた自然

この地域の NGO グループとして「名古屋東山の森づくりの会」があり，活発に活動している．その憲章を紹介しておく（表 3）．このミュージアムをつくるにあたり，資金的なことも含めて名古屋市が軸となることは当然であるが，同時に，このグループを初めとした各種の自然愛好グループ，博物館ネット，研究•教育ネッ

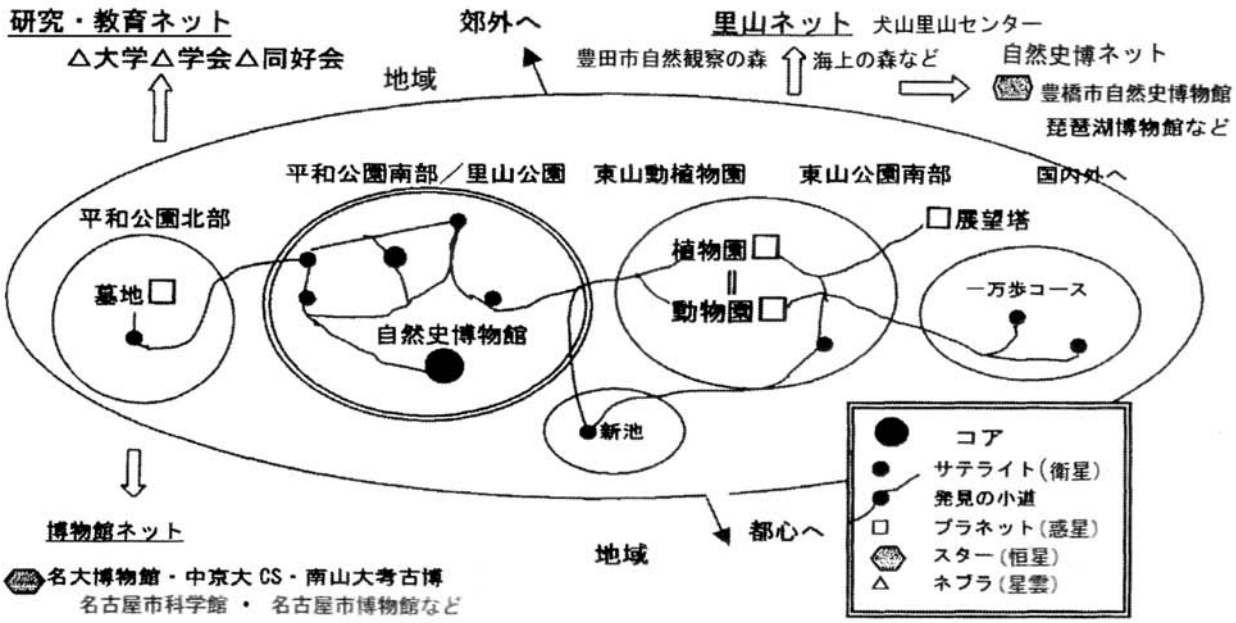


図5. なごや・東山「えこ」ミュージアム　プラン.
Fig. 5. Plan of the Higashiyama “ecomuseum” , Nagoya.

表3. なごや東山の森づくり憲章(なごや東山のもりづくりの会).
Table. 3. Constitution of the Higashiyama group of nature conservation, Nagoya.

なごや東山の森づくり憲章

私たち市民は、なごや東山の森づくりを通して共生型社会の実現をめざします。　東山の森は、人々に潤いを与え、生き物たちに豊かな生育環境をもたらしています。　東山の森は、人と自然の生命輝く森です。
私たちは、協働して森を守り育て、森と関わり、森づくりを生かし、次世代に森の大切さと素晴らしさを伝えることを目的としてここに憲章を定めます。

一、私たちは、東山の森の豊かな自然とともにあることを大切にします。
一、私たちは、森づくりを通して生活の知恵や技術を生かし、伝えます。
一、私たちは、協働して豊かな森づくりを進めます。

ト，里山ネットなどと協働することが大切である．

この「えこ」ミュージアムの原点・原型となるべきいくつかの事柄を挙げておく．

a. シンプルであること
b. 包括的（総合的）であること
c. 住民参加（NGO，ボランテイアなど）
d.「人」・「お金」・「もの」を用意すること
e. 参加体験
f.「もの」から「こと」へ
g.「もの」より「ひと」が中心
h. 東山から名古屋へ，さらに日本・世界へ
i. 基本的な活動を行う－研究面（専門家と市民）：収集・保存，調査・研究，教育面（市民の中心活動）：展示，市民学習，情報面
j. 首長（行政）に認識させること
k. 行政－市民の協働
l. プロモーター－コーデイネーター－リーダーを用意する
m. 文化，産業面のアイテムの発掘
n. コアの大きさは 1200m^2，スタッフは 6 名±
o. ネットワークをつくる・地域…（ⅰ）東山関連　（ⅱ）大学など　・ビジターセンター－博物館など
p. 新しいコンセプト－博物館＋ビジターセンター＋αの組織・活動
q. 自然中心の「えこ」ミュージアム
r. 都市の中の自然の活用
s. 日本のモデルをつくる
t.「えこ」ミュージアムを世界へ発信する

(3)　岐阜県瑞浪市北部地域

この地域については以前エコミュージアム構想を示した（糸魚川，1993）.「えこ」ミュージアムを構想するに当たって，再度検討した．前回の結果を下敷きにして，さらなる拡張・レベルアップを試みた．　前著にある，日吉町，明世町，大湫町の他に，東にある釜戸町を全部加え，土岐町の一部も含む形とした．面積約 9000 ヘクタール，人口約 12,000 人の地域である（図 6）.

前回では「人と自然のかかわり」をテーマにエコミュージアムを構築したが，要点として，a. もとの自然の復活　ⅰ．快適でない環境を改善する，ⅱ．植林をしない．　b. 人と自然のかかわり　ⅰ．情報の発信・受信，ⅱ．自然を守る（絶滅危惧種・化石など），ⅲ．自然と遊ぶ（化石採集・東海自然歩道・農業体験など），　c. 歴史とのふれあい(旧中山道, 半原文楽)，　d. レジャー　ⅰ．温泉，　ⅱ．ゴルフ場　ⅲ．陶芸工房，　e. 生産現場の公開を挙げた．

コア博物館は前と同じ瑞浪市化石博物館である．機能をもっと一般化する必要があるし，スタッフを増やすことも考えないといけない．老朽化が進んでいるので，この際造り直したい（糸魚川，2009）．サテライトは見直しを

図6. 瑞浪市北部地域「えこ」ミュージアム　プラン.
Fig. 6. Plan of “ecomuseum” in the northern part of the Mizunami City.

し，特に釜戸町については新しく選んだ．発見の小径は化石博物館のある化石公園を中心としたルート，ハナノキ・シデコブシ・ヒトツバタゴといった天然記念物で絶滅危惧種の自生地をめぐるルート，旧中山道（東海自然歩道），神社•寺めぐり，戦争遺跡（地下工場跡）めぐり，産業遺跡めぐり（亜炭坑跡），産業探訪，さわやかウオーキングコース（釜戸駅－竜吟湖－大湫宿，ＪＲ主催）など，枚挙にいとまがない．日吉町町づくり推進協議会（編）のパンフレット「ふるさと探訪」にある６コース（日吉町内）などは事情のわかっている地域の方の選ばれた，地域ごとのコースとして，それぞれ個性のある発見の小径である．

新しく「えこ」ミュージアムとするにあたってのポイントは次の点である．

a. 地域住民に「生きがい」,「安定したくらし」を実感してもらうこと
b. 地域の見直し…いまだに残っている旧町村意識(各種の活動•市議選挙などにみられる）でよいか，例えばそれぞれ（旧町村）で行われている町おこし運動はこれでよいか
c. ネットワークの構築…この地区内での，市内での，近接市町村との，もっと広く岐阜県から日本・世界まで と
d. 地域として多機能の活動
e. 地域環境浄化・自然保護運動
f. 産業（農・林・工）の復興

現実としては実現の難しい側面をもっている．地域住民の意識，それに対応する行政の姿勢を変えなければならない．「えこ」ミュージアム運動の推進は最終的に市民の意識に依存している．その形はさまざまで，ファジイに対応したほうがよい．最終的には本来のエコミュージアムを日本的な形にしたものが実現できればよい．

4．新しい展開

「えこ」ミュージアムの概念は基本的にエコミュージアム，ひいては自然史博物館を含む博物館の新生を目指したものである．したがって，この考えは収斂的であるより放散的であるといえる．その結果として新しい展開が生まれることになる．具体的な例も含めて検討する．

1）アイテムの拡張　「自然と人」が大テーマであるから，考えようによってはこの社会にあるすべてが対象になる．現代的なテーマを挙げると，・健康－福祉　・環境－災害　・資源　・エネルギー　・食糧　・平和　・観光　などである．

2）場の拡大　いわゆる領域（territory）の大きさは最大規模の制約はあるが，さまざまであり，小さなユニットでも「えこ」ミュージアムは成立する．たとえば，大学のキャンパス，寺や神社の境内，公園，街，里山，海辺，川畔，山岳地域など，いろいろなケースがある．

3）コアのいろいろ　公民館（コミュニテイセンター），図書館，ビジターセンター，道の駅，鉄道の駅，観光案内所，寺，神社，山小屋など

4）運営　(1) 博物館の原点に立つ，(2) 博物館のネットワーク－役割分担と活動全体の包括化，(3)「えこ」ミュージアム間のネットワーク，(4) 行政＋市民の運営

5）事例 -1.　京都教育大学キャンパス・エコミュージアム

京都教育大学は京都市伏見区にあり，1876（明治９）年創立の京都師範学校から始まり，戦後学制改革により京都学芸大学となり，その後京都教育大学と名を変えた．現在の場所へ移転したのが 1957(昭和 32) 年で，教育課程と総合科学課程があり，学生数約 1500 人のこじんまりした大学である．幼稚園•小学校•中学校•高等学校・特別支援学校・大学・大学院をもつ教育系の総合大学であり，専攻分野としては自然・社会・芸術・文学・体育・家政・環境・情報とあらゆる分野を網羅している．

ここでキャンパス・エコミュージアムを計画してみる．大学当局には野外博物館構想があり，マップをつくり，「構内の代表的な樹木」の位置を示している．クス・サクラ各種・メタセコイア・イチョウなどなじみの深い名前が挙げられている．屋上に「京都盆地のなりたちを眺める」という解説があり，断層系・地震・地下のようす　などに触れている．

もう少し拡大してキャンパス・エコミュージアムとしたのが以下のプランである．

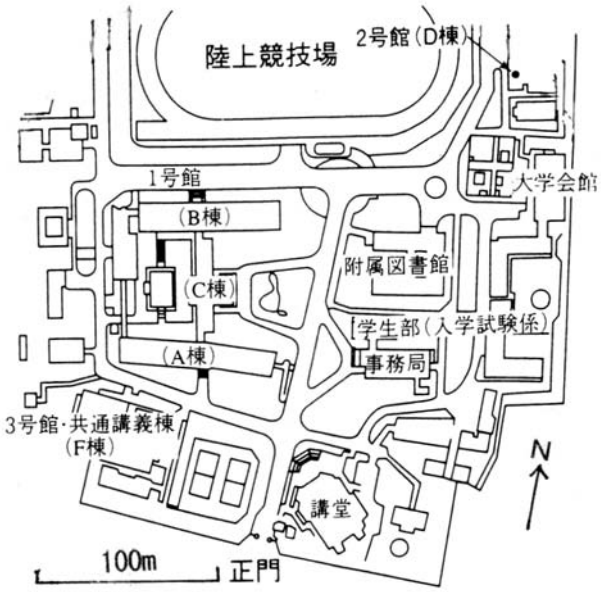


図 7．京都教育大学キャンパス（同大学による）．
Fig. 7. Campus of the Kyoto University of Education.

立地条件：京都市の都心から約 5 km, JR 藤森駅，京阪電鉄墨染駅より近い．面積は 7 ヘクタールあり，元陸軍用地で，明治以来の長い歴史の中で，つくられたものではあるがよい自然がある．この地域は都心に近い住宅・文教地区で，周りは住宅地であり，また歴史的な遺産も見られる．

構造：領域はキャンパス全域（図 7）とする．コアはどこでもよい．活動の中心になる部局（教室・専攻）がよいが，事務局（広報部・学生部など）が担当してもよい．できれば担当する専任スタッフがあればよいが，無理であれば兼務でもよい．自然分野（特に地質・動物・植物）から選んでおく．サテライトは学内の各教室・専攻である．多彩な分野の中から選べばよい．キャンパス内の自然，植物や動物もサテライトとなる．発見の小径は狭いながらもキャンパス内，グランドでスポーツの練習を見るのもよいし，音楽や美術のクラブの活動を見学する・参加するのもよい．教職員・学生，そして近くの住民もエコミュージアムの要素となるのである．

キャンパス内に無いのでちょっと変則的だが，近くにある大学の施設をプラネットに設定しよう．幼稚園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校・環境教育実習センターなどである．スターは近くの公共施設－エコロジーセンター・青少年科学センター・京都医療センター・新山科浄水場など，近くの大学－龍谷大学，近くの寺社など－仁明天皇陵・藤森神社・西福寺・天理教会など，やや離れた有名な寺社など－伏見桃山陵・伏見稲荷・稲荷山など

である．ネブラは京都市内にある大学，関連の深い大学や教育機関である．

このキャンパス・エコミュージアム構想は基本的に大学キャンパスの市民への公開である．最近の大学は外へ対してオープンであることが多くなったが，キャンパスを完全にフリーにすることは難しい．ある種の制限は必要であるし，止むを得ない．大学祭のとき，キャンパスはある程度公開であるが．この場合も時間と場所を制限した公開であれば可能であろう．活動を指定することも出来るだろう．例えば，体育・文化のクラブを公開にするということが考えられる．有料にすれば，独立行政法人としての大学には収入の一部となる．近所の市民が大学のキャンパスを利用し，楽しみ，大学人と交流することになれば，これまでに無い新しい大学のイメージが出来上がることになる．エコミュージアムの領域をキャンパス外に拡げることも不可能では無い．こうしたことも基本的には大学がかかわってくることが必要である．ぜひ，考えてみたい形である．

6）事例－2．その他

大都市にある総合大学（東大・京大・名大など）のキャンパスは大きくて多様な要素をもっている．部局も多く，スタッフも多い．コアになるのは大学博物館である．この場合はアイテム・場所・分野などを選択的にしたほうがよいだろう．いくつかのキャンパス・エコミュージアムがあって，複合した形で存在してよい．研究の面はいまさら議論の必要は無いだろう．資料は博物館に集中して収蔵し，展示はコアとなる博物館の企画展として各分野を選べばよい．公開講座は教育・普及活動の良い例になるだろう．

道の駅は国の補助で始まった施設であるが，近隣の人たちの活動・利用が目立つ，地域に根付いた施設といえよう．周りには地域のさまざまな施設・寺社・歴史遺産・産業，そして自然がある．「えこ」ミュージアムとしての要素を備えている．一例を挙げよう．岐阜県恵那市三郷佐々良木にある道の駅「そばの郷らっせいみさと」は国道 418 号と県道 66 号の交わる場所にあり，手打ちそばと地産野菜が有名で，人気がある．豊かな田園地帯で，地域の人たちの生活が豊かに拡がっている．ここをコアとして「えこ」ミュージアムを考えれば，サテライトと発見の小径には困らない．家々の畑・田，寺と神社，おいしい手つくり豆腐のある「十二」（とうふ）屋さん，公共の場ではアグリパーク恵那ふれあい広場，東濃共同模範牧場など，自然ではハナノキ・シデコブシなどの木々が春に花，秋に紅葉と目を楽しませてくれる．春の山菜採り・秋のキノコ狩は許可を得て出来るだろう．みんなサテライトである．発見の小径としては近くの夕立山への登山道，東海自然歩道，周りの田園を歩く道などが挙げられる（図 8）．

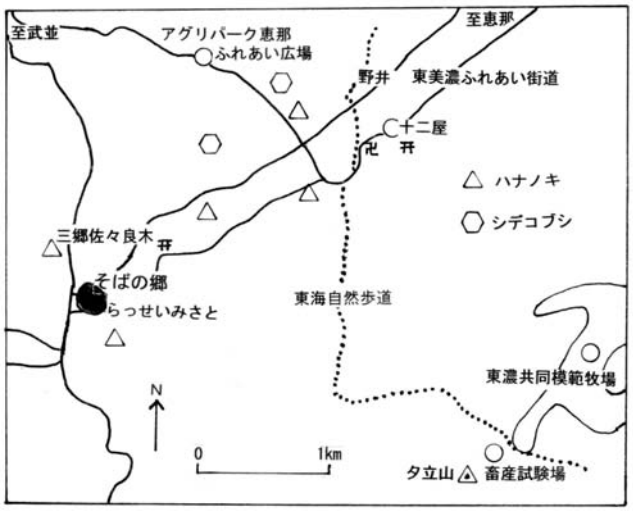


図 8．らっせいみさと周辺．
Fig. 8. Map of the “rassei Misato” (michi-no-eki) and its environs.

山岳では山小屋がコアの機能を果たしてくれる．おもに自然（地形－山頂・谷・稜線など，地質，雪渓，動植物など）をサテライトとした「えこ」ミュージアムである．さしづめ登山道は発見の小径である．自然公園は本来「えこ」ミュージアムの要素を備えている．ビジターセンターがコアとなればよい．

こうしてみるとどこでも，どんな規模でもいたるところで「えこ」ミュージアムがつくれる．市民が思いつき，よいコーデイネーター・リーダーを選んで，みんなの力を合わせ，行政とも協力してことを進めればよい．21 世紀の日本における大運動となれば，不安の社会情勢を変える一つの手がかりになるだろう．

おわりに

「えこ」ミュージアムの考えは自然と文化を継承することという，「自然と人」を大テーマとした，自然史博物館（広く，多くの他分野の博物館を想定してもよい）の考え方・活動を拡張したものに他ならない．住民運動として，NGO の活動も含め，自然と文化を守りつづけることでもある．

現在の社会は物質的な豊かさを追跡して精神的なものが欠如しているように思える．経済的なこと（金銭）におかれている価値観を変えることが求められている．最終的には，自然，そして命の大切さを忘れずに生きることにつながると思われる．

引用文献

新井重三（1987），エコミュージアムとその思想．丹青，10, 20–22.
新井重三（1988），野外博物館に突然変異：エコミュージアム．ミュージアム・データ，5，4–5.
新井重三（1989），野外博物館総論．博物館学会誌，**14**（1・2），21–46.
新井重三（編著）（1995），実践エコミュージアム入門．171 p. 牧野出版.
新井重三（1996），エコミュージアムの理念と実践．Museum ～講演録・明日の博物館を考える，75–98, 丹青研究所.
新井重三（1997），エコミュージアム実践序論．エコミュージアム―理念と活動，6–24, 牧野出版.
糸魚川淳二（1993），日本の自然史博物館．228 p. 東大出版会.
糸魚川淳二（1999），新しい自然史博物館．229 p. 東大出版会.
糸魚川淳二（2009），包括的展示論．瑞浪市化石博物館研究報告，35(Suppl.), 37–51.
日本エコミュージアム研究会（編）（1997），エコミュージアム―理念と活動．301 p. 牧野出版.
大原一興（1999a），エコミュージアムとは何だろう？　エコソフィア，4，34–39.
大原一興（1999b），エコミュージアムへの旅．183 p. 鹿島出版会.
大原一興（2002），「日本エコミュージアム憲章 2001」作成の経緯．エコミュージアム研究，7，46–47.
丹青総合研究所（編）（1993），ECOMUSEUM（エコミュージアム）．138 p. 丹青総合研究所.

瑞浪市化石博物館研究報告 no. 35 (supplement) (2009)， p. 93–97.
特集「博物館－現在と未来－」糸魚川淳二・柄沢宏明（編）
© 2009, Mizunami Fossil Museum

20 世紀の博物館学研究者からのメッセージ
－その反省と期待－

倉田公裕

元　明治大学

Message from a Museology Student in the 20th Century of Japan

Kimihiro Kurata

Former Meiji University

Abstract

This is a message to museum staffs in Japan sent by a senior museologist who mainly has been worked in the 20th century. Firstly a short sketch of the museum history in the world and in Japan is drawn. Secondary, some notable points on the museum such as museology, collection, visitor, museum staffs and so on , are discussed.

Key words: museology, museum, Japan, collection, visitor, museum staff

はじめに　博物館学の今昔物語

博物館学は，20 世紀後半に生まれ，公認された新しい学問（logy）である．周知の様に，博物館の歴史は古く，継承されてきた諸種の技術や膨大な記録，或は印象記を綴った博物館誌（museo-graphy）は多々あったが，学問 (logy) として，体系的，論理的に整えられたものは殆ど見られなかった．それらを整理統合して，独立した学にする機運が生じ，博物館学が提唱される様になった．

UNESCO（1946 年成立）の一部門である，ICOM（国際博物館会議）の総会で博物館学 (museology) は公式に認められた．それを受けて，わが国でも，1951（昭和 26）年に「博物館法」が制定され，一定基準を満たした博物館を「登録博物館」とした．その中で，学芸員制度を設け「資格取得」の必須科目として「博物館学」の履修が義務付けられた．これは「表紙だけの本」の如くで，言葉だけが先行し，その内容の検討は殆どなされていなかった．

その理由の一つは，当時，専任研究者は不在であり，専門学者（例えば美術史・考古学・歴史学・自然科学）の第 2 次専攻として講じられていた．伝統的な学問分野から見ると，次元の低い，技術の集積を纏めた補助学であり，「トンボ蝶々も鳥の内」といわれるマイナーな学として，軽く扱われていた．

その一例を挙げれば，文部省（当時）の「科学研究助成費」の申請項目に「博物館学」はなかった（最近，申請項目に加えられた）．つまり，独立した学問とは，認められていなかった．実は，筆者も 16 年にわたり，「博物館の教育活動（現・生涯学習）は，如何に成立するか」を基本テーマとして，その対象となる地域住民の意識調査を実施し，その地域的特性等を分析したいと考え，研究費助成を「教育部門」に申請したが，内容に不備があったのか，一度も認められることなく現役を去った．しかし，この「博物館を取り巻く社会の意識」の試行調査を，すでに 2 度実施しており，ある程度のデータ集積をしていた．大学の人文研究所から助成を受け，静岡県三島市で予備調査を行い，続いて，鹿島財団の研究助成費によって，札幌市での調査を実施し，発表していた．構想では，東京・大阪・福岡で実施したいと思っていたのだが，実施出来なかった．

また，学術会議でも，関連諸科学（自然科学・考古学・歴史学・美術史学）の付随的補助手段として，関心は持たれても，独立した部会は勿論，有志の集会を持つ機会もなかった．委員の中には「独立した学問と言うには程遠く，単なる技術の集積・整理であり，あえて言えば，展示の哲学に過ぎない」との批判もあった．

また，ある博物館長は，博物館学の業績もなく，講師として博物館学を講じ，体験的随想を述べるに止まり，しかも「資格の欲しい人は，全て与える」という杜撰な講義をしていたようである．当時，日本で博物館学の文献は極めて少なく，棚橋源太郎の諸著作と鶴田総一郎（当時国立科学博物館）の論文を中心とした「博物館学入門」（日本博物館協会，1956）しかなく，未翻訳の ICOM の文献を種本とした，紹介的講義であったようだ．

Museum の語源は古く，ギリシャの学芸女神・ミューズに捧げられた「荘厳」な神殿であり，街には，ピナコテーク（絵画館）もあった．

また，アリストテレスの学園（リュケイオン）では，自然，人文の事物を集めて命名し，分類・整理して，その本質を明らかに

する方法（帰納法）を用い，ある物事に就いて，広く資料を集めに集める（蒐集），それを同定（鑑定）し，差異を明らかにしている．これらについては,例えばアリストテレス全集（岩波書店）を見れば明らかなように，彼が「万学の祖」といわれる由縁である．このリュケイオン学園には，標本室•植物園•小動物園もあったと言われるが，これは学問の研究・教育の機関であり，一般に公開されたものではなかったようである．

その学問体系・方法は，弟子達に受け継がれ，直系の継承者テオフラストスは，プトレマイオス王朝時代，アレキサンドリアに招かれ，MUSEION の創設に参加し，アリストテレス学派を受け継ぎ，研究・教育機関としているが，これもまた一般に公開されたものではなかった．すると，博物館の原型は，このリュケイオン学派に，起源があると言えよう．

そこで些か角度をつけて言えば,その最も大きな役割の一つが,資料（モノ・コト＝情報）の「蒐集」であり,「分類・命名」にあると思われる．

1. モノ・蒐集－同定(鑑定)－分類・公開

博物館は,諸資料の蒐集機関である．処が近年,漢字制限で「蒐集」は「収集」の現代表記となった．これは音は同じでも，その意味する処は，大いに異なるように思う．蒐集とは（集めに集めること）であり，収集とは（集め収める）で，本来の意味を矮小化しているように思われる．

関連して言えば，わが国では，言葉を言い換えて，意味を曖昧にしたり，誤解させるような表現が少なくない．例えば，施設と機関を同一化する行政用語に「ハコモノ」がある．博物館を体育館やプールと同じ次元で捉え，建物が完成すると，博物館は「完成した」と言う．それは単なる言葉の綾に過ぎないと弁解するが，その本質を誤らせているようだ．

ここで強調して置きたいのは，設立後の補給（logistic）の問題である．日本人の補給(兵站)の下手さは，戦記を読めば明らかなように，補給を軽視し，あとは「なんとか自活するだろう」と言う姿勢は，現在にも生きているように思われる．

博物館もその例に漏れず建設費・収集費を一度投じた後は，殆ど考慮しない傾向にあるようである．これを戦史に見れば,「鼠輸送・蟻輸送」に近いようにも思われる．博物館は建物(施設)だけではない．それを活用して「社会に文化を還元する機関・組織（organization)」であり，そのハタラキ(時間的活動)が問われることを，充分に理解されていないように思われる．

蒐集行為の根底には，確固たる理念と明確な方向，それを支える旺盛な意欲が不可欠である．この蒐集への情熱を，突き詰めて行くと，根底には，好奇心があり，関心，嗜好に始まるとも言えよう．それは，公的な機関でも，優れた指導者の明確な方向，熱意がなくては叶うまい．

例えば，ローマ期は，王侯，貴族の個人蒐集で，その人の趣味・関心に基づいたものであった．その目的は，自分の権力・財力を誇示する場であったようだ．これは後世(1899)，ヴェブレン(Thorsten Veblen)の言う「有閑階級（leisure class）の理論」の「衒示的消費（conspicuous consumption)」である．本業とは関係ない．趣味としての「お道楽」であり，生活や精神の余裕を示す行動に基づくものが少なくない．

最近，わが国では，この有閑階級の「お道楽」のレベルが低下したとの声を聞く．余裕のある人の「高貴な義務」として，文化を支援する精神が衰えているようにも思われる．これは伝統的教養への指向も薄く，俗に言う．成り金趣味で，先ず，食・衣への関心が強く，次いで，住への関心に移るのだが，これはそう簡単に手を付けられるものではない．そこで，高級消費財（ブランド品）に関心が集まるようである．つまり，自己中心的消費で，高級な文化的「お道楽」が少なくなって来ているようである．

欧米の貴族や富豪の「高貴なる義務・noblesse oblige」の精神は，わが国に無かったと言われるが，そんなことはあるまい．たとえば，日本の大商家の「家訓」をしらべると「社会に還元すること」の条があり，得た余裕を社会に還元しようとする高貴な精神があり，その実例も多々残っている．明治•大正•昭和初期に，旧華族や大富豪による，富の還元があり，現在にいたる研究機関やコレクションも少なくはあるまい．

しかし，戦後は，この高貴な精神が薄れ，自己中心の時勢となり,昔の様な本格的な支援者（パトロン）や蒐集家（コレクター）の出現は望めないのではないか・・と些か悲観的である．
尤も，この個人による蒐集は，世代が代わると，継続される保証はない．趣味は継承されるとは限らない．従って,そのコレクションは売却され，散逸することも少なくない．折角，長年に渡り集められた「ロマンの世界」が散逸することになる．継承者によっては，法人として独立させ，或は国や自治体に寄贈し，公立博物館のベースになったものも少なくあるまい．

この蒐められたモノ，或はモノの集まった場所を，ミュージアムと呼ぶこともある．例えばラーメン店が集まった場所をラーメン・ミュージアムと呼び，また研究論文の集められた書物のタイトルに用いられることもあり，モノを蒐めることの本質をよく表している．

この蒐集行為は，本能に近い習性とされており，あるモノに嗜好を持ち，関心・興味を持って，そのモノの前後を蒐め，自分の独自な「ロマンの世界」を創ることにある．

その蒐集を意識的に，ある系統に従って集め，或は，時間的・空間的に限定し，独自なロマンの世界を創造しようとする．中には，或る微細な部分に関心を持った，マニヤック（熱狂的）と言われる蒐集に凝る人々も少なくない．

上記のように，蒐集とはあくまで，個人の「ロマンの世界」の構築にあると思われ，空想的な独自の世界を，現出させる事にある．当然，それを可能にするのは「心と金の余裕」である．

蒐集行為は，王侯・貴族・豪商の矜持や，衒示的消費行為に属すると既にのべたが，教会での蒐集は，聖遺物（聖人の遺物）を持つことで，巡礼者を集め，その教会の由緒の正しさ，歴史の古さなどを誇示し，また，公立の博物館は，それぞれの歴史的構築物，そこに収容された，宝物の質と量を地域の誇りとしている．

自然科学の発展と共に，その蒐集物は，研究資料（標本）として高く評価され，或は，歴史学の証明とし，更に，美術品は芸術史の資料として，誇るべきコレクションとなる．

大衆社会の出現と共に，博物館も一般に公開され，大衆化した．学問的にも再評価され，整理・分類され，博物館資料として，学問的な蒐集群となる．

わが国の 1960 ～ 70 年代は，高度成長期で，所謂「新中間層・

中流意識」が生まれ，地方自治体の税収も増え，予算に余裕が出来たこともあり，博物館建設ブーム期を迎えた．しかし，どうやら，単なる施設と安直に考えたようである．また，日本の地方行政は，常に隣県市と対比し「人並みに・・祭りの提灯式」と言う習性が，住民側にもありそうだ．そこで，隣接県市に，負けるなと言う競争意識が生じ，各地に博物館が建設され，中でも，地域歴史館・近代美術館が急増した．

それを一概に悪いと言う訳ではない．そいう機会でもないと，なかなか，創られるものではあるまい．然し，その母体（県市町村）の，予算規模，中期的財政予測，長期的戦略に欠けているようにも思える．

これは準備構想にも問題がある．先ず，建物建設が先行し，同時に収集が始まり，人事が一番最後と言うケースが多いことは事実であろう．

そこで些か偏って言えば，蒐集するには，それを支える分類学（taxonomy）的志向が無くては叶うまい．分類学こそ，博物館の最も得意とする専門分野ではあるまいか．当然そこには，評価学（axiology）が含まれていると思っている．

そこで各種のモノの分類学の知見に基づき，むしろ，新しい分類を見いだして，新分類を提唱することを，望めないものだろうか？　自然科学の立場から見て，この問題はいかがであろうか．

公開（展示）に就いては，既に「展示の科学論」で詳述しているので，省略するが，科学の進歩は日進月歩で，例えば，建築構造・照明器具・その他装置の進歩により，大いに変化することが想定され，展示の変化は必然と思われる．さらに日本展示学会が設立され，広く展示に就いて，諸研究が進んでいることは，実に喜ばしい事である．

また，展示の芸術性は，博物館の種類により，展示物の種類もことなり，さらに，展示担当者の感性•教養にも左右されるので，特定の法則性は生まれるとは思えない．

2．人（ヒト）

ヒトは，内部の専門家群（学芸員群）と，博物館を利用する観客に区別される．博物館は博物館地域社会（地元の人達）を中心とするが，広く誰でも利用できる自発的文化学習機関である．

しかし，ヒトといえば，内部の専門家群を指す論が多いが，博物館を利用するのは「博物館を取り巻く社会の人々」であり，その核と想定されるのが，私説「博物館地域住民」である．これは行政的区分でなく，博物館を中心として或る一定の地理的距離，交通手段を想定した地域社会である．この地域住民の意識・志向の調査（マーケット・リサーチ）は殆ど実施されていないと思われる（米国に来館者研究協会があると聞くがその実態は知らない）[注]．

勿論，来館者へのアンケート調査は，少なからず実施されているが，訪れない人々の意識•理由の調査は殆ど実施されていない．何故，地域住民の為にある博物館を，利用しないのか？関心を惹く博物館が無いのか？見たいと思う物がないのか？　と，問う事が求められる．

確かに無料を原則とはするが，利用者負担の原則で，わずかな入場料で，誰でも利用できる自己学習の場であるのに，利用度は高いとは言えないようだ．

それには博物館の種類・住宅からの距離・交通手段等々，様々な理由があり，そこに地域差もあると思われるが，未だ調査は行われていないようだ．

一般人が博物館を訪れるのは，余暇時間であり，また，入館料は小額と言っても，交通費，その他の経費を加えて考えねばなるまい．尤も，近年，美術館では，展覧会経費の高騰から入館料が千円を超す展覧会が出てきた時代である．

これらは，家計費では（教養娯楽費）に属する．つまり，生活費の余裕部分を，如何に用いるかは，まったく個人の選択であり，趣味・嗜好に基づくものである．又，余暇時間にも限界がある．そこで，博物館側は，開館時間を延長し，夜間開館する処もあるが，成功している例は少ないようだ．成功している館は，当初から想定された地理的条件の良い場所であり，それら一部の館を除き，館側が予想する程の入館者を得られていないようだ．

二昔も以前，都市の中央（ビジネス街）に在った美術館で二回実施したが，運営経費，人件費等，様々な問題もあり，数ヶ月で挫折した経験もある．

つまり，勤労階層が，博物館を訪ねる時間帯は，その勤務時間外の余暇時間であり，また，時間はあっても，それを可能にする，物心共に余裕の問題である．本人の意思・趣味・嗜好に左右されるが，一般的に言って，勤労階級の余暇は，まったく受身で，娯楽を求め，癒してくれるモノを望む傾向にあるのは事実であろう．

例えば，レジャー白書（2007 年版）「日本人の余暇をめぐる環境」に依れば，余暇活動の参加項目に「動物園・水族館・植物園・博物館へ行く」は，「第 9 位・3820 万人」（平成 18 年）と言う．この項目の内訳は不明であるが，過去の諸例から推測すると，その 6 ～ 7 割が，休日に動物（水族）・植物園を訪ねることであろう．これらは娯楽性が強く，利用者は「動物学園（Zoological garden）」とは思っていない．

この調査の第一位は「外食・7160 万人」であり，当今，流行のグルメ指向である．このグルメとは何か，を規定しなければならないが，これにも段階がありだ．その多くはＣクラスのファストフードや，PR された適当な価格のＢクラスの店であるようだ．

第 2 位には「国内観光・5720 万人」となっている．この国内観光の中には，歴史博物館•遺跡等も含まれていると思われるが，その内訳の数字は不明である．

と言えば，日本博物館協会の 2007 年度の発表によれば，博物館総入館者数は 2 億 4 千万人とあり，これは，国民の全部が年 2 回，訪れると言う計算になるが，実は上記の 3820 万人程度が，年に数回の利用であり，それに加えて，マスコミの話題性に巻き込まれた人々と見るのが，妥当ではあるまいか．

一方，家計費で見れば，収入の大幅な増加はなく，諸物価の高騰があり，当然，教養娯楽費を縮小・カットせざるを得ない情況である．もちろん，収入によって異なり，平均の意味は薄いが，年間 3 万円程度の支出で，月 2500 円見当であるといわれる．従って，様々な博物館を訪れたい希望や意思があっても，割愛せざるを得ない情況である．つまり，「安・近・短」で，間に合わせることになる．

一例として手元の「鎌倉環境関連産業調査実行委員会」の報告書（平成 20 年 3 月）のデータによれば，鎌倉は東京・横浜・川崎の日帰り（半日コース）の「安・近・短」な行楽地として，年間 1800 万人を超す盛況である．しかし，「史跡・自然を見るが

60%」であり，それが主目的で，文化財や施設を見る（特に有料な場所）への訪問は，わずか「２％」に過ぎないようだ．

年代的に見れば，20 代(31%)，50 ～ 60 代(31%) が多く，男女比では，男性 30%, 女性 70% となっている．また，そこでの消費金額は，2 千円以下が圧倒的であった．つまり，C クラス・グルメ程度であることが解る．この調査は，調査母数が少なく，さらなる調査が必要と思われる．

しかし，この行楽客の傾向は，日常生活からの逃避であり，自然に触れる事を目的とした「癒し系」であり，それ以外のことに時間を割く余裕も無く，必要とはしていないことが伺える．つまり，博物館の利用に，関心・興味がない人達には，目前にあっても，有料なら通過する．何よりも，興味がないと利用しようとはしないようである．

確かに「博物館は，あらゆる人に開放され，生涯学習の場である」が，興味・関心の薄い人達にとっては，面白い処，楽しませてくれる処とは思われず，「受身」が好まれる様だ．学校教育終了後の「社会成人」は，積極的に「自己学習する習慣」を学習しておらず，より進んだ好奇心に欠けているようにも思われる．つまり，自己を向上させ，教養を身に付けようとする意欲に欠けると指摘する識者もある．

日本の敗戦後，デモクラシー教育運動の一環として，各地で講演会を主とする，民主主義教育が行なわれたが，それが社会教育となり，さらに生涯教育となり，教育と言う言葉の持つイメージを転換するため，新しい概念として，自発性を尊んだ「生涯学習」となっている．

しかし，これはポール・ラングランの言う「生涯教育」とは些か異なる展開を見せている．彼の説く処では，家庭・学校・社会の教育を，統合（integrate）することにあるが，「統合」の意味が抜け落ちているようである．

これは日本に於ける「教育」は，言葉の持つイメージが悪く，過去から現在へ，上から下への，旧来の伝達教育思想が，未だ残存していると指摘する教育学者もある．

先ず，教育には，educate（引き出す，導き出す）の意味は薄かったようである．自ら学習する「育教＝自分で育つのを教える」と言う意味が充分に理解されていないように思われる．

勿論，education の基礎段階では，当然，啓蒙・普及・教示があり，知らない事を教え，その基礎を学ぶ事が含まれている．義務教育終了後は，まったく「自発的学習」であり，その学習者を支援し，レベルを高める啓発である．

人間は，関心の無いものには興味はない．格言に「心此処にあらざれば見えれども見えず」である．そこで博物館における教育とは，義務教育や高等教育とは，かなり異なった，特殊な形態になるのは当然であろう．常識と言われる世間的知識の次元を一歩進めて「何故・どうして」と言う好奇心を持たせる事で，興味や関心を抱かせる自己学習である．

つまり，興味を喚起し・関心をもたせ interest を抱かせる事である．これはある程度（常識程度）は知ってはいても，それ以上は解らない．つまり，無知と熟知との中間にある故に，それを向上させる意欲を刺激し，興味・関心を惹くと言うことになる．

近年，博物館の業績を，その入場者数で判断・評価する傾向が顕著であるが，これは，興行的な市場原理に毒されているとは思うが，それが契機となり，興味を持つこともあるだろう．

3．博物館学芸員

次に，内なる人，つまり博物館専門家の問題である．これは過去に数度，指摘し，改良運動をしてきたが，全て不成功に終わった挫折感をもっている．

特に，学芸員は，現業の煩雑さに追われて，あまりにも博物館の近過去に関心が薄く，先人たちの努力や，蹉跌したことを知らないように思われる．

近年，特に問題となっているのは，学芸員の資格ではなく資質の問題である．つまり，西欧のキュレーター（curator）との，格差は一段と拡がっているとも言われる．先ず，キュレーターを学芸員と誤訳した罪は大きい．例えば，一流ホテルと木賃宿（旅人宿）を同一視したような誤訳である．キュレーターとは，博物館の知的エリートである．人にもよるが大体，修士課程（マスターコース）を修了し，助手（アシスタント）から准教授（アソシエイト）を経た身分であり，大学で言えば教授職である．

処が，現行の養成カリキュラムでは，博物館の専門的職員にすぎない．博物館の種類によっても，大きな差があるようで，一概には言えないし，自然系と人文系では，格段の差があるように思われる．

博物館法でも「博物館の専門職員」とせず「専門的」と「的」の一字が入っている．「的」とは「・・ようなもの・・」「その性質を帯びるもの」であり，専門職ではない．つまり，日本の学芸員養成レベルの低さにあることが，昔から指摘されており，先輩・同輩が，法改正に努力してきたが，未だ改良への兆しも見えず，寧ろ，養成側大学の増加（270 大学以上）があり，「濫造」気味で，年間１万人以上の有資格者を輩出し，レベルが一段と低下しているとの声も聞く．

しかし，ある意味で幸いなことは，博物館側に年度採用はなく，不定期な欠員採用であり，就職出来ない人々が圧倒的であり，博物館側の買い手市場となっている．

とは言っても，専門分野を専攻した優れた人物の確保は難しいようである．これには様々な理由もあるが，日本の館長には，人事権が無いことも理由の一つであるまいか．その館長も専門職は極めて少数で，多くは行政者の閑職であり，名誉職的な非常勤が多いのが現実である．つまり，館長という常勤の専門職を設けた館は，ほんの僅かである．

また，視点を変えれば，日本博物館協会・全博協（全国博物館学開講講座協議会）や，さらに全日本博物館学会が中心となり，学の探求，専門家の連繋・団結を図り，研究団体としてあるいは対外交渉機関として，その成果に期待したいものである．

おわりに　法改正への意欲・博物館ロビイストの不在

博物館法の制定に努力されたのは棚橋源太郎であるが，しかし，その高邁な目標は未だ達せられていない．氏はわが国の博物館学の始祖であり，様々な問題を提起されているが，種々の抵抗があり，議会への提出に時間的制約もあり，政治的妥協をやむなくされたという経緯があったと聞いている．

そこで法制定された当時から，すでに改正を促す声が高まり，先輩諸兄と共に，訴え続けてきたが，未だにその成果はあがっていない．これは博物館界の政治的な無力さでもあり，また，そう

した大局には関与したくないし，またその機会もないという，館長や学芸員の姿勢によるのかもしれない．

前回の改正運動は，有志の努力である程度の成果を挙げたと思われるが，これを応援してくれる「博物館ロビイスト」の不在もあり，法改正まで至らず，残念ながら，文部省令の「望ましい基準」（昭和 48 年）に止まった．

さらに近年，志を受け継いだ大学の若手や学芸員有志が，法改正を働きかけたが，ごくわずかの改正，しかも本質的な改正には至らず，不成功に終わったように見受けられる．今回の運動もどうやら「ガス抜き」に終わらせられた感が否めない．つまり，博物館を理解し，応援してくれる博物館ロビイスト（lobbyist・応援団）の不在が原因のひとつであると思われる．

反省すると，問題点を指摘し，改正運動を試みた同輩・後輩も「一匹狼」であり，強力な（狼群団）を作ることが出来なかったことが問題であろう．

社会情勢も様変わりし，その変化は目に見えない，と言われる教育の崩壊も目に見える程度まで進んできた感がある．博物館界も変化せざるを得まい．基本的な役割を守る強い意欲と，新しい活動に挑戦する実行力のある人物集団の出現に期待している．

これは 20 世紀博物館学の第 2 世代に属した，一研究者からのメッセージの一部である．

注）投稿後の調査の結果，この協会について以下のことが分かった．来館者研究協会（Visitor Studies Association）は，1988 年に発足し，Visitor Studies: Theory, Research, and Practice を発刊している．詳しくは http://www.visitorstudies.org/ を参照されたい．

館　　長　　Director

奥　村　好　次　　Yoshitsugu Okumura

招聘編集長　　Invited Editor

糸魚川　淳　二　　Dr. Junji Itoigawa
(Professor Emeritus, Nagoya University)

編　集　長　　General Editor

柄　澤　宏　明　　Dr. Hiroaki Karasawa
(Mizunami Fossil Museum)

瑞浪市化石博物館研究報告　　第 35 号（Supplement）
2009 年 2 月17日発行・瑞浪市化石博物館・岐阜県瑞浪市明世町山野内（〒509-6132）
Bulletin of the Mizunami Fossil Museum, No. 35 (Supplement)
Mizunami Fossil Museum
Yamanouchi, Akeyo, Mizunami City, Gifu Prefecture, 509-6132 Japan
February 17, 2009　　ISSN 0385-0900

印刷所　株式会社　サン・ライン
瑞浪市土岐町1022番地3（〒509-6101）